

有明町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

県営中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

**黒葛遺跡(第1次・第2次)、牧原遺跡、
牧原A遺跡、大迫遺跡、飯野A遺跡、本村遺跡**

2003年3月

鹿児島県曾於郡有明町教育委員会

序 文

本書は県営中山間地域総合整備事業（有明べぶんこ村地区）に伴い、鹿児島県教育員会文化財課ならびに鹿児島県埋蔵文化財センターの協力の下に有明町教育委員会が主体となり、平成9年から平成13年にかけて随時行った埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものです。

掲載した各遺跡では、おもに縄文時代早期・中期・晩期、弥生時代中期の良好な遺構・遺物を発見しており、有明町及び大隅地域の歴史を語る上で重要な資料と言えます。

今後、これらの成果が研究や社会教育・学校教育の場などにおいて活用され、その歴史や文化が現代に活かされることを願っております。

最後になりましたが発掘調査ならびに整理報告に従事していただいた方々をはじめ、多大なるご支援・ご指導をいただいた県文化財課及び県埋蔵文化財センターの皆様に深く感謝申し上げます。

教育長 大 迫 亨

報 告 書 抄 録

ふりがな	つづらいせき (だい1じ・だい2じ)・まきはらいせき・まきはらえいせき・おおさこいせき・ いいのえいせき・ほんむらいせき							
書名	黒葛遺跡 (第1次・第2次)・牧原遺跡・牧原A遺跡・大迫遺跡・飯野A遺跡・本村遺跡							
副書名	県営中山間地域総合整備事業 (有明べぶんこ村地区) に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	有明町埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	3							
編集者名	東 徹志・中水 忍・出口順一郎							
編集機関	有明町教育委員会							
所在地	〒899-7492 鹿児島県曾於郡有明町野井倉1756番地 TEL 0994-74-1111							
発行年月日	2003年3月31日							
遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
黒葛遺跡	鹿児島県曾於郡有明町伊崎田字黒葛	46467	69-15			確認・全面 (第1次) 19971104~1209	確認・ 全面 (第1次)	農道 整備 事業
						全面 (第2次) 20011205 ~ 20020112 報告書作成	(1,200)m ² 全面 (第2次)	
						200204~20030331	360m ²	
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
包含層	縄文時代早期後半縄 文時代晩期 古代	集石、柱穴 土坑、柱穴 土坑		塞ノ神式、平椀式 入佐式、黒川式 土師器		アカホヤ直下に 焼失樹木痕		
遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
牧原遺跡	鹿児島県曾於郡有明町伊崎田字牧原	46467	69-76			確認 19971104~1209	確認 (1,200)m ²	農道 整備 事業
						全面 20011112~20020212 報告書作成	全面 780m ²	
						200204~20030331		
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
包含層	縄文時代早期 縄文時代晩期	土坑、柱穴		黒川式				

遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	原因
牧原A遺跡	鹿児島県曽於郡有明町伊崎田字牧原	46467	69-4			確認19971104~1209	確認	農道整備事業
						全面20010104~0126	(1,200)㎡	
						報告書作成 200204~20030331	全面 360㎡	
種別	主な時代		主な遺構	主な遺物		特記事項		
包含層	縄文時代早期 縄文時代晩期			加栗山式 黒川式				
遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	原因
大迫遺跡	鹿児島県曽於郡有明町伊崎田字大迫	46467	69-27			確認19980928~1009	確認	農道整備事業
						全面20011010~1117	139・6㎡	
						報告書作成 200204~20030331	全面 550㎡	
種別	主な時代		主な遺構	主な遺物		特記事項		
包含層	縄文時代早期 縄文時代晩期		土坑 土坑・柱穴	石坂式・平椀式 黒川式				
遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	原因
飯野A遺跡	鹿児島県曽於郡有明町伊崎田字飯野	46467	69-120			確認19990712~0723	確認	農道整備事業
						全面20011221~ 20020222	39.1㎡	
						報告書作成 200204~20030331	全面 1,400㎡	
種別	主な時代		主な遺構	主な遺物		特記事項		
包含層	縄文時代早期 縄文時代前期 縄文時代中期		集石 集石	押型文土器、岩本式、前平式、吉田式 塞ノ神式 曾畑式 阿高式				
遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	原因
本村遺跡	鹿児島県曽於郡有明町伊崎田字大迫	46467	69-119			確認19981012~1016	確認	農道整備事業
						全面20010104~1203	44.5㎡	
						報告書作成 200204~20030331	全面 500㎡	
種別	主な時代		主な遺構	主な遺物		特記事項		
包含層	縄文時代早期 縄文時代前期 縄文時代中期 弥生時代中期		花卉形住居	曾畑式 深浦式、春日式、船元式 山ノ口式				

例 言

1. 本書は県営中山間地域総合整備事業（有明べぶんこ村地区）の農道整備に伴って行われた、有明町伊崎田所在の黒葛遺跡（第1次・第2次）・牧原遺跡・牧原A遺跡・大迫遺跡・飯野A遺跡・本村遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および整理作業は有明町教育委員会が大隅耕地事務所より委託を受けて実施した。
3. 発掘調査は確認調査を9年11月から11年9月まで、本調査を9年11月から13年3月に渡って断続的に実施し、整理作業ならびに報告書作成を平成14年4月から平成15年3月まで行った。
4. 発掘調査・整理作業ならびに報告書作成は、鹿児島県教育委員会文化財課ならびに鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・支援のもと有明町教育委員会が実施した。
発掘調査には下記のものがあった。
確認調査：堂込秀人（鹿児島県教育委員会文化財課）、前迫亮一（鹿児島県立埋蔵文化財センター）
中水 忍（有明町教育委員会）
本調査：倉元良文（鹿児島県教育委員会文化財課）、堂込秀人（平成13年度より鹿児島県立埋蔵文化財センター）
中水 忍、出口順一郎、東 徹志（有明町教育委員会）
報告書作成には堂込の指導・支援のもと、東が補助員の協力を得て整理作業を行い、東・中水・出口が執筆して編集を東が行った。執筆者名は目次に示して文責を明らかにしてある。
5. 調査・整理作業の過程において、以下の機関に作業委託を依頼した。

・発掘作業員派遣	：	社団法人有明町シルバー人材センター
・航空写真撮影	：	有限会社ふじた
・石器実測・トレース・遺物写真撮影	：	株式会社九州文化財研究所
・炭化物の年代測定・樹種同定	：	パリノ・サーヴェイ株式会社
6. 発掘調査・整理作業ならびに報告書作成に際しては、以下の方々にご指導・ご教示を得た。記して感謝を申し上げたい。
新東晃一、倉元良文、堂込秀人、相美伊久雄、他センター職員各位（鹿児島県立埋蔵文化財センター）、本田道輝（鹿児島大学）、松崎卓郎（株式会社埋蔵文化財サポート）、村上 昇（立命館大学大学院）、東 朋子 [順位不同・敬称略]
7. 発掘調査・整理作業ならびに報告書作成の過程において、以下の者が携わった。
猜ヶ宇都敏江、田之上ともみ、野口さと、八久保壹、川ノ上真理、安野美子、若松孝雄、加藤英仁
8. 調査記録・遺物の保管は、鹿児島県曾於郡有明町野井倉1756番地 有明町役場および農業歴史資料館内に保管する。問合せ先は有明町教育委員会社会教育課まで。

凡 例

1. 発掘調査における記録は写真撮影を各調査の担当調査員が行い。実測図は調査担当者及び補助員が作成した。
2. 方位は調査に際しては磁北を用い、報告書には一部で磁北と座標値を併記した。座標値は旧地形である。
3. 本書で用いたレベルは、工事図面より引用した海拔絶対高である。
4. 土色名に数字が入っているものは、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準じた。
5. 層の呼称で用いた「アカホヤ」・「サツマ」の推定は調査員の肉眼観察によるものである。
6. 遺構の法量は検出面からの数値である。
7. 発掘調査・整理作業に際して略語を用いた。
遺跡名：「TZR」＝黒葛遺跡（T U Z U R A）
遺構名：「SK」＝土坑、「SD」＝溝
「P i t」＝柱穴、「SH」＝竪穴住居、「SB」＝掘立柱建物
ただし、土坑に関しては、規模・形態にかかわらず掘り込みをもつ穴を全て「土坑状遺構」と捉えて土坑と呼称した。また、溝についても長く延びる掘り込みを「溝状遺構」と捉えて溝と呼称している。他についてはその性格が推察されるもののみ用いてある。
8. 本書中の遺物番号は通し番号である。
9. 図の縮尺は描く図に示した。図中に見られる「」は断面位置を示している。
10. 遺物写真は原寸・1/2・2/3に統一してある。
11. 土器の観察・分類にはおもに下記の文献を参考に行った。
 - ① 新東晃一 1989 「九州貝殻文円筒土器様式」『縄文土器大観1』
 - ② 新東晃一 1989 「塞ノ神・平椀式土器様式」『縄文土器大観1』
 - ③ 南九州縄文研究会 2002 『南九州貝殻文系土器1～鹿児島県～』
 - ④ 相美伊久雄 2000 「深浦式系土器の再検討」『人類史研究12』
 - ⑤ 堂込秀人 1997 「南九州縄文晩期土器の再検討―入佐式と黒川式の細分―」『鹿児島考古31号』なお、縄文時代早期前半の土器形式名については文献③に従った。
12. 石器実測・トレースと一部の土器実測・トレース・復元、遺物写真撮影を株式会社九州文化財研究所に委託した。担当者名は後述する。

本文目次

第Ⅰ章 発掘調査の経過（中水・東）	1
第1節 発掘調査に至る経緯	
第2節 発掘調査と整理作業・報告書作成の組織	
第3節 確認調査の概要	
第Ⅱ章 遺跡の概要（東）	13
第1節 遺跡の環境	
第2節 遺跡の位置	
第3節 周辺の遺跡	
第Ⅲ章 黒葛遺跡第1次の調査（東）	21
第1節 はじめに	
第2節 調査の概要	
1. 調査の方法	
2. 層序	
3. 調査の成果	
第3節 まとめ	
第Ⅳ章 黒葛遺跡第2次の調査（東）	59
第1節 調査の環境	
第2節 調査の経過	
第3節 調査の概要	
1. 調査の方法	
2. 層序	
3. 調査の成果	
第4節 まとめ	
第5節 黒葛遺跡から出土した炭化材の年代・樹種（パリノ・サーヴェイ株式会社）	
第Ⅴ章 牧原遺跡の調査（東）	89
第1節 調査の環境	
1. 調査の環境	
2. 調査の経過	
第2節 調査の概要	
1. 調査の方法	
2. 層序	
3. 調査の成果	
第3節 まとめ	

第Ⅵ章 牧原 A 遺跡の調査（東）	129
第 1 節 調査の環境	
1. 調査の環境	
2. 調査の経過	
第 2 節 調査の概要	
1. 調査の方法	
2. 層序	
3. 調査の成果	
第 3 節 まとめ	
第Ⅶ章 大迫遺跡の調査（東）	149
第 1 節 調査の環境	
1. 調査の環境	
2. 調査の経過	
第 2 節 調査の概要	
1. 調査の方法	
2. 層序	
3. 調査の成果	
第 3 節 まとめ	
第Ⅷ章 飯野 A 遺跡の調査（出口）	173
第 1 節 確認調査の経過	
1. 発掘調査の経過	
第 2 節 発掘調査の概要	
1. 本調査の概要	
2. 層序	
第 3 節 発掘調査の成果	
1. 集石遺構	
2. 土坑	
第 4 節 遺物（東）	
第Ⅸ章 本村遺跡の調査（東）	221
第 1 節 調査の環境	
1. 調査の環境	
2. 調査の経過	
第 2 節 調査の概要	
1. 調査の方法	
2. 層序	
3. 調査の成果	
第 3 節 まとめ	

表 目 次

第1表	周辺遺跡地名表
第2表	黒葛遺跡第1次 石器観察表
第3表	黒葛遺跡第2次 石器観察表
第4表	放射性炭素年代測定および樹種同定結果
第5表	牧原遺跡 石器観察表
第6表	牧原A遺跡 石器観察表
第7表	大迫遺跡 石器観察表
第8表	飯野A遺跡 土坑計測表
第9表	飯野A遺跡 石器観察表
第10表	本村遺跡 石器観察表

挿 図 目 次

第1図	確認調査トレンチ配置1	第26図	黒葛遺跡第2次 各土層
第2図	確認調査トレンチ配置2	第27図	黒葛遺跡第2次 遺構1・土器1(Ⅲ・Ⅳ層上面)
第3図	遺跡位置	第28図	黒葛遺跡第2次 遺構2・土器2(Ⅶ層上面)
第4図	周辺遺跡配置1	第29図	黒葛遺跡第2次 遺構3(Ⅶ層上面)
第5図	周辺遺跡配置2	第30図	黒葛遺跡第2次 遺構4(Ⅶ層上面)
第6図	大久保遺跡・いせんぼ遺跡 表採遺物	第31図	黒葛遺跡第2次 土器3(14トレンチ出土)
第7図	いせんぼ遺跡 表採遺物	第32図	黒葛遺跡第2次 土器4
第8図	黒葛遺跡第1次 調査区位置	第33図	黒葛遺跡第2次 土器5
第9図	黒葛遺跡第1次 土層柱状図	第34図	黒葛遺跡第2次 石器1
第10図	黒葛遺跡第1次 遺構1	第35図	牧原遺跡 調査区位置・配置
第11図	黒葛遺跡第1次 遺構2	第36図	牧原遺跡 土層柱状図
第12図	黒葛遺跡第1次 遺構3	第37図	牧原遺跡 各土層
第13図	黒葛遺跡第1次 遺構4	第38図	牧原遺跡 遺構1(Ⅲ層上面)
第14図	黒葛遺跡第1次 土器1	第39図	牧原遺跡 遺構2(Ⅳ層上面)
第15図	黒葛遺跡第1次 土器2	第40図	牧原遺跡 遺構3(Ⅳ層上面)
第16図	黒葛遺跡第1次 土器3	第41図	牧原遺跡 遺構4(Ⅳ層上面)
第17図	黒葛遺跡第1次 土器4	第42図	牧原遺跡 土器1
第18図	黒葛遺跡第1次 土器5	第43図	牧原遺跡 土器2
第19図	黒葛遺跡第1次 土器6	第44図	牧原遺跡 土器3
第20図	黒葛遺跡第1次 土器7	第45図	牧原遺跡 土器4
第21図	黒葛遺跡第1次 土器8	第46図	牧原遺跡 土器5
第22図	黒葛遺跡第1次 石器1	第47図	牧原遺跡 土器6
第23図	黒葛遺跡第1次 石器2	第48図	牧原遺跡 石器1
第24図	黒葛遺跡第1次 土器9	第49図	牧原遺跡 石器2
第25図	黒葛遺跡第2次 調査区位置・配置・基本層位	第50図	牧原遺跡 石器3

- 第51図 牧原遺跡 石器 4
- 第52図 牧原遺跡 遺構 5 (Ⅷ層上面)
- 第53図 牧原 A 遺跡 調査区位置・配置
- 第54図 牧原 A 遺跡 遺構 1
- 第55図 牧原 A 遺跡 遺構 2・遺物 1
- 第56図 牧原 A 遺跡 土器 2
- 第57図 牧原 A 遺跡 土器 3
- 第58図 牧原 A 遺跡 石器 1
- 第59図 大迫遺跡 調査区位置・配置
- 第60図 大迫遺跡 各土層
- 第61図 大迫遺跡 遺構 1 (Ⅲ層上面)
- 第62図 大迫遺跡 遺構 2 (Ⅳ層上面)
- 第63図 大迫遺跡 遺構 3 (Ⅳ層上面)
- 第64図 大迫遺跡 遺構 4 (Ⅷ層上面)
- 第65図 大迫遺跡 遺構 5 (Ⅷ層上面)
- 第66図 大迫遺跡 遺物 1 (3トレンチ出土)
- 第67図 大迫遺跡 遺物 2
- 第68図 大迫遺跡 石器 1
- 第69図 大迫遺跡 石器 2
- 第70図 土層柱状図
- 第71図 1号集石検出状況
- 第72図 阿高式土器遺物出土状況
- 第73図 2号集石検出状況
- 第74図 3号集石検出状況
- 第75図 確認調査トレンチ位置及び本調査調査区設定図
- 第76図 飯野 A 遺跡付近工事計画図
- 第77図 A区 Va層 遺物出土状況及び攪乱状況
- 第78図 A区 VI層 遺物出土状況
- 第79図 A区 VII層 遺物出土状況
- 第80図 B区 VI層 遺物出土状況
- 第81図 B区 VII層 遺物出土状況及びトレンチ設定
- 第82図 B区 IV層 遺物出土状況
- 第83図 B区 遺物出土状況及び遺構完掘状況
- 第84図 C区 Va層 遺物出土状況及びVb層攪乱状況
- 第85図 C区 VI層 遺物出土状況
- 第86図 C区 VII層上面 遺構検出状況
- 第87図 C区 VII層上面 遺物出土状況・IX層遺構検出状況
- 第88図 飯野 A 遺跡 土器 1
- 第89図 飯野 A 遺跡 土器 2
- 第90図 飯野 A 遺跡 土器 3
- 第91図 飯野 A 遺跡 土器 4
- 第92図 飯野 A 遺跡 土器 5
- 第93図 飯野 A 遺跡 土器 6
- 第94図 飯野 A 遺跡 土器 7
- 第95図 飯野 A 遺跡 土器 8
- 第96図 飯野 A 遺跡 土器 9
- 第97図 飯野 A 遺跡 石器 1
- 第98図 飯野 A 遺跡 石器 2
- 第99図 飯野 A 遺跡 石器 3
- 第100図 飯野 A 遺跡 石器 4
- 第101図 飯野 A 遺跡 石器 5
- 第102図 飯野 A 遺跡 石器 6
- 第103図 飯野 A 遺跡 石器 7
- 第104図 飯野 A 遺跡 石器 8
- 第105図 本村遺跡 調査区位置・配置・土層柱状図
- 第106図 本村遺跡 遺構 1
- 第107図 本村遺跡 遺構 2
- 第108図 本村遺跡 土器 1
- 第109図 本村遺跡 土器 2
- 第110図 本村遺跡 土器 3
- 第111図 本村遺跡 土器 4
- 第112図 本村遺跡 土器 5
- 第113図 本村遺跡 土器 6
- 第114図 本村遺跡 土器 7
- 第115図 本村遺跡 石器 1
- 第116図 本村遺跡 石器 2
- 第117図 本村遺跡 石器 3
- 第118図 本村遺跡 石器 4
- 第119図 本村遺跡 石器 5
- 第120図 本村遺跡 石器 6

圖 版 目 次

図版 1	黒葛遺跡第 1 次	遺物 1	図版41	牧原 A 遺跡	遺物 3
図版 2	黒葛遺跡第 1 次	遺物 2	図版42	牧原 A 遺跡	遺構 1
図版 3	黒葛遺跡第 1 次	遺物 3	図版43	牧原 A 遺跡	遺構 2
図版 4	黒葛遺跡第 1 次	遺物 4	図版44	牧原 A 遺跡	遺構 3
図版 5	黒葛遺跡第 1 次	遺物 5	図版45	牧原 A 遺跡	遺構 4
図版 6	黒葛遺跡第 1 次	遺物 6	図版46	牧原 A 遺跡	遠景
図版 7	黒葛遺跡第 1 次	遺物 7	図版47	大迫遺跡	遺物 1
図版 8	黒葛遺跡第 1 次	遺物 8	図版48	大迫遺跡	遺物 2
図版 9	黒葛遺跡第 1 次	遺構 1	図版49	大迫遺跡	遺構 1
図版10	黒葛遺跡第 1 次	遺構 2	図版50	大迫遺跡	遺構 2
図版11	黒葛遺跡第 1 次	遺構 3	図版51	大迫遺跡	遺構 3
図版12	黒葛遺跡第 1 次	遺構 4	図版52	大迫遺跡	遺構 4
図版13	黒葛遺跡第 1 次	遺構 5	図版53	大迫遺跡	遺構 5
図版14	黒葛遺跡第 1 次	遺構 6	図版54	大迫遺跡	遠景
図版15	黒葛遺跡第 1 次	遺構 7	図版55	飯野 A 遺跡	遺物 1
図版16	黒葛遺跡	遠景	図版56	飯野 A 遺跡	遺物 2
図版17	炭化材分析写真		図版57	飯野 A 遺跡	遺物 3
図版18	黒葛遺跡第 2 次	遺物 1	図版58	飯野 A 遺跡	遺物 4
図版19	黒葛遺跡第 2 次	遺物 2	図版59	飯野 A 遺跡	遺物 5
図版20	黒葛遺跡第 2 次	遺物 3	図版60	飯野 A 遺跡	遺物 6
図版21	黒葛遺跡第 2 次	遺物 4	図版61	飯野 A 遺跡	遺物 7
図版22	黒葛遺跡第 2 次	遺構 1	図版62	飯野 A 遺跡	遺物 8
図版23	黒葛遺跡第 2 次	遺構 2	図版63	飯野 A 遺跡	遺構 1
図版24	黒葛遺跡第 2 次	遺構 3	図版64	飯野 A 遺跡	遺構 2
図版25	黒葛遺跡第 2 次	遺構 4	図版65	飯野 A 遺跡	遺構 3
図版26	黒葛遺跡第 2 次	遺構 5	図版66	飯野 A 遺跡	遺構 4
図版27	牧原遺跡	遺物 1	図版67	飯野 A 遺跡	遺構 5
図版28	牧原遺跡	遺物 2	図版68	飯野 A 遺跡	遠景
図版29	牧原遺跡	遺物 3	図版69	本村遺跡	遺物 1
図版30	牧原遺跡	遺物 4	図版70	本村遺跡	遺物 2
図版31	牧原遺跡	遺物 5	図版71	本村遺跡	遺物 3
図版32	牧原遺跡	遺物 6	図版72	本村遺跡	遺物 4
図版33	牧原遺跡	遺構 1	図版73	本村遺跡	遺物 5
図版34	牧原遺跡	遺構 2	図版74	本村遺跡	遺物 6
図版35	牧原遺跡	遺構 3	図版75	本村遺跡	遺物 7
図版36	牧原遺跡	遺構 4	図版76	本村遺跡	遺構 1
図版37	牧原遺跡	遺構 5	図版77	本村遺跡	遺構 2
図版38	牧原遺跡	遺構 6	図版78	本村遺跡	遺構 3
図版39	牧原 A 遺跡	遺物 1	図版79	本村遺跡	遺構 4
図版40	牧原 A 遺跡	遺物 2	図版80	本村遺跡	遠景

第 I 章 発掘調査の経過

第 1 節 発掘調査に至る経緯

鹿児島県農政部農地整備課（大隅耕地事務所、以下、「農整課」）は、有明町の有明べぶんこ村地区において、県営中山間地域総合整備事業を計画し、事業区内における埋蔵文化財包蔵地の有無について、鹿児島県教育委員会文化財課（以下、「文化財課」）に照会を依頼した。

これを受けて平成 7 年 4 月に、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、「埋文センター」）・有明町教育委員会社会教育課（以下、「社会教育課」）が分布調査を実施した。結果、事業区内に遺物散布地として黒葛遺跡・牧原遺跡・大迫遺跡・本村遺跡・飯野 A 遺跡・仮宿遺跡が所在することが確認された。

これをもとに農整課・文化財課・社会教育課は、埋蔵文化財保護と開発事業との調整を目的に協議をおこない、埋蔵文化財の包蔵状況を把握するため確認発掘調査（以下、「確認調査」）の実施が取り決められた。

確認調査は平成 9 年から平成 11 年にかけて、文化財課・埋文センター協力のもと、有明町教育委員会が主体となり実施した。調査の期間・面積は以下のとおりである。

黒葛遺跡 ¹ ・牧原遺跡 ²	期間：平成 9 年 11 月 4 日～12 月 9 日(24 日間)	面積：約 1,200m ²
大迫遺跡	期間：平成 10 年 9 月 28 日～10 月 9 日(10 日間)	面積： 139.6m ²
本村遺跡	期間：平成 10 年 10 月 12 日～10 月 16 日(5 日間)	面積： 44.5m ²
飯野 A 遺跡	期間：平成 11 年 7 月 12 日～7 月 23 日(9 日間)	面積： 39.1m ²
仮宿遺跡	期間：平成 11 年 8 月 23 日～9 月 3 日(9 日間)	面積： 53.8m ²

結果、仮宿遺跡を除いた各遺跡で遺物包含層が確認され、包蔵状態が良好であることが判明した。そのため取扱いについて農整課・文化財課・社会教育課・有明町役場耕地課の間で、遺跡の現状保存及び事業の設計変更等について協議を行ない、事業推進にあたっては遺跡の現状保存は困難であると判断した。そのため埋蔵文化財の破壊・消滅が予想される範囲について、緊急に記録保存を目的とした本発掘調査（以下、「本調査」）の実施を決定した。

本調査は埋文センター指導のもと、有明町教育委員会が主体となり、整備に伴い破壊・消滅の予想される範囲を対象に、平成 9 年度から平成 13 年度まで全面発掘調査を実施した。期間・面積は以下のとおりである。

牧原 A 遺跡	期間：平成 13 年 1 月 4 日～1 月 26 日(19 日間)	面積：約 360m ²
大迫遺跡	期間：平成 13 年 10 月 10 日～11 月 17 日(29 日間)	面積：約 550m ²
本村遺跡	期間：平成 13 年 1 月 4 日～12 月 3 日(13 日間)	面積：約 500m ²
黒葛遺跡第 2 次	期間：平成 13 年 12 月 5 日～平成 14 年 1 月 12 日(23 日間)	面積：約 360m ²
牧原遺跡	期間：平成 13 年 11 月 12 日～平成 14 年 2 月 12 日(53 日間)	面積：約 780m ²
飯野 A 遺跡	期間：平成 13 年 12 月 21 日～平成 14 年 2 月 22 日(33 日間)	面積：約 1,400m ²

平成 14 年度には整理作業ならびに報告書作成を行なった。

第2節 発掘調査と整理作業・報告書作成の組織

以下、発掘調査と整理作業ならびに報告書作成の組織について述べる。発掘調査については後述する報告と順番が異なるが、ここでは調査完了順とした。

1. 発掘調査

a. 確認調査

黒葛遺跡・牧原遺跡（平成9年度） ※黒葛遺跡は引き続き、約2/3の本調査を実施した。

主体者	有明町教育委員会		
責任者	〃	教 育 長	大脇茂夫
企画担当	〃	社会教育課長	高崎成行
庶務担当	〃	社会教育課長補佐	
		兼社会教育係長	上村宗市
	〃	社会教育課主事	黒川 晃
調査担当	〃	社会教育課主事	中水 忍
	鹿児島県教育委員会	文化財課文化財主事	堂込秀人

大迫遺跡・本村遺跡（平成10年度）

主体者	有明町教育委員会		
責任者	〃	教 育 長	大脇茂夫
企画担当	〃	社会教育課長	高崎成行
庶務担当	〃	社会教育課長補佐	
		兼社会教育係長	浜島兼雄
	〃	社会教育課主事	黒川 晃
調査担当	〃	社会教育課主事	中水 忍
	県立埋蔵文化財センター	文化財主事	前迫亮一

飯野A遺跡・仮宿遺跡（平成11年度）

主体者	有明町教育委員会		
責任者	〃	教 育 長	大脇茂夫
企画担当	〃	社会教育課長	立山廣幸
庶務担当	〃	社会教育課長補佐	浜島兼雄
		社会教育係長	井手佐喜雄
調査担当	〃	社会教育課主事	中水 忍
	鹿児島県教育委員会	文化財課文化財主事	堂込秀人

b. 本調査

黒葛遺跡 第1次（平成9年度）

主体者	有明町教育委員会		
責任者	〃	教 育 長	大脇茂夫
企画担当	〃	社会教育課長	高崎成行
庶務担当	〃	社会教育課長補佐	

		兼社会教育係長	上村宗市
	〃	社会教育課主事	黒川 晃
調査担当	〃	社会教育課主事	中水 忍
	鹿児島県教育委員会	文化財課文化財主事	堂込秀人
調査補助	有明町教育委員会	社会教育課臨時職員	猜ヶ宇都敏江

発掘調査作業従事者（社団法人有明町シルバー人材センター）

瀬口イク、鈴木絹枝、田迫チヅ、前田重良、中野京子、小平光子、谷川静枝、中野ノリ、山添早苗、原浦八重子、持留照子、有野昭海、原田トミ、仮谷静子、栢山貞男、立本トシ、市来原勝男、前野正美、野口実、立迫利治、留村アヤ子、立山キクエ、井ヶ倉トミヨ、西平ミスミ、吉岡ミチ、瀬口エミ、長竹健次、新保松雄、中村未吉、持永ハツ子、富山サチ、木佐タエ子、勝田ハツミ、持留タキコ、宇都ミキ

牧原A遺跡（平成12年度）

主体者	有明町教育委員会		
責任者	〃	教 育 長	大迫 亨
企画担当	〃	社会教育課長	立山廣幸
庶務担当	〃	社会教育課長補佐	浜島兼雄
		社会教育係長	鬼塚 仁
調査担当	〃	社会教育課主事	出口順一郎
	〃	臨時職員(埋蔵文化財専門)	東 徹志
	鹿児島県教育委員会	文化財課文化財主事	倉元良文、堂込秀人
調査補助	有明町教育委員会	社会教育課臨時職員	野口さとみ、八久保 壹、田之上ともみ

発掘調査作業従事者（社団法人有明町シルバー人材センター）

井ヶ倉トミヨ、川野雄幸、若宮庸成、和佐恵美子、中本雅紹、小平光子、伊田カズ、大池万里子、瀬口トミエ、稲田光昭、栢山貞男、森山敬子、池坂ミツ子、橋口トシ、山平一美、黒木郁子、瀬口イク、鍋サチ、濱田信雄、鈴木絹枝、谷川静枝、谷口久子、中野京子、野口サチ

大迫遺跡・本村遺跡・黒葛遺跡第2次・牧原遺跡・飯野A遺跡（平成13年度）

主体者	有明町教育委員会		
責任者	〃	教 育 長	大迫 亨
企画担当	〃	社会教育課長	立山廣幸
庶務担当	〃	社会教育課長補佐	畑山昭俊
		社会教育係長	鬼塚 仁
調査担当	〃	社会教育課主事	出口順一郎（飯野A）
	〃	〃	東 徹志（大迫ほか）
調査指導・支援	県立埋蔵文化財センター	文化財主事	堂込秀人

（大迫遺跡・本村遺跡・黒葛遺跡第2次・牧原遺跡）

調査補助	有明町教育委員会	社会教育課臨時職員	川ノ上真理
重機操縦・安全管理（有限会社宮内機械）			山口好邦

発掘調査作業従事者（社団法人有明町シルバー人材センター）

中本雅紹、山平一美、伊田カズ、鈴木絹枝、瀬口イク、谷川静枝、谷口チエ、谷口モギ、中野京子、橋口トシ、田迫チヅ、森山敬子

（飯野A遺跡）

調査補助 有明町教育委員会 社会教育課臨時職員 野口さとり（大迫にも従事）、若松孝雄、安野美子

発掘調査作業従事者（社団法人有明町シルバー人材センター）

立山利行、園山キヤク、山平親行、藏坪サエ、長竹健次、鍋サチ、黒木郁子、新保松夫、北野サエ、永野タミ、山元フクミ、立山キクエ、阿久根久子、山平アヤ子、富山サチ、谷口久子、小平光子、富迫利満、新保綾子、持永ハツ子、稲田光昭、伊田カズ、瀬口イク、谷川静枝、田迫チヅ、中本雅紹、中野京子、森山敬子、山平一美、鈴木絹枝

2. 整理作業・報告書作成（平成14年度）

主体者	有明町教育委員会		
責任者	〃	教育長	大迫 亨
企画担当	〃	社会教育課長	立山廣幸
庶務担当	〃	社会教育課長補佐	畑山昭俊
		社会教育係長	鬼塚 仁
報告担当	〃	社会教育課主事	中水 忍（現企画課）
	〃	社会教育課主事	出口順一朗、東 徹志
指導・支援	県立埋蔵文化財センター	文化財主事	堂込秀人
整理・報告補助	有明町教育委員会	社会教育課臨時職員	野口さとり、川ノ上真理 安野美子、若松孝雄 加藤英仁

諸事の協議・調整は、社会教育課長補佐畑山昭俊のもと出口・東があたった。

報告書の執筆は第Ⅰ章中水・東、第Ⅶ章出口・東、その他を東が行い、編集を東が行なった。報告書作成の全般にわたり、堂込秀人氏より指導・支援を賜った。なお、本文の校正にあたり東朋子氏のご尽力を得た。

整理作業はおもに東が担当した。作業はおもに補助員が実施したが、遺跡ごとに作業主体者をおいて進め、これを他者が助けた。以下に作業主体者は記述する。

黒葛遺跡第1次	野口さとり、安野美子（遺構）、加藤英仁（遺物）
牧原A遺跡	野口さとり（遺構）、若松孝雄（遺物）
大迫・本村・黒葛2次・牧原遺跡	川ノ上真理
飯野A遺跡	野口さとり、安野美子（遺構）、若松孝雄（遺物）

今回の報告は石器の実測などを株式会社九州文化財研究所に委託した。以下、担当者名を記述する。

総括	野村俊之
製図責任者	小畑三千代
石器製図作業	青木智子、伊世洋子、伊藤幸子、葛西薫、木下和子、

土器接合・石膏復元・製図作業者	工藤章子、たまん谷順子、富家孝子、中野優美 秋山容子、葛西薫、多田羅美千代、中野優美、濱田裕子、 福島良子、要名本裕子
レイアウト作業者	吉田和彦
遺物撮影作業者	尾ノ上尚平

第3節 確認調査の概要

1. 黒葛遺跡・牧原遺跡

調査概要

確認調査ではトレンチを黒葛遺跡で15トレンチ、牧原遺跡で8トレンチを設定した。I・II層は重機により除去したのち人力による掘り下げ作業を実施した。黒葛遺跡では、耕土改良の「天地返し」によりI・II層が攪乱されていたが、遺物包含層であるIII a層・IV層の残存状況は良好で、遺構・遺物も多かった。牧原遺跡では、削平はほとんど無かったが遺物の出土範囲は狭かった。

黒葛遺跡は南側から順番にトレンチを設定して調査を行なった。1～3 T・5～8 Tでは、I・II層が攪乱されていたが包含層の残存状況は良好であった。縄文時代晩期包含層に相当するIII層から遺物の出土があったのは4 T、縄文時代早期包含層に相当するIV層から遺物の出土があったのは1・3・5・7・12・14 Tであった。とくに14 Tでは、塞ノ神式と思われる土器片が出土した。1 Tでは、縄文時代早期の柱穴と思われる遺構が検出された。その他のトレンチでは遺物の出土はなかった。

牧原遺跡では、西側から順番にトレンチを設定して調査した。牧原遺跡の層位は比較的良好な状況で遺存していた。1・2 Tは縄文時代晩期・早期の包含層、6・7 Tは晩期包含層がそれぞれ残存し遺物の出土があったが、すべてのトレンチにおいて遺構は検出されなかった。

標準土層

I 層 灰褐色土層	表土。現在の耕作面で、切り盛りされた攪乱層である。
II 層 黒褐色土	やや粘質がある腐植土で、部分的に残存している。
III a層 暗黄褐色火山灰層	III b層の二次堆積と思われる層で、縄文時代晩期の時期に相当する遺物包含層であり、池田降下軽石も点在している。
III b層 明黄褐色火山灰層	6,300年前に鬼界カルデラから噴出されたとされるアカホヤ火山灰層で、全体に大きなブロック状に存在している。
IV 層 青灰色土層	オレンジ色のパミスを多く含む縄文時代早期に相当する遺物包含層である。
V 層 黒褐色土層	やや硬質の層である。
VI 層 黄褐色土層	11,500年前のサツマ火山灰層で、ブロック状に残存している。
VII 層 茶褐色粘質土層	粘質のある「チョコ層」と呼ばれる層である。
VIII 層 黄褐色土層	硬質でパミスを含んでいる。
IX 層 褐色ローム層	X層の二次堆積と思われる層である。
X 層 黄褐色土層	サラサラしているシラス層である。

2. 大迫遺跡

調査概要

確認調査は、遺跡の性格と範囲を把握するために0 Tから4 Tまでトレンチを設定し実施した。現在の耕作土を重機により除去したのち人力による掘り下げ作業を実施した。本来の地形は3 Tを設定したあたりを頂点とし、東西に傾斜した地形であったと考えられるが、畑地改良等により現状は平坦化されており包含層の残存状況は悪い。

拡幅改良工事範囲にかかる畑地に、現道に沿って1 T・2 Tを東西方向に長く設定した。その後、西側にあたる一段高い畑地に3 T・4 Tを設定した。さらに、1 Tの東側にあたる山林内の現道脇に0 Tを設定した。0 TはI・II層が削平されていたが包含層の残存状況は良好であった。しかし、遺物・遺構は見られなかった。1 Tは土層が東に向かって傾斜しておりI～III層が削平されていたが、IV層・V層から縄文時代早期前後半の遺物が出土した。2 Tも東に向かって傾斜しておりI～VI層が削平されていたが、VII層から縄文時代早期前半の遺物が出土した。1 T・2 Tとも一部下層確認を行なったが遺物出土は見られなかった。3 Tは良好な状態で土層が残っておりIII層から縄文時代晩期の遺物が出土した。また、III層上面から時期不詳の溝状遺構が検出された。埋土は黒色で遺物等も包含していなかった。一部深掘りを行なった結果、VII層から縄文時代早期後半の遺物が出土した。4 Tも土層の状態は良好でIII層上面に3 Tにつながる溝状遺構が検出された。さらに、VII層から礫器及び焼石が出土した。各トレンチは調査終了し次第、埋め戻して調査を終了した。

出土土器はVII層より縄文時代早期前半の貝殻条痕文土器片、VI層より縄文時代早期後半の塞ノ神式土器片、III層より縄文時代晩期の入佐式土器片が見られた。

確認調査の結果、大迫遺跡は縄文時代早期前半・早期後半及び晩期の遺跡であることが判明した。

標準土層

I層	灰褐色土層	表土。現在の耕作面である。
II層	黒褐色土層	真っ黒の腐植土で、ふかふかした軟質層である。一部に残存する。
III層	暗黄褐色土層	IV層の二次堆積と思われる層である。
IV層	明黄褐色火山灰層	6,300年前に鬼界カルデラから噴出したオレンジ色のアカホヤ火山灰層である。
V層	黄白色土層	黄色パミス（P11）混じりの層である。
VI層	淡黄褐色土層	やや硬質の縄文時代早期後半の包含層である。
VII層	黒褐色土層	硬質の縄文時代早期前半の包含層である。
VIII層	黄褐色土層	11,500年前のサツマ火山灰層で全体にまだら状の堆積である。
IX層	淡茶褐色土層	やや粘質のある層である。
X層	黄褐色土層	やや粘質のある層である。

3. 本村遺跡

調査概要

確認調査は、遺跡の性格と範囲を把握するためにトレンチを設定して実施した。本村遺跡では1 A Tから6 Tまでの9トレンチを設定し、I・II層を重機により除去したのち人力による掘り下げ作業を実施した。遺構等の広がりや想定されたトレンチにおいては随時拡張した。包含層の残存状況は、全体的に良好であった。

本村遺跡の北東側から2 A T・2 B T・3 T・5 T・6 Tを設定して調査を開始した。その後1 A

T・1BT・1CT・4Tを随時設定し、各トレンチにおいて遺物・遺構の広がりを確認しながら拡張していった。1Aから1CTにかけては山林になっており、可能な範囲での狭いトレンチ調査となった。遺跡内の地形は、5T付近を頂点に現道に沿ってそれぞれの方向に緩い傾斜が見られる。1ATでは貝殻条痕文土器、1BTでは剥片（黒曜石）、1CTでは縄文時代早期土器片が出土した。地形は北に向かって傾斜しており、遺構等は検出されなかった。2AT・2BTではⅥ層上面で縄文時代前期の深浦式土器片が出土した。3Tでは縄文時代早期・前期の土器が出土した。4Tでは集石遺構、5Tでは弥生時代の竪穴住居（花卉形）1基が検出された。山ノ口式土器片が住居跡内より出土、包含層は削平されていた。遺物の広がりは一発計画地の全域に及んでいることを確認した。

確認調査の結果、本村遺跡は縄文時代早期・前期及び弥生時代中期の遺跡であることが判明した。特に弥生時代については、集落を構成する可能性が高い。

標準土層

I層 灰褐色土層	表土。現在の耕作面である。
II層 黒褐色土層	真っ黒の腐植土で、ふかふかした軟質層である。一部に残存する。
III層 暗黄褐色土層	IV層の二次堆積と思われる層である。弥生時代の包含層である。
IV層 明黄褐色火山灰層	6,300年前に鬼界カルデラから噴出したオレンジ色のアカホヤ火山灰層である。
V層 黄白色土層	黄色パミス（P11）混じりの層である。
VI層 淡黄褐色土層	やや硬質の層で下部が縄文時代早期の包含層である。
VII層 黒褐色土層	硬質の層である。
VIII層 黄褐色土層	11,500年前のサツマ火山灰層で全体にまだら状の堆積である。
IX層 淡茶褐色土層	やや粘質のある層である。
X層 黄褐色土層	やや粘質のある層である。

4. 飯野A遺跡

調査概要

確認調査は、遺跡の性格と範囲を把握するためにトレンチを設定して実施した。飯野A遺跡では1T～10Tを随時設定し、現在の耕作土を重機により除去したのち人力による掘り下げ作業を実施した。本来の地形は土層の残存状況から、5Tを設定したあたりを頂点とし、北西方向に下って上る起伏があり、北東方向に傾斜が見られる地形であったと考えられる。畑地改良等により切り盛りが見られるが、縄文時代早期の包含層の残存状況は良好であった。

拡幅改良工事範囲にかかる畑地に、現道に沿って1T～4T・5T～7T・8T～10Tを随時設定した。1Tの土層は盛土がされているため包含層の残存状況は良好で、南東方向に傾斜する。Ⅶ・Ⅷ層から縄文時代早期の前平式土器が出土した。2Tも1Tと同様に傾斜、盛土があり包含層の残存状況は良好であった。Ⅳ層から縄文時代晩期、Ⅶ層から縄文時代早期後半の遺物が出土した。3TではⅤ層面で石が出土した。4Tの土層は北側へ傾斜しており、Ⅴ層面で道路状の硬化面を検出した。Ⅶ・Ⅷ層で多数の焼石が出土した。5Tは工事区域の中央付近に位置しており、土層の堆積も平坦である。Ⅳ層下面とⅤ層上面でそれぞれ縄文時代晩期、縄文時代前期・中期の土器が出土した。さらにⅦ層、Ⅷ層で縄文時代早期の土器も出土した。6TはⅤ層までが削平されており、盛土されたシラスの直下に南東に傾斜したⅥ層が確認できた。下層においては遺物の出土はなかった。7Tは山林にかかる傾斜地であったため重機での確認を実施したが、遺物・遺構は確認できなかった。8Tは上層からⅥ層

の一部が削平されており、Ⅶ層・Ⅷ層で縄文時代早期の吉田式土器が出土した。9 Tも1 Tと同じ状況で、Ⅶ層・Ⅷ層で縄文時代早期の前平式土器が出土している。10 Tも1 Tと同じ状況で、Ⅳ層で縄文時代晩期の黒川式土器が出土した。各トレンチは調査終了し次第、埋め戻して調査を終了した。

標準土層

I層	黒褐色土層	表土。
II層	灰褐色土層	火山灰層であるが、部分的に堆積している。
III層	黒色土層	真っ黒の腐植土でふかふかした軟質層である。
IV層	黒褐色土層	真っ黒で黄色パミスを含む、縄文時代晩期の包含層である。
V層	黄褐色土層	Ⅵ層の二次堆積と思われる層で、縄文時代前期・中期に相当する包含層である。
Ⅵ層	明黄褐色火山灰土層	6,300年前に鬼界カルデラから噴出したオレンジ色のアカホヤ火山灰層である。
Ⅶ層	青灰色土層	やや粘質のある縄文時代早期後半の包含層である。
Ⅷ層	暗黄褐色土層	やや硬質の縄文時代早期前半の包含層である。
Ⅸ層	黄白色土層	11,500年前のサツマ火山灰層で全体にまだら状の堆積である。黄色パミス混じりの包含層である。
X層	淡茶褐色土層	やや粘質のある層である。
XI層	黄褐色土層	やや粘質のある層である。

5. 仮宿遺跡

調査概要

確認調査は、遺跡の性格と範囲を把握するためにトレンチを設定して実施した。仮宿遺跡では1 T～8 Tを随時設定後、現在の耕作土を重機により除去したのち人力による掘り下げ作業を実施した。土層の残存状況から切り盛りが見られ、本来は起伏・傾斜の激しい地形であったと想定される。とくに事業実施区域北東側については盛土が厚く、下層までの調査が困難であった。

道路拡幅改良工事の範囲にかかる畑地に、南東側から1 T～8 Tを随時設定して調査を開始した。1 TはⅣ層上部までが削平されており下層からの遺物・遺構は確認できなかった。2 TもⅦ層上部までが削平されていたが、Ⅺ層上面で黒曜石が1点出土した。3 Tは北東方向へ傾斜しており、1.7m程度の盛土の下にはアカホヤ火山灰層、サツマ火山灰層が連続して堆積していた。遺物・遺構は確認できなかった。4 TはⅤ層上部までが削平されており、下層からの遺物・遺構は確認できなかった。5 Tの土層は良好であったが遺物・遺構は確認できなかった。7 TはⅡ層に相当する層が厚く堆積しており、下層の確認が困難であった。調査可能な深さでの遺物遺構は確認できなかった。8 Tは盛土が厚く、その下層は7 Tと類似した堆積が見られた。遺物・遺構は確認できなかった。

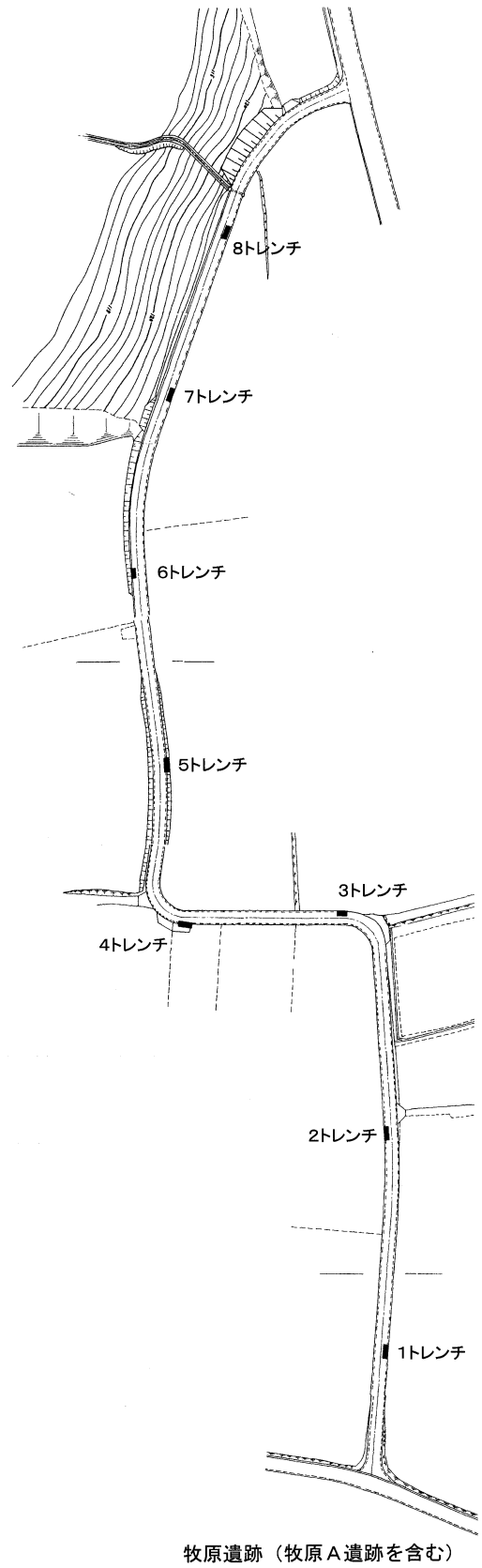
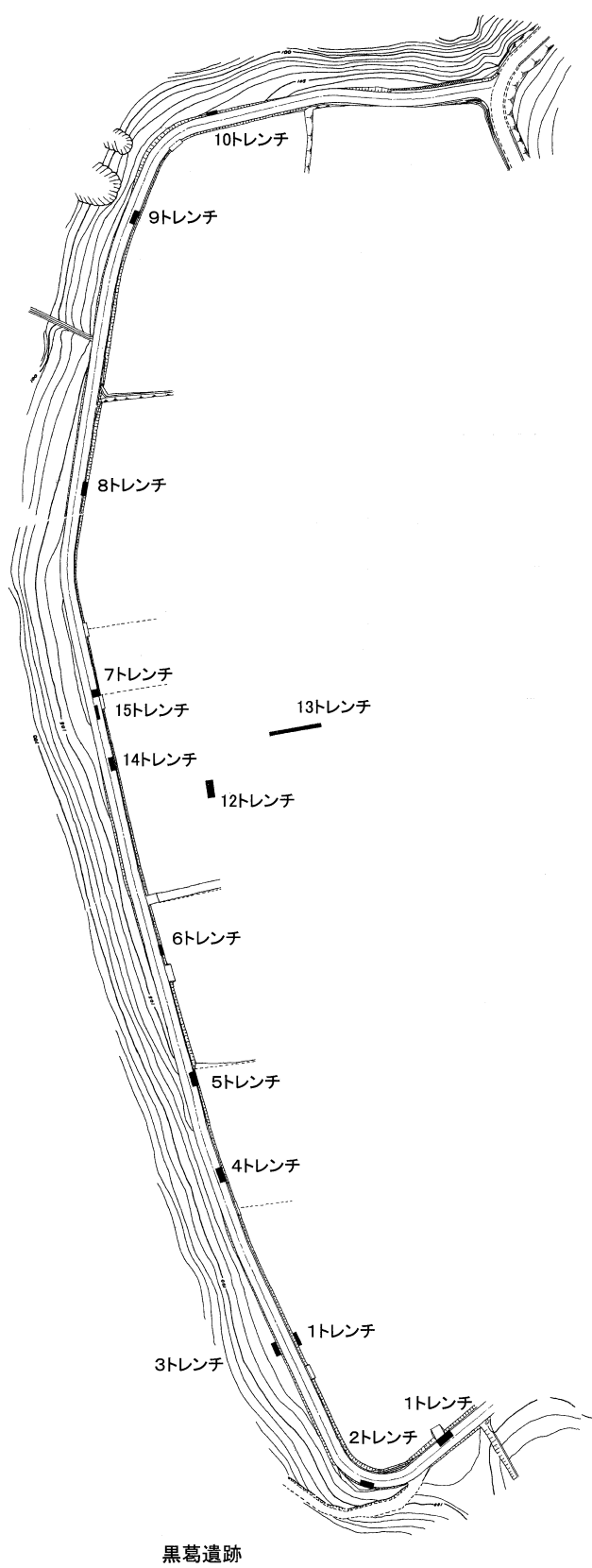
標準土層

I a層	灰褐色土層	表土。現在の耕作面である。
I b層	黄褐色土層	攪乱層である。
II層	淡黒色土層	白いパミスを多く含んだ粗い層である。
III層	黒色土層	部分的に残存しており削平された残りの層と考えられる。
IV層	黄白色土層	V層の二次堆積で縄文時代前期・中期相当層と思われる。

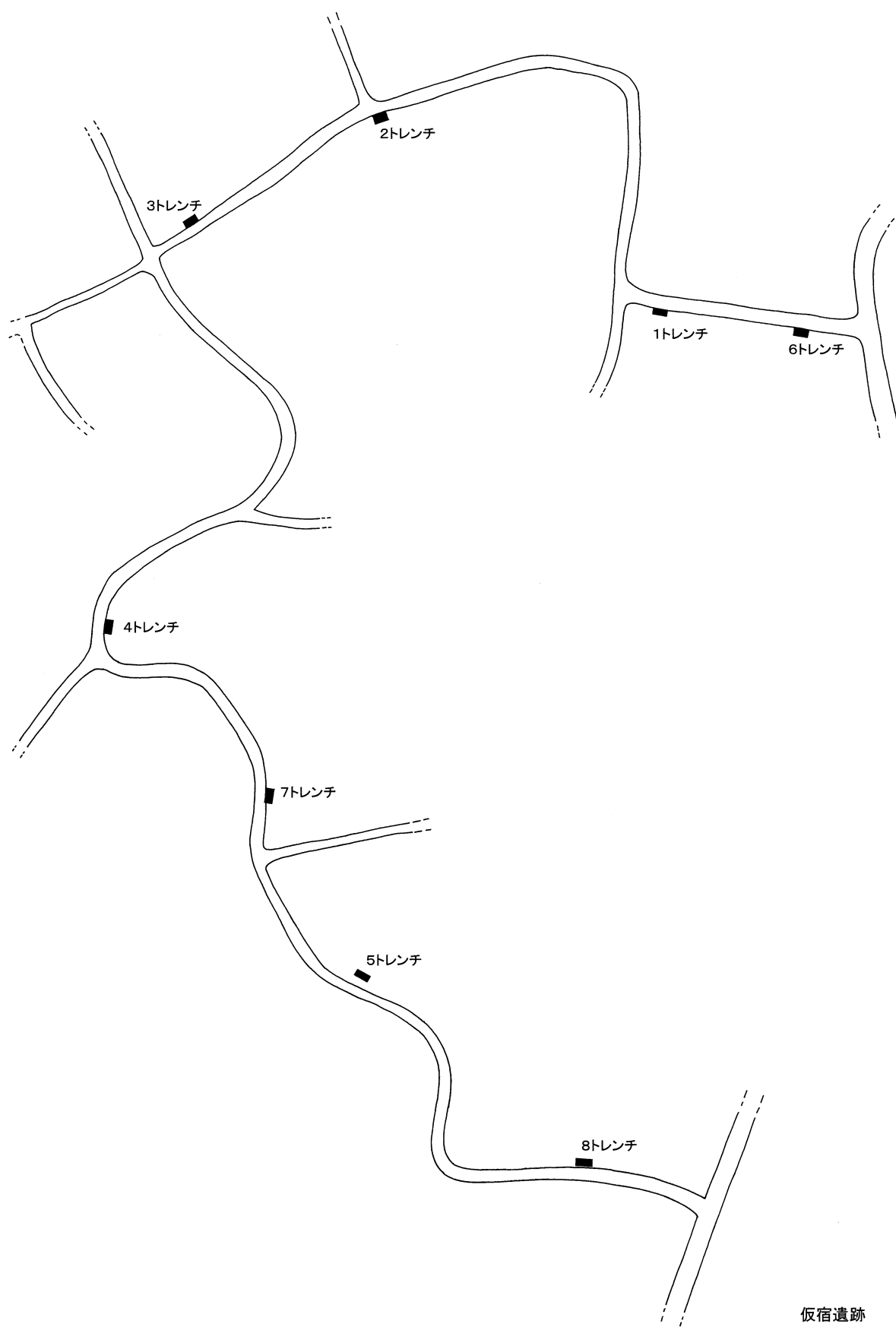
V 層	明黄色火山灰土層	6,300年前に鬼界カルデラから噴出したオレンジ色のアカホヤ火山灰層で、ブロック状に堆積している。
VI 層	黄白色土層	縄文時代早期の包含層である。
VII 層	黒色土層	縄文時代早期の包含層である。
VIII 層	淡黄褐色火山灰土層	11,500年前のサツマ火山灰層で全体にまだら状の堆積である。
IX 層	明茶褐色土層	強い粘質のある層である。
X 層	暗茶褐色土層	強い粘質のある層である。
XI 層	明黄褐色土層	硬質の層である。
XII 層	茶褐色土層	シラス二次堆積層である。

¹ 黒葛遺跡は確認調査の完了後に、そのまま本調査に取り掛かった。これを第1次調査とした。

² 牧原A遺跡は当初、牧原遺跡の一部であったが、散布地が離れていることから単独の遺跡として周知の遺跡に加えた。



第1図 確認調査トレンチ配置1



第2図 確認調査トレンチ配置2

第Ⅱ章 遺跡の概要

第1節 遺跡の環境

1. 地理

有明町は、鹿児島県東部の大隅半島に位置する。半島の南東部にあたり、宮崎県との県境に近い。町域は志布志湾に臨むが、海岸線は1.7km程と狭く、内陸に広い。大部分をシラス台地が占める。人口は約12,000人、総面積98.05km²。稲作、茶・野菜栽培や畜産が盛んである。

町から北北西約50kmに霧島山、西北西約40kmに桜島、南西約60kmに開聞岳があり、現在でも冬には桜島の火山灰が降る。また、南東に開いた志布志湾の沖には黒潮が北上する。

町内の地形は北と南で様子が異なる。町のほぼ中央を流れる菱田川を境に、南の野神¹・蓬原などに比較的なだらかな台地が広がる。一方、北の伊崎田は細かな小谷がシラス台地を削り込み、複雑な地形となっている。さらに、山重から伊崎田にかけて横たわる沢津ヶ峰などの100～170mの丘陵や霧岳（408m）・岳ノ山（278m）などの山により高低差の激しい地形となる。台地の標高は約120～300mをはかる。

町域を流れる河川には、中央に菱田川、東部には安楽川の支流である本村川・高下谷川、西部を南に流れる田原川がある。本村川・高下谷川沿いでは狭いながらも平地が見られ、菱田川流域には河岸段丘が広がる。また、町内のいたるところで湧水がみられる。

2. 気候

気候は温暖多湿であり、雨が多い。秋には台風にも見舞われる。植生も北の地域と大きく異なる。代表的なものとしては、志布志湾のびろう島が熱帯性植物の宝庫として知られている。ほかに当町から東に約30kmの宮崎県串間市には、熱帯性植物のソテツ・バナナの自生の北限が確認されている。

3. 歴史

有明町は、現在、鹿児島県曾於郡に含まれるが、古代から近世にかけては日向国諸県に属し、近代においても宮崎県の南諸県に所属した時期があった。古代より馬の産地としての記録が残っており、日本書紀の「馬ならば日向の駒」のひとつに野神が含まれていたと考えられている。

平安時代末期以降、菱田川の東側が日向国救二院、西が同国救二郷と呼ばれ、蓬原には救二郷氏の拠点があり、中世になると蓬原城が築かれる。その後、島津氏の支配下となり、近世の慶長頃まで外城を構成していたと言われる。近代に入り、住民の力によりシラス台地上での水田開発が進められ、蓬原開田・野井倉開田が完成した。

町内のほぼ全域に分布する遺跡は旧石器時代後期まで遡る。縄文時代の遺跡は草創期が未確認であるが、早期から晩期にかけては多く存在する。弥生時代では野井倉の土橋遺跡から全長81.6cmの銅矛が出土している。古墳時代では古墳・地下式横穴墓が多く見られ、円墳の原田古墳、原田・蓬原の地下式横穴墓群がある。近年の発掘調査では原田の長田遺跡・蓬原の仕明遺跡・通山の上苑遺跡で住居跡が確認されている。

第2節 遺跡の位置

調査報告を行う遺跡はすべて伊崎田²に所在している。黒葛遺跡・牧原遺跡・牧原A遺跡・大迫遺跡は隣接しており、菱田川に面した台地上にある。飯野A遺跡・本村遺跡は本村川流域の台地縁辺部に立地する。各遺跡いずれも台地下に河川が見られるが、飯野A遺跡のみは本村川より離れた小谷上

にある。

第3節 周辺の遺跡

1. 大久保遺跡

新たに認知された遺跡である。野神の田淵付近で発見された遺物を住民より届けられた。農地を深耕中に発見されたもので、遺物は弥生土器片8点、石鎌1点、打製石斧13点、磨製石斧4点である。出土地は台地上にあたる。時期は弥生時代と推定される。とくに注目されるのは打製の石鎌であり町内では初めての出土となる。

石鎌1は材質が頁岩、法量が最大長14.7cm、最大幅5.3cm、最大厚2.2cm、重さ157.2gを量る。

2. いせんぼ遺跡

伊崎田牛ヶ迫に所在の遺跡で大迫遺跡に隣接する。調査中に遺物が住民より届けられた。畑地の整備中に出土したもので地表面の黒色土から出土したらしい。遺物は石皿3点、磨石3点、叩石1点、凹石1点である。時期は縄文時代晩期と思われるが詳細は不明である。

凹石2は石材が砂岩であり、耕運時のものと思われる破損が表面に多く見られて1/2弱が欠損する。器面には敲打の痕跡は見られない。法量は最大長10.9cm、最大幅8.82cm、最大厚4.48cm、重量は620gを量る。

磨石3・4は側面に敲打痕が密に見られる。石材は3が砂岩、4が花崗岩である。法量は3が最大長8.8cm、最大幅5.6cm、最大厚4.92cm、重量は330gを量る。1/2が欠損する。4は最大長11.05cm、最大幅10.1cm、最大厚4.66cm、重量は850gを量る。

参考文献

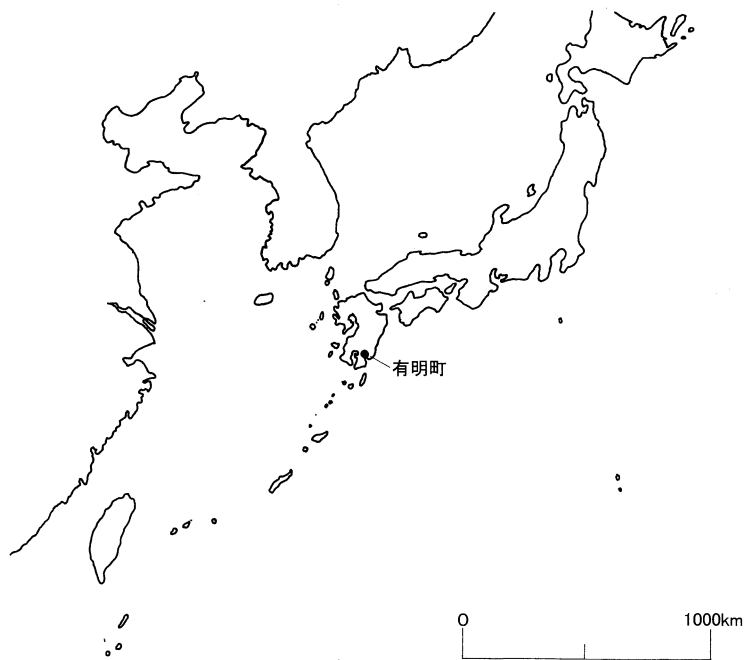
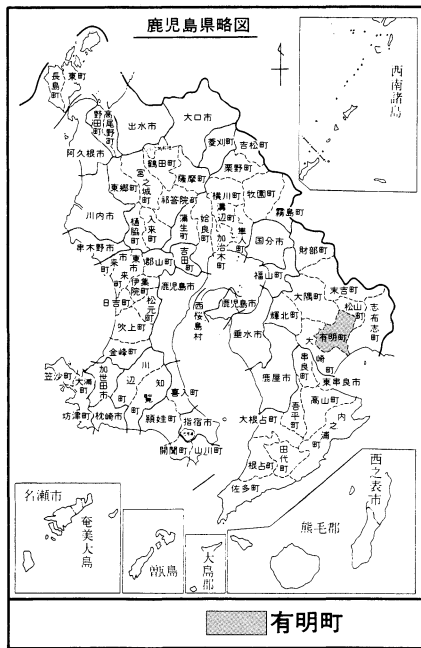
町誌編纂会編 『有明町誌』 有明町教育委員会

¹ 7つの大字のひとつ、他に伊崎田・野井倉・通山・山重・野神・原田がある。

² 町内は大字で7つに分けられる。それぞれが小学校の校区であり、地理・歴史的にも関係の深い範囲で形成されている。



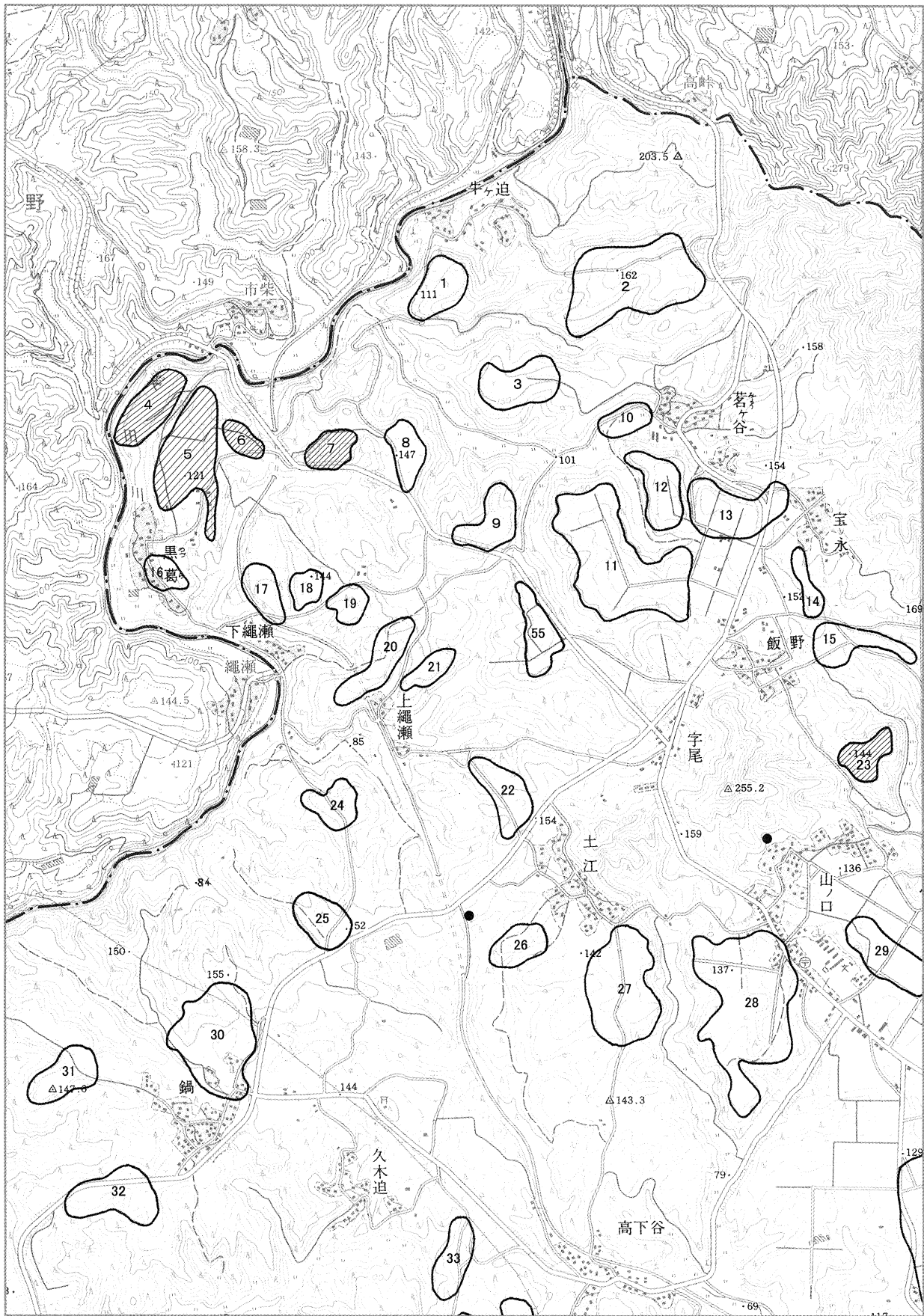
1. 黒葛遺跡 2. 牧原遺跡 3. 牧原A遺跡 4. 大迫遺跡 5. 飯野A遺跡 6. 本村遺跡



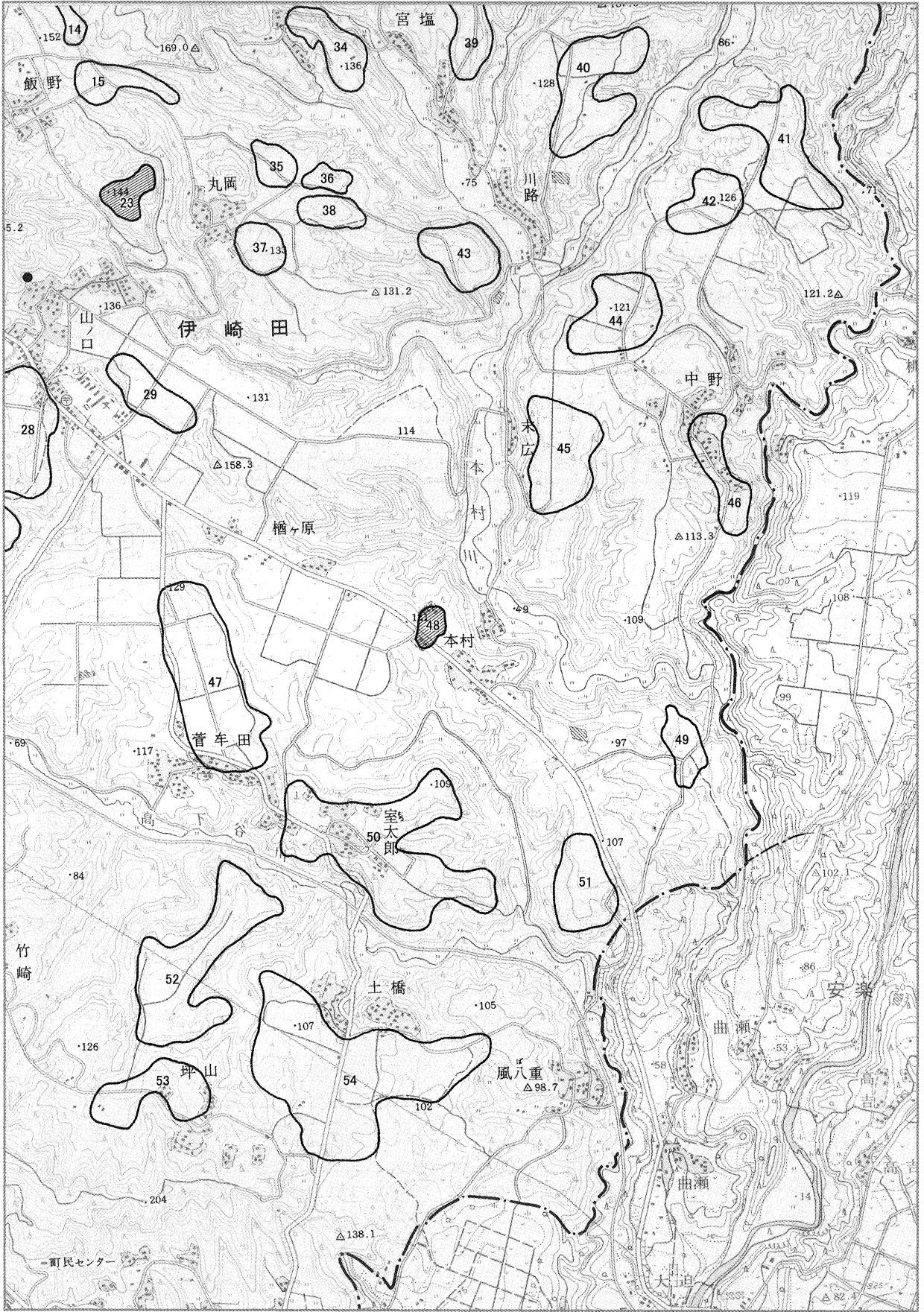
第3図 遺跡位置

	遺跡名	フリガナ	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	牛ヶ迫	ウシガサコ	伊崎田字牛ヶ迫・松ヶ尾・午休	台地	縄(晩)・弥	石鏃	
2	松ヶ尾	マツガオ	伊崎田字松ヶ尾	台地	縄(早・晩)中	前平式・打製石斧・土師器	H11分布
3	松ヶ尾B	マツガオ	伊崎田字松ヶ尾・茗ヶ谷	台地	古	平柄式	H11分布
4	黒葛A	ツヅラ	伊崎田字黒葛・牧原	台地	縄(後)・歴	土師器	H7分布
5	牧原	マキハラ	伊崎田字牧原・大迫	台地	歴		H13全面
6	牧原A	マキハラ	伊崎田字牧原・大迫	台地	古	石坂式・前平式	H7分布, H12全面
7	大迫	オオサコ	伊崎田字大迫	台地	縄(早・晩)	塞ノ神式・入佐式	H7分布
8	いせんぼ	イセンボ	伊崎田字社ヶ段・大迫	台地	縄(後・晩)弥	磨製石斧・土器	
9	社ヶ段A	シャガダン	伊崎田字社ヶ段・坂ノ下	台地	縄(後)	土器	H11分布
10	前田	マエダ	伊崎田字前田	台地	弥	土器・石器	
11	谷ヶ迫	タニガサコ	伊崎田字谷ヶ迫・向段	台地	縄		H7分布
12	向段	ムコウダン	伊崎田字向段・谷ヶ迫	台地	古	石・土器	H11分布
13	谷ヶ迫A	タニガサコ	伊崎田字谷ヶ迫・宝永・向段	台地	古		H11分布
14	飯野B	イイノ	伊崎田字宝永・飯野	台地	縄		H7分布
15	飯野	イイノ	伊崎田字飯野・丸岡・力石	台地	縄(晩)		H11分布
16	黒葛C	ツヅラ	伊崎田字黒葛・大迫	台地	縄・弥	石・土器	
17	社ヶ段B	シャガダン	伊崎田字社ヶ段・縄瀬	台地	中世	永山式土器	H11分布
18	縄瀬C	ナワセ	野井倉字縄瀬・社ヶ段	台地	古		H11分布
19	縄瀬B	ナワセ	伊崎田字縄瀬	台地	中世		
20	縄瀬A	ナワセ	伊崎田字縄瀬・坂ノ下	台地	縄(晩)・中世	土器・土師器	H11分布
21	坂ノ下	サカノシタ	伊崎田字坂ノ下	台地	縄		H11分布
22	萩ノ迫	ハギノサコ	伊崎田字萩ノ迫・土江	台地	古		H11分布
23	飯野A	イイノ	伊崎田字飯野	台地	縄(早・前)	吉田式・前平式・黒川式・古道1基	H7分布, H13全面
24	三方境	サンポウザカイ	伊崎田字三方境	台地	弥	石・土器	
25	土光	ドコウ	伊崎田字土光・三方境	台地	古		H11分布
26	渡ヶ迫	ワタリガサコ	伊崎田字渡ヶ迫・牧	台地	古		H11分布
27	牧	マキ	伊崎田字牧・堂免	台地	古		H8分布
28	山ノ口	ヤマノクチ	伊崎田字馬場ヶ迫・中田・山ノ口前・奈良ヶ迫	台地	縄	石皿・石斧	H11分布
29	段	ダン	伊崎田字段・奈良ヶ原	台地	縄(中・後)		
30	稗ノ迫	ヒエノサコ	伊崎田字稗ノ迫・鍋前畑・蔦ノ段	台地	古		H11分布
31	鍋A	ナベ	伊崎田字鍋・西ノ迫	台地	古		H11分布
32	伊崎田鍋	イサキダナベ	伊崎田字牧・西ヶ迫・鍋前田	台地	縄(早・後)	石坂式・吉田式	H11分, 旧遺跡名: 西之迫
33	仮宿A	カリジユク	伊崎田字仮宿・別当	台地	古		H11分布
34	塩水流	シオズル	伊崎田字塩水流・前谷	台地	古	土師器・青磁	H11分布
35	丸岡A	マルオカ	伊崎田字丸岡・力石	台地	縄	石鏃・土器・石器(打・磨)	
36	東段A	ヒガシダン	伊崎田字東段	台地	弥		
37	丸岡B	マルオカ	伊崎田字丸岡	台地	弥		H11分布
38	東段B	ヒガシダン	伊崎田字東段	台地	古		H11分布
39	石割迫	イシワリザコ	伊崎田字石割迫・関松・弓場ヶ迫	台地	古		H11分布
40	上ノ原A	ウエノハラ	伊崎田字上ノ原	台地	縄	青磁	H11分布
41	山原	ヤマバル	伊崎田字山原・宮谷	台地	縄(晩)	入佐式・敲石・磨石・剥片	H11分布, 全面
42	札元	フダモト	伊崎田字札元	台地	縄(後・晩)古	中岳Ⅱ類・磨石・石斧	H11分布, 全面
43	向江原	ムカエバラ	伊崎田字向江原	台地	縄(晩)	剥片石器	H7分布
44	鹿藤	カフジ	伊崎田字鹿藤・二反田	台地	縄		H11分布
45	小迫	コザコ	伊崎田字小迫・鹿藤	台地	縄・古		H11分布
46	中野	ナカノ	伊崎田字中野・下原	台地	弥	土器・石斧	
47	見返段	ミカエリダン	伊崎田字見返段・前迫・中尾	台地	縄・弥		H11分布
48	本村	ホンムラ	伊崎田字本村・下原	台地	縄・弥	深浦式・山ノ口式・集石1基・竪穴住居1基	H7分布, H13全面
49	川原田	カワハラダ	伊崎田字川原田・後迫・大道	台地	古		H11分布
50	立山	タチヤマ	伊崎田字立山・上ノ園・平・室太郎	台地	古		H11分布
51	下原	シモハラ	伊崎田字下原	台地	縄(晩)・弥	土器	H11分布
52	榎	エノキ	野井倉字榎・一合田	台地	縄・古		H11分布
53	草場	クサバ	野井倉字草場・坪山・前畑	台地	弥(後)・古	石斧・土師器	
54	土橋	ツチバシ	野井倉字土橋・下原・土原	台地	縄(後)弥(中)	銅矛	
55	坂ノ下A	サカノシタ	伊崎田字坂ノ下	台地	古		H11分布
56	仮宿	カリシユク	伊崎田字仮宿・多々越	台地	縄		H7分布

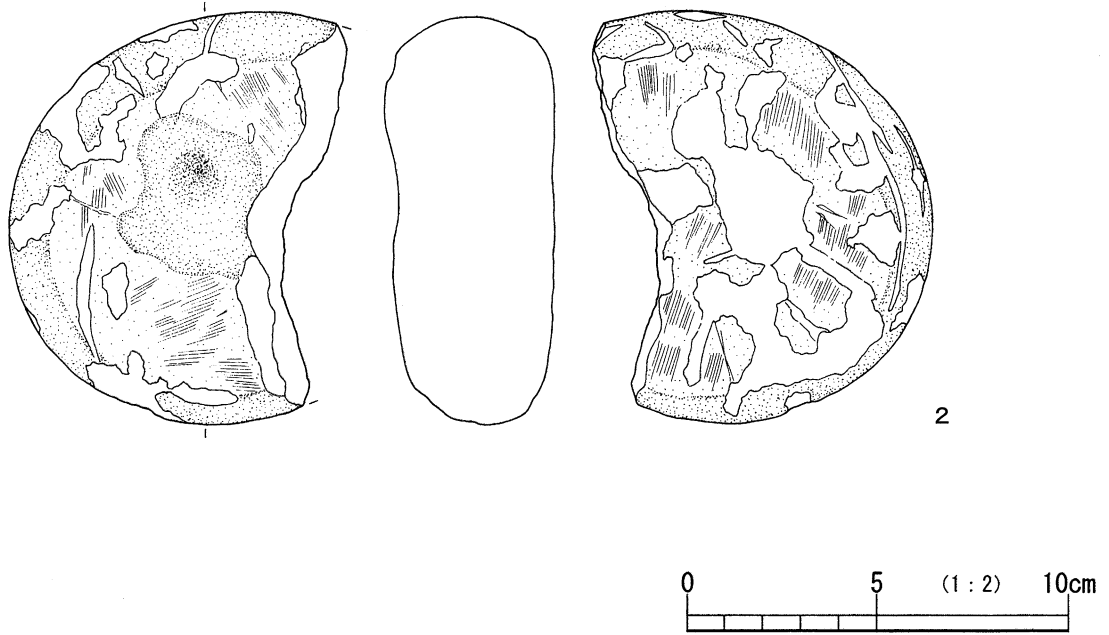
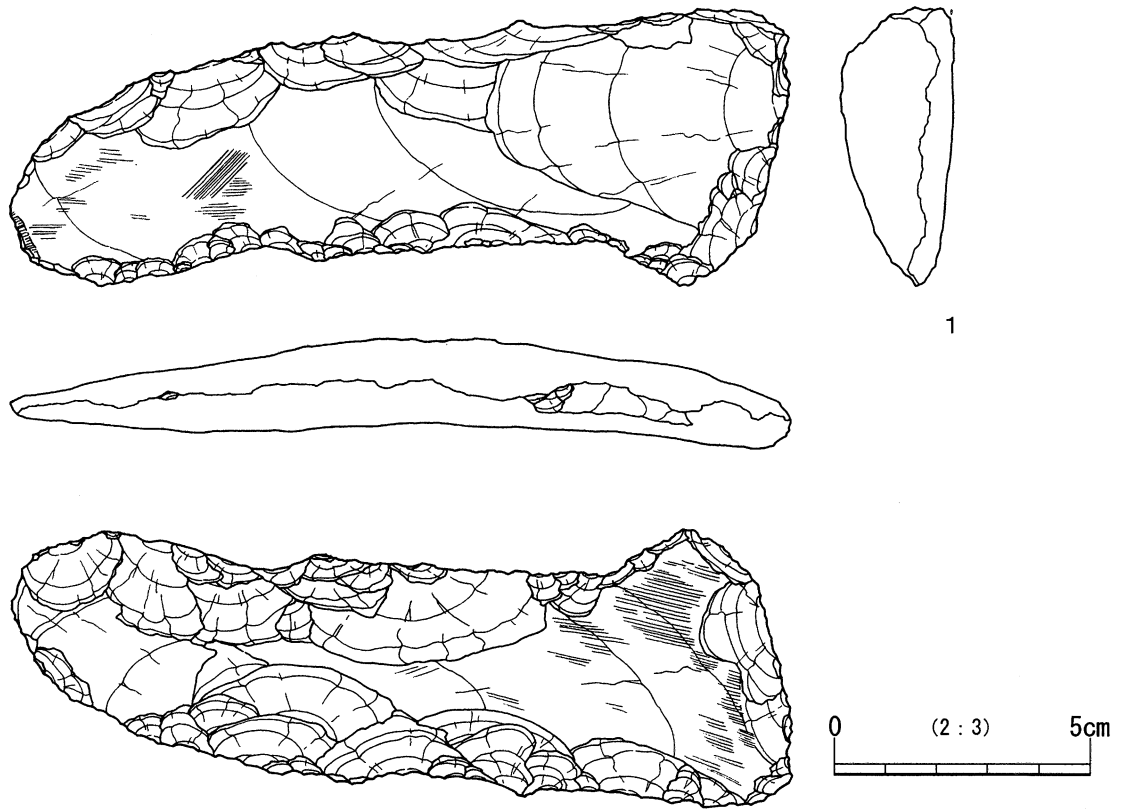
第1表 周辺遺跡地名表



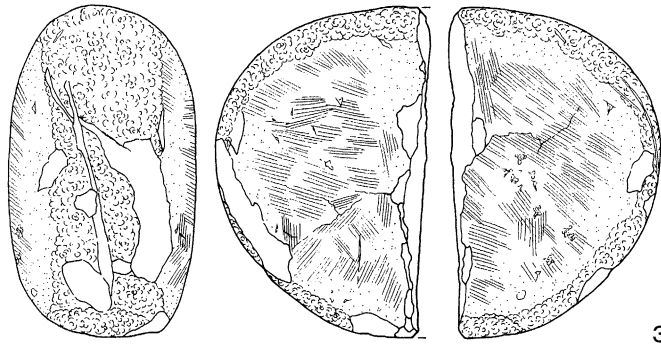
第4図 周辺遺跡配置1



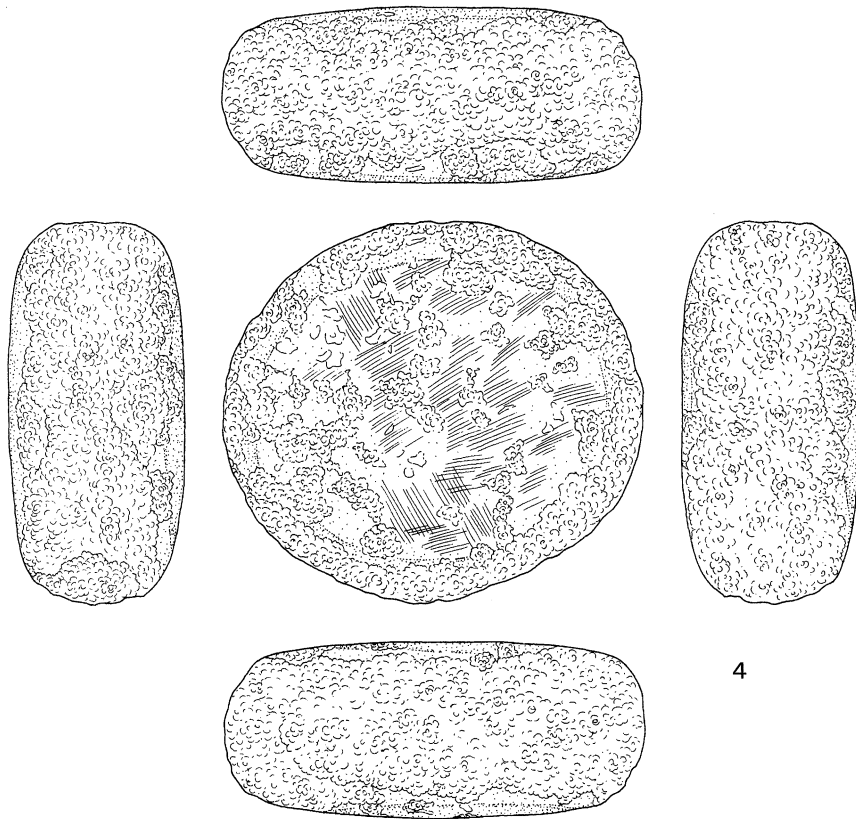
第5図 周辺遺跡配置2



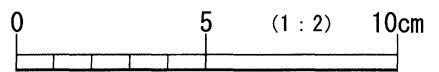
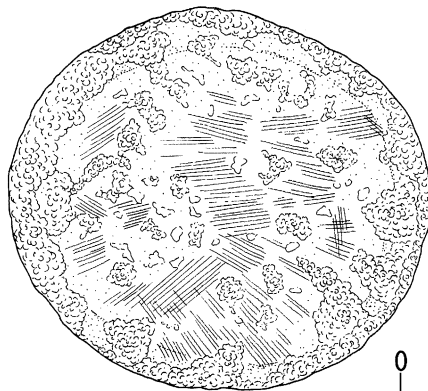
第6図 大久保遺跡・いせんぼ遺跡 表採遺物



3



4



第7図 いせんぼ遺跡 表採遺物

第三章 黒葛遺跡 第1次

第1節 はじめに

黒葛遺跡の第1次発掘調査は元社会教育課主事 中水忍により平成9年に実施されたものである。調査は無事完了して整理・報告を残すのみであったが、中水が異動のため作業は中断することとなった。

今回、残された事業報告などの記録をもとに整理作業を行ない、以下に簡略ながら報告する。本文は調査担当者の事業報告書を基本にして必要事項を書き加えてある。

第2節 調査の概要

1. 調査の方法

黒葛遺跡は、個人の耕土改良によるいわゆる「天地返し」によりⅠ・Ⅱ層が攪乱されていたが、遺物包含層であるⅢa層・Ⅳ層の残存状況は良好であり遺構・遺物も多かった。調査はⅠ・Ⅱ層を重機で除去した後に、人力による掘り下げを実施した。

遺構の検出はⅢb層上面（検出面1）とⅥ層上面（検出面2）で行なった。調査区は細長い範囲であったため、任意に設定した10mグリッドを用いて位置を把握した。

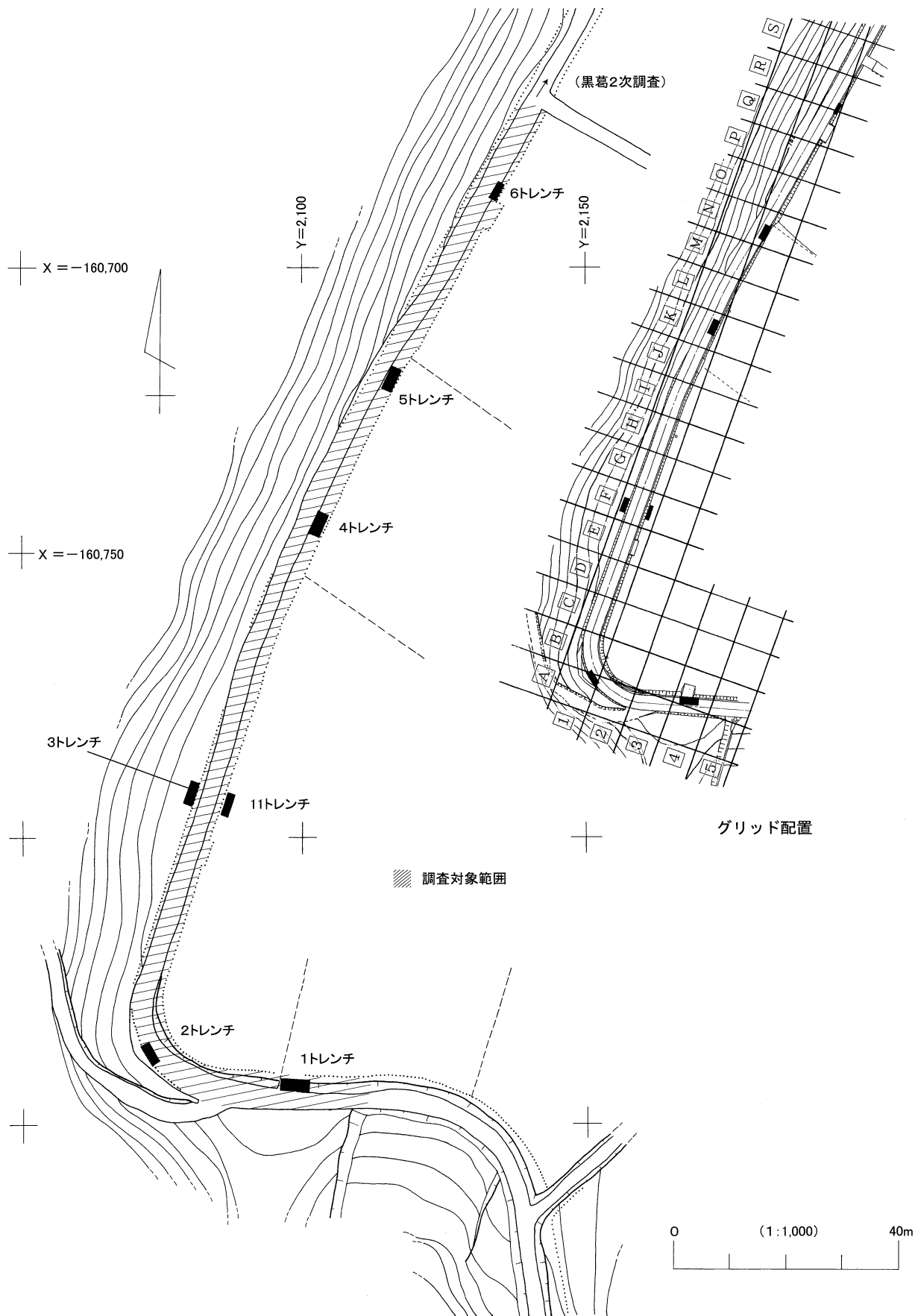
2. 層序

遺物包含層はⅡ・Ⅲa・Ⅳ層の3層が確認されたがⅡ層は攪乱されて残存状況は極めて悪い。調査地周辺の旧地形は耕地改良などの削平により失われている。

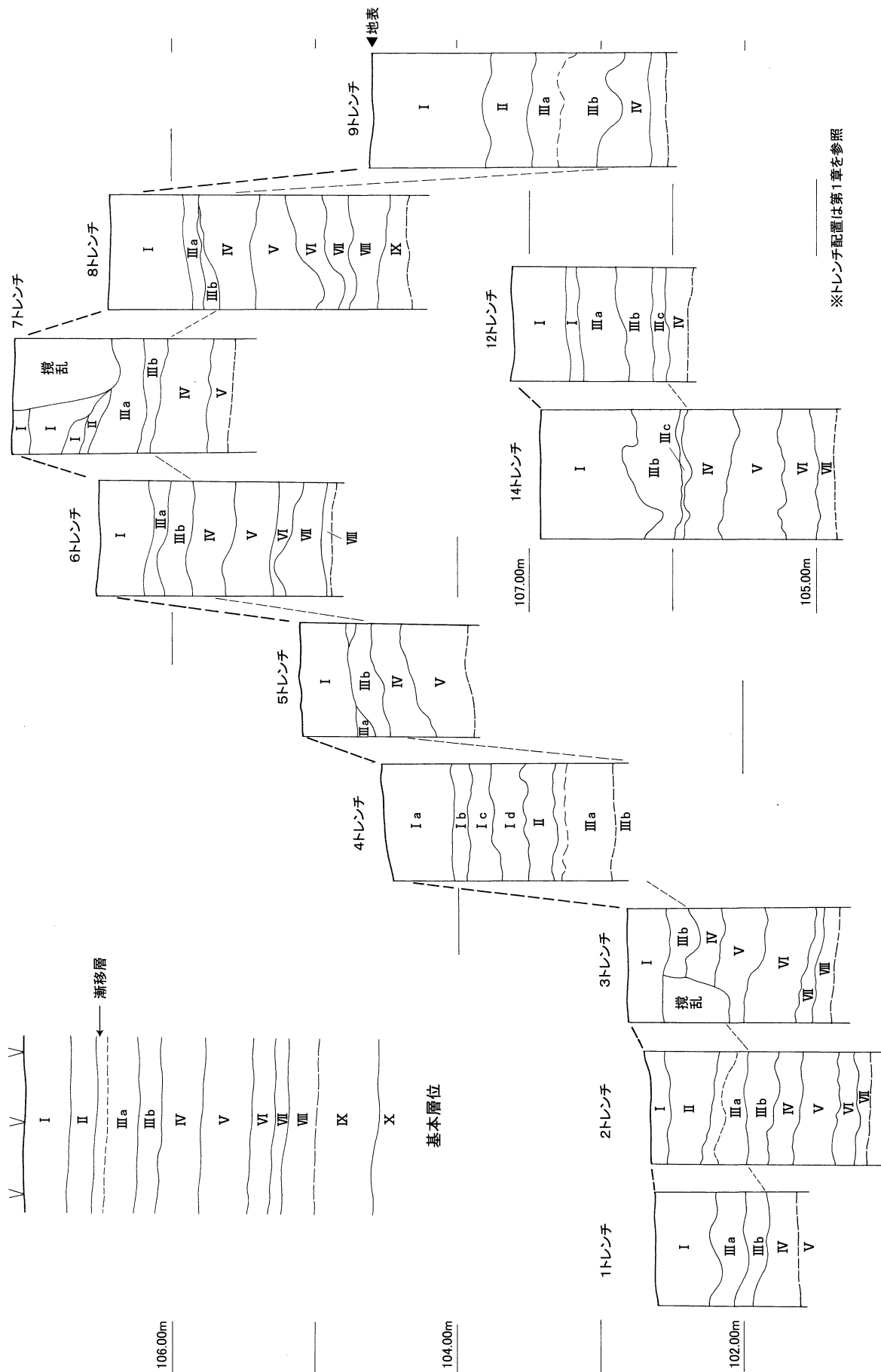
柱状図から推測される旧地形は、現在の様に緩やかな勾配の比較的平坦な地形ではなく、細かい起伏が見られる高低差の大きな地形であったことが考えられる。

基本土層

Ⅰ 層	灰褐色土層	表土。現在の耕作面で切土・盛土の攪乱層である。
Ⅱ 層	黒褐色土層	やや粘性のある腐植土で部分的に残存している。一部にはⅢa層の漸移層も確認された。
Ⅲ a 層	暗黄褐色火山灰層	Ⅲb層の二次堆積と思われる層で縄文時代晩期の時期に相当する遺物包含層であり、池田降下軽石も点在している。
Ⅲ b 層	明黄褐色火山灰層	6,300年前に鬼界カルデラから噴出されたとされるアカホヤ降下火山灰層に推定され、全体的に大きなブロック状で確認された。
Ⅳ 層	青灰色土層	オレンジ色のパミスを多く含む縄文時代早期に相当する遺物包含層である。
Ⅴ 層	黒褐色土層	やや硬質の土層である。
Ⅵ 層	黄褐色土層	11,500年前のサツマ降下火山灰層に推定され、ブロック状に残存している。
Ⅶ 層	茶褐色粘質土層	粘性のある「チョコ層」と呼ばれる層である。
Ⅷ 層	黄褐色土層	硬質でパミスを含んでいる。
Ⅸ 層	褐色ローム層	X層の二次堆積と思われる層である。
X 層	黄褐色土層	サラサラしているシラス層である。



第8図 黒葛遺跡第1次 調査区位置



第9図 黒葛遺跡第1次 土層柱状図

3. 調査の成果

遺構の検出はⅢb層上面とⅣ層途中ないしⅤ層上面で行なわれた。Ⅲb層上面において古代・縄文時代晩期の遺構を、Ⅳ～Ⅴ層上面においては縄文時代早期の遺構を検出している。

遺物包含層はⅡ・Ⅲa・Ⅳ層を確認し、Ⅱ層では古代及びⅢa層の漸移層中からの縄文時代晩期の遺物が出土した。Ⅳ層では縄文時代早期の遺物を確認した。

a. 検出面1（Ⅲb層上面）

古代と縄文時代晩期の遺構があり、縄文時代晩期の遺構内には黄褐色土、古代のものには黒色土が堆積する。

（ア）古代

古代の遺構には土坑2があり、覆土が第Ⅱ層に類似の黒色土で多くの土器を含む。規模は大きく平面3.7m×2.7mを測る。

遺物の分布状況としてはほぼ土坑2内でのみで確認されるが、これは古代の包含層が削平により消滅しているためであり、当時の廃棄状況等を反映しているものではない。

各遺物のおもな特徴は下記のとおりである。

土器 5～17・石製品 127

土坑2より出土した5～16はすべて土師器であり、器種はおもに甕と考えられる。

胎土・色調から2種類に分けられる。ひとつが10YR8/4浅黄橙色で多量に2mm大の赤褐色砂粒・乳白色砂粒・黒色砂粒・長石・石英・雲母などが含まれるもの、もうひとつが7.5YR5/6明褐色でやや多量に1mm以下の石英・長石・雲母・黒色砂粒を含むものである。前者には5～8・14～16、後者には9～13が該当する。

口縁部5は直立する胴から外反した口縁が短く延びる。口縁部は頸部付近から口唇部まで肥厚して丸い口縁端部をもつ。器面は胴部内面にのみ右から左への粗いケズリを残し、その他には横方向のナデが施される。6・7も類似する。

8は外面に段が見られるほどの強いナデを施している。14～16は部位が底部近くと思われる。

9・10は脹らむ胴部にくびれた頸部をもち、そこから大きく外反した口縁部がやや長く延びる。調整は5と同様であるが胴部外面のみは縦方向のハケメを施している。底部付近ではハケメもナデ消される。

これらの土器の年代はおもに8世紀代であろうか。

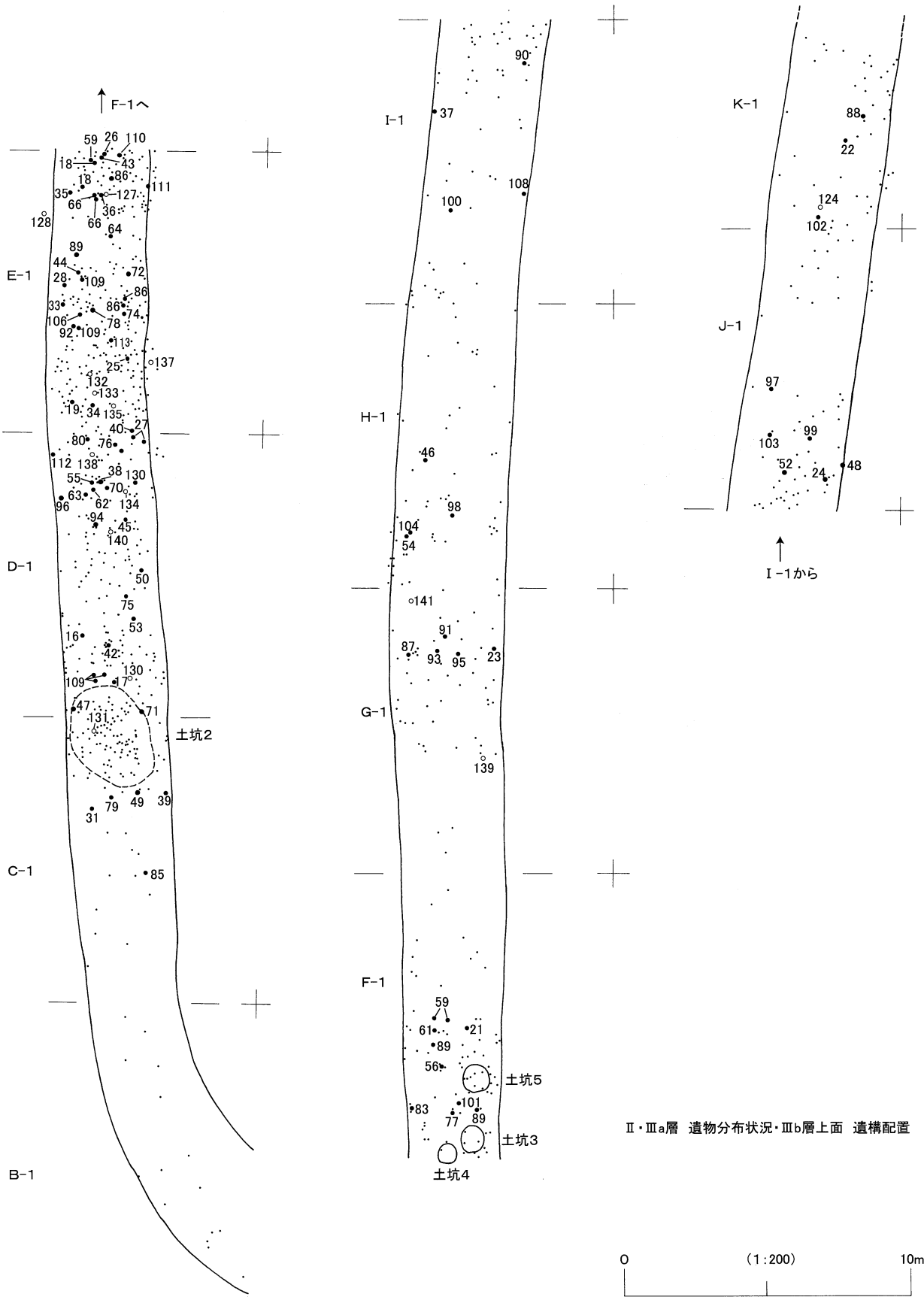
17は土師皿と思われ、1点のみ確認した。器面は摩滅する。時期は不明である。

なお、土坑2より10mほど離れたグリッドE1から小玉127が出土している。詳しくは表に記述してある。

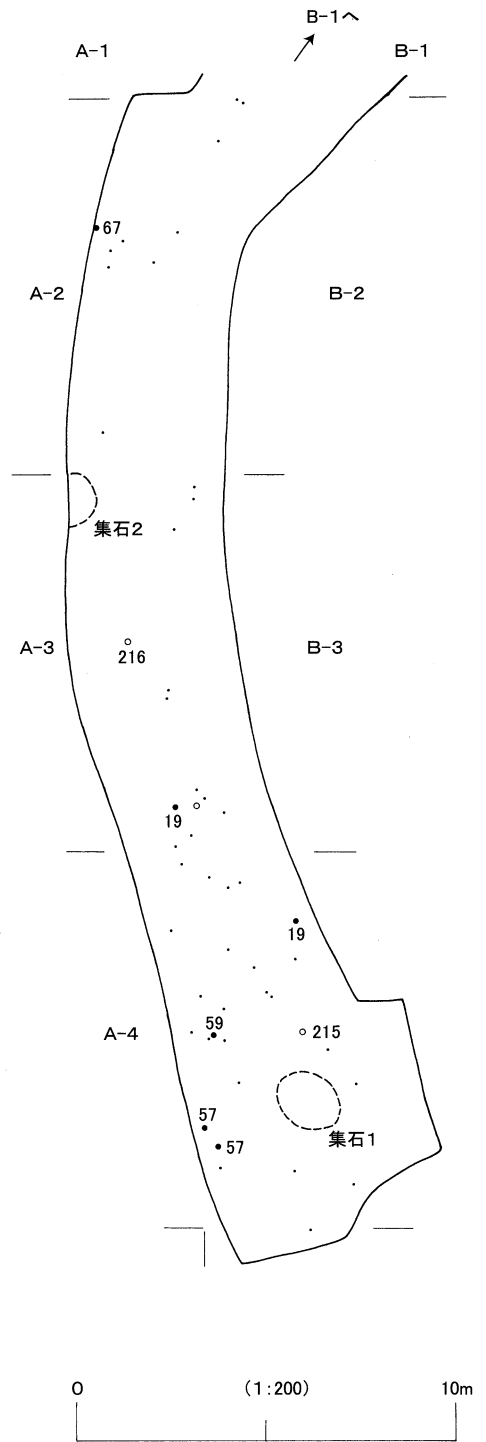
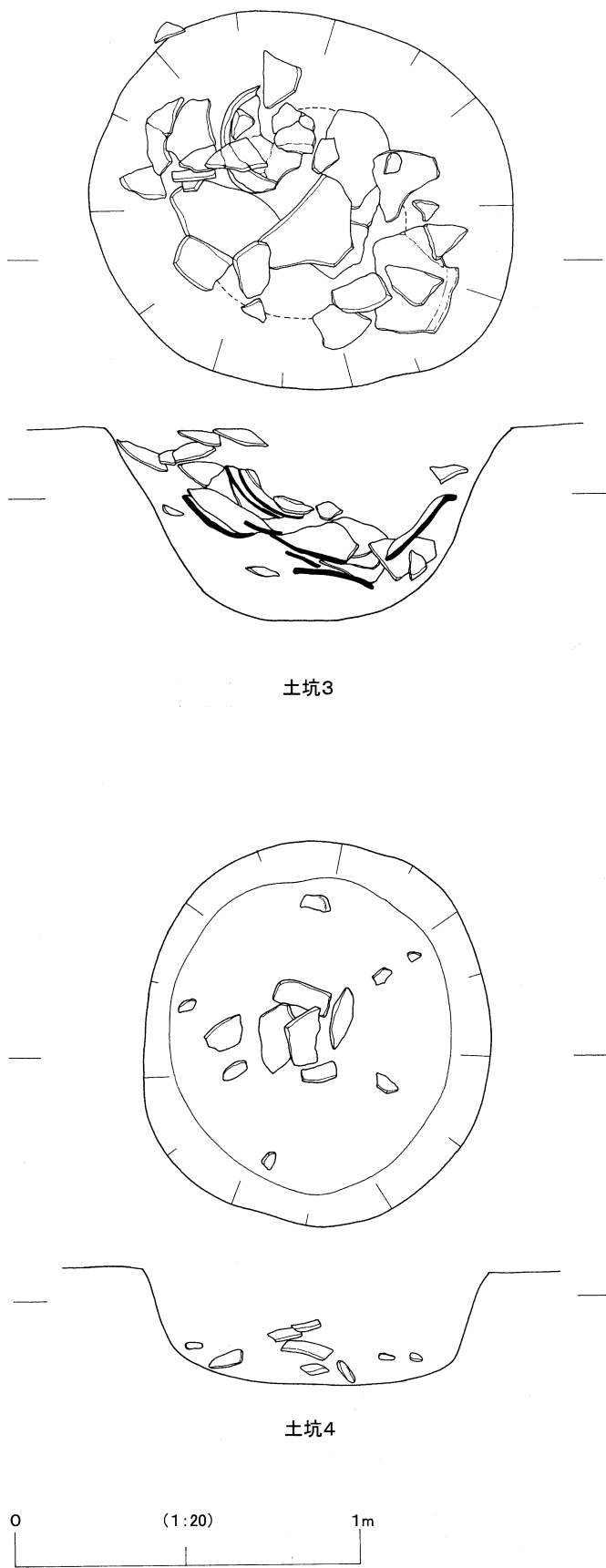
（イ）縄文時代晩期

この時期の遺構は3基の土坑を確認した。3基はグリッドF1で近接している。土坑3・土坑4には破碎した土器片が覆土中に含まれる。遺構内には黄褐色土が堆積する。

土坑3は規模が平面110cm×123cm、深さ55cmを測り、底面の13cm上から土器片が埋没する。土器片は1個体に復元でき、142がこれにあたる。復元した器面にはつながらない黒班や煤・炭化物の範囲が確認できた。断面にも煤・炭化物が見られたことから破碎後に加熱を受けたことが考えられる。焼

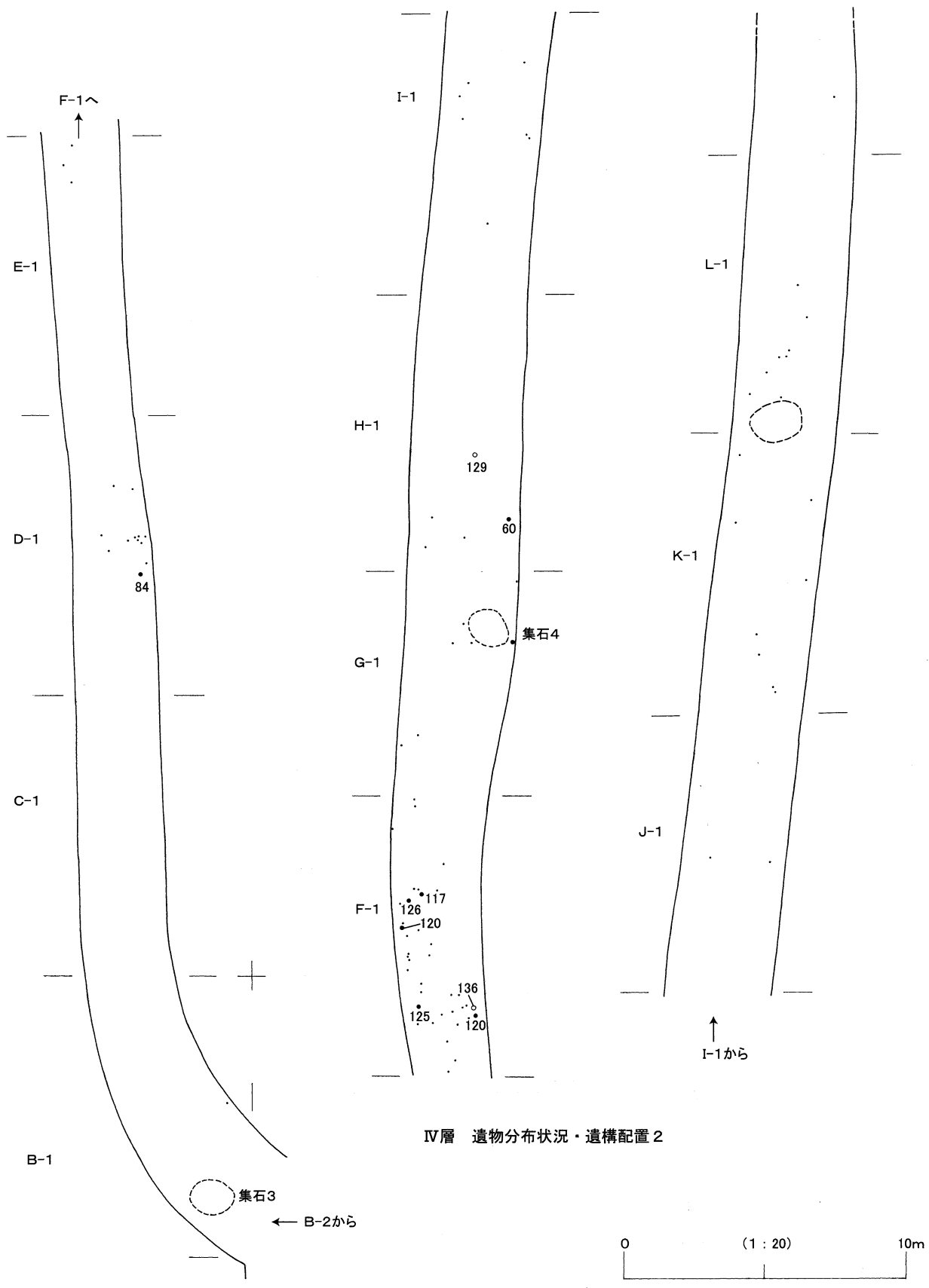


第10図 黒葛遺跡第1次 遺構1



IV層遺物分布状況・遺構配置1

第11図 黒葛遺跡第1次 遺構2



第12図 黒葛遺跡第1次 遺構 3

成の場が土坑3であった可能性も考えられる。

土坑4は規模が113cm×102cm、深さが32cmを測る。土器片が数点見られた。

各遺構の時期は覆土と出土土器から縄文時代晩期と考えられる。

遺物の分布状況としては、B1からK1までの広い範囲に多量の土器片が出土した。とくにC1北端からF1にかけては密に分布する。また、数箇所比較的遺物の集まる範囲が見られる。遺物は表採として周囲の耕地でも確認できる。

土器の形式は入佐式から黒川式にかけてと考えられ、黒川式の数量が最も多い。また、晩期終末の突帯をもつものも見られる。

以下、各遺物についておもな特徴を述べる。

土器

土器は粗製と精製に分けられる。残存状況が良好なものは少なく、ほとんどが5cm程度の破片である。そのため粗製・精製に分けた後は各部位ごとに記述する。なお、各土器とも焼成などを受けたと思われ、煤・炭化物が付着して赤化する。そのため色調は必要に応じて記述する。

粗製土器 (18～88・107～109・142)

器形の109・142があり、109はくの字状に脹らむ胴部にやや肥厚する口縁が外に開いている。器面はヘラ状工具によるミガキで整えられている。142は胴部が脹らむが明瞭な屈曲は見られない。口縁部外面には頸部近くに突帯が貼り付けられる。器面は摩滅が激しく不明であるが、外面には貝殻条痕と粗いミガキが確認できる。

口縁部18・20・21は入佐式と考えられ、口縁部外面に幅が狭くやや深いヘラ状工具による沈線が数条並行する。18には11条の沈線が施文される。器形は直行する口縁が外に開き、口唇部が平坦面をもっている。胎土にはおもに石英・長石・雲母が見られ、粒度が2mm以下と粗くて含有量が多い。とくに雲母が多い。

口縁部107・108は黒川式の終末期に位置づけられる。口縁端部に突帯をめぐらしており、107の突帯は断面が台形を、108は三角形を呈している。また、110～113は細かいミガキが施される器面調整などから同時期のものと思われる。

その他の口縁は器形から、いくつかに分けられる。

口縁部19・22～24はやや薄い器壁をもち、直行する口縁部が外に開いている。口唇部は平坦な面に仕上げている。それぞれ器面の摩滅の状態は異なるが器面調整には粗いミガキが見られる。器形は入佐式18に近い。

口縁部25～30は外面に段をもつ、いずれも口唇部から約3cmとやや離れた頸部近くに段がある。口唇部は25～27・30が不明瞭な稜線をもつ平坦面、28は明瞭な稜線をもった平坦面になる。29はやや尖るように丸く仕上げる。29・30には器面に粗いミガキが施される。

39～43・45・48は外に開いた口縁がやや内湾する。口唇部はやや稜線の不明瞭な平坦面をもっている。39～41・45は器面調整にミガキが施される。

44・47・50は厚い器壁が直行する口縁部をもち、口唇部にはやや稜線の鈍い平坦面が見られる。器面はナデで整えられる。

その他、口縁部には口唇部がやや尖った様に丸く仕上げられる49・52、外面に明瞭な条痕を残す36・37・51、口縁端部が肥厚する46・57などがある。また、35は外面に頸部付近で段をもち、口縁部には縦位の棒状突帯を貼り付けられる。内面にも見られる。

頸部・胴部は様々であるが、胴部58～62からは屈曲部の角度が異なることが分かる。60の屈曲部から下には明瞭な貝殻条痕が残る。また、頸部38にはリボン状の貼付文が見られる。

底部はいずれも器面が摩滅しており、内外面に細かい剥離が見られて赤化していることから加熱を受けたことが考えられる。

精製土器（89～106）

口縁部91・97には口唇部外側にリボン状の貼付文が見られる。91は口唇部に浅い沈線をめぐらす。

口縁部92は胴部から鋭く屈曲して大きく外反する口縁に、口縁端部がやや真っ直ぐ立ち上がる。口縁端部の外面には浅い沈線がめぐる。器種は精製浅鉢である。

口縁部89・90・93～95・98は口縁端部が肥厚して内側に段をもっている。94は口縁端部の内外面の屈曲部分に沈線を施している。90は外面に激しい剥離が見られる。

胴部には丸く脹らむものと鋭く屈曲するものが存在している。

石器

石鏃128・130、異形石器132、削器133、石錐134、打製石斧136～138、磨製石斧139～141・143、剥片135・217、磨石213が出土した。他にも剥片が15点ほどあるが10点近くは頁岩、他はチャートである。頁岩は風化の程度がそれぞれ異なる。

石鏃128は基部に厚みがあり浅い抉入部をもっている。石鏃130は先端部と片方の脚部が欠損する。浅い抉入部をもっている。

異形石器132の石材は不透明な黒曜石を用いている。反りあがった辺は磨耗しており、刃部と考えられる。

削器133は破損した打製石斧の2次使用と思われる、石斧の側辺を刃部として利用したと考えられる。器面の磨滅が激しい。

石錐134は打製石斧の基部を二次加工して使用したのと考えられる。刃部が想定される箇所は2つあるが、図では幅のある部分を刃部とした。磨耗の状態では断面図側がより激しい。

打製石斧137・138はいずれも上下端が欠損する。石材には風化したと思われる頁岩が用いられている。

磨製石斧139は幅が細く一般的な石斧とは異なる。器面は丁寧に磨かれており、表裏の大きな剥離は成形時の残存である。欠損部には先端が折れた後に加えられた剥離が見られる。二次加工か使用の痕跡と思われる。左右の側面の対になる位置に細かい敲打痕が見られる。機能としては通常の磨製石斧と異なるものと思われる。

磨製石斧140は欠損した刃部であるが二次使用の痕跡があり、両辺に敲打痕と刃部に細かい剥離が見られる。折れた後に横からの力で大きく剥離しており、左右の敲打痕の結果と思われる。

磨製石斧141は刃部のみが残るが幅が140に比べ倍近く広い。全体的に磨滅が激しい。

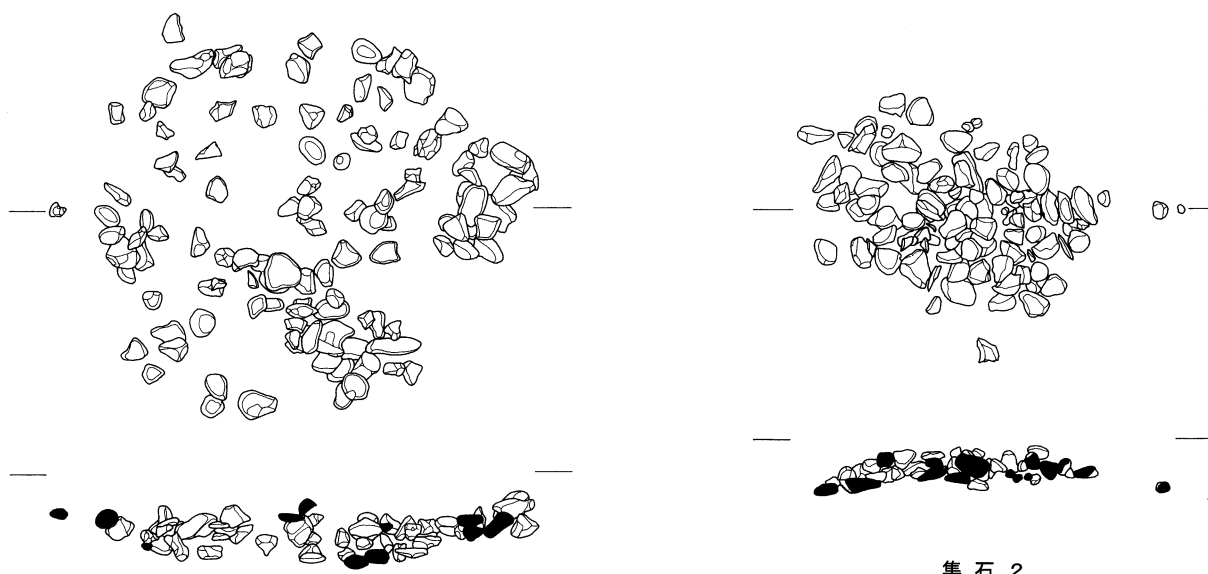
磨製石斧143は刃部先端のみが残る。

剥片217は石材が黒曜石で不純物が多く不透明である。

磨石213は背腹の両面に磨耗が見られるが、とくに腹面は平坦で磨耗面が明瞭である。側面には敲打痕が見られて集中する箇所がある。

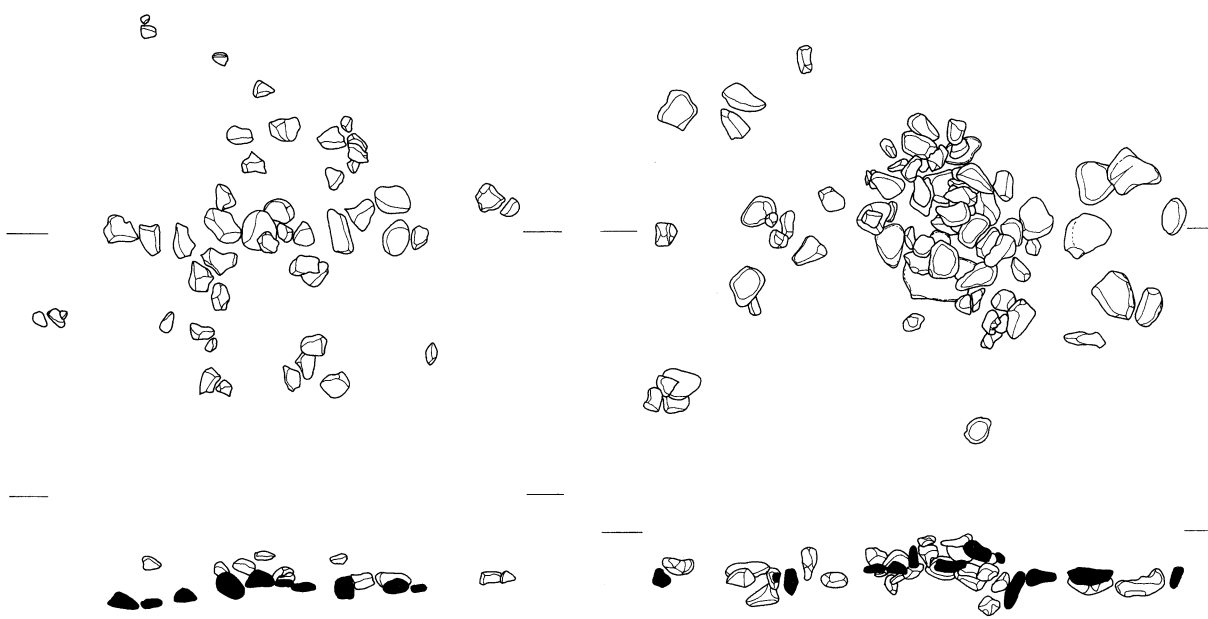
b. 検出面2（IV層途中もしくはV層上面）

IV層途中より集石を数基検出した。包含層には多数の礫が含まれており、破碎や赤い変色が見られ



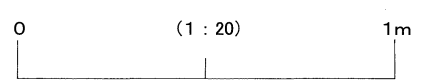
集石 1

集石 2



集石 3

集石 4



第13図 黒葛遺跡第1次 遺構 4

るが川原石が多い、集石を構成する礫も同じである。時期は層位と土器から縄文時代早期後半と考えられる。

遺物の密度は疎であるがB 1～M 1まで広く出土する。分布状況としては、グリッドA 4とF 1に比較的遺物が集まる。

(ア) 遺構

集石 1 平面で1.2m×1.0mの範囲に広がり、密度は比較的疎である。しかし、礫の集中する範囲は比較的綺麗な円形を呈している。垂直方向での礫の分布は断面がレンズ状になっており、浅い掘り込みがあった可能性も考えられる。

集石 2 平面で0.7m×0.6mの範囲に広がり、密度は密である。礫は敷き詰められたように密集しており、垂直方向でもほぼ同じ高さに集まる。

集石 3 平面で1.1m×1.0mの範囲に広がり、密度は極めて疎である。比較大きな礫が集まるが配石などを行った様子はない。垂直方向の分布からは掘り込みなどは見られない。

集石 4 平面で1.4m×1.0mの範囲に広がり、密度は疎密が見られる。礫の集中する部分は0.6m×0.5mを測り、垂直方向でも集まっている。垂直方向の分布では全体的な上下の散らばりは見られないが部分的に礫が落ち込むところが見られる。

(イ) 遺物

土器

口縁部119は口唇部外側にキザミをもち、外面には沈線で文様を描いている。口縁部115・116も口唇部は失われるが、外面には沈線で描かれた文様が見られる。いずれも平椀様式と考えられる。

胴部117・118・120・121の外面には沈線に区画された燃糸文が見られる。塞ノ神様式と考えられるが、118のみは平椀様式の胴部の可能性がある。

胴部122は外面に縦位に貝殻を用いて流水文を描いている。形式は桑ノ丸式と考えられる。

底部126は外面に縦位の燃糸文のうえから横位に2条の沈線文が施されている。平椀様式と考えられる。

土製品114は耳栓と考えられ、器面は丁寧なナデで仕上げる。

石器

石器は軽石製品124、石鏃129、搔器131、打製石斧136、剥片215・216・218が出土した。

軽石製品124は、板状の軽石の中央に凹みがあり未貫通の穿孔と思われる。摩滅が激しく調整などは不明である。

石鏃129は石材が白色のチャート、鋭い先端と深い抉入部にやや幅広の脚部をもっている。

搔器131は石材が不純物を含んだ不透明の黒曜石である。図化時には搔器と想定したが、その後の観察で先端部と脚部が欠損した石鏃の可能性も考えられた。この時の軸線は図の裏面で左斜め下から右斜め上、先端は左斜め下となる。形態は幅広の基部に脚部を持たない形となる。

打製石斧136は基部の途中から刃部が欠損する。左右の側辺に抉入りが存在する。欠損部には二次使用もしくは加工の痕跡が見られる。

剥片215は白みがかかった黒曜石で姫島産と思われる。

第3節 まとめ

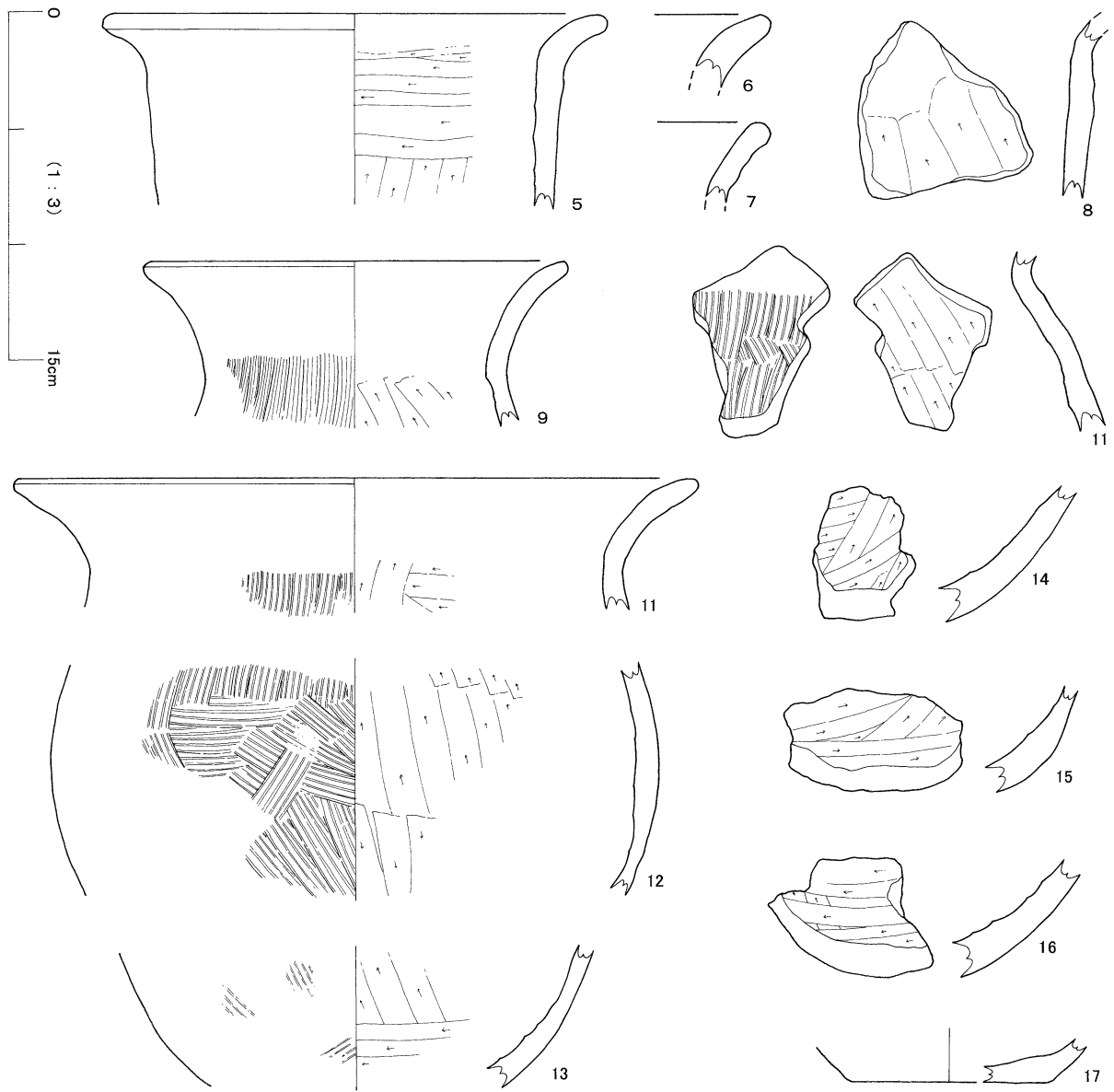
今回の調査の成果は以下の点にまとめることができる。

- ① 古代の土坑が発見され周囲に関連する遺構が広がることが予想される。ただし、包含層は消滅している。
- ② 縄文時代晩期の包含層が良好な状態で残存している。包含層には多量の遺物が含まれている。遺物の出土状況・量、遺構から周囲に居住域が存在する可能性が考えられる。
- ③ 縄文時代早期は早期後半の包含層から複数の集石が検出された。集石の存在から居住域の中であることが考えられ、周囲に住居跡が存在することが予想される。

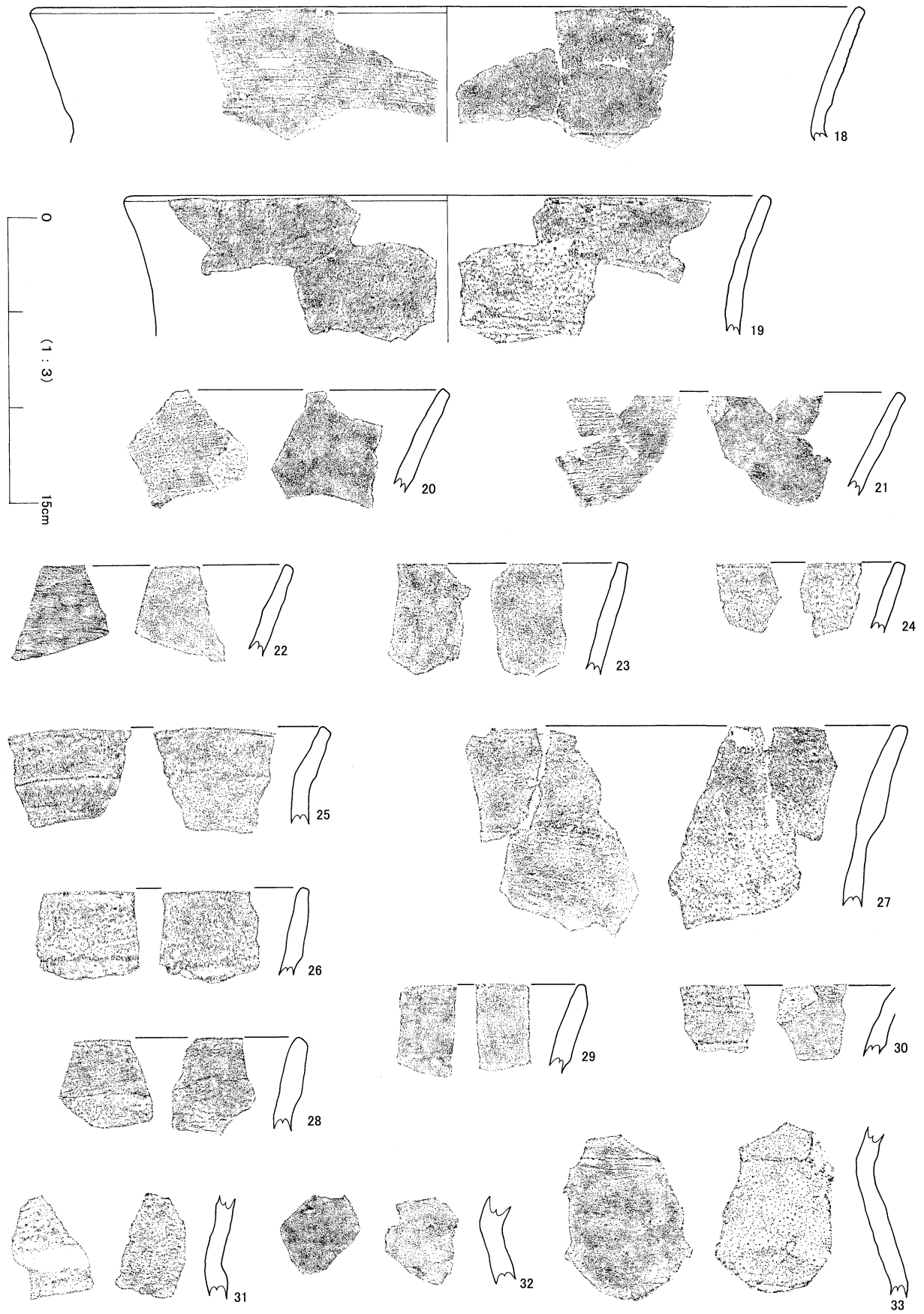
挿図番号	遺物番号	出土位置		種類	器種	石材	法量(cm, g)			
		地点	層位				最大長	最大幅	最大厚	重量
127	686	E1	Ⅲ		小玉	軟玉	0.70	0.70	0.30	0.20
128	894	E1	Ⅱ・Ⅲ	剥片石器	石鏃	チャート	2.00	1.40	0.60	1.20
130	836	E1	Ⅱ・Ⅲ	剥片石器	石鏃	頁岩	1.40	2.00	0.30	0.89
132	645	E1	Ⅲ	剥片石器	異形石器	黒曜石	3.50	1.95	0.60	2.20
133	656	E1	Ⅲ	剥片石器	削器	頁岩	3.70	2.60	0.80	11.20
134	86	D1	Ⅲ	礫石器	石錐	頁岩	5.60	6.90	0.80	26.40
135	978	E1	Ⅲ	剥片石器	剥片	頁岩	6.70	3.40	0.90	27.30
137	631	E1	Ⅲ	礫石器	打製石斧	頁岩	5.10	4.40	1.20	43.00
138	868	D1	Ⅱ・Ⅲ	礫石器	打製石斧	頁岩	7.40	5.00	1.30	58.10
139	425	G1	Ⅲ	礫石器	磨製石斧	頁岩	9.30	2.80	1.50	61.90
140	98	D1	Ⅲ	礫石器	磨製石斧	頁岩	4.80	4.80	1.50	41.80
141	385	G1	Ⅲ	礫石器	磨製石斧	頁岩	4.80	7.50	0.60	31.40
143	Ⅲ層一括	—	Ⅲ	礫石器	磨製石斧	頁岩	2.03	28.90	0.48	1.83
213	表採	—	—	礫石器	磨石・叩石	砂岩	5.74	4.61	2.54	62.62
217	土坑2-4		Ⅲ	剥片石器	剥片	黒曜石	2.40	1.34	0.32	0.94
124	229		Ⅳ	軽石製品	—	軽石	22.75	17.71	3.01	151.58
129	964	H1	Ⅳ	剥片石器	石鏃	チャート	1.90	1.55	0.30	0.47
131	21	A4	Ⅳ	剥片石器	搔器	黒曜石	1.70	2.20	0.60	2.20
136	1034	F1	Ⅳ	礫石器	打製石斧	頁岩	4.80	4.50	1.20	31.40
215	3	B4	Ⅳ	剥片石器	剥片	黒曜石	3.98	1.98	6.61	2.08
216	36	A3	Ⅳ	剥片石器	剥片	チャート	3.07	1.64	9.80	2.45
218	30(確認)	3T	Ⅳ	剥片石器	剥片	頁岩	1.59	1.47	0.06	1.20

※挿図番号213～218は黒葛2次図版に掲載

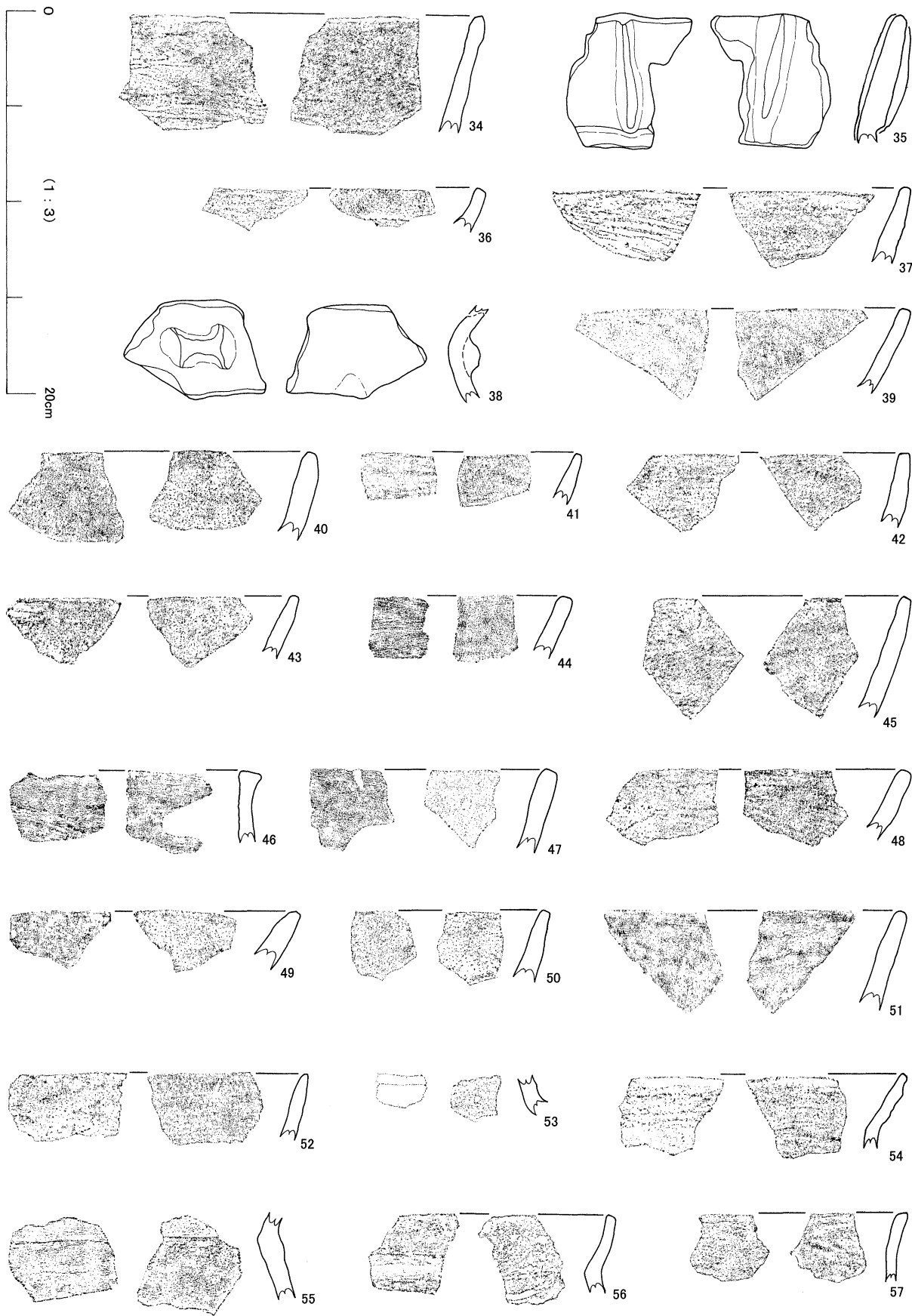
第2表 黒葛遺跡第1次 石器観察表



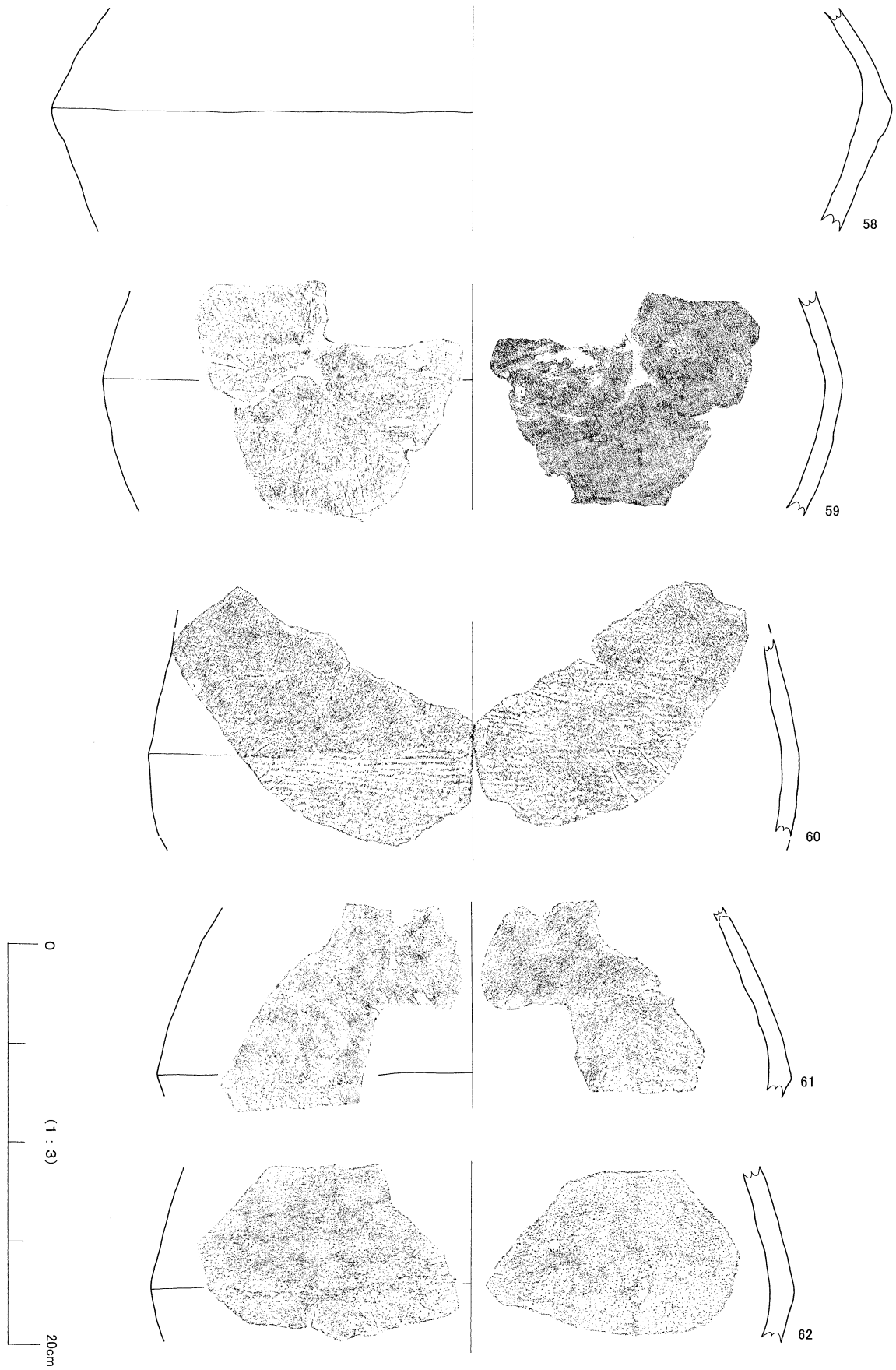
第14図 黒葛遺跡第1次 土器1



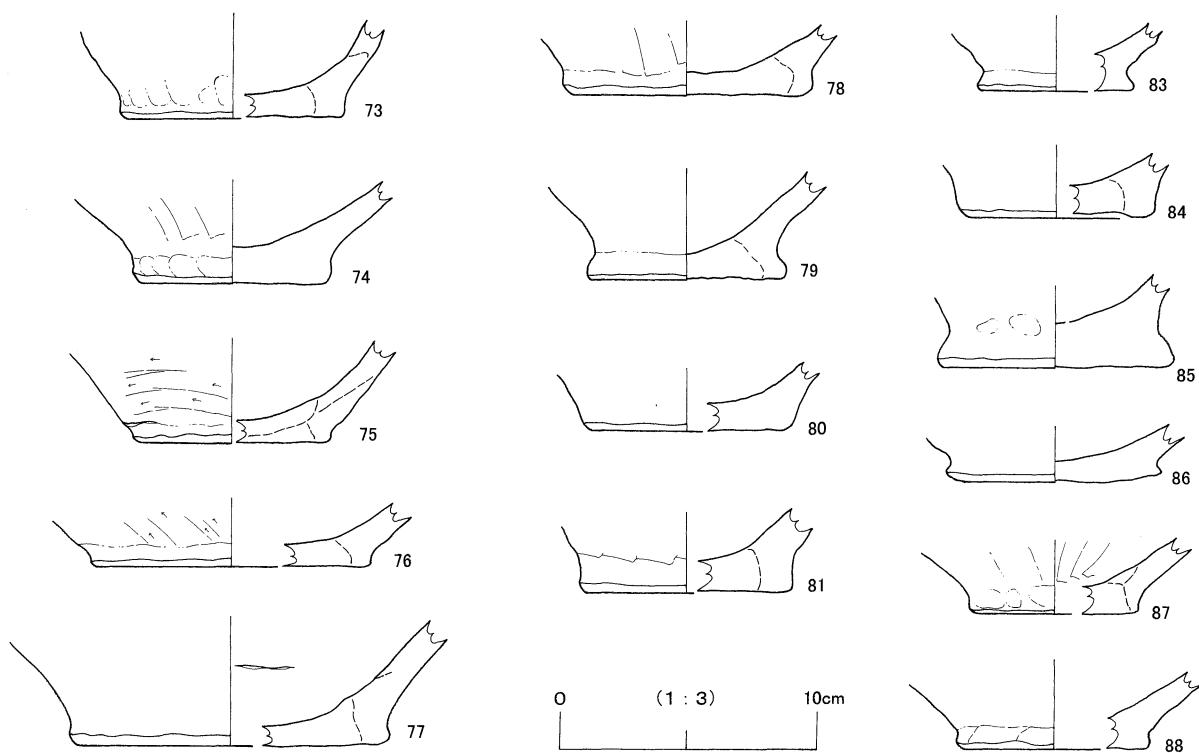
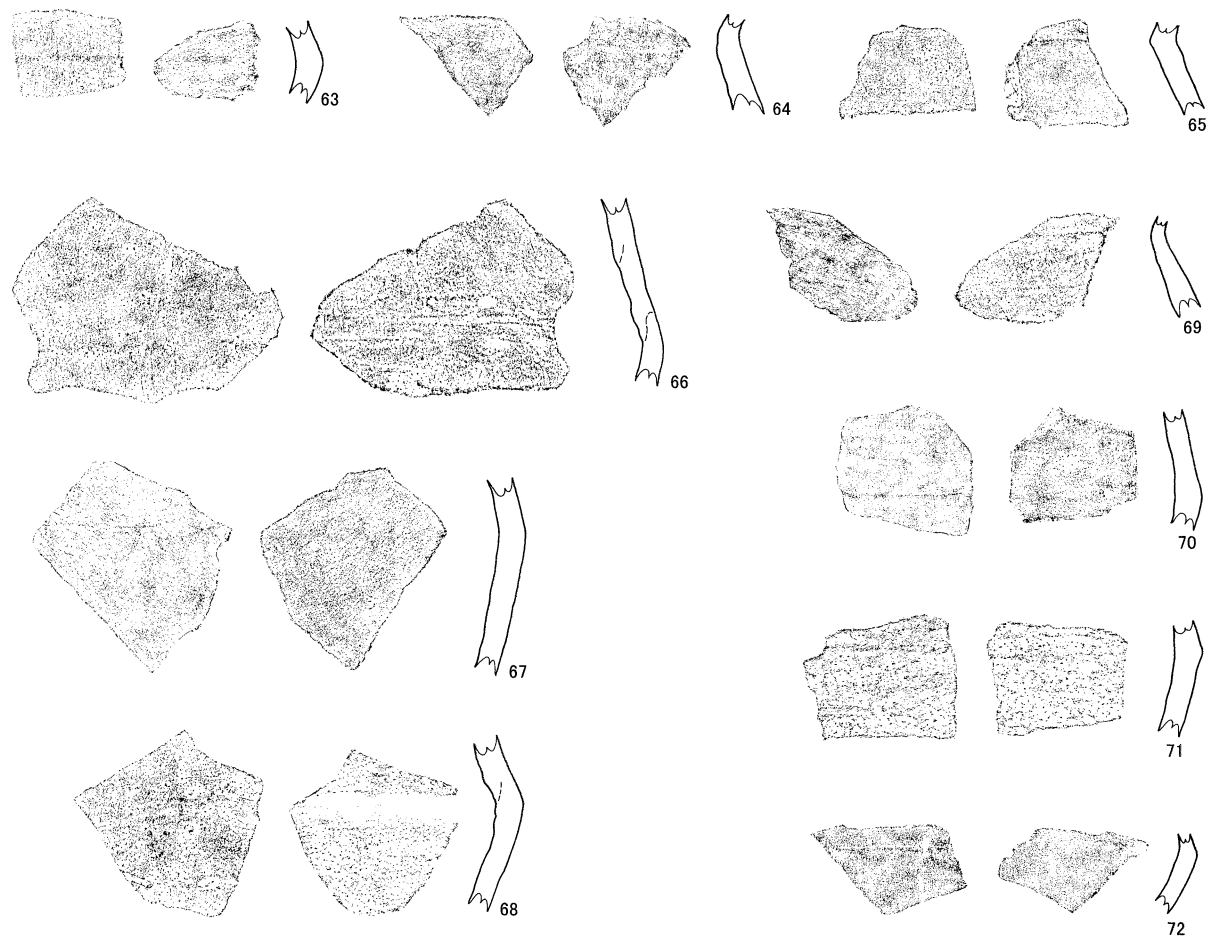
第15図 黒葛遺跡第1次 土器2



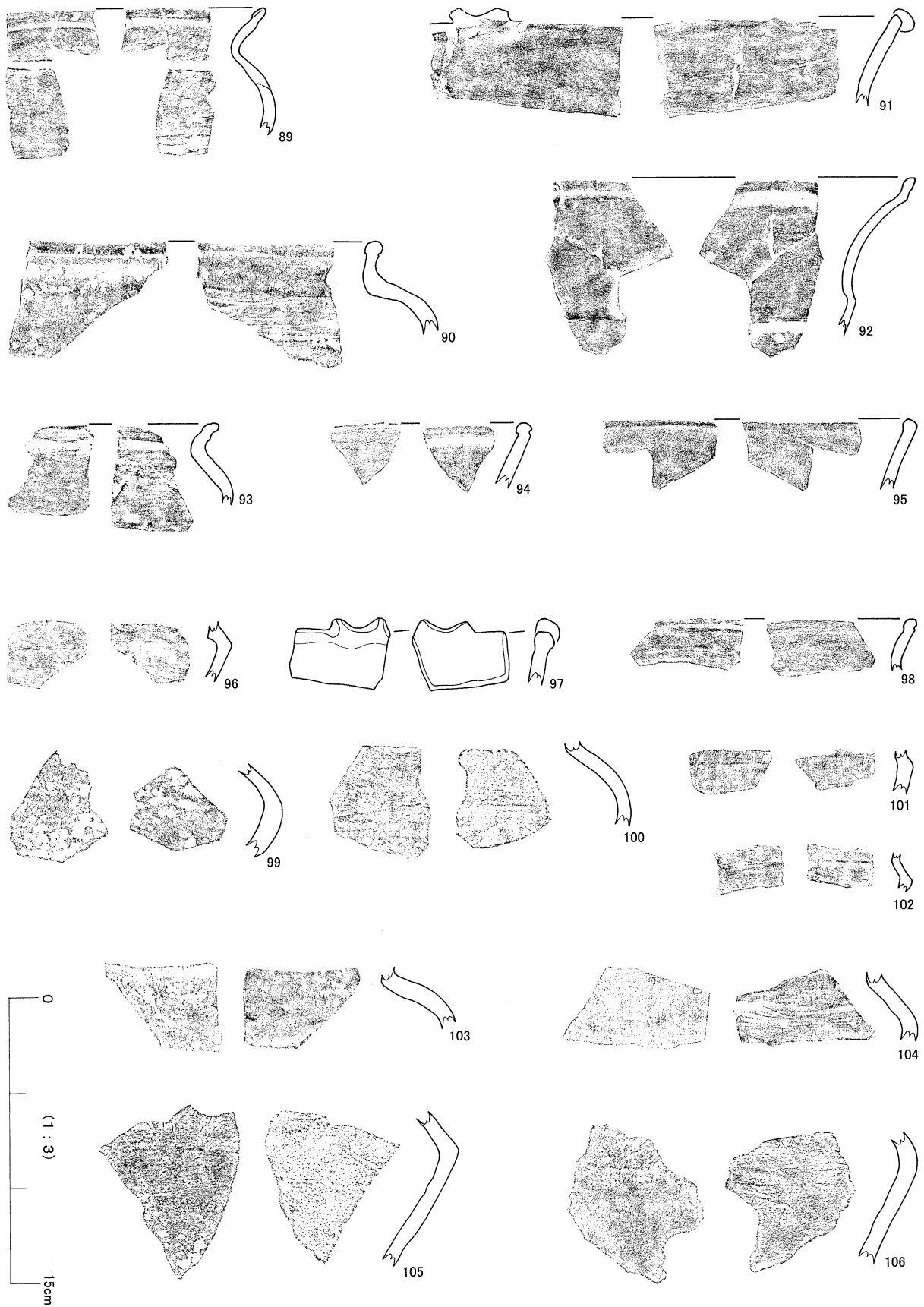
第16図 黒葛遺跡第1次 土器3



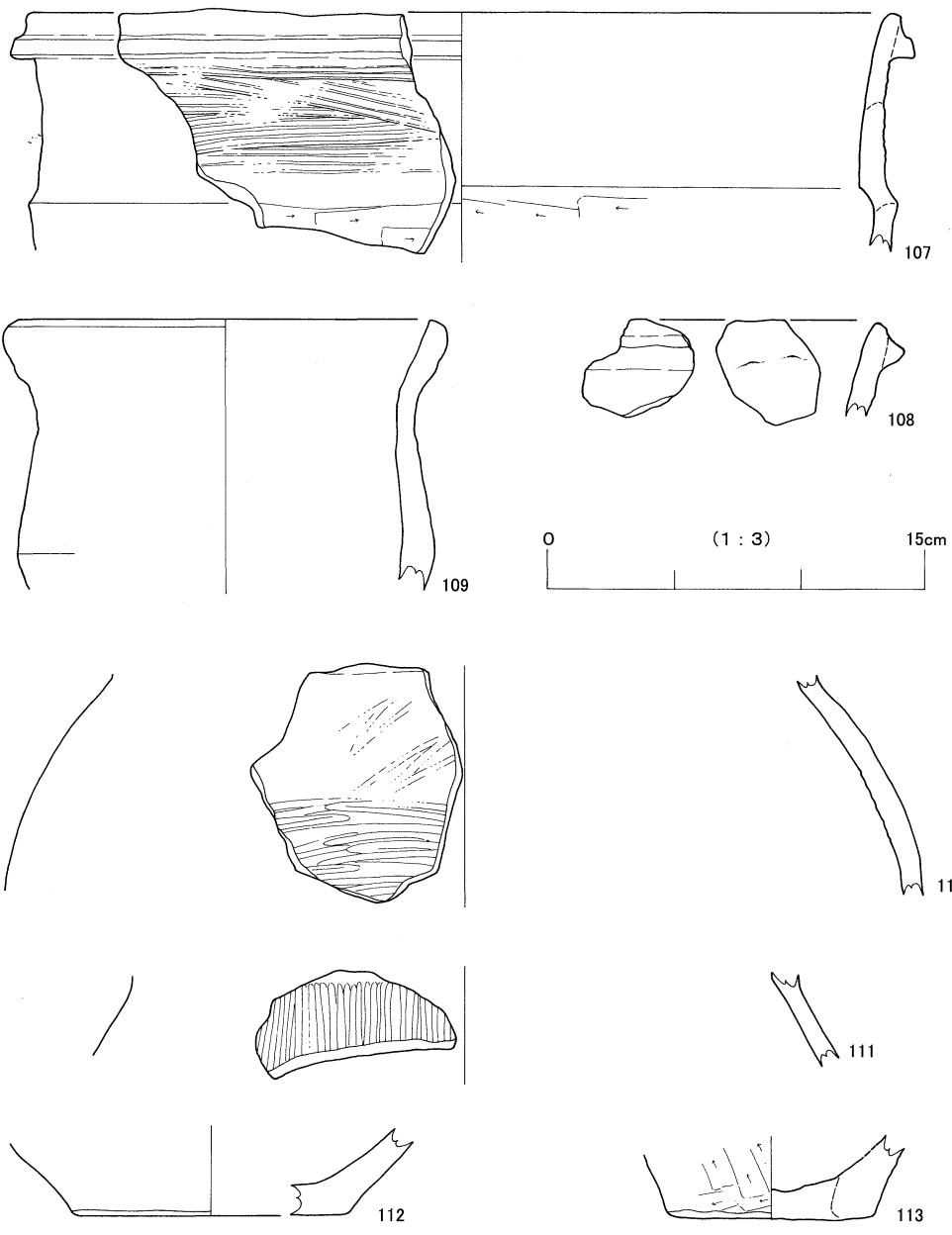
第17図 黒葛遺跡第1次 土器4



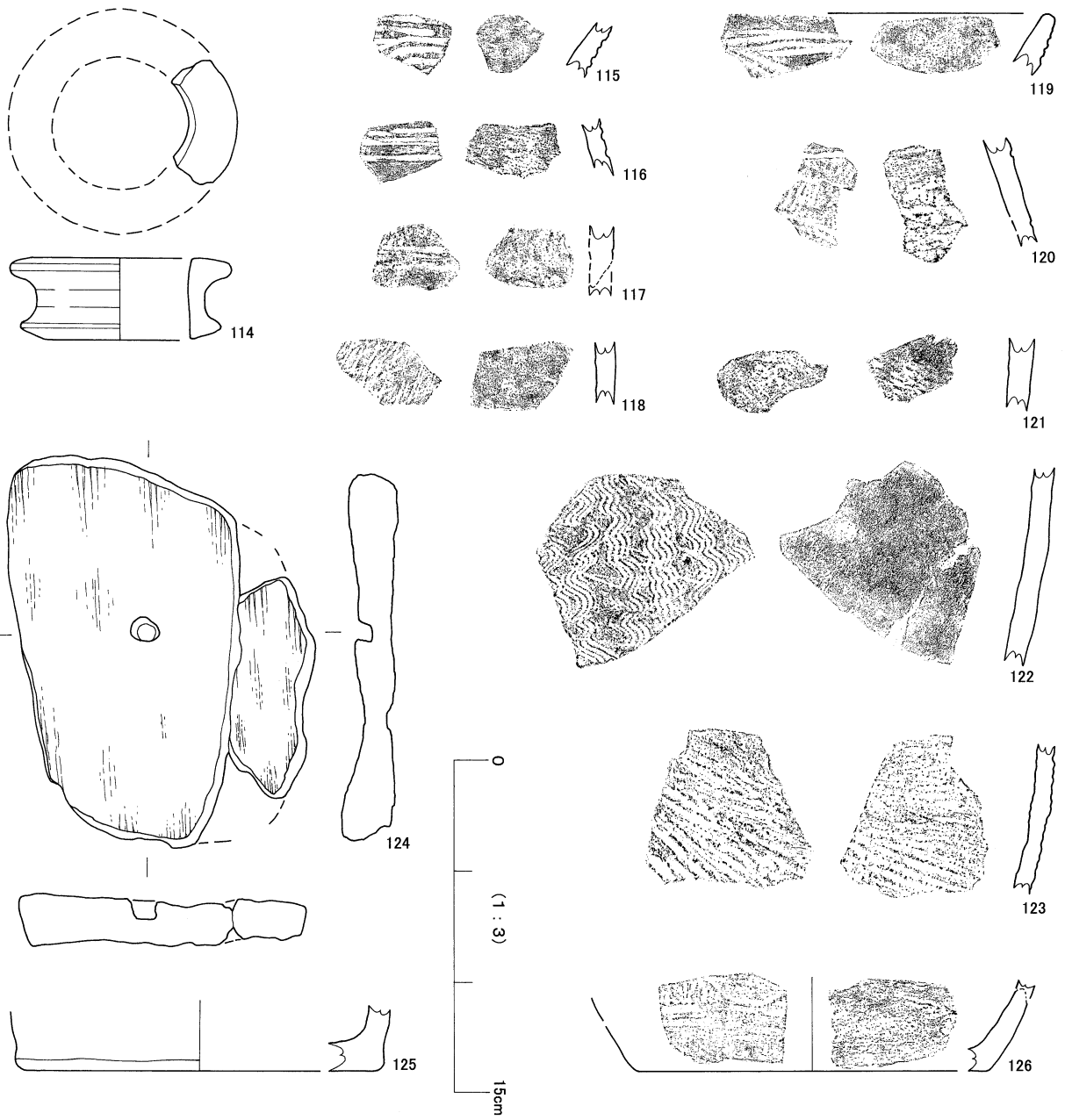
第18図 黒葛遺跡第1次 土器5



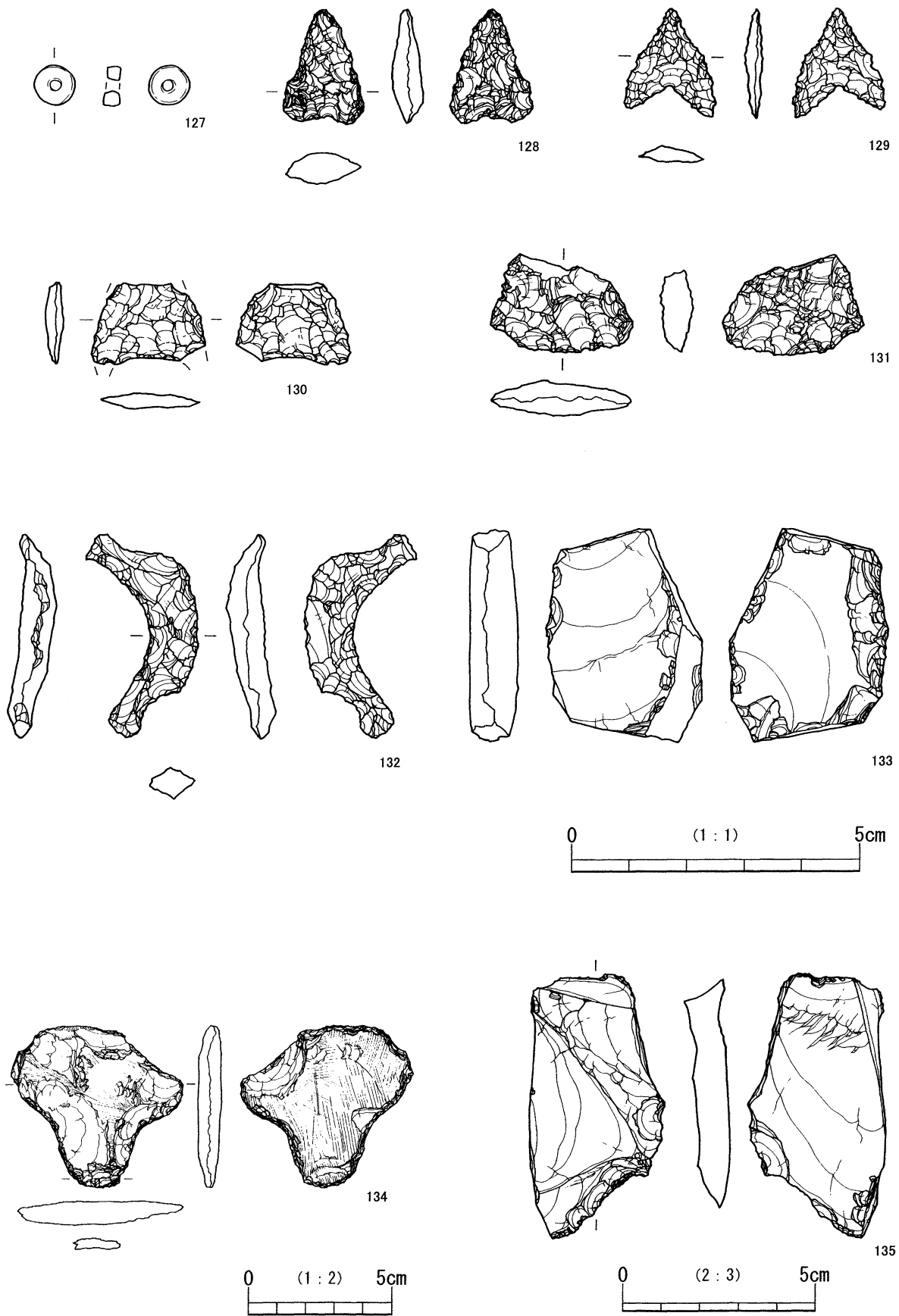
第19圖 黒葛遺跡第1次 土器6



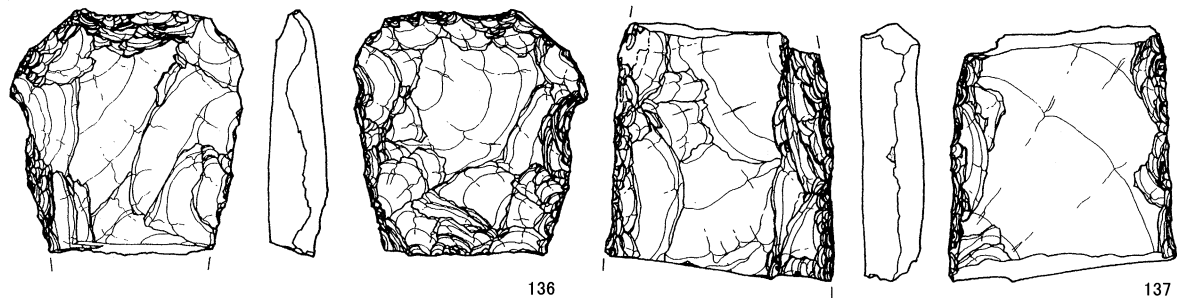
第20図 黒葛遺跡第1次 土器7



第21図 黒葛遺跡第1次 土器8

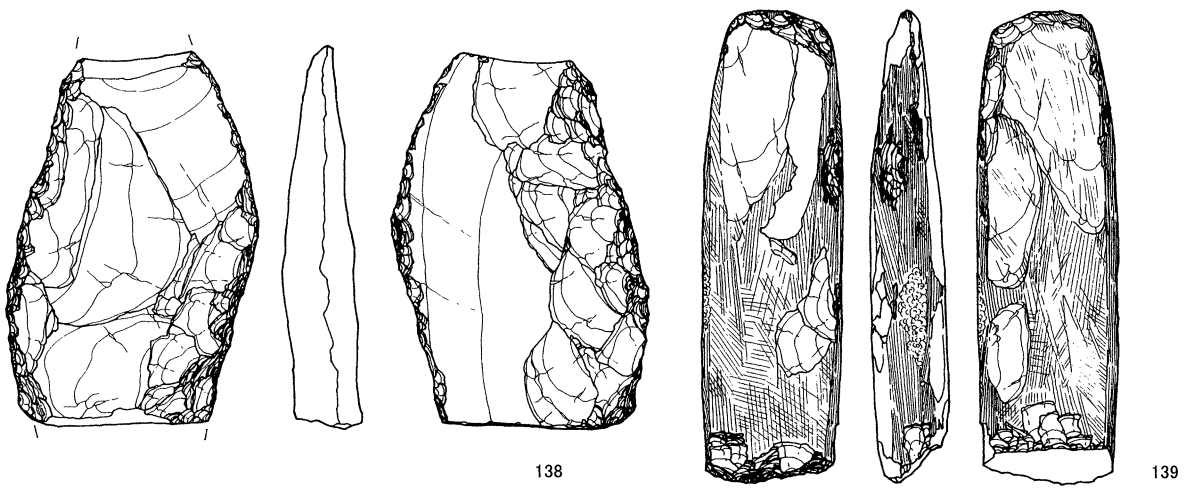


第22図 黒葛遺跡第1次 石器1



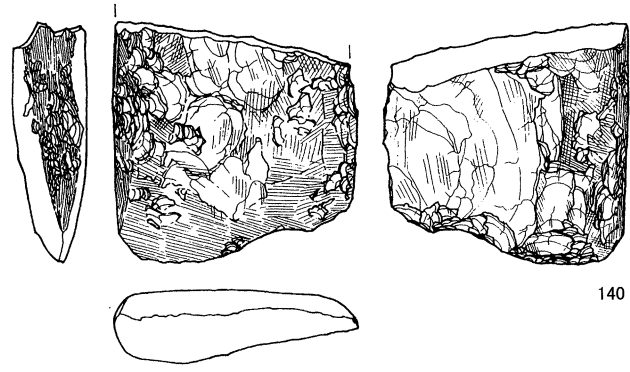
136

137



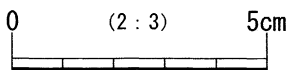
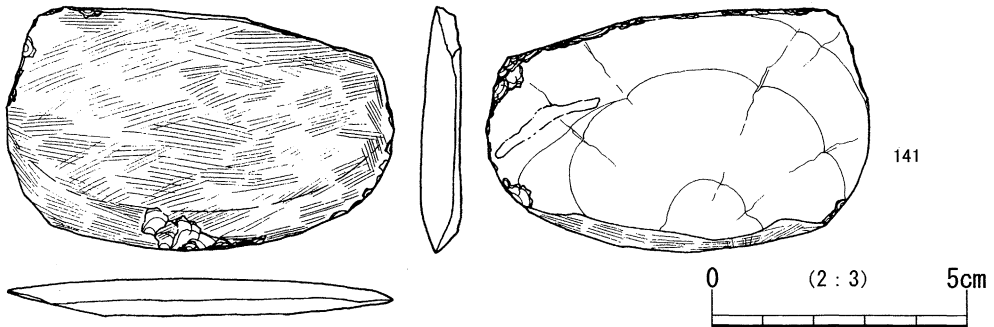
138

139

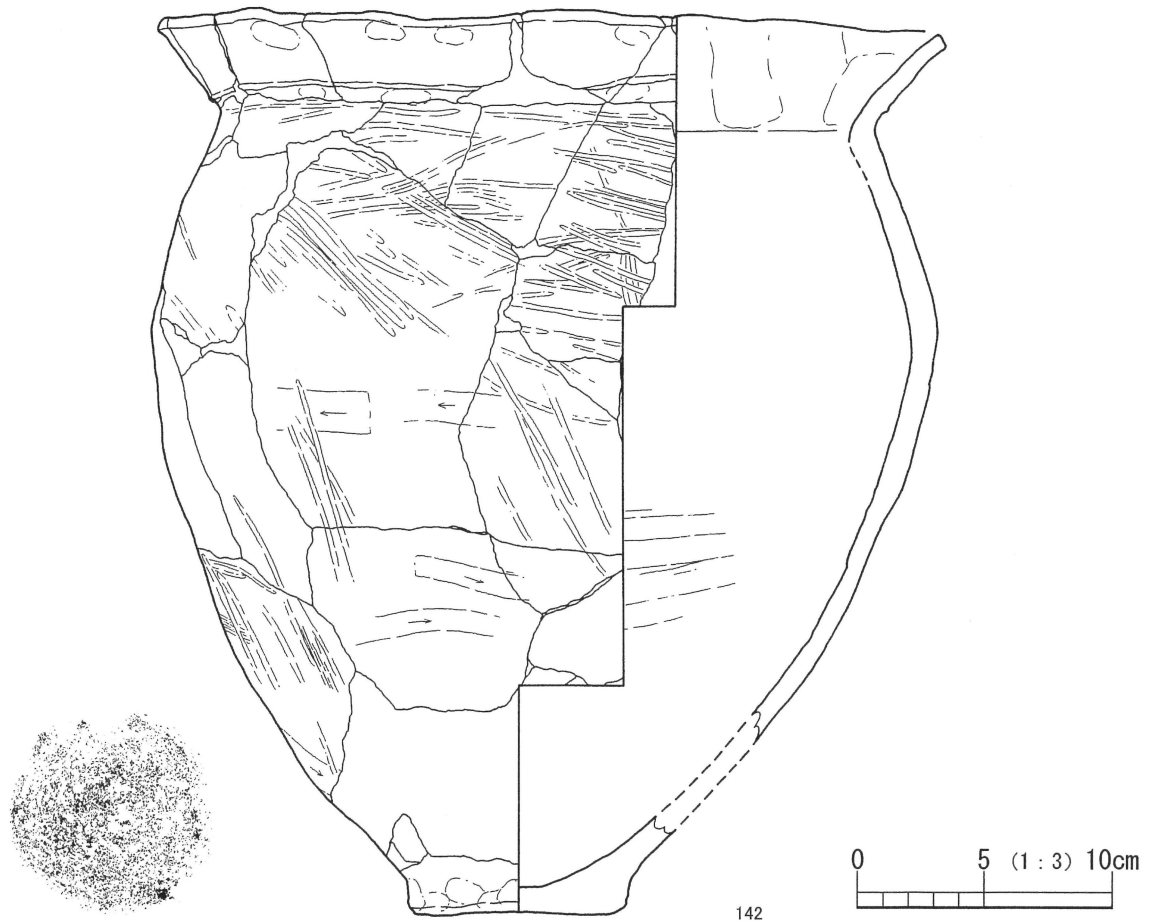


140

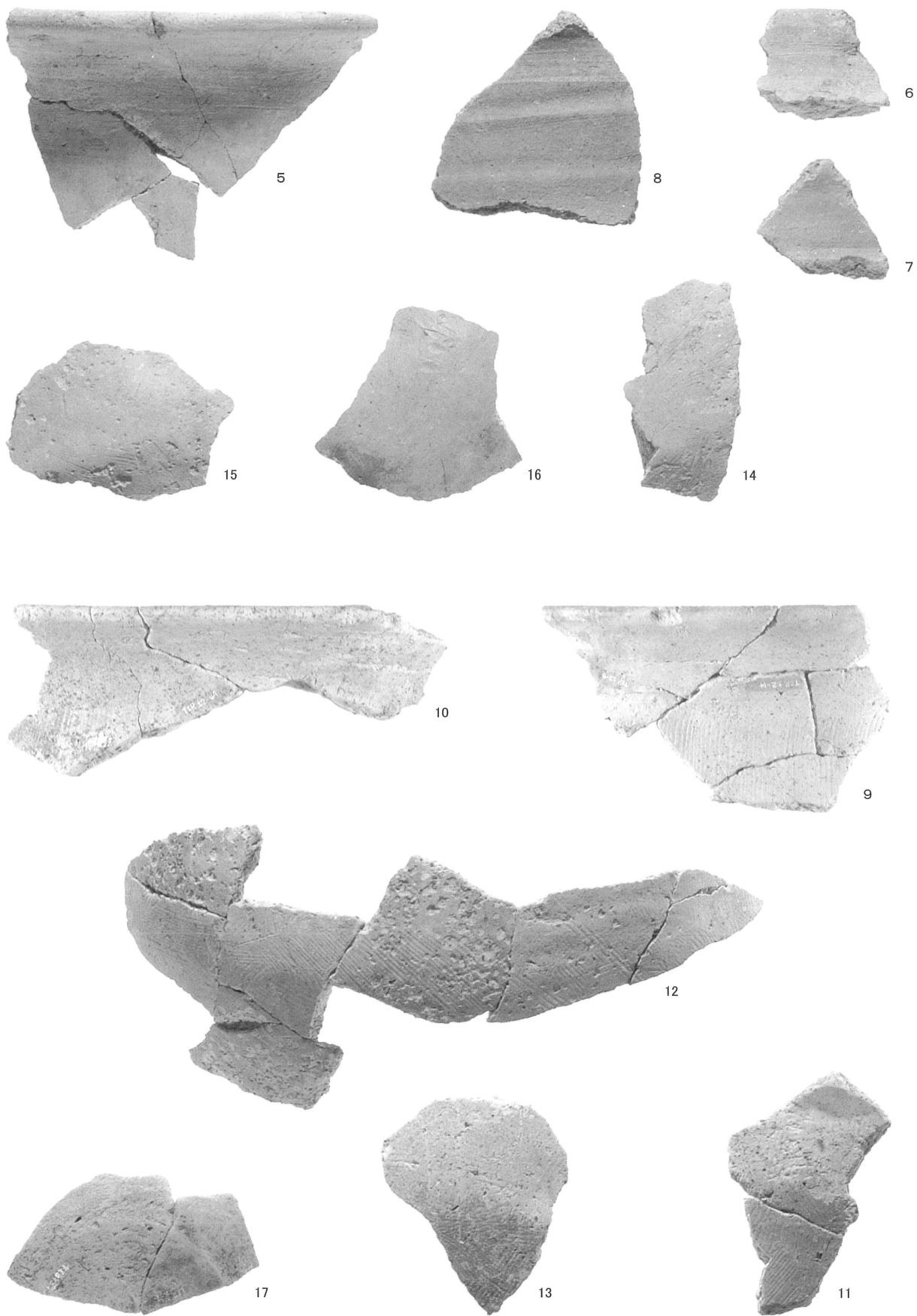
141



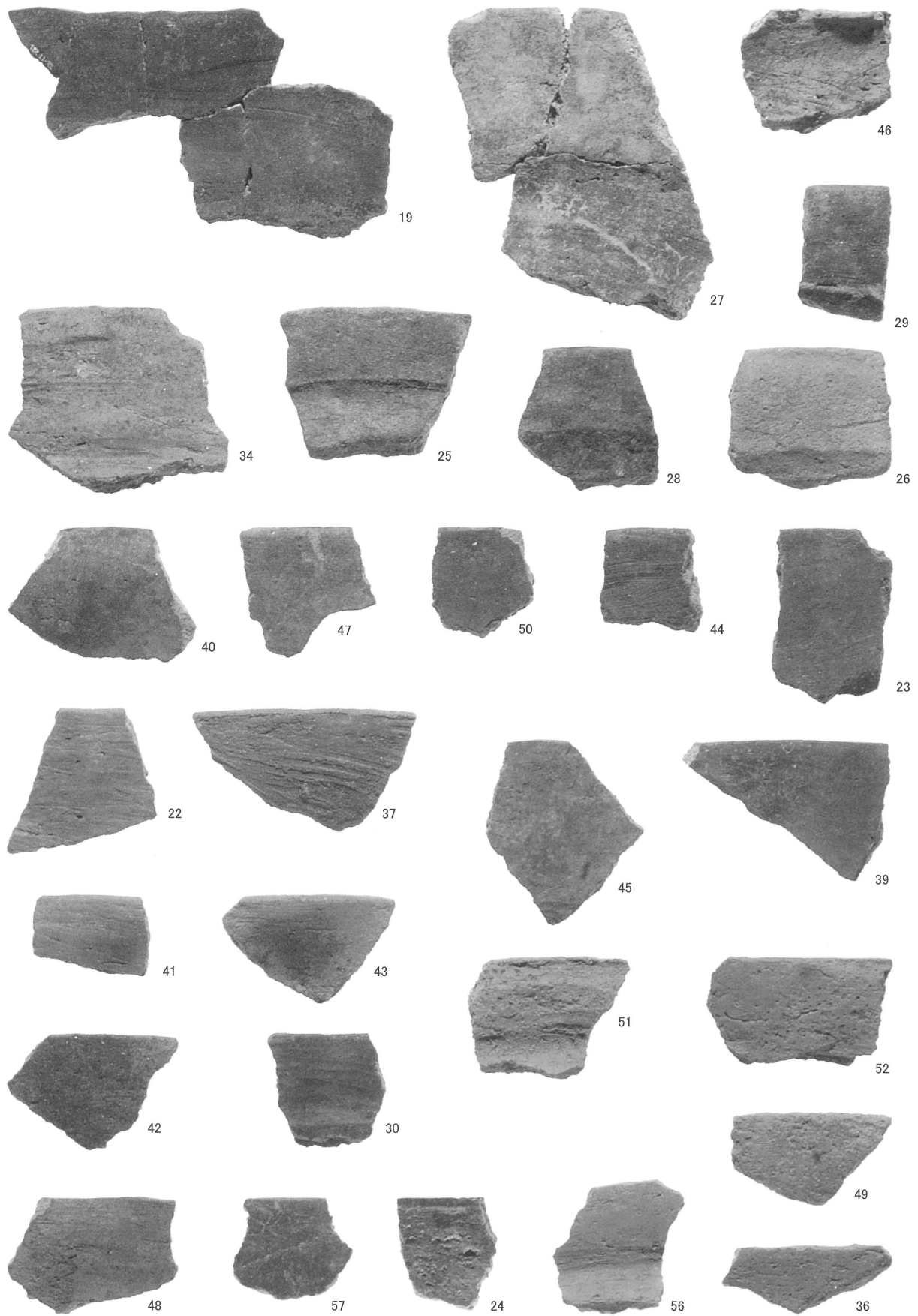
第23図 黒葛遺跡第1次 石器2



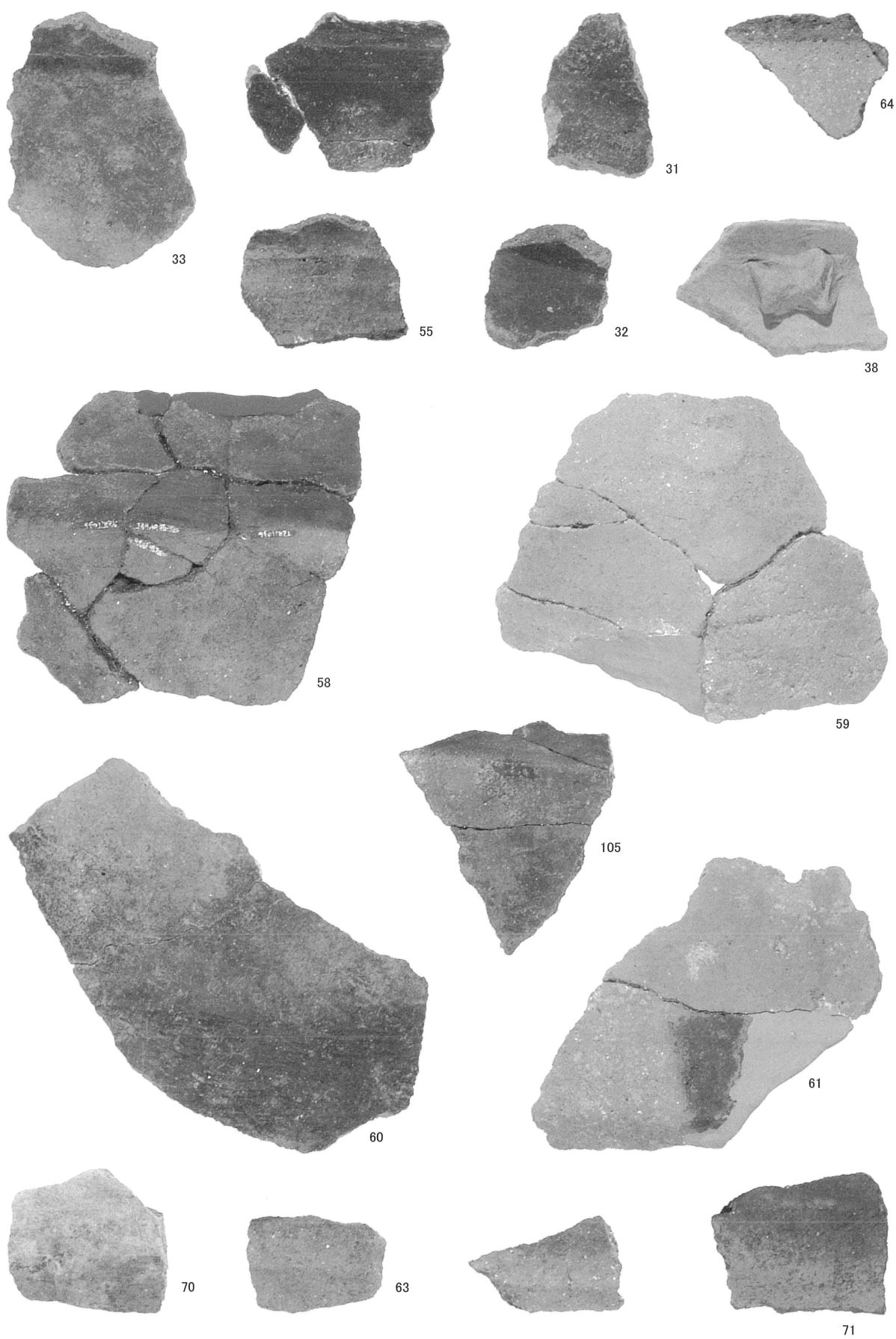
第24図 黒葛遺跡第1次 土器9 図版1 黒葛遺跡第1次 遺物1



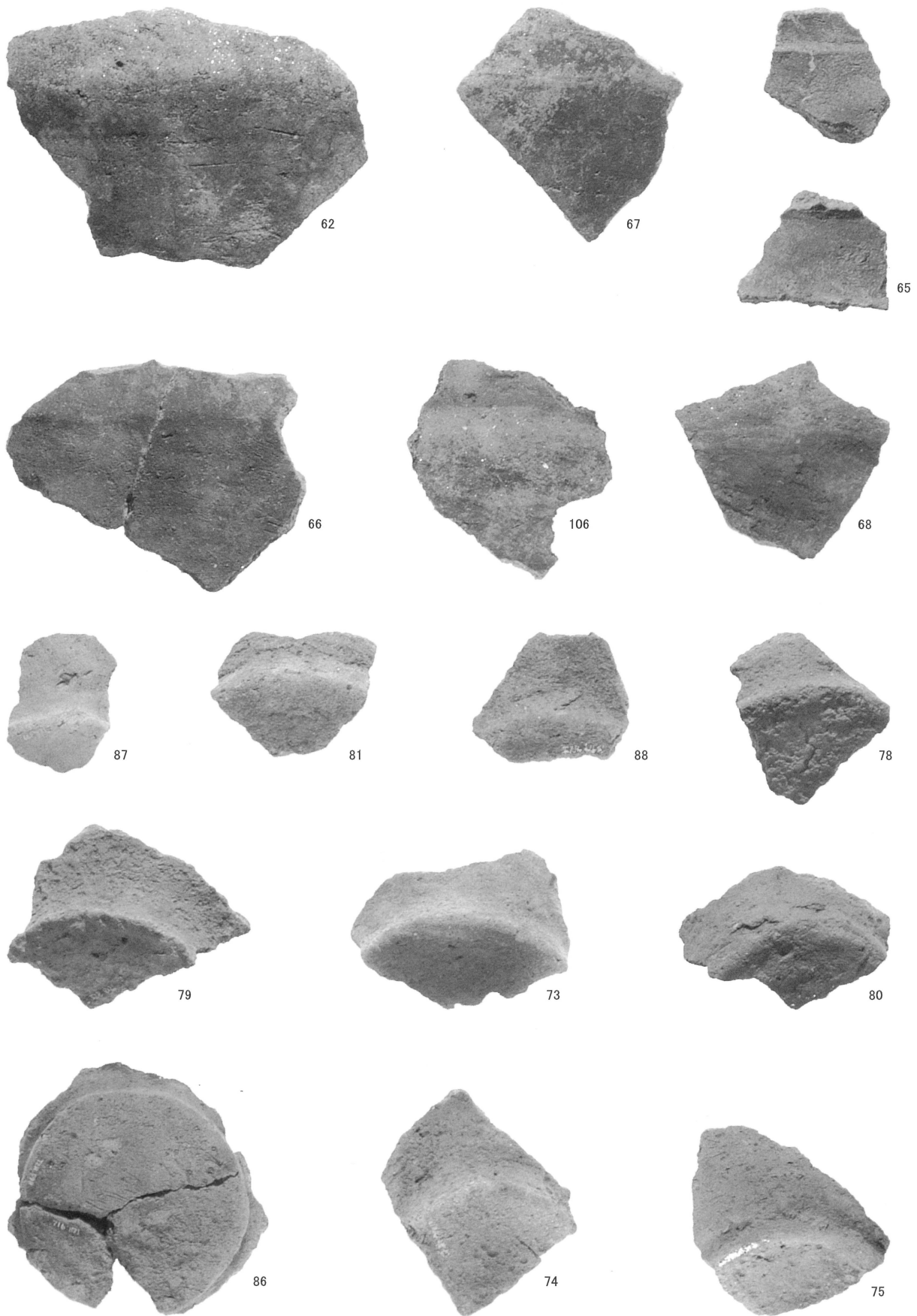
图版2 黑葛遺跡第1次 遺物2



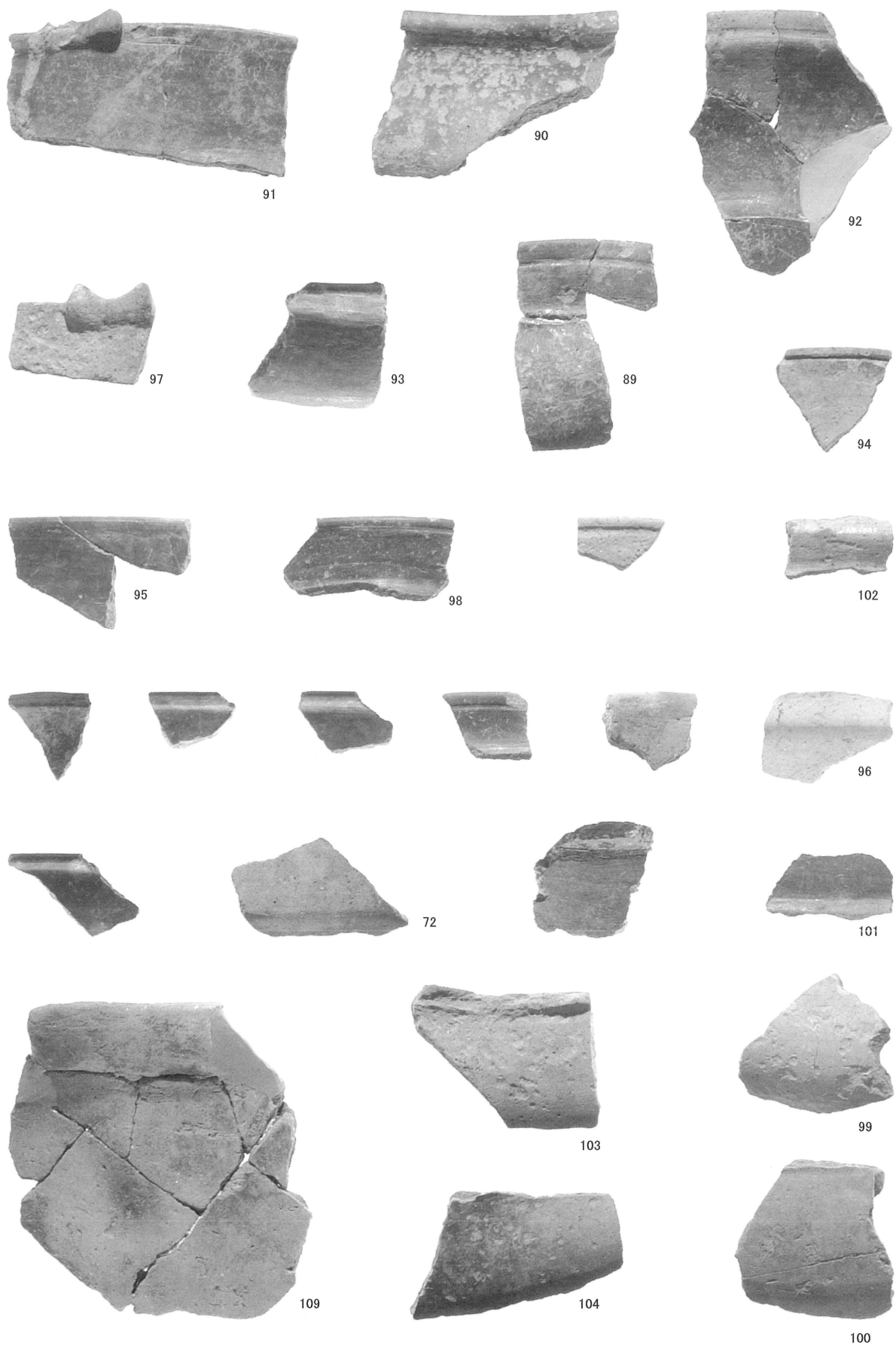
图版3 黑葛遺跡第1次 遺物3



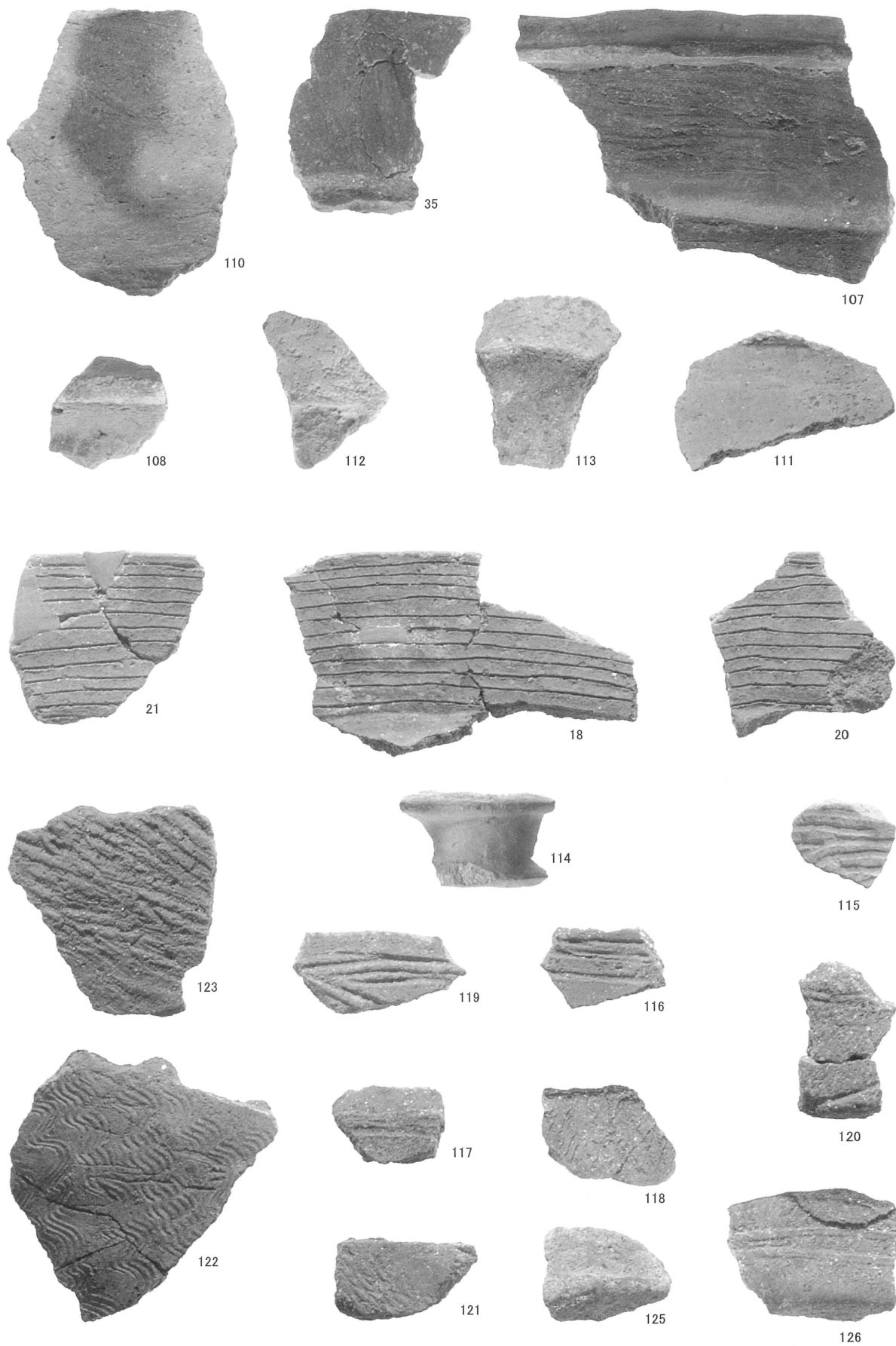
图版4 黑葛遺跡第1次 遺物4



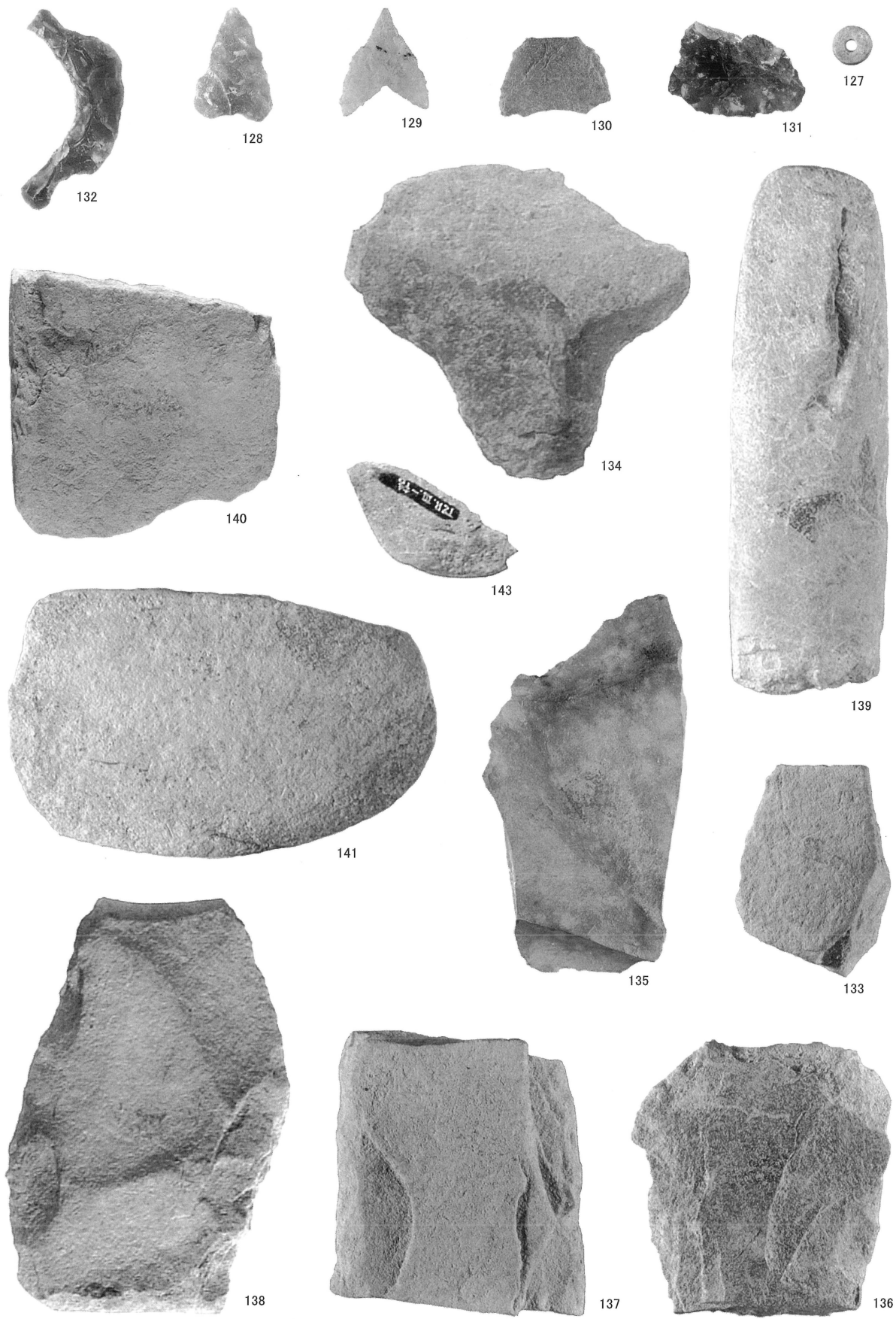
図版5 黒葛遺跡第1次 遺物5



图版6 黑葛遺跡第1次 遺物6



图版 7 黑葛遺跡第 1 次 遺物 7



图版 8 黑葛遺跡第 1 次 遺物 8



Ⅲa層 遺物出土状況 1
(グリッドK1付近、南より)



Ⅲa層 遺物出土状況 2
(グリッドD1～J1付近、北より)



Ⅲa層 遺物出土状況 3
(グリッドB1～E1付近、北より)



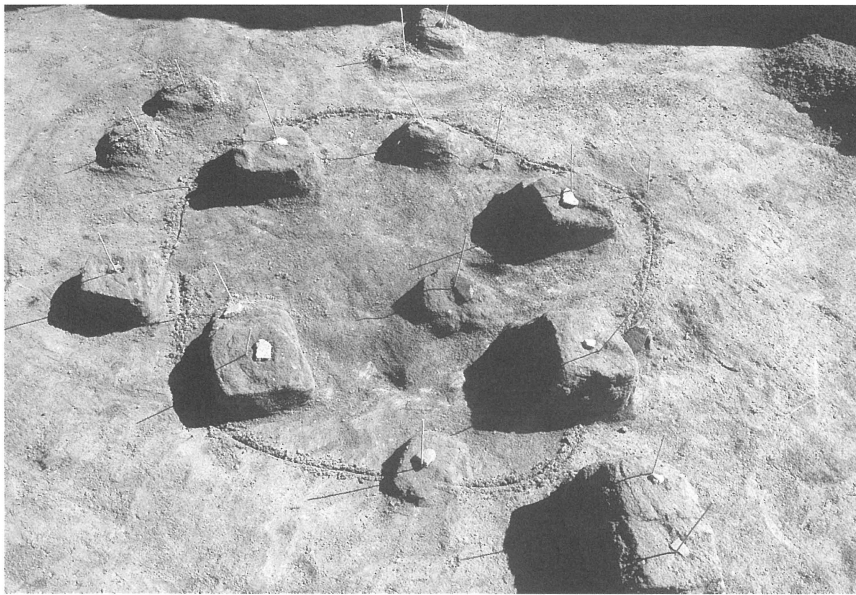
Ⅲa層 遺物出土状況 4



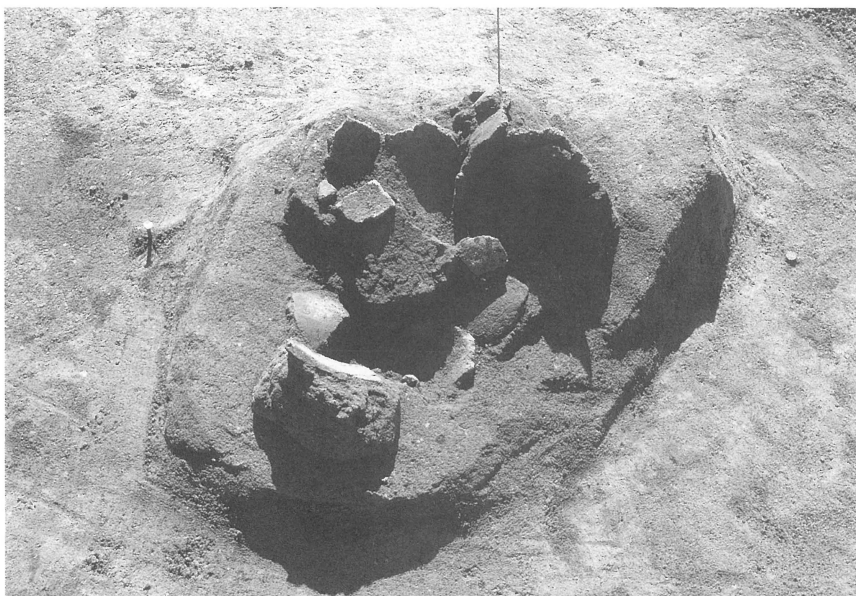
Ⅲa層 遺物出土状況 5



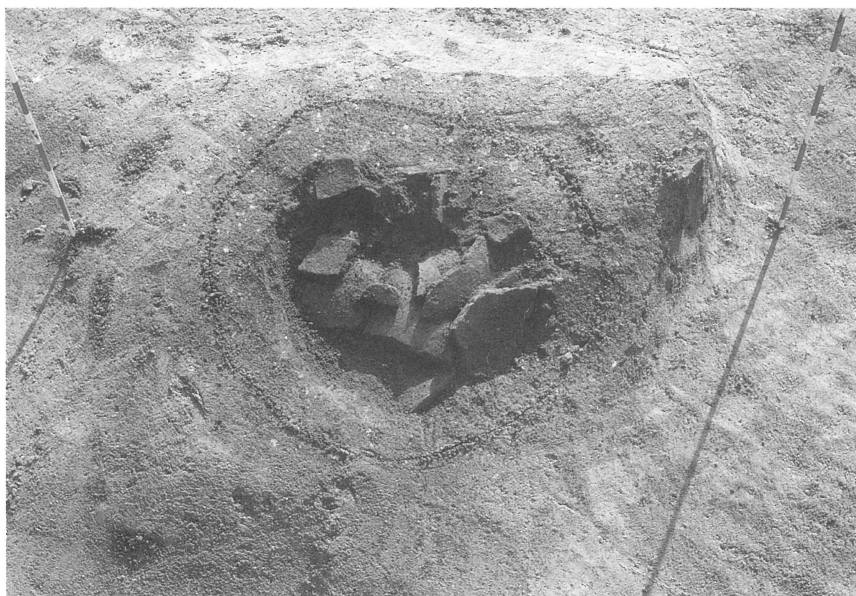
Ⅲa層 遺物出土状況 6



Ⅲb層上面 遺構検出状況



土坑3 検出状況1



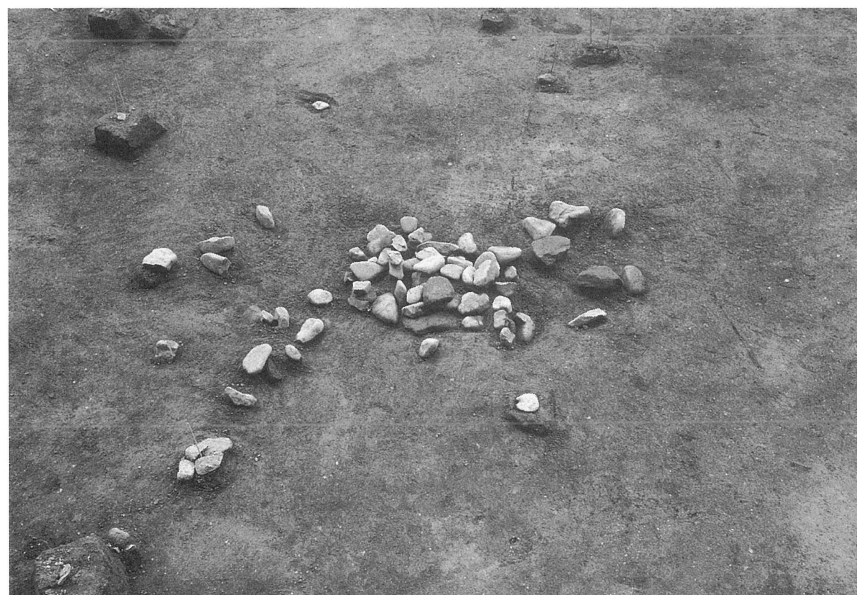
土坑3 検出状況2
(1段階掘り下げる)



IV層 遺物出土状況 1
(グリッドA1～A5付近、
東より)



IV層 遺物出土状況 2
(グリッドA1～A5付近、
西より)



集石 4 検出状況 1



集石 4 検出状況 2



集石 2 検出状況 1



集石 2 検出状況 2



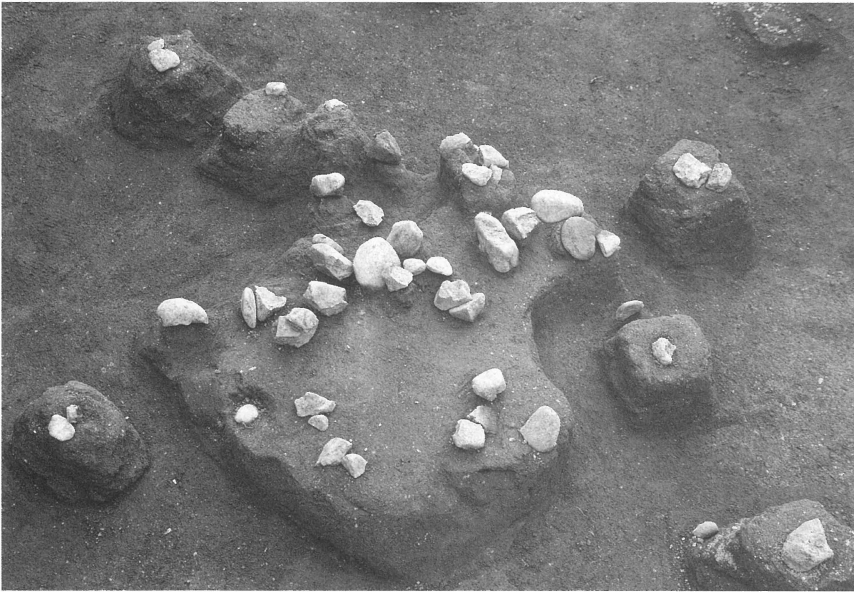
IV層 遺物出土状況 3



IV層 遺物出土状況 4



調査区遠景
(グリッドA1～G1付近、
北より)



集石 3 検出状況



遺構 半裁状況



集石 1 検出状況



図版16 黒葛遺跡 遠景

※東より撮影

第IV章 黒葛遺跡 第2次

第1節 調査の環境

調査地は県道63号線志布志福山線から有明町道199号黒葛線に入り、有明町黒葛集落へと向かう途中の農道黒葛3号線の中央部にあたる。

調査地周辺の地形は、西側に菱田川が北東から南へと緩やかに屈曲しながら流れる。東側には緩やかな勾配をもった平坦面に畑地が広がる。さらに東側の一段高い台地には牧原遺跡・牧原A遺跡が広がる。周辺の畑地は耕地整備後のため旧地形は削平により失われている。調査地は着手前が未舗装農道であった。

遺跡は北西に突出した台地上にあり菱田川川岸の台地縁辺部に立地する。調査地点は遺跡範囲の西端に位置する。

第2節 調査の経過

以下、調査日誌より略述する。

平成13年12月5日(水) 表土を重機で除去する。

6日(木) 1区、Ⅱ(クロボク)・Ⅲ(アカホヤ2次堆積層)層を掘り下げる。写真撮影・平板実測を行なって、遺物を取上げる。

7日(金) 1区、土層断面を写真撮影後、実測する。2・3区を開削する。

10日(月) 2・3区、Ⅲ層を掘り下げる。Ⅳ層上面で遺構精査を行なう。検出・遺物の出土状況を写真撮影後、平板で実測する。遺物を取り上げる。1区、補足トレンチを設けて、Ⅵ層を掘り下げる。

11日(火) 1区、遺物の出土状況図を作成する。一部はさらに掘り下げる。

12日(水) 1区、Ⅶ層上面を写真撮影、遺物を取り上げる。2区、Ⅵ層を掘り下げる。SK1を検出、調査する。3区、Ⅳ層上面で遺構調査する。4区、Ⅱ・Ⅲ層を掘り下げる。

13日(木) 3区、補足トレンチを設けて、アカホヤ(Ⅳ・Ⅴ)層を重機にて除去後、人力でⅥ層を掘り下げる。

14日(金)・15日(土) 排出土を処理する。

17日(月) 3区、Ⅵ層中より炭化物が広がる範囲を検出する。住居跡の可能性をもつがそれにしては輪郭が確定しない。検出状況を撮影する。堂込氏よりご助言頂いた結果、住居跡の可能性は低いと考えられるが、断ち割りなどで調査を進めることを決める。

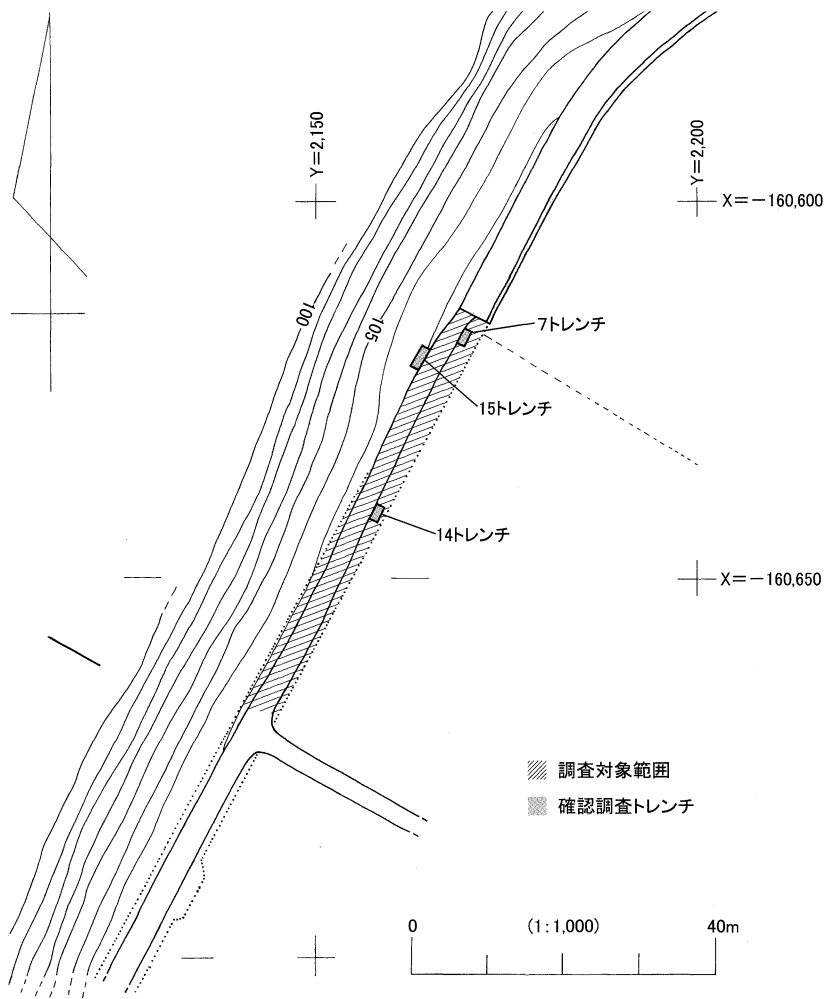
18日(火) 2・4区、Ⅶ層上面において検出状況を撮影、遺物の出土状況を平板図に記録する。遺物を取り上げる。3区、Ⅵ層を掘り下げる。Ⅶ層上面検出状況の写真を撮影する。集石1を1基検出する。

19日(水) 3区、集石1を調査する。3区を北に拡張する。拡張部分を7区と呼称する。5区、Ⅱ・Ⅲ層を掘り下げる。Ⅳ層上面において写真を撮影、平板図を作成する。

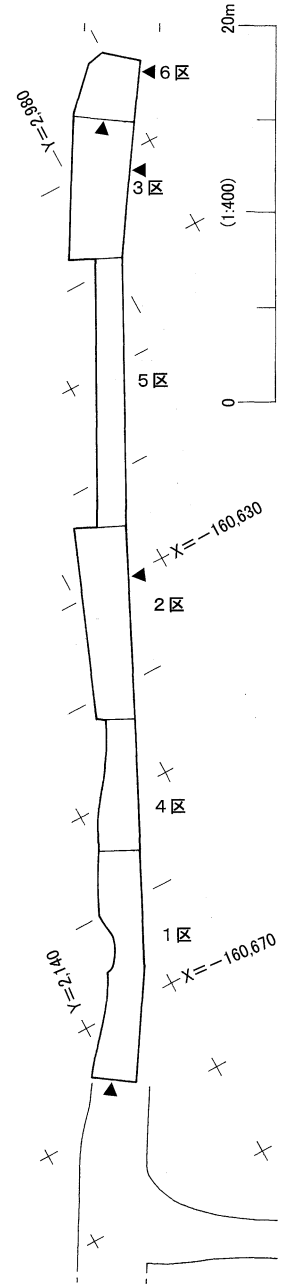
20日(木) 3区、Ⅶ層上面まで完掘する。写真撮影、平板実測を行なう。土層断面の写真・実測を行なう。5区、補足トレンチを設けてアカホヤ層を重機で除去する。Ⅵ層を人力で掘り下げる。

21日(金) 3区、土層断面図を作成する。土坑2・3を調査する。5区、Ⅵ層を掘り下げる。6区、Ⅲ層を掘り下げて、Ⅳ層上面で遺構検出する。写真撮影、平板実測を行なう。

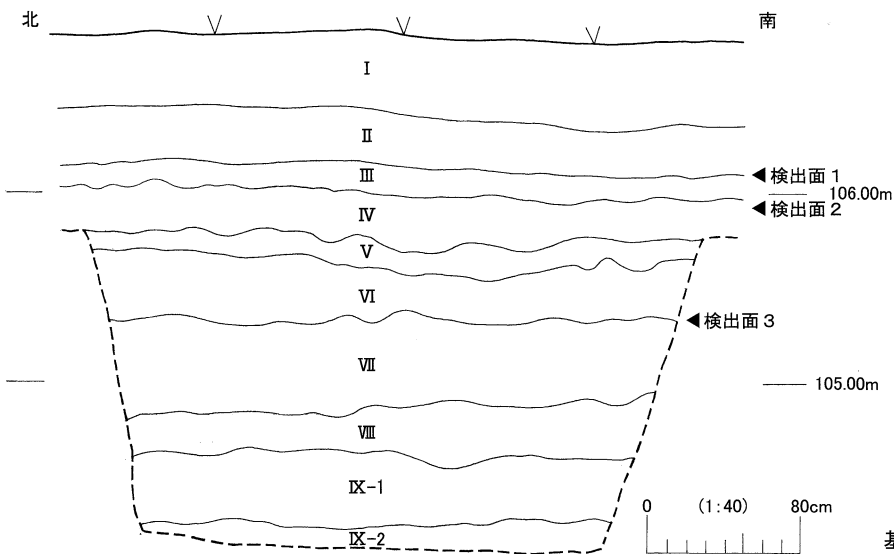
22日(土) 5区、Ⅵ層を掘り下げる。集石2を検出する。Ⅶ層上面を検出する。写真撮影、平板実測



調査区位置



調査区配置



基本層位 (1区)

※ III層上面調査時の配置状況

◀ 土層記録位置

第25図 黒葛遺跡第2次 調査区位置・配置・基本層位

を行なう。6区、掘り下げる。

25日(火) 降雨のため中止する。

26日(水)・27日(木) 5・6区、掘り下げる。集石2を調査する。

平成14年1月7日(月) 5区、Ⅶ層まで掘り下げて完掘写真を撮影する。土層断面を撮影・実測する。

8日(火)～12日(土) 埋め戻しを行なう。

第3節 調査の概要

1. 調査の方法

調査は排土仮置場が確保できなかったため、任意規模の調査区を設けて開削・調査・埋め戻しを繰り返して仮置場を確保しながら進めた。

また、隣接する畑地の一部も調査対象ではあったが、作物が作付けされていたため、現農道部分の調査状況を見ながら、状況に応じて収穫後に調査に取り掛かる予定で着手した。結果、舗装整備で破壊される深さでは調査の必要が無いと判断し、拡張せずに調査を終了した。

なお、当調査範囲は確認調査で縄文時代早期の良好な遺物包含層が確認されていたことから、補足調査として下層の調査を実施した。

各調査区の名称は調査着手順に番号で呼称し、計6区を数えた。規模は各区の状況により異なる。

掘り下げはⅠ-1(表土：農道整備)層及びⅣ・Ⅴ(アカホヤ降下火山灰)層を重機により取り除き、その他は人力による掘り下げを実施した。

遺構の検出はⅢ層・Ⅳ層・Ⅶ層の上面にて実施した。記録は写真と図面にて行い、遺物取り上げは基本的に平板でのドット記録で行なったが、遺物量が膨大な範囲(3・5・6区)に限って任意に設けた2mグリッドを併用して取り上げた。グリッド番号には遺物番号を用いた。

2. 層序

a. 残存状況と旧地形

層の残存状況は全ての区においてⅡ層まで削平されている。土層を観察する限りでは旧地形は現地形に比べて緩やかな起伏があったことが推測される。また、1区ではⅢ層から菱田川のある西側に向かって地形の落ち込みを確認した。当地点は旧地形における平坦面から斜面への変化点に位置することが考えられる。詳しくは第Ⅲ章を参照されたい。

b. 層序

遺物包含層は縄文時代晩期・縄文時代早期を確認した。他は中世・古墳時代があったと推測されるが包含層は削平されている。

以下、各層の特徴・見解を層別に略述する。土色・土質の詳細は基本層位を参照されたい。

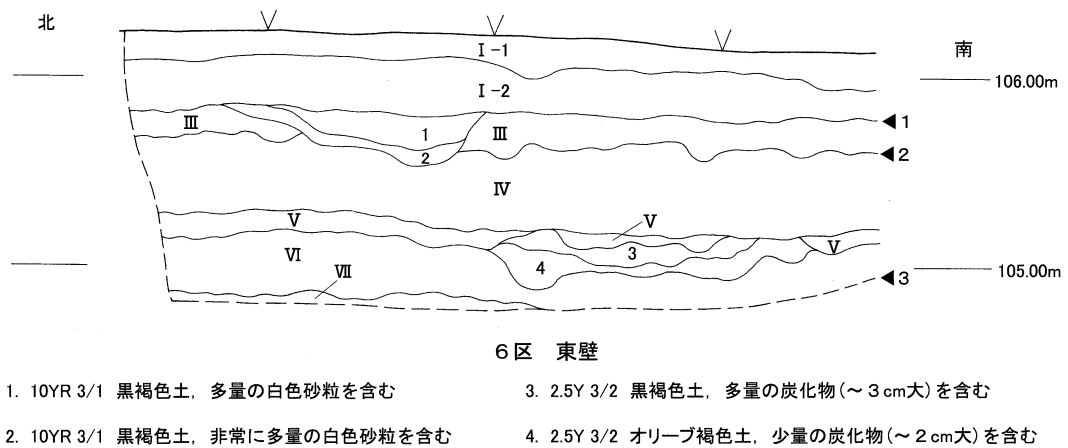
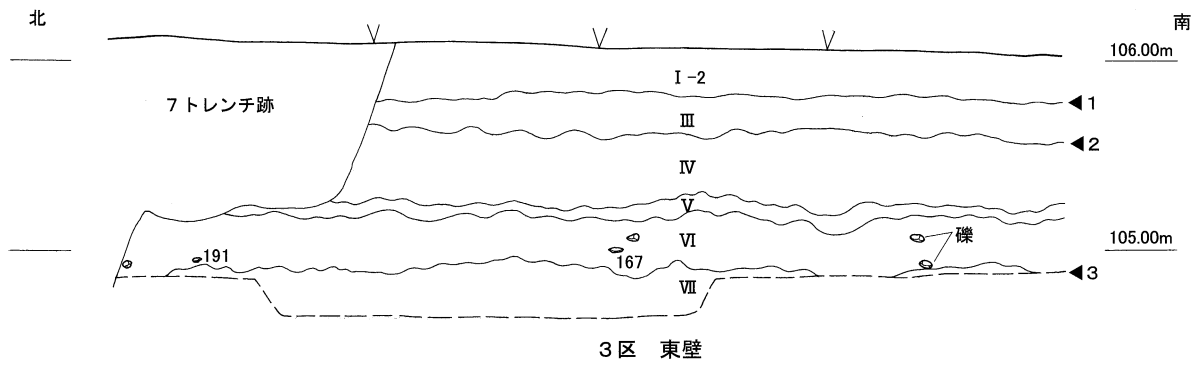
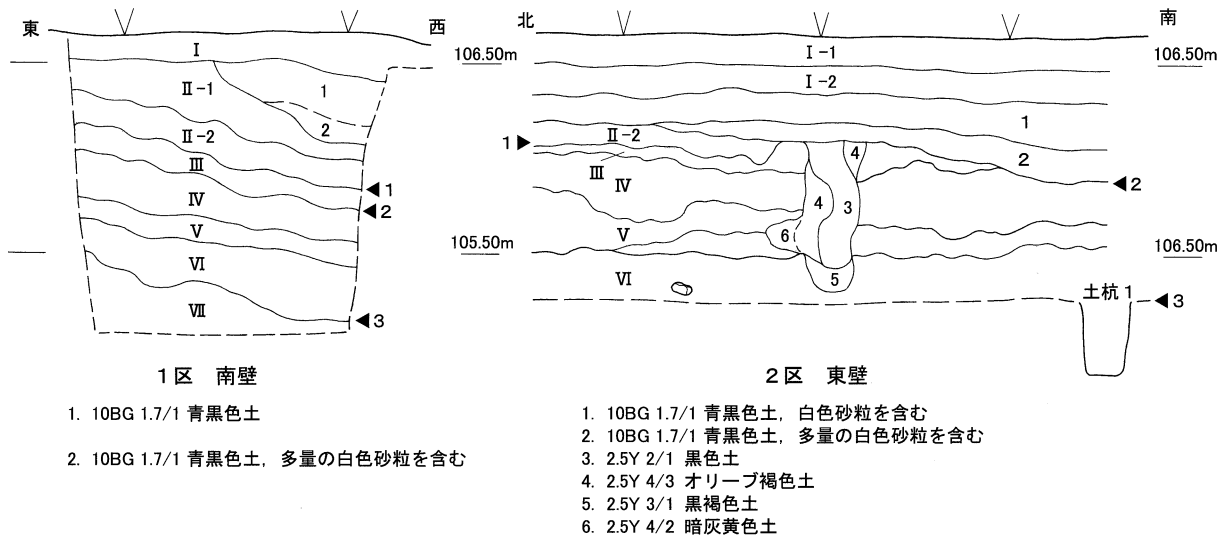
第Ⅰ-1層 アタゴ・バラスによる農道整備層である。

第Ⅰ-2層 黒色土に多量の白色砂粒を含む。白色砂粒は大正期の桜島降下火山灰と思われる。削平後の整地層と考えられ現在の耕土にあたる。

第Ⅱ層 黒色土。遺物をわずかに散見したがⅢ層の漸移層にあたるか、もしくは遺構内と考えられる

第Ⅲ層 調査では「アカホヤ二次堆積層」と呼称した、縄文時代晩期の遺物包含層である。

第Ⅳ層 黄褐色土。粒度により2層に分層が可能であり上層の方が粒度は細かい。無遺物層である。アカホヤ降下火山灰層と推定する。



※ 縮尺はすべて 1/40

第26図 黒葛遺跡第2次 各土層

- 第Ⅴ層 黄褐色土。Ⅳ層より粒度が粗い無遺物層である。アカホヤ降下火山灰層と推定する。
- 第Ⅵ層 黒色系の土に多量の降下火山灰と思われる白色・橙色砂粒を含む、縄文時代早期の包含層である。
- 第Ⅶ層 黒色系の土に少量の降下火山灰と思われる白色・橙色砂粒を含む。
- 第Ⅷ層 褐色土。Ⅸ層の漸移層と考えられる。
- 第Ⅸ層 黄褐色土ブロックが多く見られる、薩摩降下火山灰層と推定する。

基本層位

- 第Ⅰ-2層 オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 土に、多量に～0.5cm大の白色砂粒を含む
- 第Ⅱ層 黒褐色 (2.5Y3/1) 土
- 第Ⅲ層 黄褐色 (2.5Y5/6) 土、粒度がⅣ層に比べ細かい
- 第Ⅳ層 明黄褐色 (10YR6/8) 土
- 第Ⅴ層 明黄褐色 (10YR6/8) 土、非常に多量に～1cm大の橙色砂粒を含む
- 第Ⅵ層 黄褐色 (2.5Y5/6) 土、やや粘性をおびる
- 第Ⅶ層 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 土、やや粘性をおびる
- 第Ⅷ層 明黄褐色 (10YR6/8) 粘質土
- 第Ⅸ-1層 明黄褐色 (10YR6/6) 粘質土、非常に多量の1～10cm大の黄褐色 (10YR5/4) 粘質土ブロックを含む
- 第Ⅸ-2層 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土、少量の3～10cm大の明黄褐色 (10YR5/4) 粘質土ブロックを含む

3. 調査の成果

a. 検出面1 (Ⅲ層上面)

遺構は、2区において覆土に黒色土をもつ、溝1・土坑1を検出した。他に溝は6区の溝2など複数を確認したが、覆土に大正期の桜島降下火山灰と思われる白色砂粒が含まれるため攪乱とした。

遺物は散見される程度であり多くはⅢ層の漸移層より出土した。また、Ⅰ-2・Ⅱ層間において数点の遺物を確認した。本来は削平で消失した包含層の遺物であろう。

(ア) 遺構

土坑1 規模は長さ126cm×幅52cm、深さ23～67cmを測る。断面は二段掘りとなり二段目の壁面には掘り具痕らしき縦筋が確認できた。上方から見ると花卉形を呈する。柱痕の存在から柱穴と考えられる。

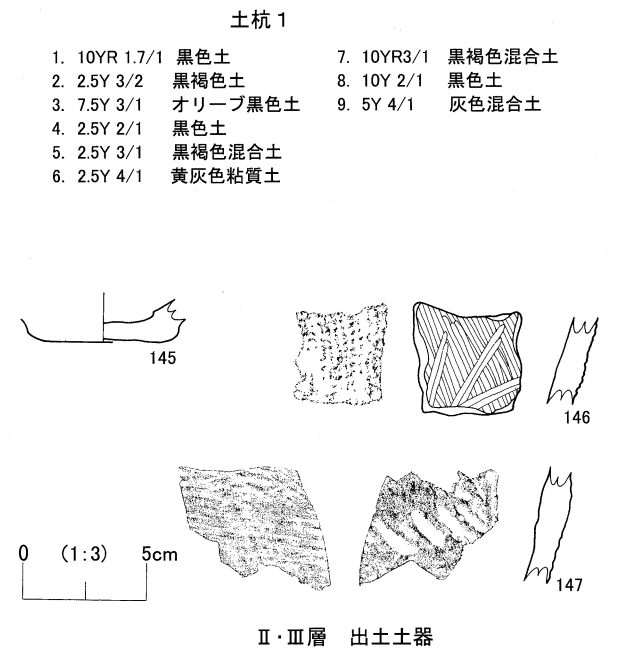
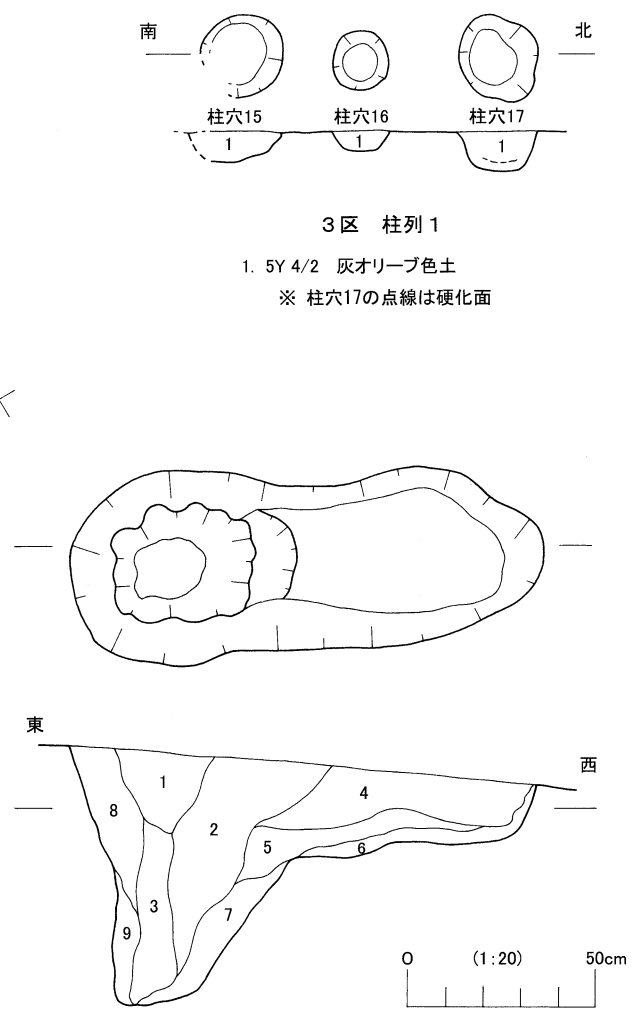
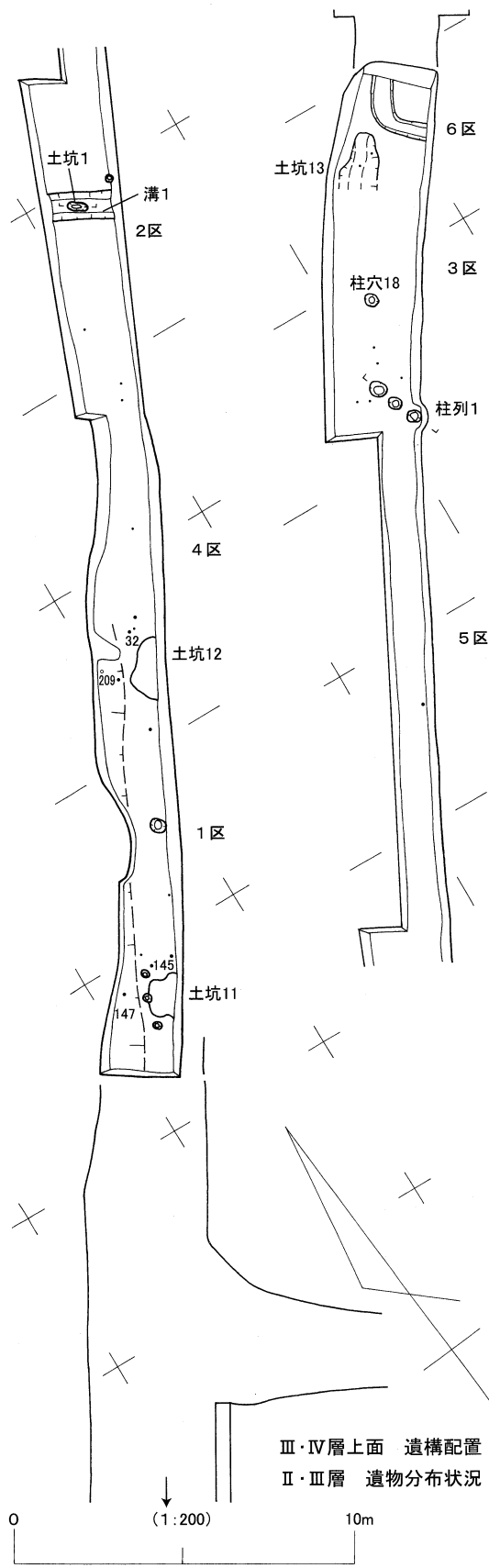
形態から柱の抜き取り痕を有した柱穴とも推測されるが、柱痕が見られることから立柱時の跡の可能性が考えられる。時期は不明である。

溝1 攪乱に削平され底面がわずかに残存する。規模は幅112cm、深さ3cmを測る。土坑1と重複するが切り合い関係は不明である。性格や時期は不明である。

(イ) 遺物 (Ⅱ層中)

土師皿145は横ナデで器面を調整し、外面の底の中央が黒ずむ。時期は中世と思われる。

須恵器147は小型甕の胴部と思われる。外面に叩き目と内面に当て具痕が見られる。時期は古墳時代と思われる。



第27図 黒葛遺跡第2次 遺構1・土器1 (III・IV層上面)

他の遺物としては土師器片が5点程出土した。

b. 検出面2 (IV層上面)

遺構の覆土・埋土はⅢ層類似の黄褐色系の土である。1・4・6区で土坑11～13が検出したが、明瞭な掘形は確認できず樹木痕と考えられる。その他は柱穴を確認した。とくに3区においては間隔の狭い柱列を検出しており、柱間は約20cmである。柱穴17では埋土中に硬化面を確認したが、分層できるほどの差異は判別できなかった。3区中央の柱穴18も類似する。各遺構の時期は不明であるが、Ⅲ層中より出土した土器146などから縄文時代晩期の可能性が考えられる。

遺物の分布状況は、出土量は多くはないが比較的まとまって出土した。とくに礫が多く、中には赤く変色した礫が見られた。大きさは10cm程で川原石が破碎して赤く変色しており、被熱破碎礫(=焼石)の可能性が考えられる。

出土遺物の位置は図表を参照されたい。

(ア) 遺構

- 柱穴11～13 規模は柱穴11が直径23cm、柱穴12は直径22cm、柱穴13は直径24cmを測る。
- 柱穴14 規模は直径45cm、深さ9cmを測る。覆土はⅢ層類似の土であり、明確な柱痕は確認できなかった。規模も他に比べ大きいことから土坑とも考えられる。性格は不明である。
- 柱穴15～17 規模は柱穴15が直径22cm、深さ9cm。柱穴16は直径16cm、深さ6cm。柱穴17は直径23cm、深さ11cmを測る。柱穴17は平面がやや不整形を呈しており、埋土中に径8cm程度の硬化面が確認できた。底面付近の壁面も硬化する。
- 柱穴18 規模が直径23cm、深さ10cmを測り、埋土の状況が柱穴17に類似する。

(イ) 遺物 (Ⅲ層中) 145～147・209

土器は146が内面に精緻なミガキを施し、外面には布目痕が明瞭に残る。色調は内面が7.5YR1.7/1黒色、外面は10YR6/6明黄褐色を呈する。縄文時代晩期の組織痕文土器と考えられる。

石匙209は石材がチャート、原礫面を基部にもち刃部にはわずかだが磨滅が見られる。

c. 検出面3 (VII層上面)

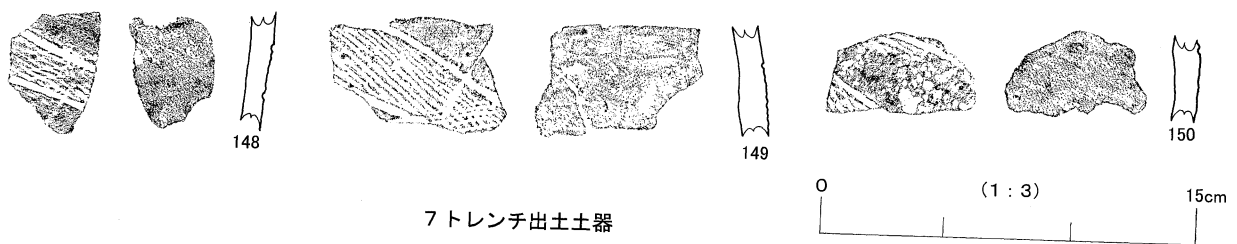
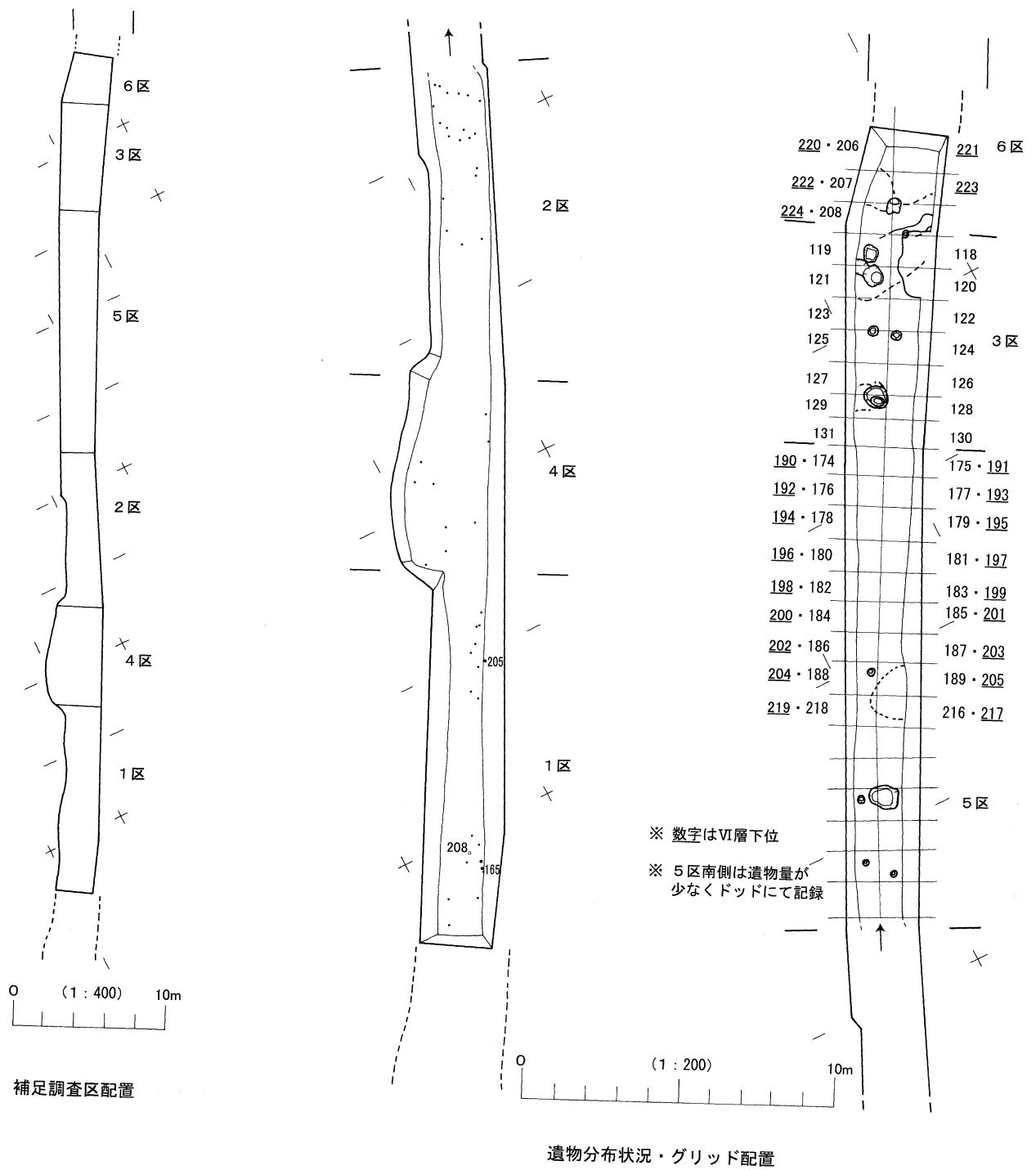
遺構は集石2基、土坑4基、柱穴7基を検出した。柱穴は調査範囲が狭いことから配置・性格が不明であるが、全体的な遺構配置としては各集石の周囲に集まっている。また、土坑も覆土に性格を判断できる特徴は確認できなかった。集石は、層位的にはいずれもⅥ層中位程から検出された。

遺物の分布状況は、南半の1・4・2区と北端の6区は希薄であったが、3区と5区北側2/3では集中的に多量の遺物が出土した。層位としてはⅥ層でのみ出土する。

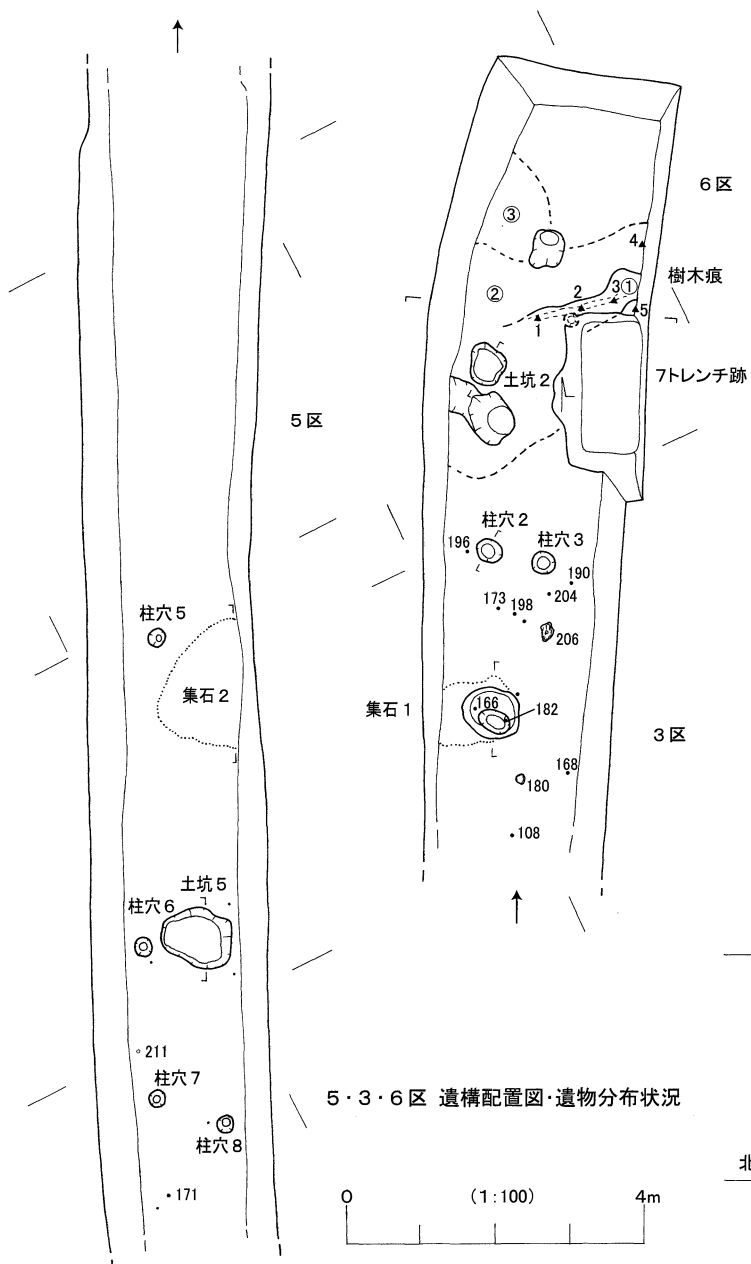
また、出土状況としては3・5区において、5～10cm大の破碎して赤く変色する礫が一面に広がり、その中に土器片などが散見する状況であった。礫はその特徴と近くに集石が存在することから被熱破碎礫(=焼石)と考えられる。材は角の丸くなった川原石である。

(ア) 遺構

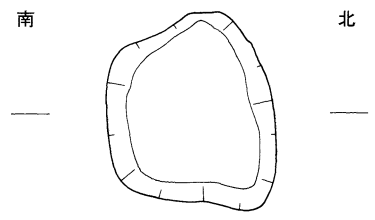
- 集石1 集石1は礫が(100)cm×90cmの範囲に集中的に広がり、とくに55cm×80cmの範囲に集中する。集石の下には土坑を掘り込む。土坑の規模は77cm×70cm、二段掘りで深さ16cmから7cm



第28図 黒葛遺跡第2次 遺構2・土器2 (VII層上面)

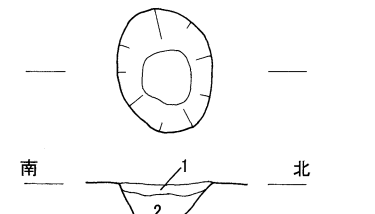


5・3・6区 遺構配置図・遺物分布状況



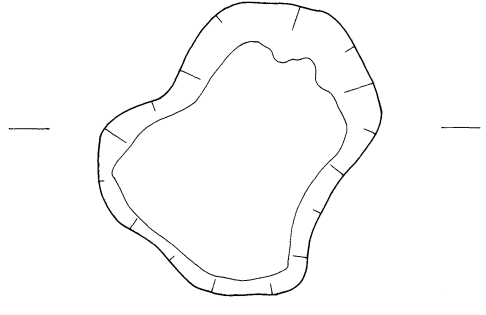
土坑 2

1. 2.5Y 4/2 暗灰黄色土, 多くの炭化物を含む



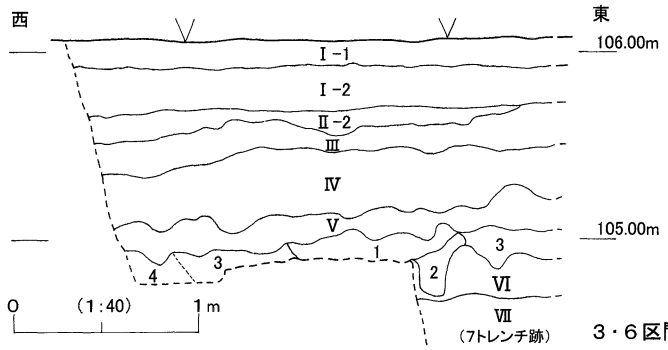
柱穴 2

1. 5Y 5/6 オリーブ色土, やわい
2. 5Y 6/8 オリーブ色土, 硬くしまる



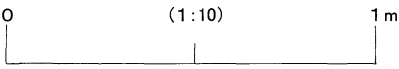
土坑 5

1. 10YR 6/8 明黄褐色土
2. 2.5Y 4/4 オリーブ褐色土



3・6区間 北壁

1. 2.5Y 3/1 黒褐色土, 非常に多量の炭化物(〜3cm大)を含む
2. 5Y 4/2 灰オリーブ色土
3. 5Y 3/1 オリーブ黒色土, 多量の炭化物(〜1cm大)を含む
4. 2.5Y 5/6 黄褐色土, 多量の炭化物(〜1cm大)を含む



第29図 黒葛遺跡第2次 遺構3 (VII層上面)

を測る。意識的に配石した感じではなく無造作に置かれた状態であった。礫は西側の調査区外にも広がると思われる。礫は包含層出土のものと類似しており焼石と考えられる。

また、周囲には穿孔のある軽石製品（206）と円盤状の土器底部（180）がほぼ水平に寝かした状態で出土していることから集石との関係が注目される。何らかの作業場の痕跡と考えられるが性格は不明である。

集石 2 掘り込みをもたずに礫のみが集中する。中央付近に掘り込みと思われる起伏が見られたが不明瞭であった。礫は130cm×(100)cmの範囲に集中的に広がり、とくに50cm四方の集中する範囲が存在する。配石などは確認しなかった。礫の特徴は集石 1 と同様である。なお、礫の範囲が東側の調査区外に広がることから区外に掘り込みがあるとも考えられる。

土坑 2 平面形は不定形を呈して、規模が平面49cm×45cm、深さ18cmを測る。

土坑 5 平面は不定形を呈して、規模が平面74cm×77cm、深さ19cmを測る。

柱穴 2 平面は楕円形を呈して、規模が直径30cm×25cm、深さ11cmを測る。底面付近の埋土がやや硬く締まる。

柱穴 3 平面は円形を呈して、規模が直径14cm、深さ 9 cmを測る。

柱穴 4 平面は円形を呈して、規模が直径 8 cm、深さ 9 cmを測る。

柱穴 5 平面は円形を呈して、規模が直径 8 cm、深さ14cmを測る。

柱穴 6 平面は円形を呈して、規模が直径10cm、深さ16cmを測る。

柱穴 7 平面は円形を呈して、規模が直径 9 cm、深さ25cmを測る。

柱穴 8 平面は円形を呈して、規模が直径 8 cm、深さ51cmを測る。

樹木痕 3区から6区にかけて炭化物の広がる範囲を検出した。V層直下で検出されており、炭化物の含まれる密度で3ブロック（①～③）に分けられた。番号の①から炭化物が大きく密に含まれる。とくに中央の①は最も炭化物が多く、5cm大のものが同一直線上に並んで出土した。平面形と掘り込みはともに明瞭ではなく、浅い底面に細かい凹凸が確認できた。この遺構の性格を確認するため複数の炭化物（▲試料1～5）を樹種同定にかけたところ、すべて針葉樹のカヤの木であり、試料1と2は同一直線状であることから1本の幹であったことが予想される結果が得られた。周囲には炭化物が広がることから自生していたカヤが倒木・焼失したのと考えられる。

また、炭化物の年代測定を行なうと6530±90BPの数値がえられた。アカホヤ降下火山灰層と考えられるV層が直上に存在する点から、火山灰層形成時の噴火などによる自然現象の痕跡であることが推察される。

樹木痕に伴うかたちでの遺物は見られなかった。分析結果は後述する。

（イ）遺物（VI層中）

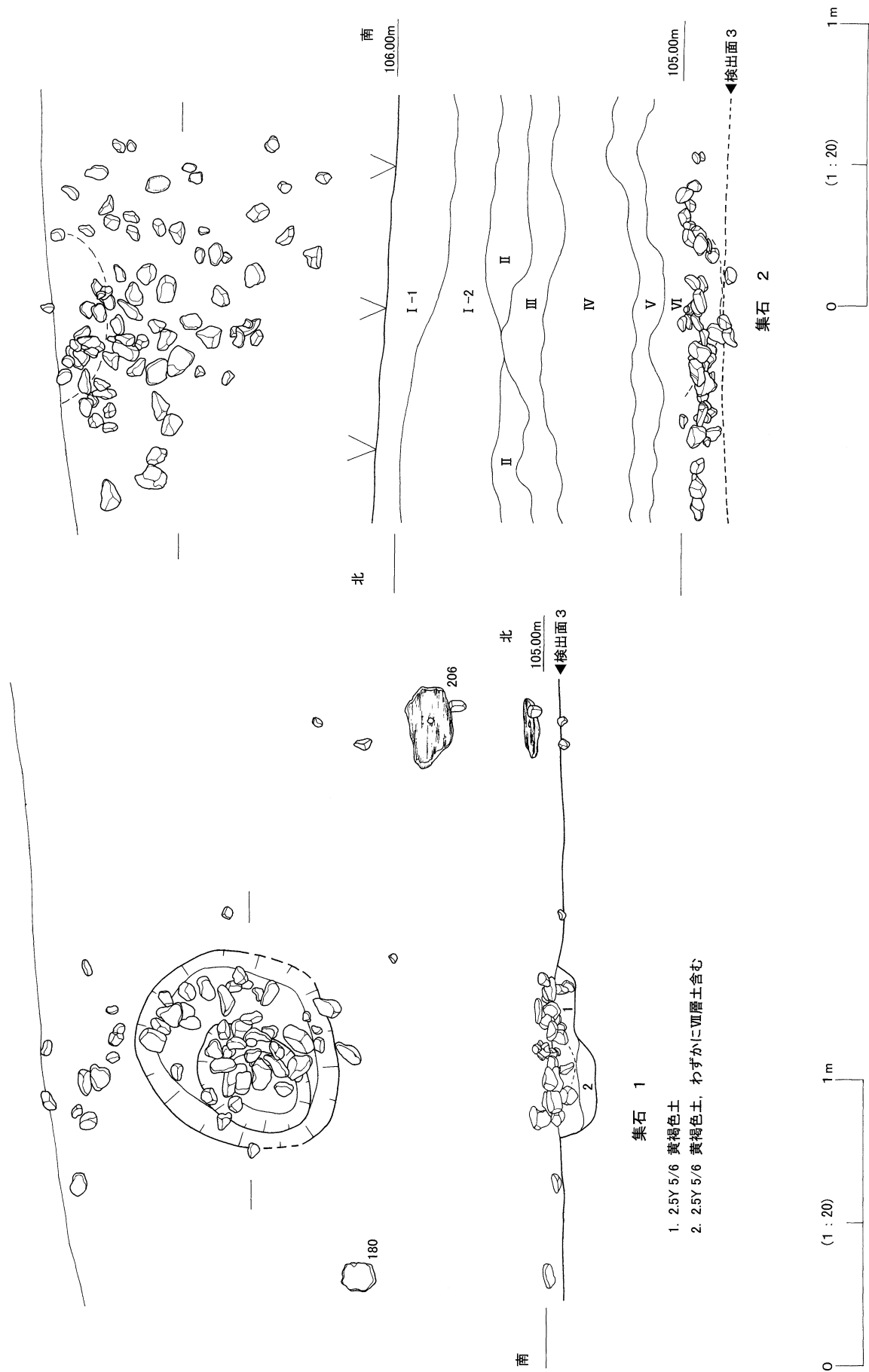
遺物の出土位置は図表を参照されたい。グリッドによる一活取り上げ分については以下に記述する。

6区：G 221；177・179、G 208；181、G 217；199

5区：G 181；188、G 174；201、G 219；169・170、G 191；175、G 197；185、
G 192；192、G 195；203

3区：G 121；178・189、G 124；172・195・200、G 125；202、G 130；183、G 131；193

接合資料：171＝G 200・G 209・14トレンチ、176＝G 195・G 197、194＝G 177・G 181



第30図 黒葛遺跡第2次 遺構4 (Ⅶ層上面)

(1) 土器

確認調査7トレンチ 148～150

148・149・150は本調査第VI層に対応層する層より出土した。調整はいずれも外面にヘラ描き沈線に挟まれた撚糸文が見られる。内面はナデで調整されるが、148にはヘラ削りの痕跡が残る。色調は148・149の内外面が10YR7/4にぶい黄橙色、150は5YR5/6にぶい赤褐色である。150には外面に剥離が見られ、色調と考え合わせると二次焼成を受けたと考えられる。胎土にはいずれも1mm以下の石英・長石・黒色砂粒が見られる。土器型式は塞ノ神式と考えられる。

確認調査14トレンチ 151～164

本調査第VI層に対応層する層より口縁部151と胴部152～164が出土した。152を除くと色調が類似することから同一固体とも考えられる。胎土には石英（～1mm大）・長石（～2mm大）・黒色砂粒（～1mm大）・赤褐色砂粒（～5mm大）を含む。152は他に比べて石英が多い。煤が口縁部151には内外面に、153・154・157・161は外面にのみ見られる。型式はすべて塞ノ神式と考えられる。

口縁部151は外面に3条と口唇部に貝殻連続刺突文を横位に施す。調整は横方向のナデである。153は頸部から胴部にかけて残り、上端に横位の貝殻連続刺突文が見られる。胴部外面には2.5mm幅の沈線に囲まれた撚糸文が施文される。内面は板状工具でナデ調整が施される。

他はすべて胴部で153と類似の文様が見られる。調整・施文の順番は次のように観察できた。器面を板状工具もしくは貝殻によりナデ調整→ナデ調整→撚糸文を施す→2条の沈線で区画→区画外の撚糸文をナデ消す、の順である。内面にはナデ調整とケズリが見られる。ケズリの原体は不明である。

本調査 165～205

口縁部165～167・170、頸部168・169、底部180、他は胴部である。型式は塞ノ神式がほとんどであるが、170・205は平楯式と考えられる。

塞ノ神式の一群は、①色調・②焼成・③文様・④胎土・⑤その他の特徴から四つに分けられる。ただし、型式差ではなく個体差と考えた。

一類：①10YR5/2灰黄褐色 ②非常に良好 ③網目状の撚糸文

④1mm以下の非常に多量の長石、石英、雲母を含む

挿図番号；口縁部166、頸部168・169、胴部173・181・184・186・187・189・190・192・193・195・196・198・200・202・204

二類：①10YR8/4浅黄橙色 ②軟 ③単軸絡条体の撚糸文

④0.5mm以下のやや多量の長石、石英、極少量の黒色砂粒・赤褐色砂粒を含む赤褐色砂粒は3mm程度のものも存在する。

⑤外面に多量の炭化物が付着するものが2点（177・179）見られる。器厚が他に比べやや厚い。

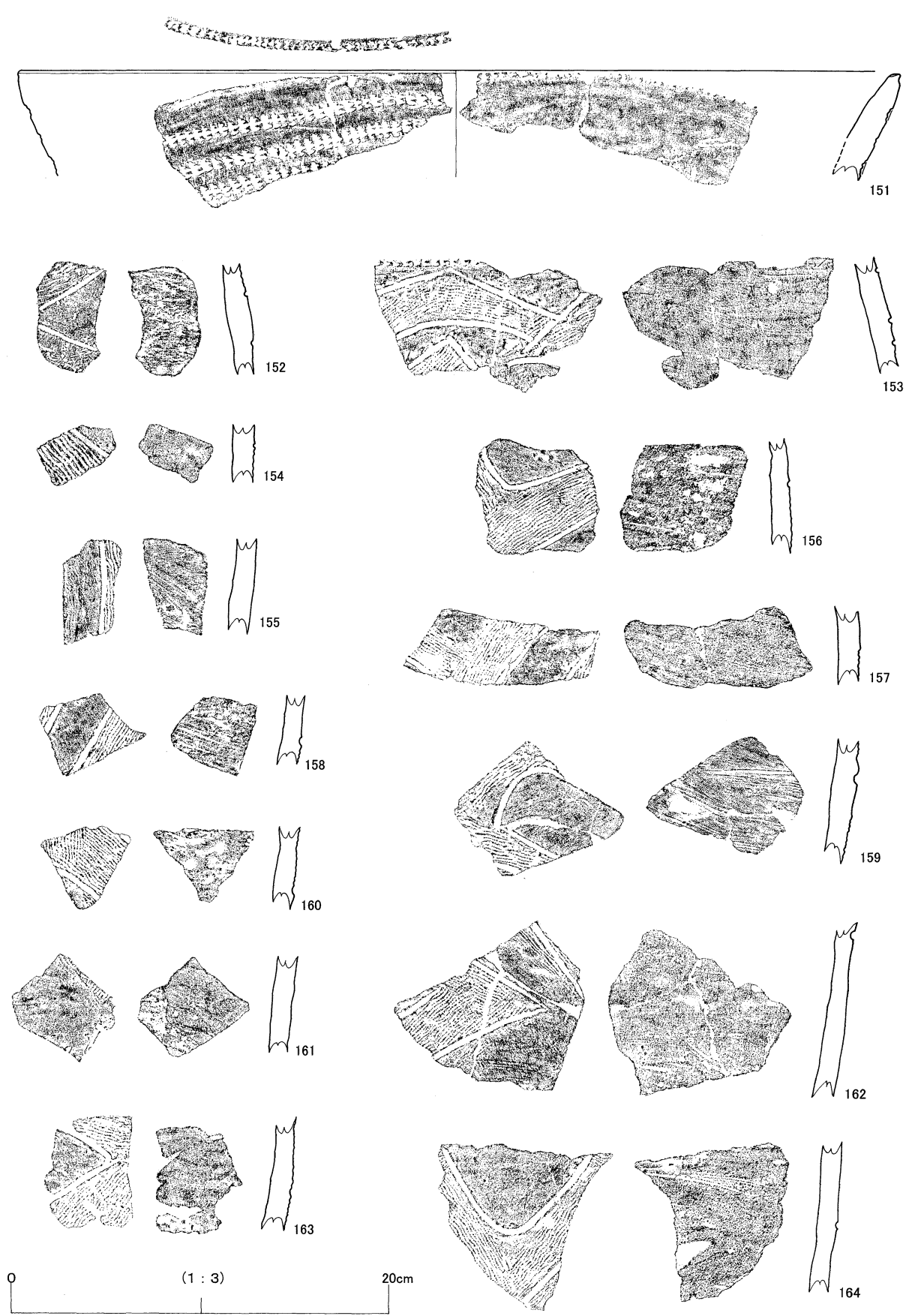
挿図番号；胴部172・174・175・177・179・183・197

三類：①7.5Y5/6明褐色 ②やや軟 ③単軸絡条体の撚糸文

④粒の粗い1～3mm以下の長石、石英、非常に多量の黒色砂粒、極多量の赤褐色砂粒を含む
挿図番号；胴部176・178・182・185・188・191・194・199・201、底部180

四類：①7.5YR4/3褐色 ②良好 ③単軸絡条体の撚糸文

④粒の粗い1～3mm以下の長石、石英、非常に多量の黒色砂粒、極少量の赤褐色砂粒を含む



第31図 黒葛遺跡第2次 土器3 (14トレンチ出土)

⑤外面に炭化物が薄く付着する。171はグリッド200・209・14トレンチ出土土器との接合資料となった

挿図番号；口縁部165・167、胴部171

施文方法・器面調整はすべて同様に、器面を板状工具もしくは貝殻によりナデ調整→ナデ調整→捺糸文を施す→2条の沈線で区画→区画外の捺糸文をナデ消す、の順である。内面にはナデ調整とケズリが見られる。

口縁部165は内外面を横のナデで整える。166は大きく反った口縁と口唇部に横位の貝殻連続刺突文を施す。167は口縁部に3条、頸部に1条の横位のヘラ状工具による連続刺突文を施す。

頸部168・169は、横位の爪形文を外面に施す。

底部180は、縁辺を打ち欠き、二次加工を施す。土製円盤の可能性が考えられる。出土状況からは作業台の可能性も想定されるが、その性格は不明である。

平椀式は2点あり、口縁部170は外面に山形の沈線を描き、波状の口縁をもつと思われる。沈線は幅1.5mm内に2条が並行する。色調は2.5Y5/2暗灰黄色。胎土には長石・石英・雲母が見られ、とくに長石が非常に多く含まれる。胴部205は、網目状の捺糸文が縦位に施される。色調は7.5YR5/2灰褐色、胎土には長石・石英・雲母が見られ前二者が多い。

その他に横位に刺突文が巡る203がある。

石器 207・208・210～212・214

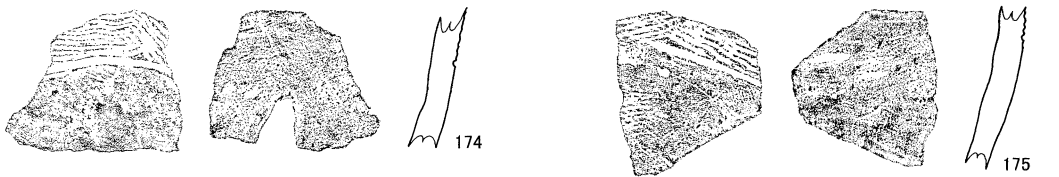
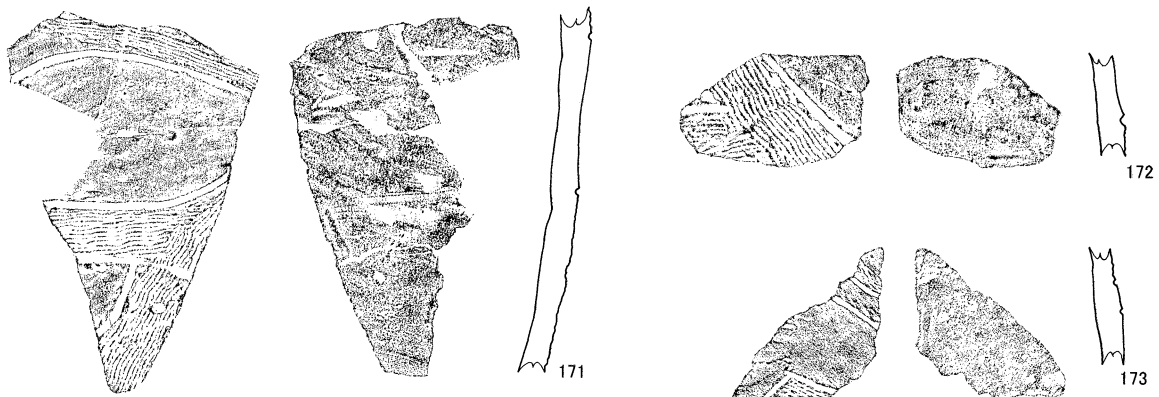
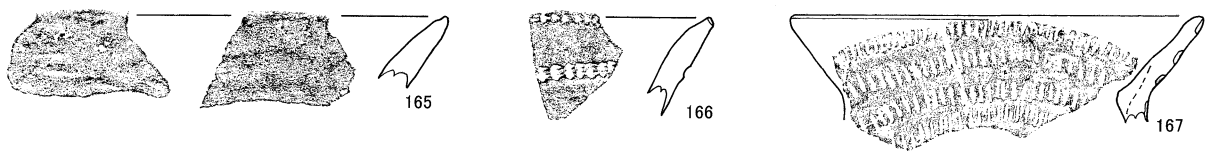
206は板状の軽石に穿孔を施したもので、用途は不明である。出土状況からは何らかの作業に用いたと思われる。風化が激しく調整痕・使用痕は確認できなかった。

搔器207は刃部と思われる部位は角度が鈍く、磨滅の痕跡なども観察できない。このことから剥片の二次加工とも考えられる。原礫面を残す。

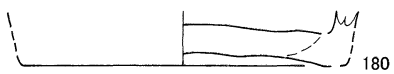
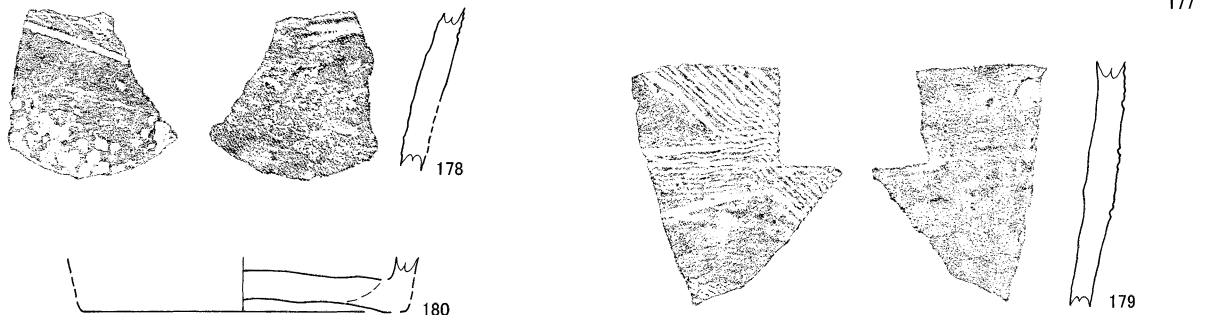
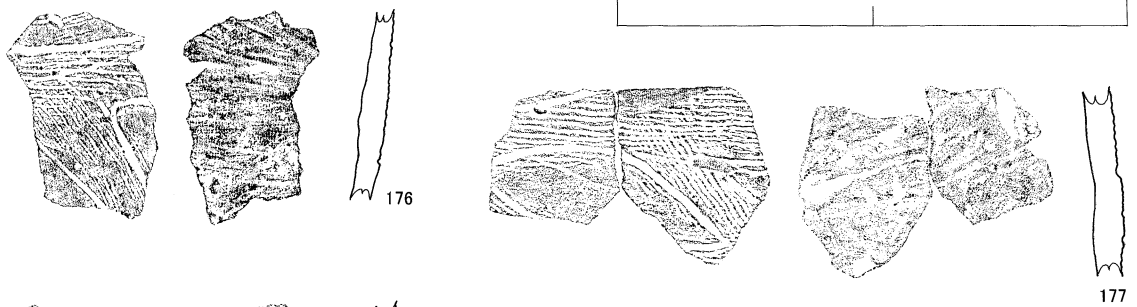
他は剥片であるが、210は白みを帯びた黒曜石であり姫島産と考えられる。211・214は不純物を含んだ黒曜石であり211が不透明だが214は透明度が高い。

挿図番号	遺物番号	出土位置		種類	器種	石材	法量(cm, g)			
		地点	層位				最大長	最大幅	最大厚	重量
209	8	1区	Ⅲ	剥片石器	石匙	チャート	3.70	5.20	0.90	14.00
207	174	5区-174	Ⅵ-上位	剥片石器	搔器	頁岩	3.00	2.50	1.20	9.90
208	17	1区	Ⅵ	剥片石器	剥片	チャート	2.00	3.40	1.50	10.16
210	126-2	3区-127	Ⅵ	剥片石器	剥片	黒曜石	1.20	1.10	0.40	0.40
211	215	5区	Ⅵ-下位	剥片石器	剥片	黒曜石	1.60	1.30	0.40	0.60
212	126-1	3区-126	Ⅵ	剥片石器	剥片	頁岩	1.50	2.00	0.20	0.70
214	206	6区-206	Ⅵ-上位	剥片石器	剥片	黒曜石	1.71	1.13	0.49	0.50
206	160	3区	Ⅵ	軽石製品	—	軽石	25.12	1.13	0.49	0.50

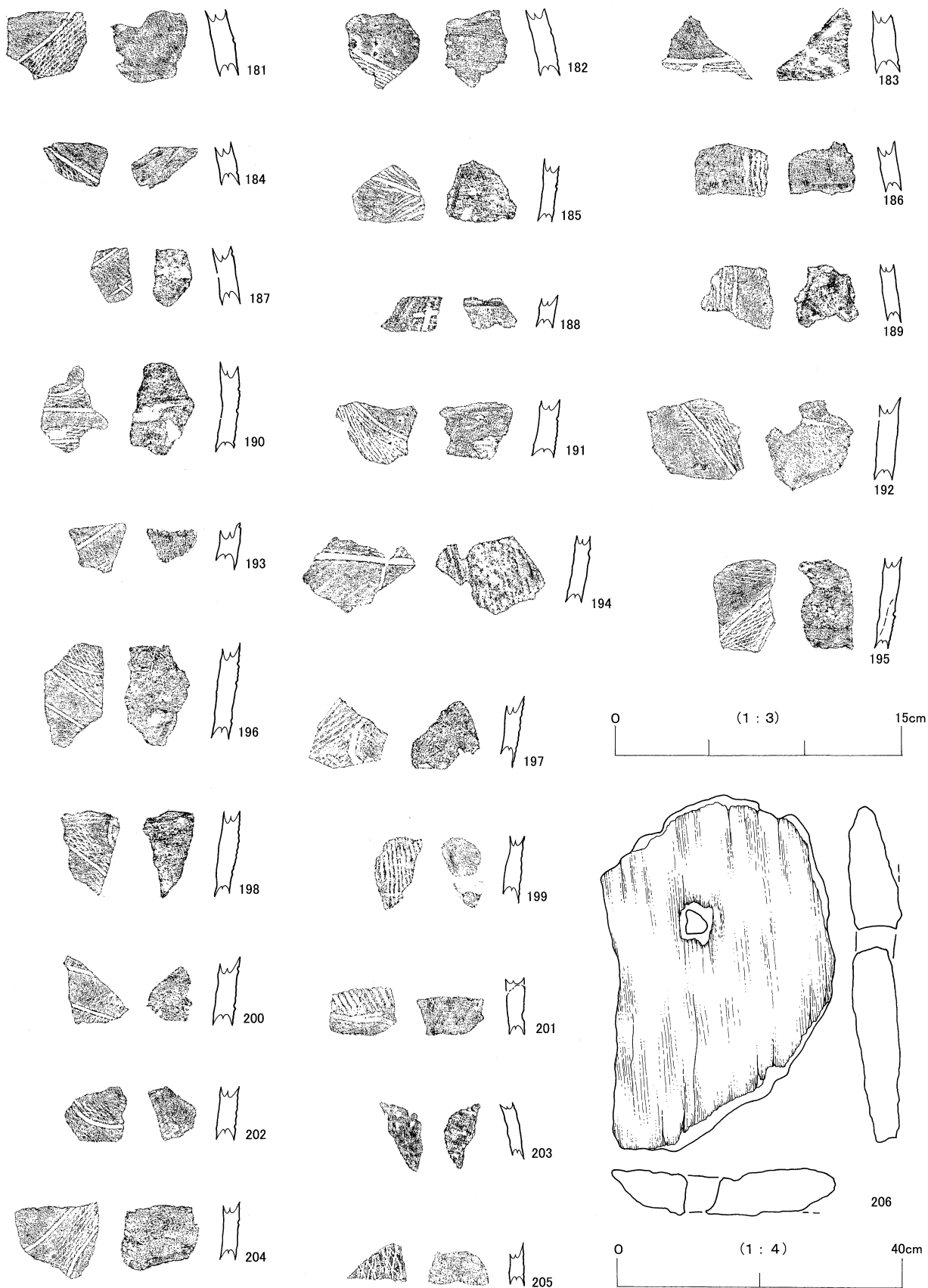
表3 黒葛遺跡第2次 石器観察表



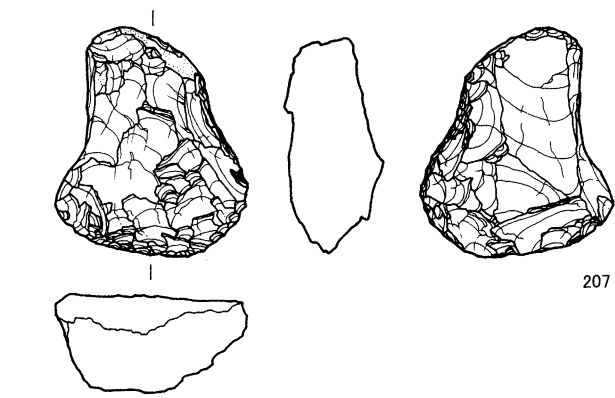
0 (1 : 3) 20cm



第32図 黒葛遺跡第2次 土器4



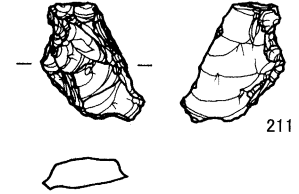
第33図 黒葛遺跡第2次 土器5



207



210



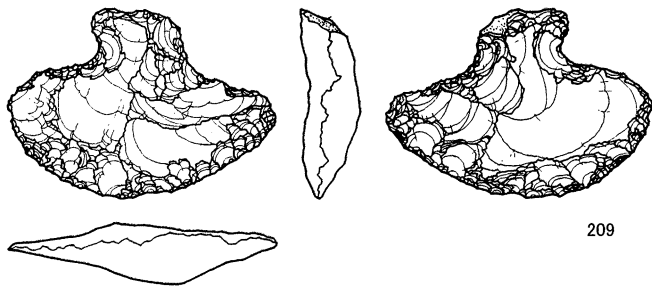
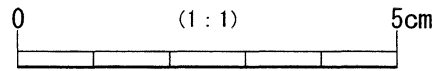
211



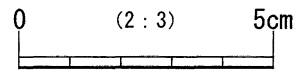
208



212



209



第34図 黒葛遺跡第2次 石器1

第4節 まとめ

調査成果としては①歴史時代以降の包含層は現代の耕地整備などにより消滅するが遺構は残存する可能性が高い。②縄文時代早期の包含層は約20mの範囲に広がることが推測される。③塞ノ神式の包含層はⅥ層であり、有明町における従来の縄文早期包含層（Ⅵ・Ⅶ）の中でも上部に位置する。④塞ノ神式以外に他の形式が見られず、一型式の期間に営まれた遺構を検出した。⑤この時期の遺物の集中する範囲と遺構を検出する範囲に食い違いがあることが確認できた。⑥炭化材の樹脂同定によりアカホヤ降下以前の植生について情報を得られた。⑦炭化材の年代測定によりアカホヤ降下火山灰層の降下年代について情報が得られた。

以上の点にまとめられる。

第5節 黒葛遺跡から出土した炭化材の年代と樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

黒葛遺跡第2次調査の6区では、アカホヤ降下火山灰層直下のVI層上面から炭化材が出土している。この中には、棒状を呈する炭化材も認められており、火山灰の降下によって炭化したこと等が推定される。

本報告では、炭化材の放射性炭素年代測定を行い、テフラの噴出時期に関する情報を得る。また、樹種同定を併せて行ない、古植生に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、6区のVI層上面およびVI層から出土した炭化材5点（試料番号1～5）である。このうち、放射性炭素年代測定は試料番号3を選択し、樹種同定は全点について行なう。

2. 方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は、株式会社加速器分析研究所（IAA）の協力を得た。

(2) 樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

放射性炭素年代測定および樹種同定結果を表1に示す。炭化材の年代は、補正年代で 6530 ± 90 BPであった。一方、炭化材の樹種は、全て針葉樹のカヤに同定された。主な解剖学的特徴を以下に記す。

・カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、早材部から晩材部への移行は緩

やかで、晩材部の幅は狭い。仮道管内壁には、対をなしたらせん肥厚が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1～10細胞高。

4. 考察

(1) 年代について

炭化材は、鬼界-アカホヤ火山灰（K-Ah：町田・新井,1978）直下のVI層上面から出土している。年代は、補正年代で 6530 BPであった。K-Ahは、鬼界カルデラから噴出したテフラで、九州・四国・本州の広い範囲で分布が確認されている（町田・新井,1992）。最近の研究例では、その噴出年代について同時に噴出した火砕流堆積物中や降下火山灰の直下、直上などから採取された炭化材や土壤の

表4 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

番号	地区	層位	樹種	$\delta^{13}C$	補正年代	Code No.
1	6区	VI層上面	カヤ			
2	6区	VI層上面	カヤ			
3	6区	VI層上面	カヤ	-23.1‰	6530 ± 90 BP	IAA-141
4	6区	VI層上面	カヤ			
5	6区	VI層上面	カヤ			

1) 年代測定は、 β 線計数法による。

2) 補正年代は、1950年を基点とした年数で、 $\delta^{13}C$ の値を基に、同位体補正を行った値。

3) 放射性炭素の半減期は、5570年を使用した。

年代測定が多数行なわれており、6500BP 前後に集中することが確認されている（辻ほか、2000）。今回の年代測定値は試料の出土層位からほぼK-A h 噴出直前の年代を示すと考えられ、これまでの測定値ともよく一致している。

（2）古植生について

VI層上面から出土した炭化材は、全て針葉樹のカヤであった。炭化材の中には、棒状を呈するものも見られ、試料番号1と2は同軸線上から出土している。これらのことから、5点の炭化材は同一個体に由来する可能性がある。

カヤは、常緑高木で樹高20～25m、直径1m以上になることがある。本州・四国・九州に分布し、アカガシ亜属等の常緑広葉樹と共に、暖温帯常緑広葉樹林内（照葉樹林）に生育する。このことから、K-A h 降灰直前の本遺跡周辺には、常緑広葉樹を主とした植生が見られた可能性がある。本地域の現存植生では、アカガシ亜属やシノキ属等の常緑広葉樹を主とした林分が僅かに残存しており（宮脇、1981）、現在と類似する植生であったと考えられる。

周辺地域では、同時期の古植生に関する調査例がほとんどないため、詳細は不明である。今後、さらに調査を行ない、資料を蓄積したい。

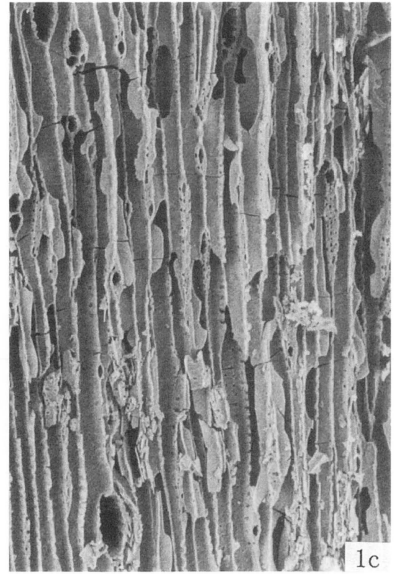
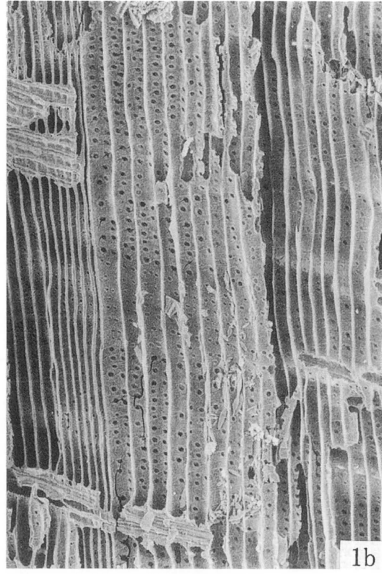
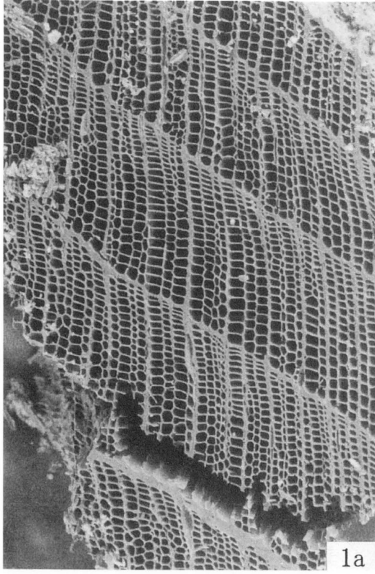
引用文献

町田 洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラアカホヤ火山灰.
第四紀研究、17、p.143-163.

町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス. 276p.、東京大学出版会.

宮脇 昭編（1981）日本植生誌 九州. 484p.、至文堂.

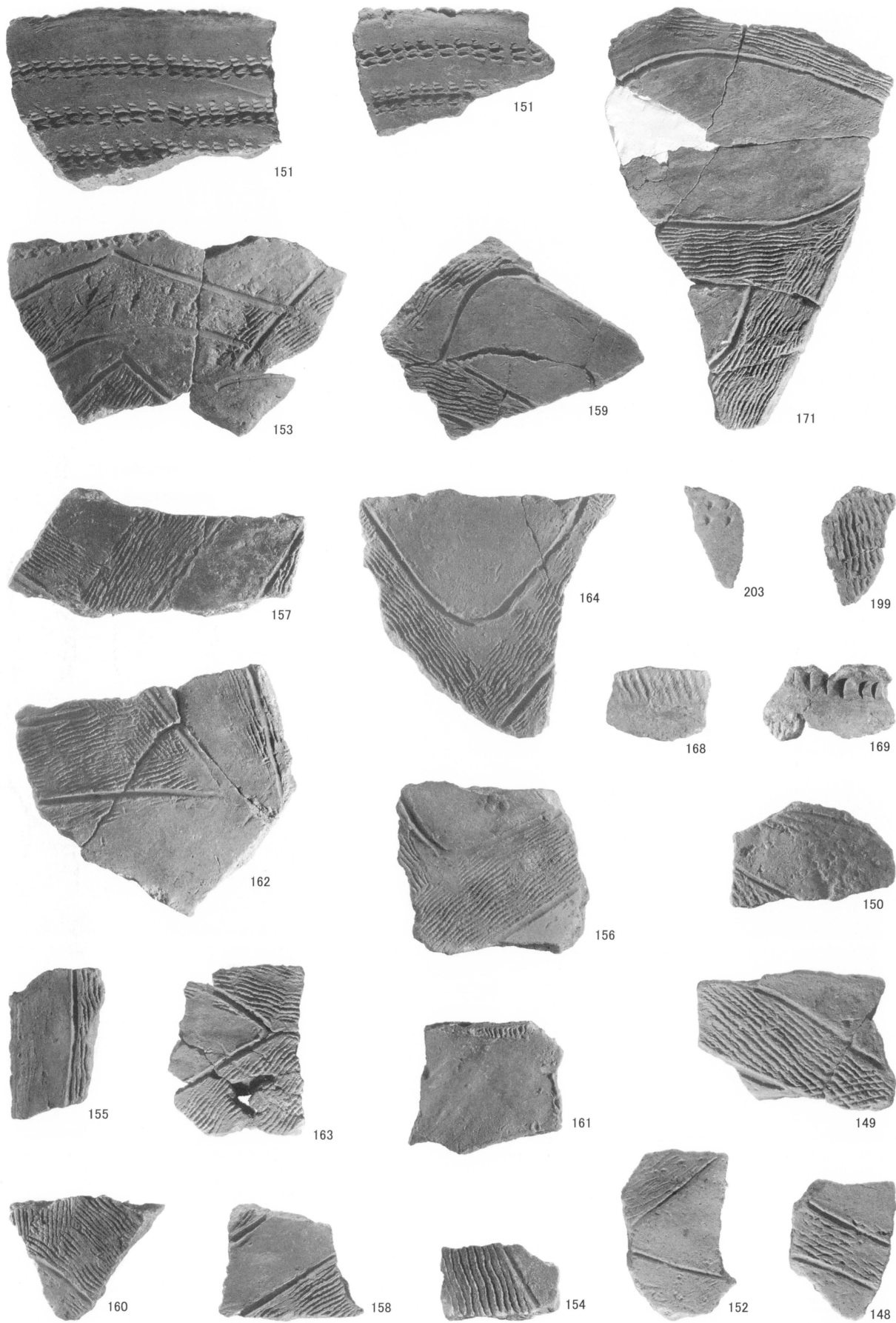
辻 誠一郎・奥野 充・福島大輔（2000）テフラの放射性炭素年代. 「日本先史時代の14C年代」、p. 41-58、日本第四紀学会.



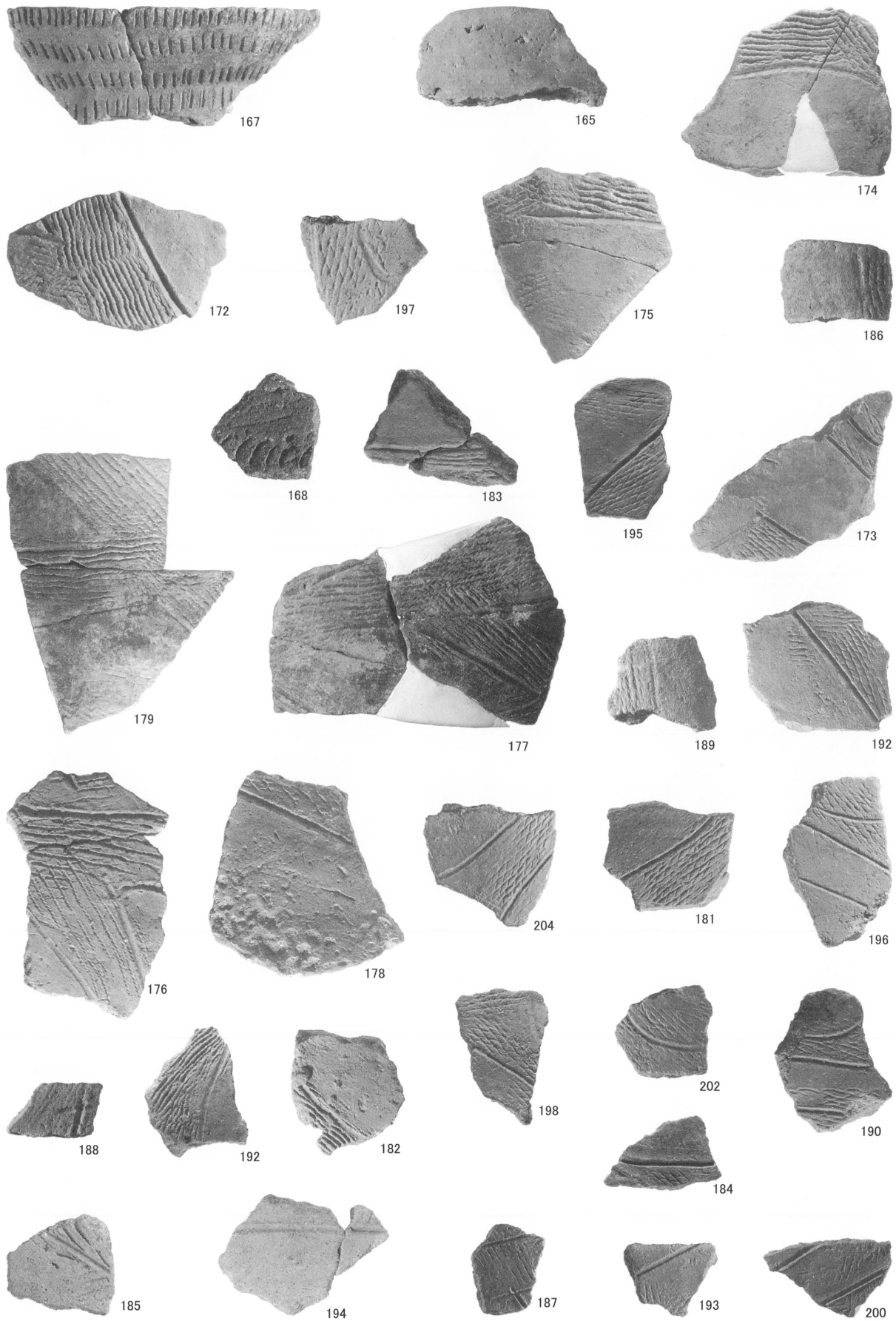
1. カヤ (6区VI層上面 No. 2)
a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μ m: a
200 μ m: b, c

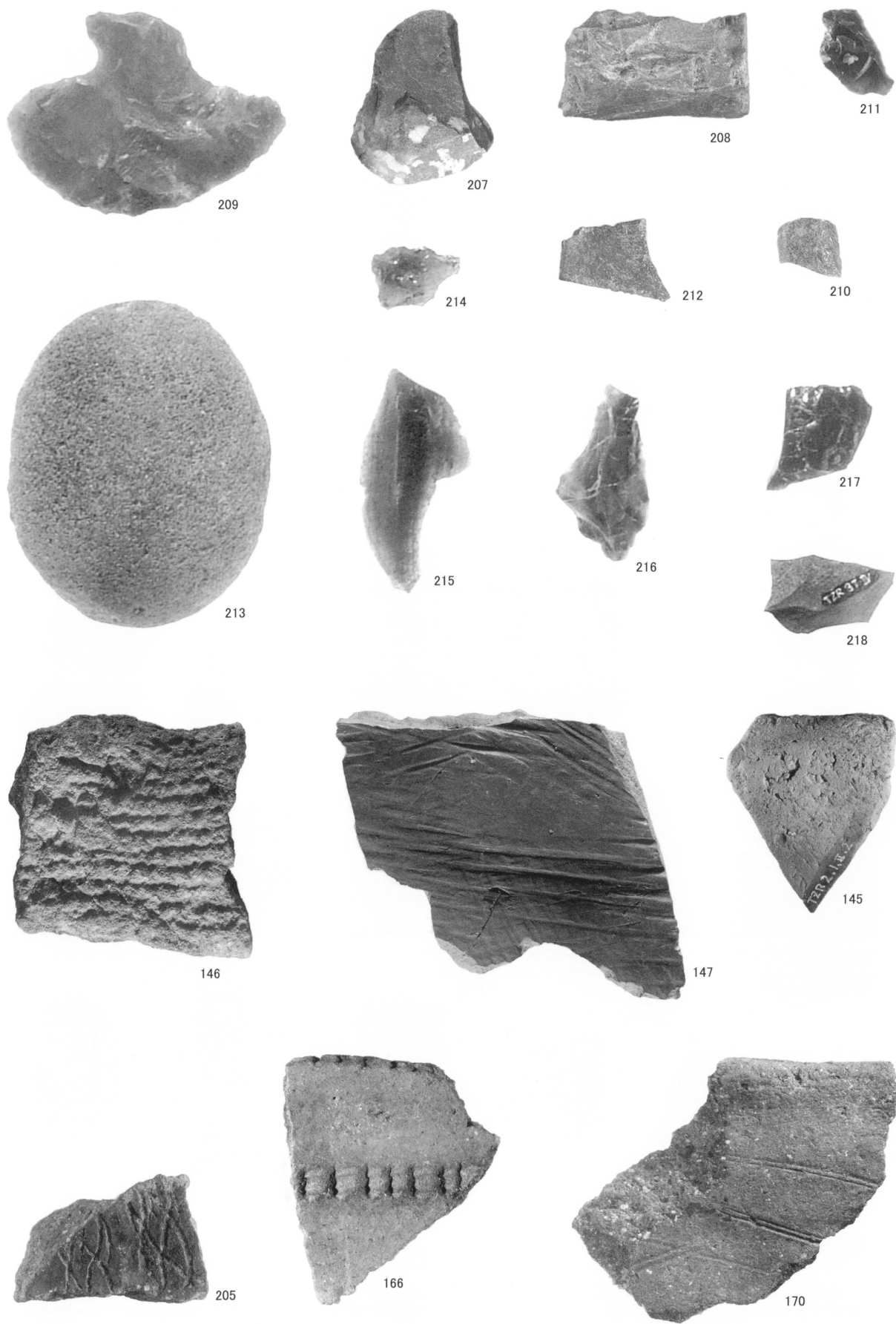
図版17 炭化材



图版18 黑葛遺跡第2次 遺物1



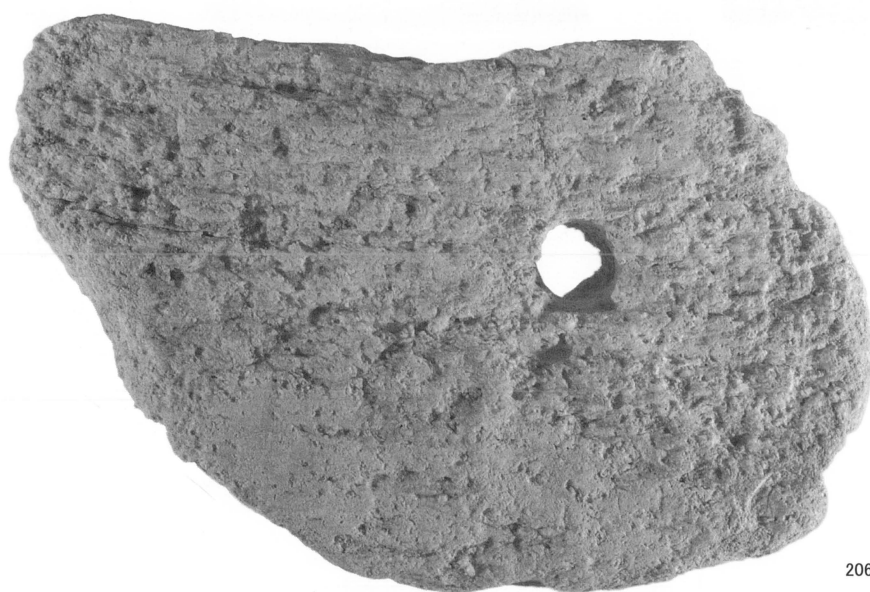
图版19 黑葛遺跡第2次 遺物2



图版20 黑葛遺跡第2次 遺物3



124



206

図版21 黒葛遺跡第2次 遺物4



柱穴断面
(2区、東壁)

◀Ⅲ層上面



土杭1 完掘状況



Ⅳ層上面 遺構配置
(3区、南より)



土層断面
(3区、東壁)

◀VII層上面



VII層上面 遺構検出状況
(3区、南より)



軽石製品(206)出土状況



集石1 検出状況
(3区、東より)



集石1 半裁状況



VII層上面 完掘状況
(3区、北より)



樹木痕 検出状況 1
(6区、北より)



樹木痕 検出状況 2
(3区、南より)



樹木痕 土層断面
(3・6区、東壁)



VI層 遺物出土状況
(6区、北より)



集石 2 検出状況



VII層上面 遺構完掘状況
(6区、北より)

第V章 牧原遺跡の調査

第1節 調査の環境

1. 調査の環境

調査地は県道63号志布志福山線から町道28号縄瀬牛ヶ迫線を黒葛集落へと向かい、北側に分岐した農道黒葛2号線のほぼ中央にあたる。本道を進むと町道199号黒葛線へと出る。

調査地の周辺は比較的平坦な台地に畑地が広がり、地形は緩やかに南へと下る。畑地ごとには段差が見られ、土地改良を受けて旧地形は失われているが、本来は起伏のある台地であったことが考えられる。調査地点は遺跡範囲の中央に位置する。調査地の東側には牧原A遺跡が隣接し、西側には黒葛遺跡が広がる。

調査地の現況は未舗装の農道であったため大きく削平を受けている。周囲も耕地整備などにより削平されている。

2. 調査の経過

調査日誌より以下に略述する。

平成13年11月12日(月) 事務所・休憩所の設営予定の借地を整地する。

13日(火) 1区の表土を重機で除去する。Ⅱ(クロボク)・Ⅲ(アカホヤ2次堆積)層を人力で掘り下げる。遺物出土状況の写真撮影・平板実測を行なう。

14日(水)～12月3日(月) 1区、Ⅵ・Ⅶ層を人力で掘り下げる。

4日(火) 1区、Ⅵ・Ⅶ層を掘り下げる。2区、Ⅲ層上面において遺構を検出する。写真撮影・平板実測を行なう。

5日(水) 1区、Ⅵ・Ⅶ層を掘り下げる。Ⅲ層を掘り下げる。

6日(木) 1区、Ⅷ(サツマ)層上面で検出状況・遺物出土状況の写真撮影・平板実測を行なう。土層堆積状況を撮影・実測する。2区、Ⅳ層上面で遺構検出・遺物出土状況の写真撮影・平板実測を行なう。

7日(金) 2区、Ⅳ層上面、遺構を半裁・完掘を行なう。

10日(月)～12日(水) 2区、Ⅵ・Ⅶ層を掘り下げる。

13日(木) 2区、Ⅷ層上面で検出状況を撮影・実測、遺物を取り上げる。土層断面を撮影・実測する。

14日(金) 2区の埋め戻しを行なう。

15日(土) 2区の埋め戻しと排土の処理を行なう。

17日(月) 降雨のため中止する。

18日(火)・19日(水) 3区、Ⅱ層を掘り下げる。

20日(木) 3区、Ⅲ層上面、遺構を検出後に半裁・完掘を行なう。完掘状況の写真撮影を行なう。

22日(土) 3区、平板実測を行なう。4区、掘り下げを開始する。

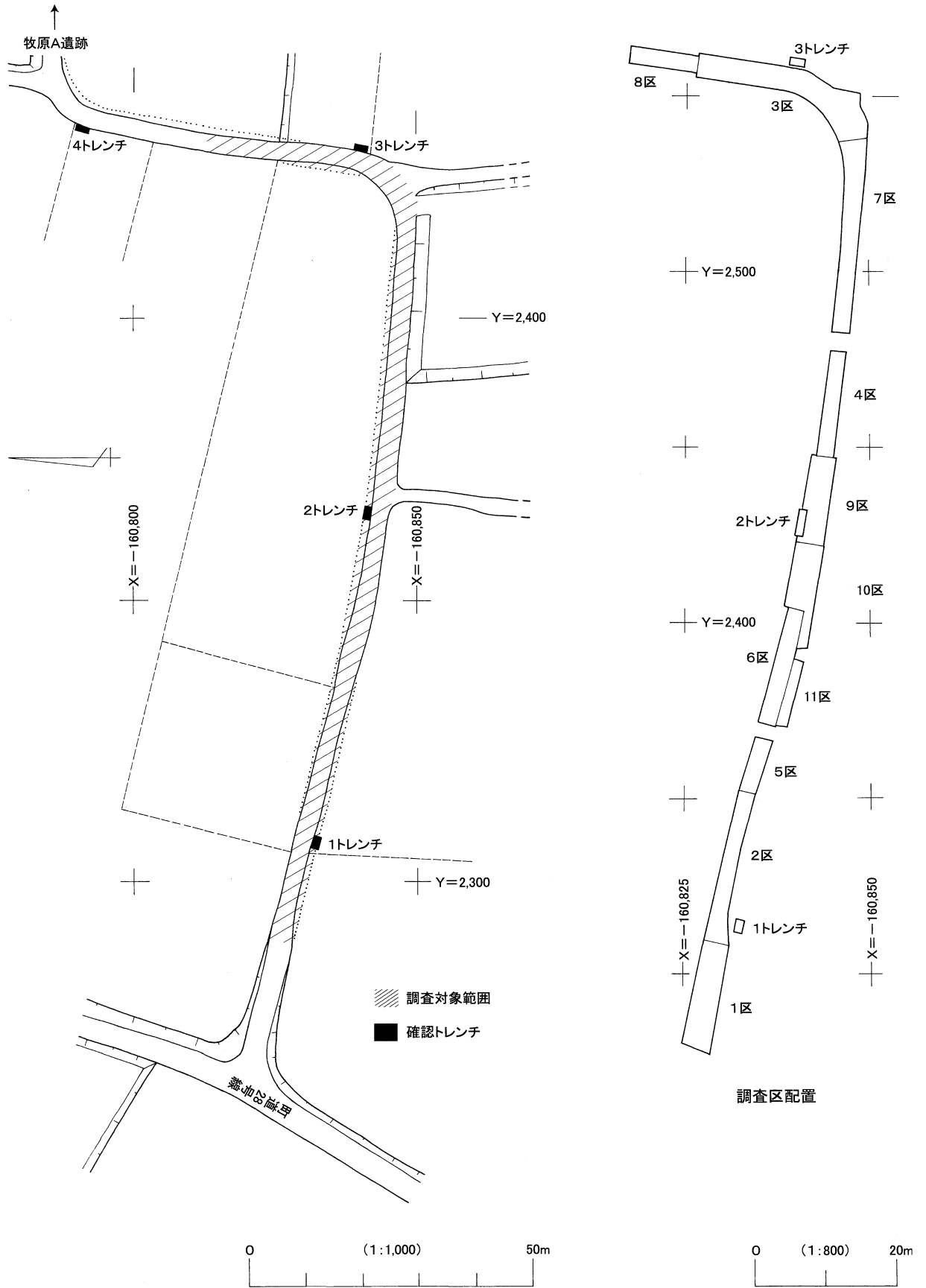
25日(火) 降雨のため中止する。

26日(水)・27日(木) 3区、Ⅲ層を掘り下げる。

平成14年1月7日(月) 3区、Ⅳ層上面で遺構の検出状況の写真撮影を行なう。

8日(火) 4区、補足トレンチ1・2を設けてⅥ・Ⅶ層を掘り下げる。補足トレンチ3・4を設けてⅥ・Ⅶ層を掘り下げる。

9日(水) 4区、Ⅵ・Ⅶ層を掘り下げる。補足トレンチ3・4のⅥ・Ⅶ層を掘り下げる。補足トレンチ3を写真撮影・平板図実測を行なう。5区、Ⅱ・Ⅲ層を掘り下げる。



第35図 牧原遺跡 調査区位置・配置

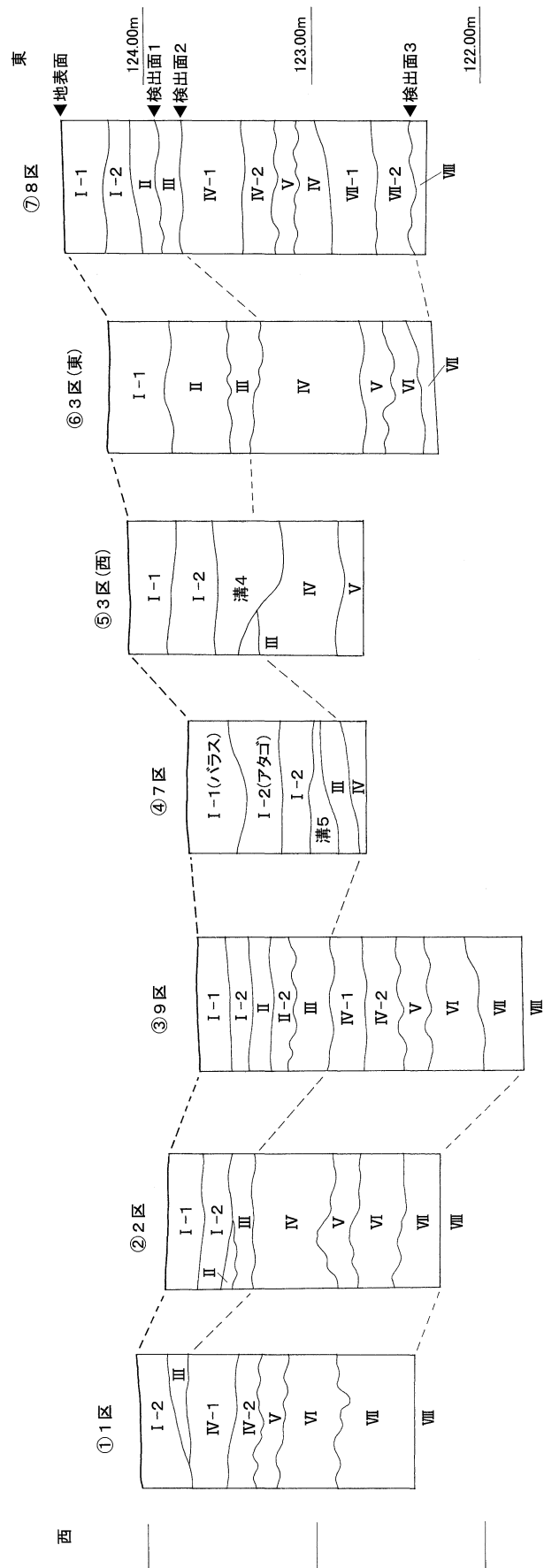
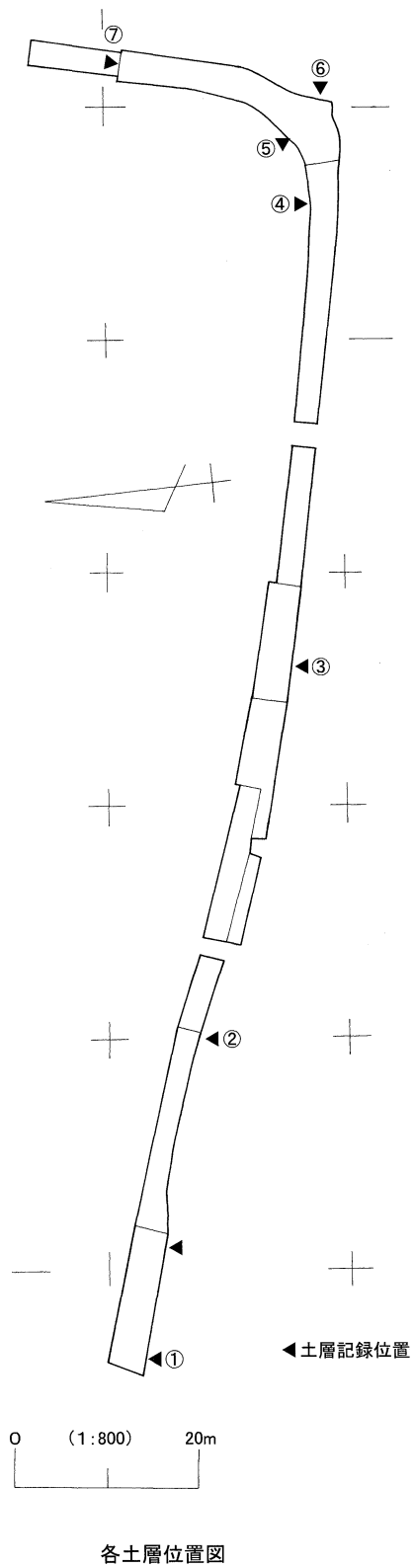
- 10日(木) 4区、Ⅵ・Ⅶ層を掘り下げる。補足トレンチ4のⅦ層を掘り下げる。5区、Ⅳ層上面で遺構精査を行ない、柱穴を検出・調査する。6区、Ⅱ層を掘り下げる。
- 11日(金) 補足トレンチ4・5のⅦ層を完掘、写真撮影・平板実測を行なう。6区、Ⅲ層を掘り下げる。
- 15日(火) 6区、Ⅲ層を掘り下げる。Ⅳ層上面で遺構を検出する。7区、Ⅲ層上面で遺構を検出する。写真撮影・平板実測を行なう。8区、Ⅱ層を掘り下げる。6区、遺物の出土状況の写真撮影を行なう。
- 16日(水) 6区、Ⅳ層上面で遺構調査を行なう。7区、Ⅲ層を掘り下げ、Ⅳ層上面で検出写真を撮影する。
- 17日(木) 6区、Ⅳ層上面で遺構調査を行なう。8区、Ⅱ層中より道と思われる硬化面を検出する。9区、Ⅱ層を掘り下げる。
- 18日(金) 6区、Ⅳ層上面で遺構調査を行なう。9区、Ⅱ層を掘り下げる。8区、Ⅲ層上面で遺構を検出する。
- 21日(月) 8区、Ⅲ層を掘り下げる。Ⅳ層上面で遺構調査を行なう。9区、Ⅲ層上面で調査を行なう。Ⅲ層を掘り下げる。10区、Ⅱ層を掘り下げる。
- 22日(火) 9区、Ⅲ層を掘り下げ、遺物の出土状況を撮影後、取り上げる。10区、Ⅱ層を掘り下げる。
- 23日(水) 9区、Ⅳ層上面で遺構を半裁・完掘・調査を行なう。10区、Ⅲ層上面で遺構を半裁・完掘・調査を行なう。
- 24日(木) 9区、Ⅳ層上面で遺構を半裁・完掘・調査を行なう。10区、Ⅲ層を掘り下げる。
- 25日(金) 9区、Ⅳ層上面で遺構を半裁・完掘・調査を行なう。10区、遺物の出土状況を撮影、遺物を取り上げる。Ⅲ層下位を掘り下げる。
- 28日(月) 9区、Ⅳ層上面で遺構を半裁・完掘・調査を行なう。10区、Ⅲ層より下(Ⅳ層：アカホヤ)を掘り下げる。
- 29日(火) 9区、Ⅳ層上面で遺構を半裁・完掘・調査を行なう。写真撮影・平板図実測を行なう。完了後にアカホヤ層を機械で除去し、Ⅵ・Ⅶ層を人力で掘り下げる。Ⅳ層を人力で掘り下げる。
- 30日(水) 9区、Ⅵ層を人力で掘り下げる。10区、遺構を半裁・完掘・調査する。11区、Ⅳ層を掘り下げる。写真撮影・平板図実測を行い、遺物を取り上げる。
- 31日(木) 9区、Ⅵ層を掘り下げる。10区、Ⅳ層を掘り下げる。11区、遺構を半裁・完掘・調査する。
- 2月1日(金) 撤収の準備と一部を撤収する。
- 4日～5日 9区、Ⅵ層を掘り下げる。10・11区、Ⅳ層を掘り下げる。
- 7日(木)～12日(火) 埋め戻しと借地の復旧を行なう。

第2節 調査の概要

1. 調査の方法

調査では排出土の仮置場を調査地内に確保するため、任意規模の調査区を設定して調査・埋め戻しを繰り返した。調査区幅は現道内で設定して必要に応じて工事範囲端まで拡張した。調査区は着手順に番号で呼称して11区を数えた。

掘り下げは基本的に人力で行ない、Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ層は重機を用いた。遺構検出はⅢ・Ⅳ・Ⅷ層上面にて実施した。遺物の記録・取り上げは、平板へのドット記録と任意の2mグリッドでの一括取り上げの二つを併用した。



第36図 牧原遺跡 土層柱状図

なお、調査では部分的に工事の破壊深度以下の補足調査を実施した。確認したのはⅧ層上面までで、時期は縄文時代早期にあたる。地点は図に示してある。

2. 層序

a. 旧地形

柱状図を見ると現況で7区が最も低いことが分かり、Ⅳ層上面を基準に見ると同様に低く、より起伏があったことが分かる。その起伏を利用して溝が築かれたと思われる（溝5）。また、縄文時代晩期の遺物が集中する範囲は東側になる緩斜面にあたり、斜面下方には7・3区付近から浅い小谷が南に開いていたことが現在の地形から読み取れる。さらに、旧地形での最頂部は1区付近となり縄文時代早期の遺物はここで出土した。

b. 層序

土層は耕地整備などの削平をうけて歴史時代の包含層が失われている。Ⅰ層は削平後の表土になる。

以下、各層の特徴・見解などを箇条書きする。

第Ⅰ-1層：戦後から現代にかけての農道整備のアタゴ・バラス層である。

第Ⅰ-2層：黒色土。近代から現代まで耕作土、含まれる白色砂粒は大正期の桜島火山灰と考えられる。

第Ⅱ-1層：黒色土。削平を免れた地山層、無遺物層である。

第Ⅱ-2層：黒褐色土。第Ⅲ層の漸移層、本来はⅢa層と呼称すべき層である。

第Ⅲ層：黄褐色土。調査の際には「アカホヤ二次堆積層」と呼称した、縄文時代晩期の遺物包含層である。

第Ⅳ層：黄褐色土。アカホヤ降下火山灰層に推定される。粒度の違いから2つに分けることができ、上層の方が粒度は細かい。

第Ⅴ層：黄褐色土。アカホヤ降下火山灰層に推定される。Ⅳ層より粒度が粗い。

第Ⅵ層：黒色土。縄文時代早期の包含層、層の下位に遺物は集まるが少ない。

第Ⅶ層：黒色土。縄文時代早期の包含層、層の上位に遺物は集中する。

第Ⅷ層：黄色土。薩摩降下火山灰層に推定される。ブロック状の黄色砂質土ブロックが多量に見られる。

基本層位

第Ⅰ-1層 2.5Y5/2暗灰黄色砂礫

第Ⅰ-2層 5GY3/1暗オリーブ灰色土、非常に多量の白色砂粒（5mm以下）を含む

第Ⅱ-1層 10G2/1緑黒色土

第Ⅱ-2層 2.5Y4/2暗灰色土

第Ⅲ層 2.5Y4/6オリーブ褐色土、極少量の橙色砂粒（33mm以下）を含む

第Ⅳ-1層 2.5YR5/6黄褐色土、非常に多量の橙色砂粒（5mm以下）を含む

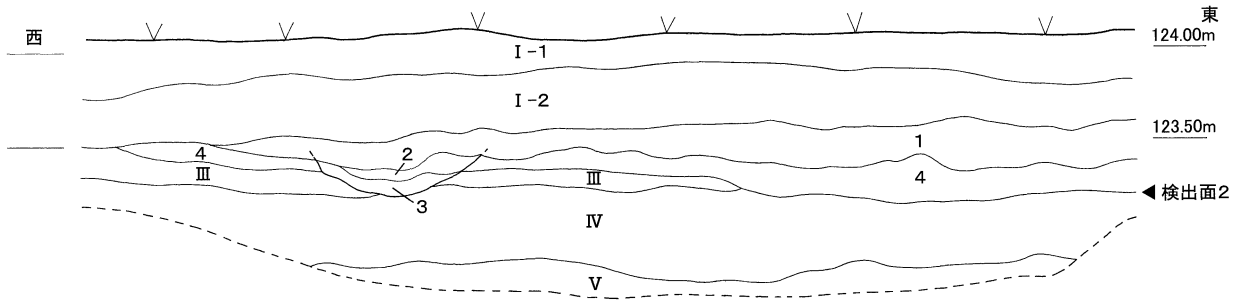
第Ⅳ-2層 2.5YR5/6黄褐色砂質土、極少量の橙色砂粒（3mm以下）を含む、Ⅳ-1層より粒が粗い

第Ⅴ層 2.5YR5/6黄褐色砂質土、非常に多量の橙色砂粒（10mm大）を含む、Ⅳ層より粒が粗い

第Ⅵ層 2.5Y4/3オリーブ褐色土、多量の白色・橙色砂粒（1mm大）を含む

第Ⅶ層 2.5Y2/1黒色土、多量の白色・橙色砂粒（1mm大）を含む

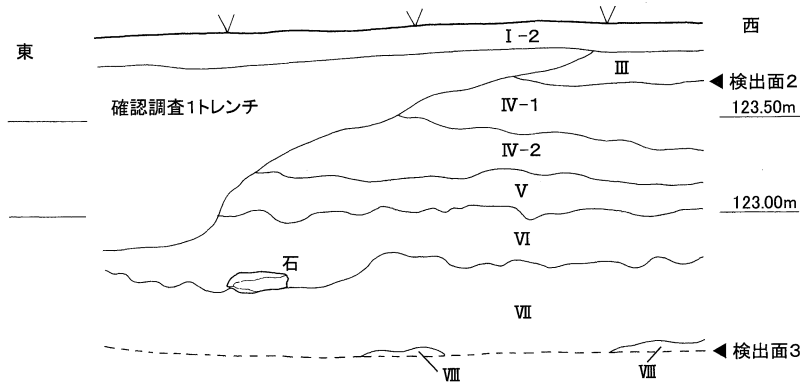
第Ⅷ層 2.5Y3/1黒褐色土、非常に多量の2.5Y6/4にぶい黄色土ブロック（5～30cm大）を含む



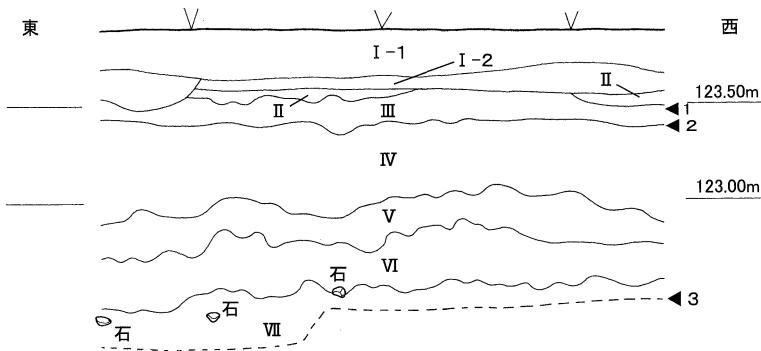
3区 西壁

[3区 西壁]

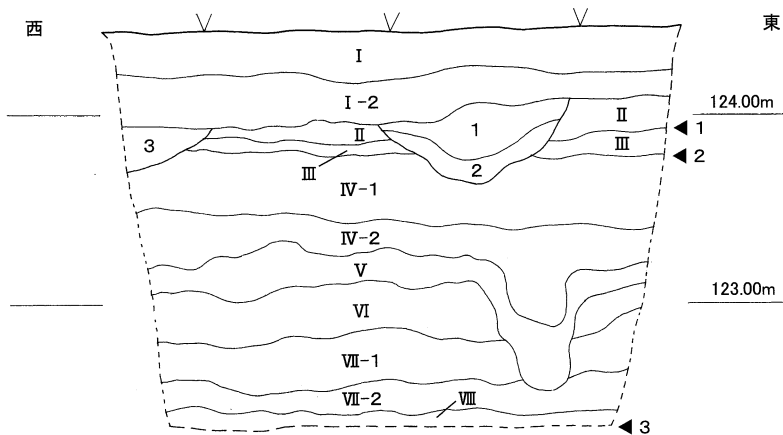
1. 10YR 3/1 黒褐色土, 極少量の白色砂粒を含む
2. N 2/0 黒色土
3. N 2/0 黒色土, IV層土ブロック含む
4. N 3/0 暗灰色土



1区 南壁



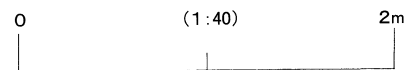
2区 南壁



[3区 北壁]

1. 10Y 2/1 黒色土
2. 25GY 3/1 暗オリーブ灰色土
3. 7.5Y 2/1 黒色土

3区 北壁



第37図 牧原遺跡 各土層

c. その他

アカホヤ降下火山灰層の直下において、アカホヤ層土が落ち込む地点を数箇所を確認した。落ち込みは下層を切り込んで掘り込まれており、その中にアカホヤ層が落ち込んでいる。遺物は出土しなかったが掘り方は明確であり、人もしくは動物による掘削の痕跡とも考えられる。詳しくは図・写真図版を参照されたい。

3. 調査の成果

以下、検出面ごとに記述する。対応する包含層・遺物も併記してある。

a. 検出面 1 (Ⅲ層上面)

検出面 1 では埋土に黒色土をもった遺構を数多く検出した。とくに溝が多くみられ、想定される旧地形で最も低くなる 3・7 区に向かって集約している。溝は立地が台地上であることから排水路などと考えられる。また、溝の数箇所では段状の遺構や土坑を確認しており、段状遺構が丁寧に整えた平坦面をもつことから、何らかの作業場の可能性が考えられる。3 区では溝内から延びる平坦な硬化面を検出しており、同じ幅で延びることと合わせると道の可能性が考えられる。なお、数基の隅丸長方形の土坑を検出したが、覆土などから近代・現代の「芋穴」と思われる。

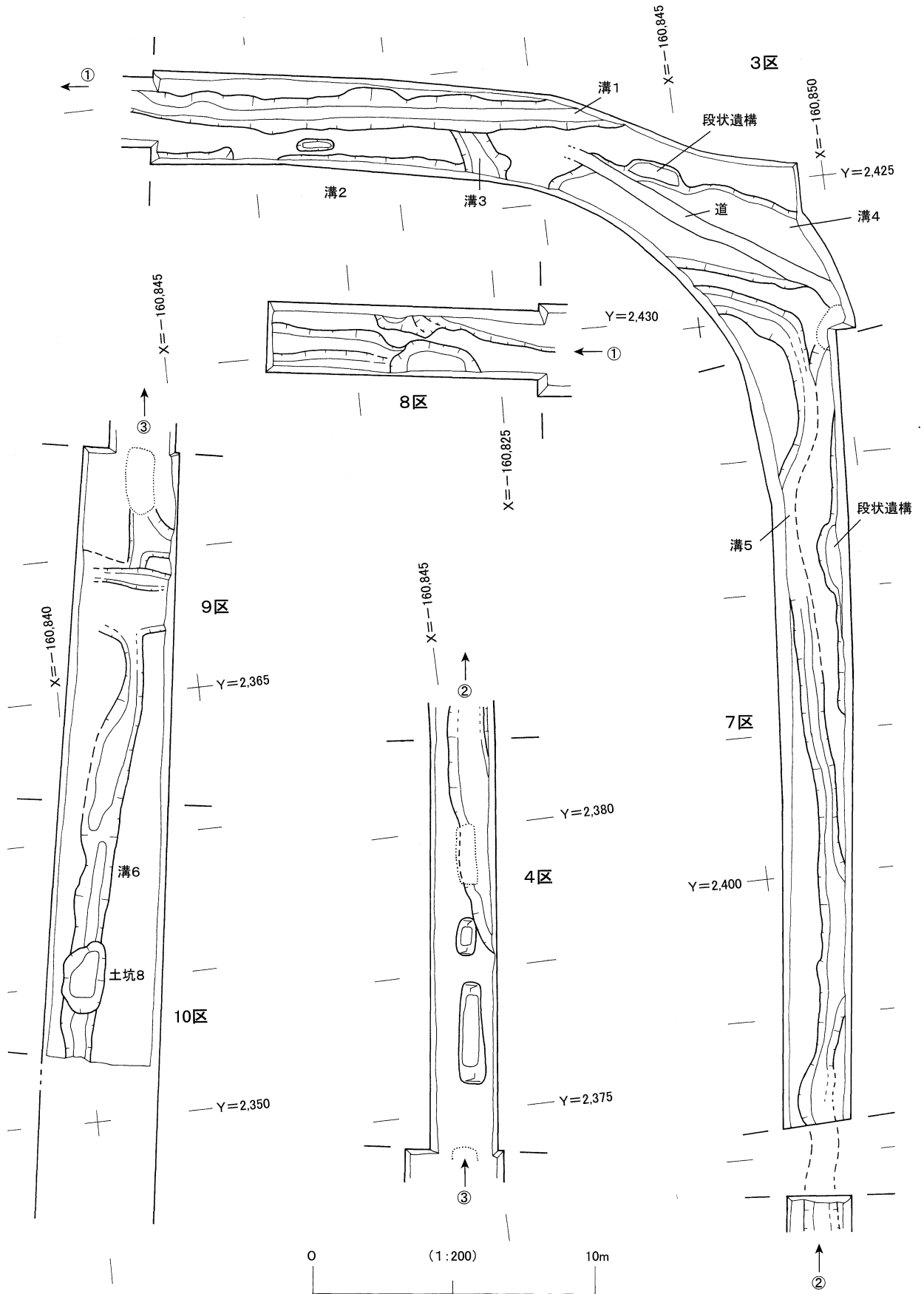
遺物は溝内より少量の陶磁器が出土した。時期は遡っても近世と考えられる。

(ア) 遺構

- 溝 1 幅122cm×深さ 9～20cmを測り、南に下る。溝の中では最も掘り方が整う。
- 溝 2 調査区の壁際より検出のため、規模は不明である。
- 溝 3 幅115cm×深さ 3 cmを測る。残存状態が悪く、底面が残るのみである。西に向かって下る。
- 溝 4 幅318cm×深さ35cmを測り、最も大きな溝である。底面は南に向かって低くなる。底面には、他の溝の比べて細かい凹凸が見られる。覆土などから溝ではなく、土坑の可能性も考えられる。性格は不明であるが、規模などから排水などの機能以外に、溜池などの機能も想定できる。
- 溝 5 調査区に沿った形で検出され、3区から4・7区まで延びる。幅100cm×深さ15cmを測る。7区では残存状況が悪く底面の痕跡のみを確認した。なお、図では溝4付近で北に向きをかえるが、南に曲がっていた可能性も考えられる。
- 溝 6 9区・10区で確認した。幅123cm×深さ10cmを測る。10区から西では削平で消滅する。
- 道 1 溝4から北東に向かって延びる。溝の底面から5cm程上面で硬化面を確認した。硬化面は10YR3/1暗赤灰色土が硬く締められており、幅は約40cmを測る。溝の壁面付近では溝の肩を削平して平坦面を築いている。時期は溝の底面から浮き、溝の壁面を切っていることなどから溝の埋没過程で構築された可能性が考えられる。よって溝4よりは下る時期と考えられるが詳細は不明である。
- 土坑 8 平面形は楕円形、規模が257cm×143cm、深さ23cmを測る。
- 段状遺構 1 長さ232cm×幅72cm×深さ11cmを測る。
- 段状遺構 2 長さ237cm×幅61cm×深さ10cmを測る。溝4の底面からは6cmの高さとなる。

(イ) 遺物

出土遺物はおもに陶器であり、溝4からは土器301・302が出土した。他にも陶器片が見られたが胎



第38図 牧原遺跡 遺構 1 (Ⅲ層上面)

土が301と類似する。同じ産地と思われる。

301は、釉薬が高台と内面の一部以外に施される。色調は2.5YR2/3極暗褐色である。高台は貼り付け後に削り出す。胎土は5YR5/4にぶい赤褐色で精緻である。時期は近世であろうか。

302は須恵質の陶器で宝珠つまみをもち、口縁端部には長いかえりが見られる。色調は灰色、焼成は堅緻である。

b. 検出面 2 (IV層上面)

遺構は2区から7区まで広く分布してとくに6・9・10・11区に集中する。8区においても柱穴を確認した。種類は柱穴・土坑で、埋土・覆土はすべてⅢ層類似の黄褐色土である。おもな遺構の詳細は後述する。

遺物の出土状況は遺構より偏りが激しく、4区と6・11区でも少量は出土するが9～10区では多量に出土した。出土地点は図・表のとおりである。

(ア) 遺構

柱穴1 平面は円形、規模は径49cm×深さ58cm、柱痕は径14cmを測る。柱穴1は土坑を切り込む。土坑の底面には径15cm×深さ33cmの別の柱穴を検出した。土坑は径77cmの円形を呈して深さ30cmを測る。

柱穴2 平面はやや歪んだ円形、規模は径58cm×深さ7～38cmを測る。断面は二段掘りで、二段目に柱痕を確認した。径は9cmを測る。当初は土坑6と呼称した。

柱穴3 平面は楕円形、規模は62cm×32cm、深さは46cmを測る。柱痕と思われる痕跡があり、底面で径12cmを測る。

柱穴4 調査区壁に断面がかかる。土層の観察からⅢ層中から掘り込まれているのが確認した。平面形は円形、規模は径82cm×深さ90cmを測る。柱痕があり径14cmを測る。柱痕の下に埋土が存在する。

柱穴5 平面は楕円形、規模は59cm×34cm、深さ25cmを測る。断面は二段掘りである。

柱穴6 平面は楕円形を呈して、規模が25cm×18cm、深さ61cmを測る。

柱穴7 平面は円形を呈して、規模が径42cm、深さ38cmを測る。

土坑2 平面はやや歪んだ楕円形、規模は111cm×68cm、深さ11～19cmを測る。覆土には多量の1～5cm大の炭化物を含む。

土坑3 平面がやや歪んだ円形、規模が径56cm、深さ12cmを測る。

土坑4 平面がやや歪んだ円形、規模が径82cm、深さ20cmを測る。断面は二段掘りを呈する。

土坑5 平面は不定形、規模が74cm×(59)cm、深さ19cmを測る。底面には細かい凹凸が存在する。

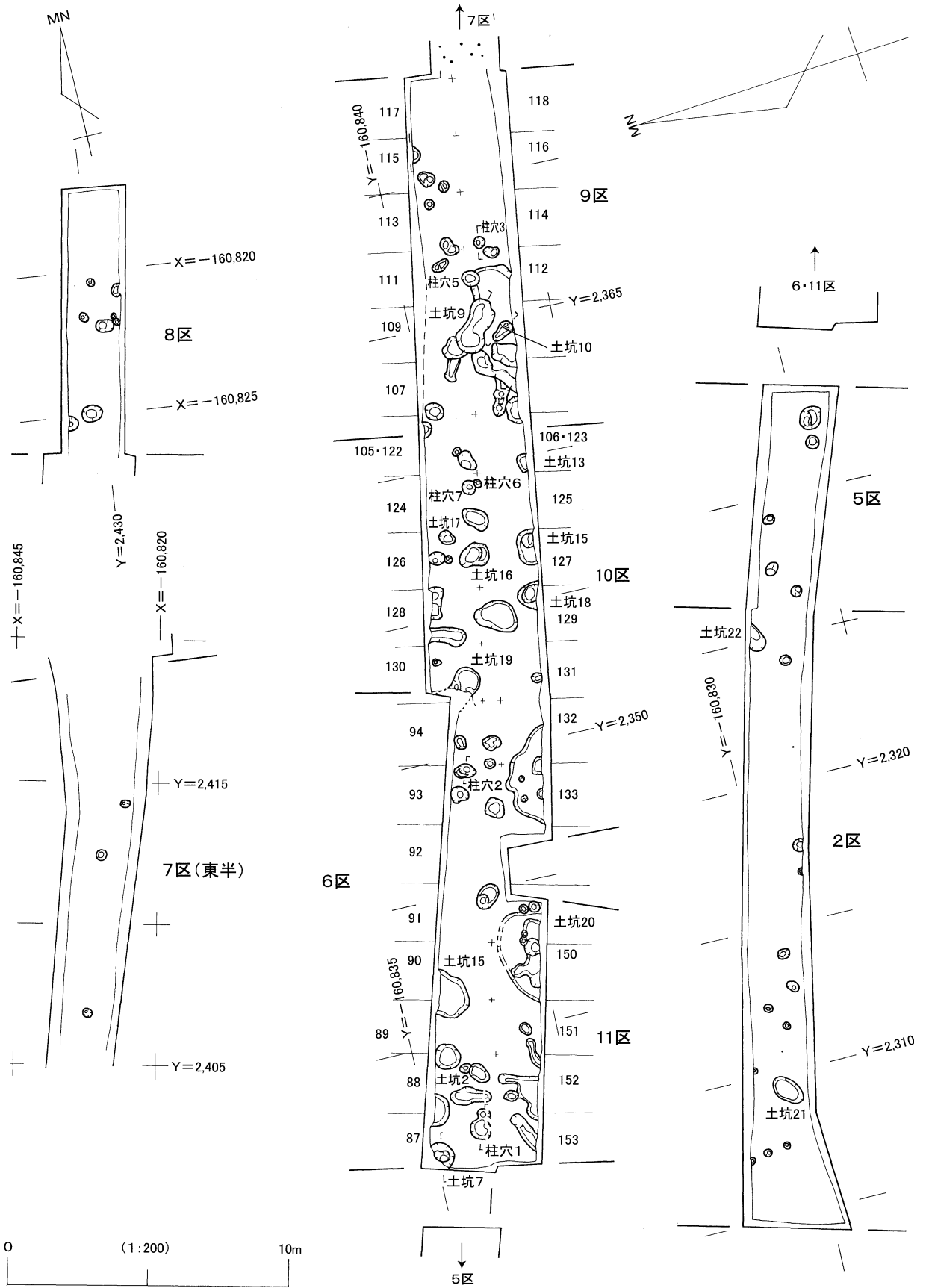
土坑7 平面は円形、断面が二段掘りで1段目の規模が径(96～70)cm×深さ32cm、2段目が径47cm×深さ72cmを測る。2段目の断面形はややフラスコ形とも言える。

土坑9 平面が歪んだ楕円形、長さ192cm×幅94cm、深さ28cmを測る。底面は凹凸が顕著である。

土坑10 平面は瓢箪を思わす形を呈し、規模が長さ82cm×幅38cm、深さ15～24cmを測る。

土坑11 平面は不定形、規模は454cm×(148)cm、深さ15cmを測る。土坑9・10が切り込む。底面には80cmを超える凹みがある。

土坑13 平面は円形、規模が61cm×(23)cm、深さ25cmを測る。



第39图 牧原遺跡 遺構 2 (IV層上面)

- 土坑14 平面は歪んだ円形、規模が62cm×52cm、深さ65cmを測る。底面は遺構の上場の外に斜めにもぐり込む。
- 土坑15 平面は円形、規模が128cm×(48)cm、断面は二段掘りで深さ19cm・69cmを測る。
- 土坑16 平面は歪んだ円形、規模が108cm×74cm、断面が二段掘りで深さ10cmと53cmを測る。
- 土坑17 平面は円形、規模は径34cm、深さ28cmを測る。
- 土坑18 平面は円形、規模が径96cm、深さが40cmを測る。
- 土坑19 平面が歪んだ円形、規模が径92cm、深さ65cmを測る。底面には径25cmの円形の掘り込みが存在した。
- 土坑20 平面は不明、規模が(350)cm×(110)cm以上を測る。深さは75cmを測る。遺構の肩から約10cm下の底面には複数の遺構を検出した。

(イ) 遺物 (Ⅲ層出土)

遺物の分布状況としては9区と10区東半に集中しており、他の調査区では散見できる程度であった。2mグリッドにて取上げた土器の出土位置については以下に記述する。

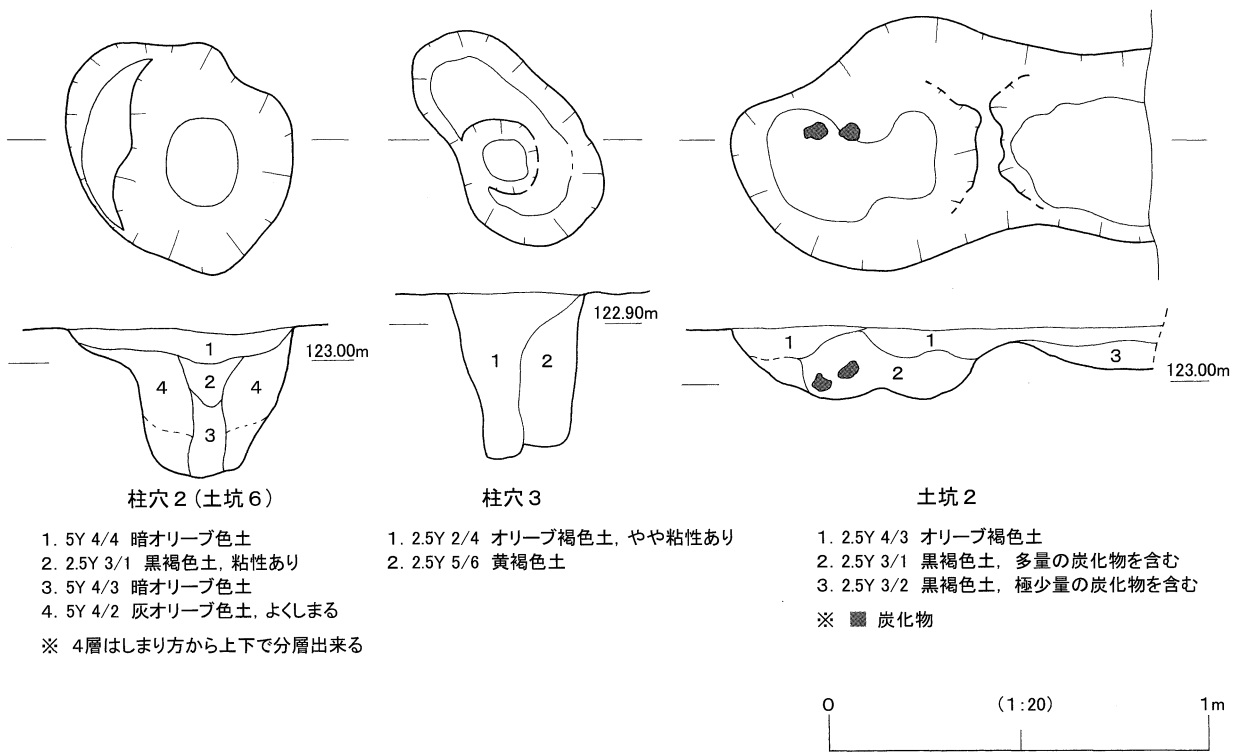
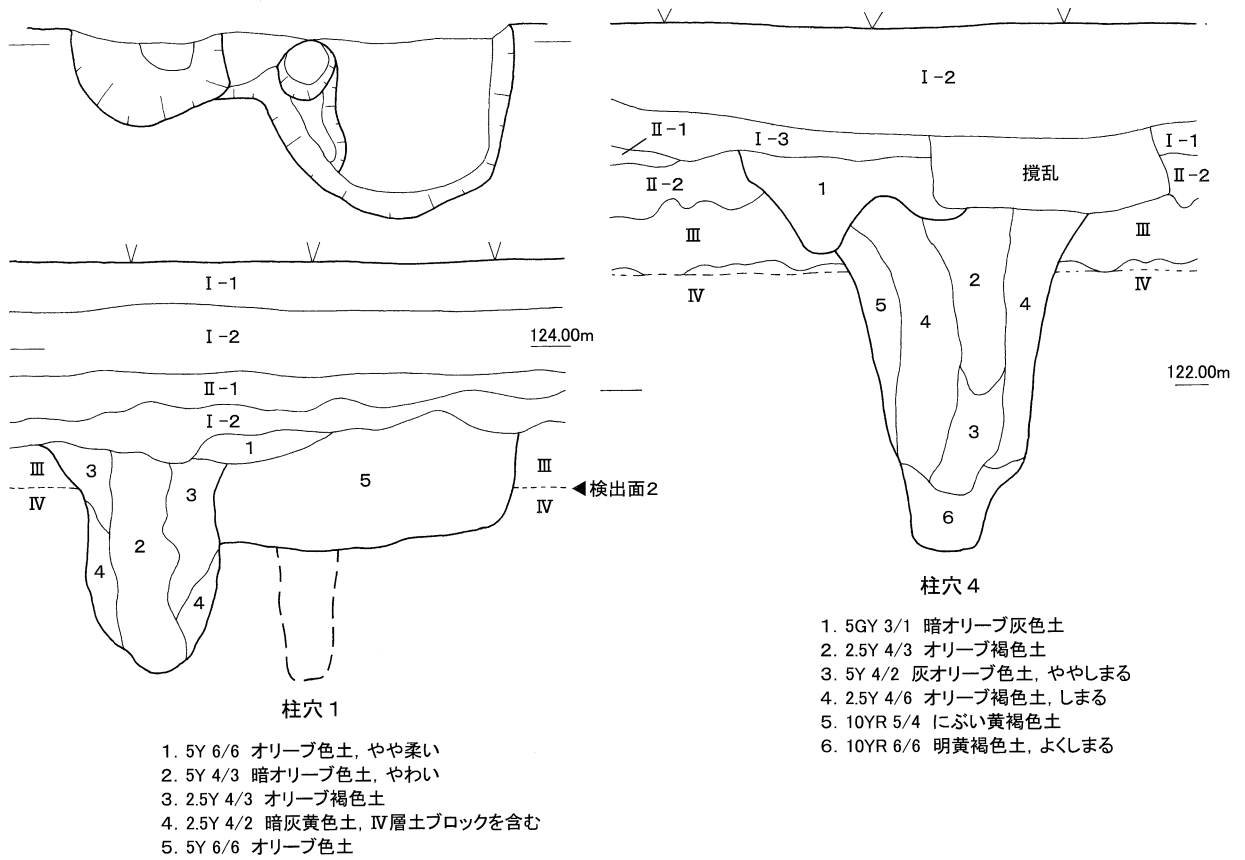
6区	G91 : 249	10区	G122 : 254
9区	G105 : 223・257		G123 : 227・233・236・247・252・254・258
	G106 : 258・281・285		G124 : 228・229・240・253・283・287
	G107 : 257		G125 : 230・259・262・293
	G108 : 225・254・279・284		G126 : 224・226・256・264・286
	G109 : 221・267		G127 : 232・235・237・263・282・285・296・
	G110 : 266・279		297
	G111 : 275・276		G129 : 271
	G112 : 222・268		G131 : 289・300
	G113 : 242・274		G132 : 298
	G114 : 295		G133 : 245・248
	G115 : 251・260・291・292	11区	G150 : 219
	G116 : 241・246		G151 : 234
	G117 : 273	2トレンチ	: 220・243・288・290
	G118 : 238	3トレンチ	: 244

※ Gはグリッドの略である。

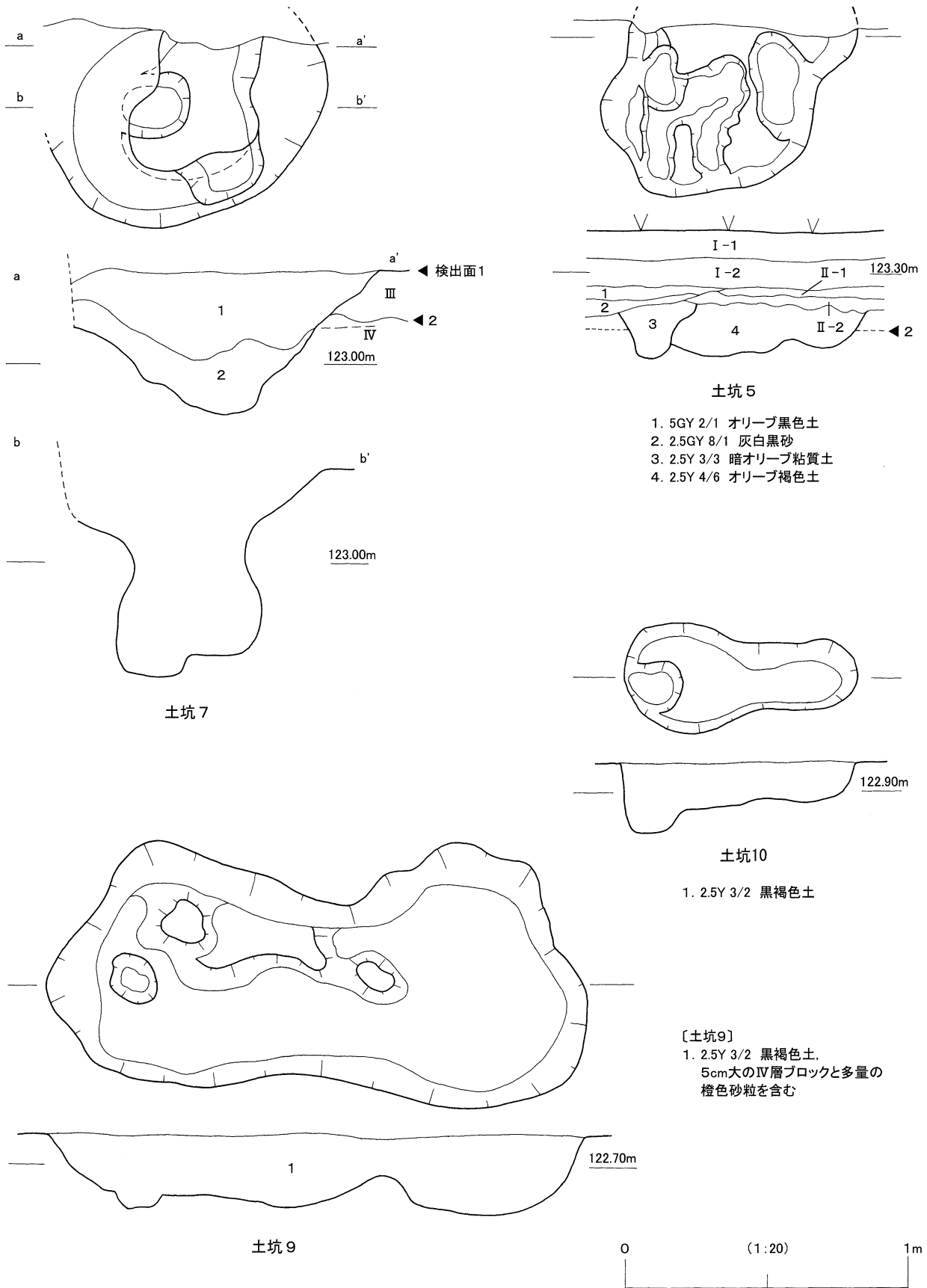
土器 219～300

Ⅲ層より出土した土器はおもに入佐式から黒川式に比定でき、時期は縄文時代晩期になる。この両者に包含層中での上下差は見られず、混在した状態で出土した。また、両者とは異なる形式の土器が数点見られる。ここでは81点を図化して掲載した。

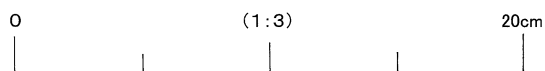
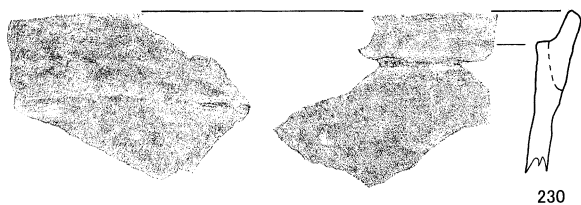
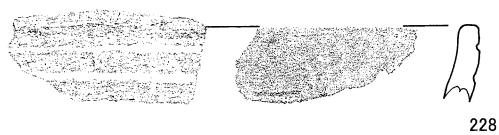
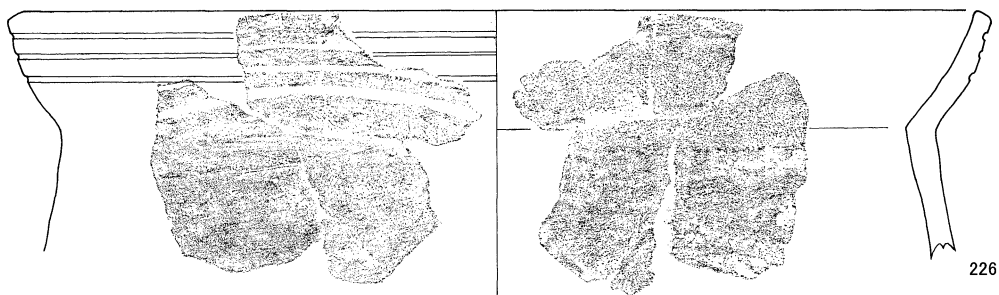
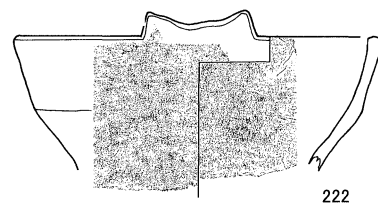
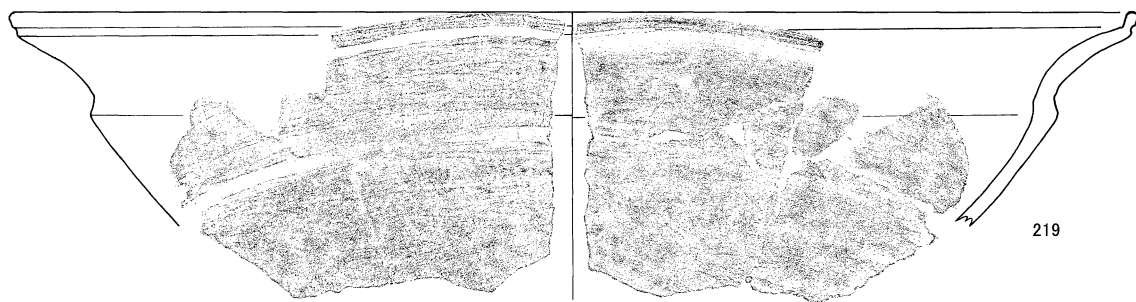
全体的な特徴としては、土器は色調が基本的に褐色を呈して、個体別に部分的な黒色化が見られる。胎土には長石・石英・雲母・黒色砂粒・赤褐色砂粒などの鉱物が含まれ、土器の中には粒度・割合が異なるものもある。以下では精製と粗製を器面調整の緻密さ、器壁の厚さの2点から分けた。



第40図 牧原遺跡 遺構 3 (IV層上面)



第41図 牧原遺跡 遺構4 (IV層上面)



第42図 牧原遺跡 土器 1

精製土器 219～225

ここでは器面調整として精緻なミガキが観察され、薄手で焼成が堅緻なものを精製土器とした。以下、個体別におもな特徴を述べる。

精製浅鉢219は頸部が胴部から屈曲して内側に立ち上がる。大きく弧状に外反する口縁部には真っ直ぐ立ち上がる口唇部が見られる。内外面の器面は精緻なミガキを施し、口唇部の外面には1条の沈線をめぐらす。外面には煤の付着が見られる。色調は黒色～黒褐色である。胎土には1mm大の石英が多く含まれる。224も同様の器形と考えられる。

223は内湾する口縁に4条の沈線が並行し、頸部内面にも沈線が施される。色調は2.5Y7/4浅黄色で、頸部から下がやや黒色化する。胎土には0.5mm以下の雲母・黒色砂粒・赤褐色砂粒が多く見られる。225が類似する。

221は外に開く口縁にわずかに立ち上がった口唇部をもつ。丸く肥厚した口唇部には沈線は施されず、外面の段も不明瞭である。内面と口縁端部の外面が黒色化する。胎土には0.5mm以下の雲母が多く見られる。

220は内湾する口縁に端部がやや直立に立ち上がる。内面から口縁端部の外面にかけて黒色化する。胎土には長石が多く見られる。

222には口唇部に鱗状の突起が見られ、口縁端部が波状にめぐると考えられる。器面には粗いミガキで調整され、ミガキの下にはケズリ痕が見られる。色調は黒褐色であるが口唇部などに黒色化が見られる。胎土には1mm大の砂粒が多く、黒色砂粒・長石が多く見られる。

粗製土器

粗製土器は、器面調整がミガキを施していても粗雑なものや条痕・ナデで仕上げ、器壁が厚手のものである。一部には精緻なミガキを施すものも存在する。また、胎土に含まれる鉱物は精製土器と変わらないが粒度が異なり、精製に比べて粗く2～3mmのものが多い。付着する炭化物は多くて厚い。

以下、口縁部・胴部・底部の順におもな特徴を述べる。

口縁部は226～248があり、特徴から3・4点ずつの単位に細分できる。

深鉢226は厚手の口縁部に3条の沈線をめぐらして口唇部を平坦な面に仕上げる。内面には頸部に明瞭な稜線が見られる。外面はナデによって調整され、内面はケズリの後にミガキもしくはナデを施したと思われるが磨滅して不明である。内外面ともに煤ける。胎土には1mm大の石英が多量に見られる。227～229も同様である。

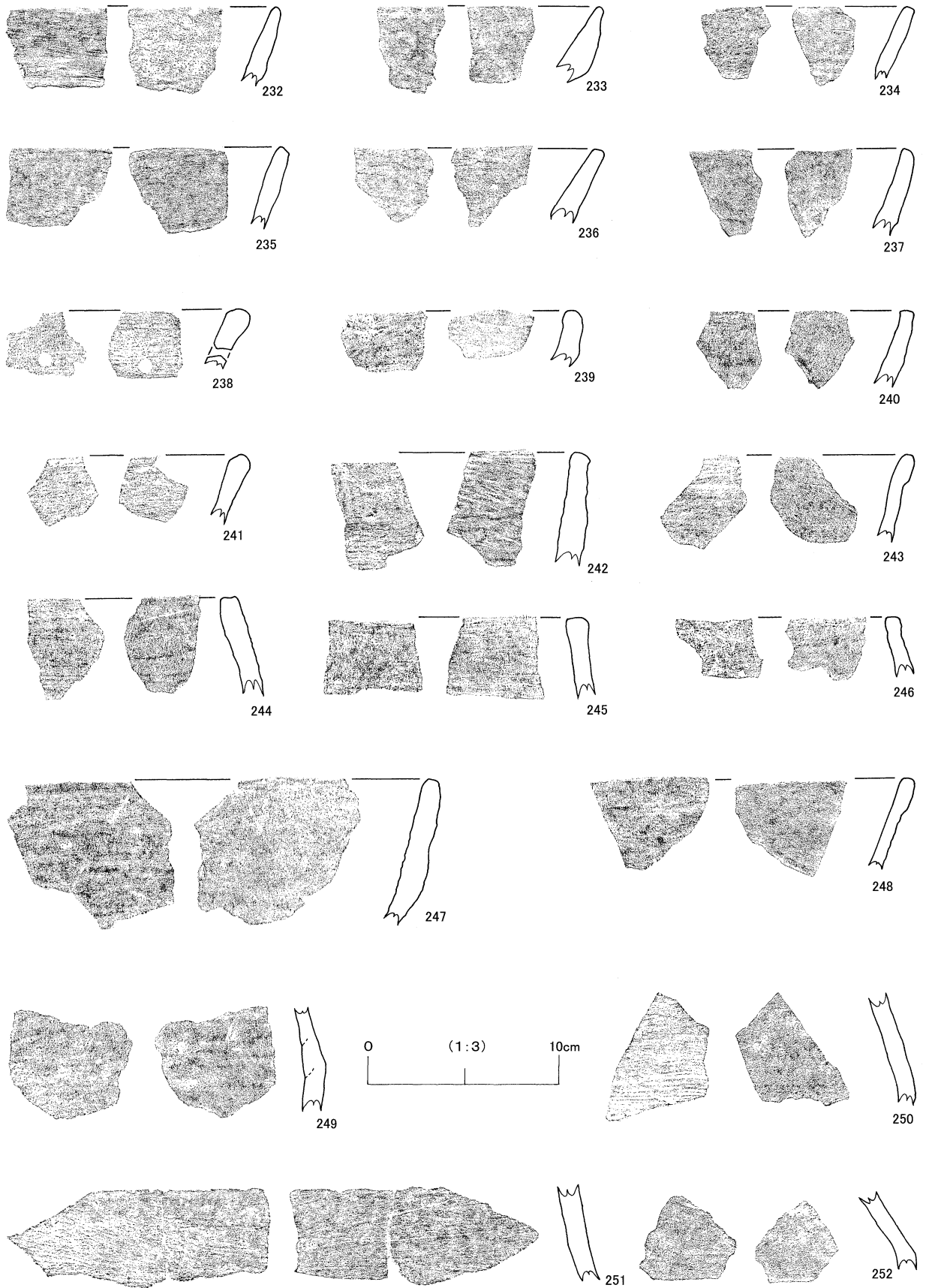
232・233・237は口縁全体が肥厚して頸部近くで段をもち、口唇部を丸く仕上げる。237口唇部が比較的平坦に仕上げてあり、面を取ることを意識した可能性もある。233は頸部近くが大きく肥厚して断面が三角形を呈する。器面はミガキを施している。

243・248は口縁端部が肥厚して段をもち、段から下には条痕が残る。口唇部は平坦に仕上げて面を意識している。

234～236・240は外に真っ直ぐ開いた口縁に、明らかに平坦な面を意識した口唇部をもつ。240はやや内湾した口縁である。235は口唇部に平坦な面をもつがやや不明瞭である。いずれも内外面をナデで整えて粗いミガキを施している。

244～246は内側に傾く口縁である。いずれも内面にミガキを施し、外面には条痕を施している。厚い炭化物が外面に付着する。口縁端部はわずかに上へと立ち上がる。

238・241は肥厚して丸みを帯びた口縁端部をもつ。238には穿孔が見られる。器面は条痕の上に粗



第43图 牧原遺跡 土器 2

いナデを施される。

239は丸い口縁端部をナデで整える。242は外に真っ直ぐ開いた口縁に、やや不明瞭な面の口唇部をもっている。

231・247は器壁が厚く、内面には細かい剥離が一面に見られる。247は外面を粗いナデで仕上げる。231は外面の頸部近くに突帯状の段をもち、器面に粗い磨きを施している。

230は器面をナデで整えた後に比較的丁寧なミガキを施している。内外面に段をもつがとくに内面のものは受身を思わせる段である。

胴部では、器形のはっきりするものとしては254がある。それ以外は5～10cm大の破片である。器面には剥離や煤・炭化物の付着が多く見られる。調整としては外面に丁寧なミガキを施すものと状痕が明瞭に残るものとに分かれる。前者は252・256～259・263、後者は250・251・279・288～292である。

254は鋭く屈曲した胴部はそろばん形を呈する。器面は粗いナデの後に粗いミガキを施す。

丸い胴部もあり249・278がそれにあたる。粗製の浅鉢であろうか。

281・283～285は厚さ1.5cmを測る厚い器壁をもつ。同一個体と思われる破片が図化した以外に多数出土している。本来は完形に近いと思われる。器面は粗いミガキで仕上げられており、煤・炭化物が内外面に広く付着する。断面にも炭化物の付着が見られ、破碎後も被熱を受けたものと考えられる。

286・287は器面をナデ・ミガキで丁寧に仕上げる。色調は7.5YR6/8橙色である。

底部は293・294が円盤充填法で成形されるが、他は円盤状の粘土に粘土紐を輪積みして成形したものと思われる。265・261は同一個体で、薄い器壁に条痕を施し粗いナデで仕上げている。

組織痕土器266～277は外面に組織痕をもつ浅鉢である。いずれも内外面に炭化物の付着や赤化が見られて火を受けたと考えられる。内面は丁寧なミガキを施して黒色化する点が共通する。基本的な色調は2.5Y7/3浅黄色、胎土も類似しており多量の2mm以下の長石・石英、極少量に0.5mm以下の黒色砂粒・赤褐色砂粒が含まれる。

口縁部266・267は、蓆目の胴部から緩やかに内湾した口縁が直立する。266は粗雑な造りで、口縁部は接合痕が残る粗いナデで整え、口唇部を丸く仕上げる。内面は頸部から下を横方向の丁寧なミガキで調整する。器面には厚い炭化物の付着が見られ、断面にも存在することから破碎後も加熱を受けたと考えられる。炭化物はとくに頸部の内外面の同じ高さに見られる。267は266に比べれば丁寧な造りであるが口縁部内面には貝殻条痕が明瞭に残る。

268は蓆目、269～276には網目の組織圧痕が見られる。網目は1網/cmと粗く、269・273・275には網目が重複している¹。270・271には圧痕をナデ消した痕跡が見られる。

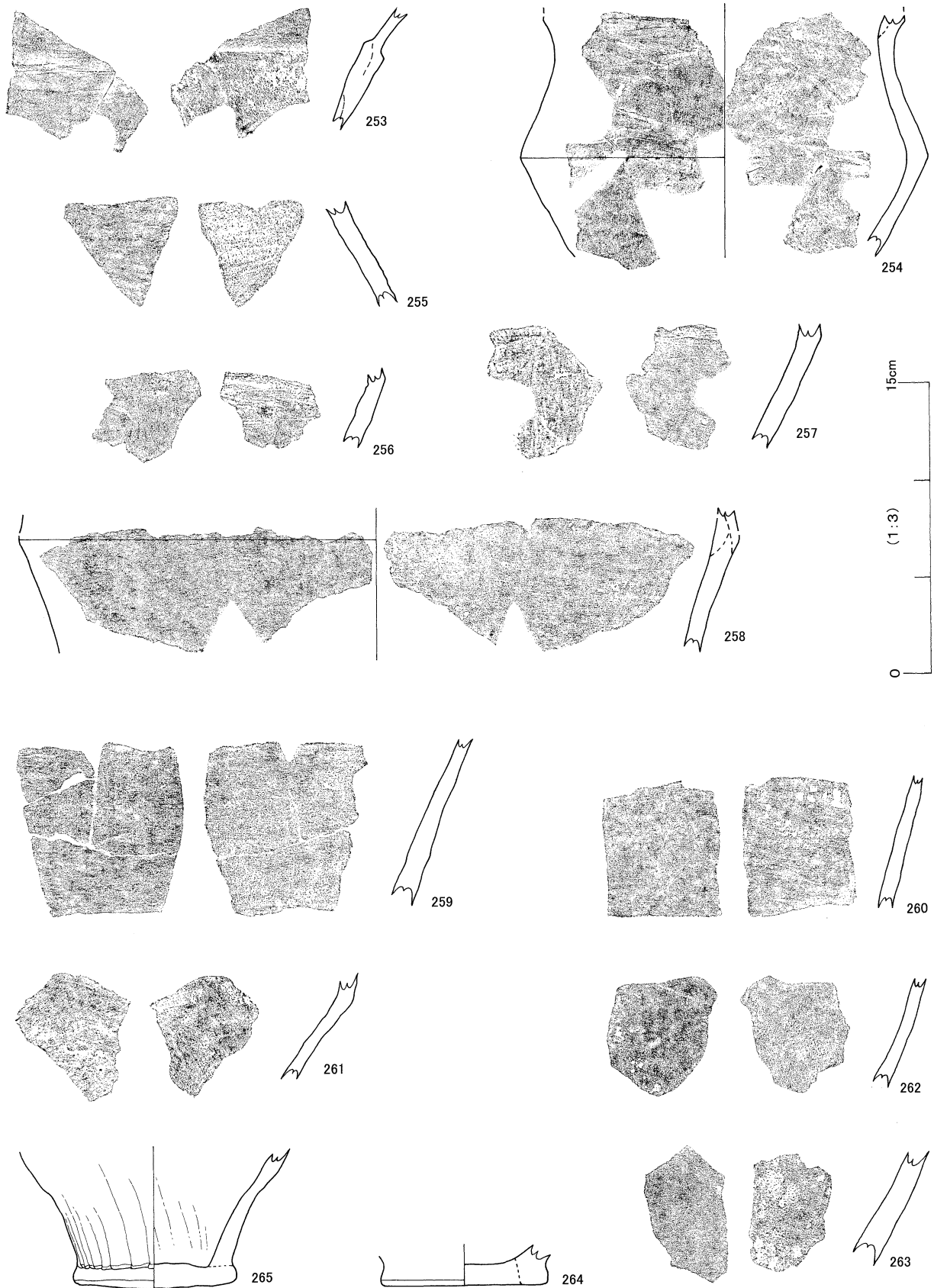
その他 280・298～300

280は口縁端部の突起で棒状・段状の粘土を貼り付けている。

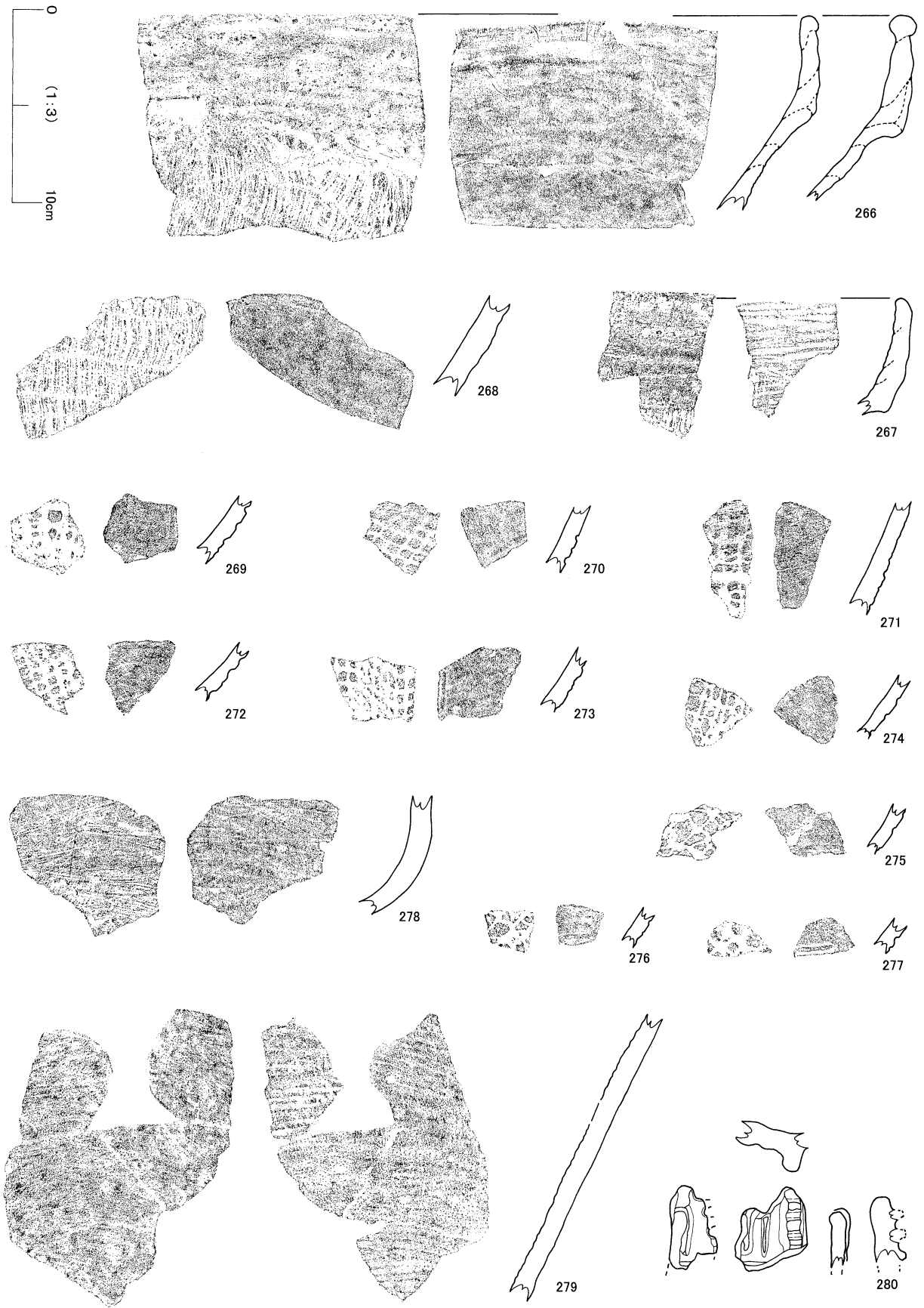
298～300は、他とは大きく異なっており、外面を貝殻上痕で整えた後に指先で引いた凹線文で文様を描く。胎土も他と異なり金色の雲母が多く見られる。

石器 305・310～328

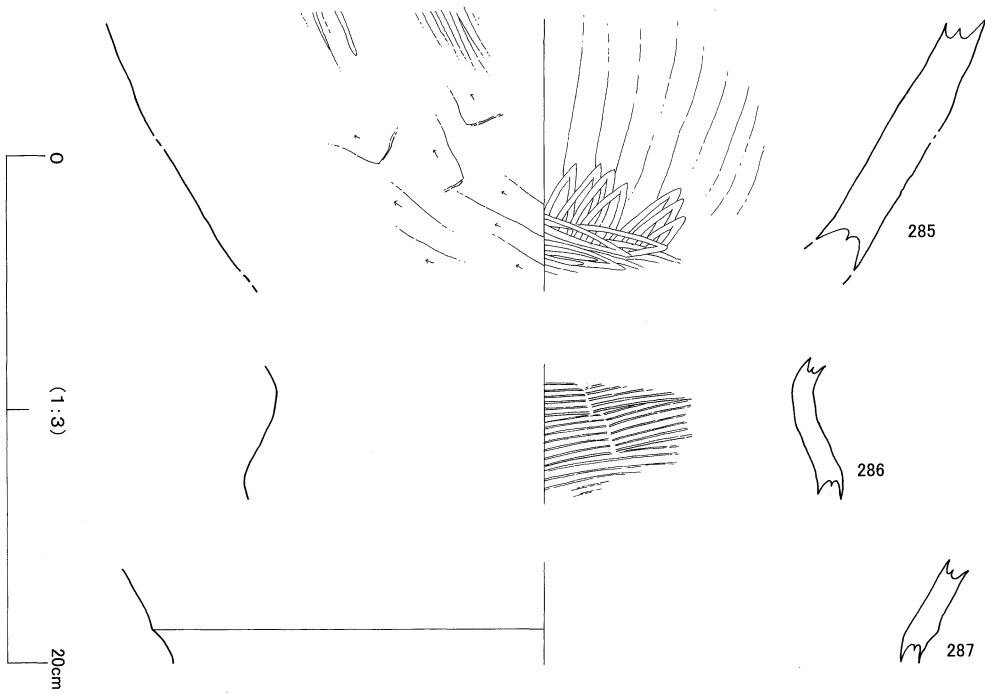
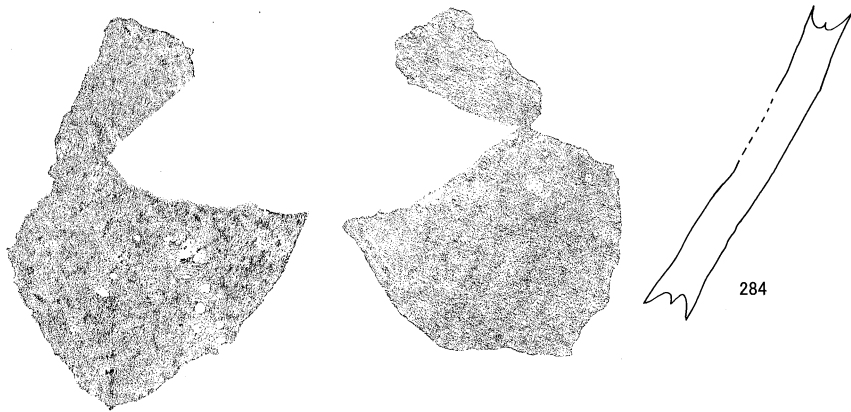
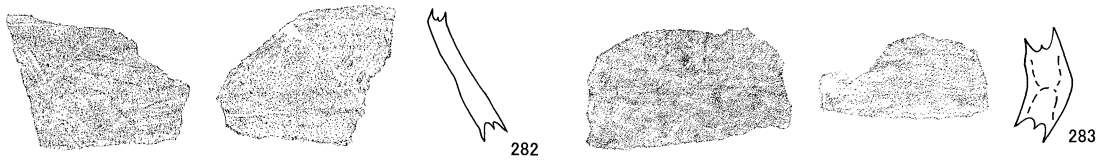
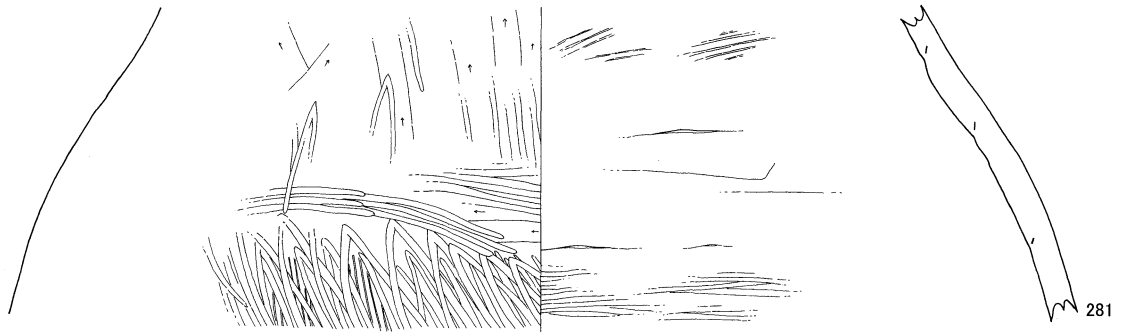
石鏃2点、楔形石器1点、使用剥片2点、搔器1点、石核1点、打製石斧3点、磨製石斧2点、磨



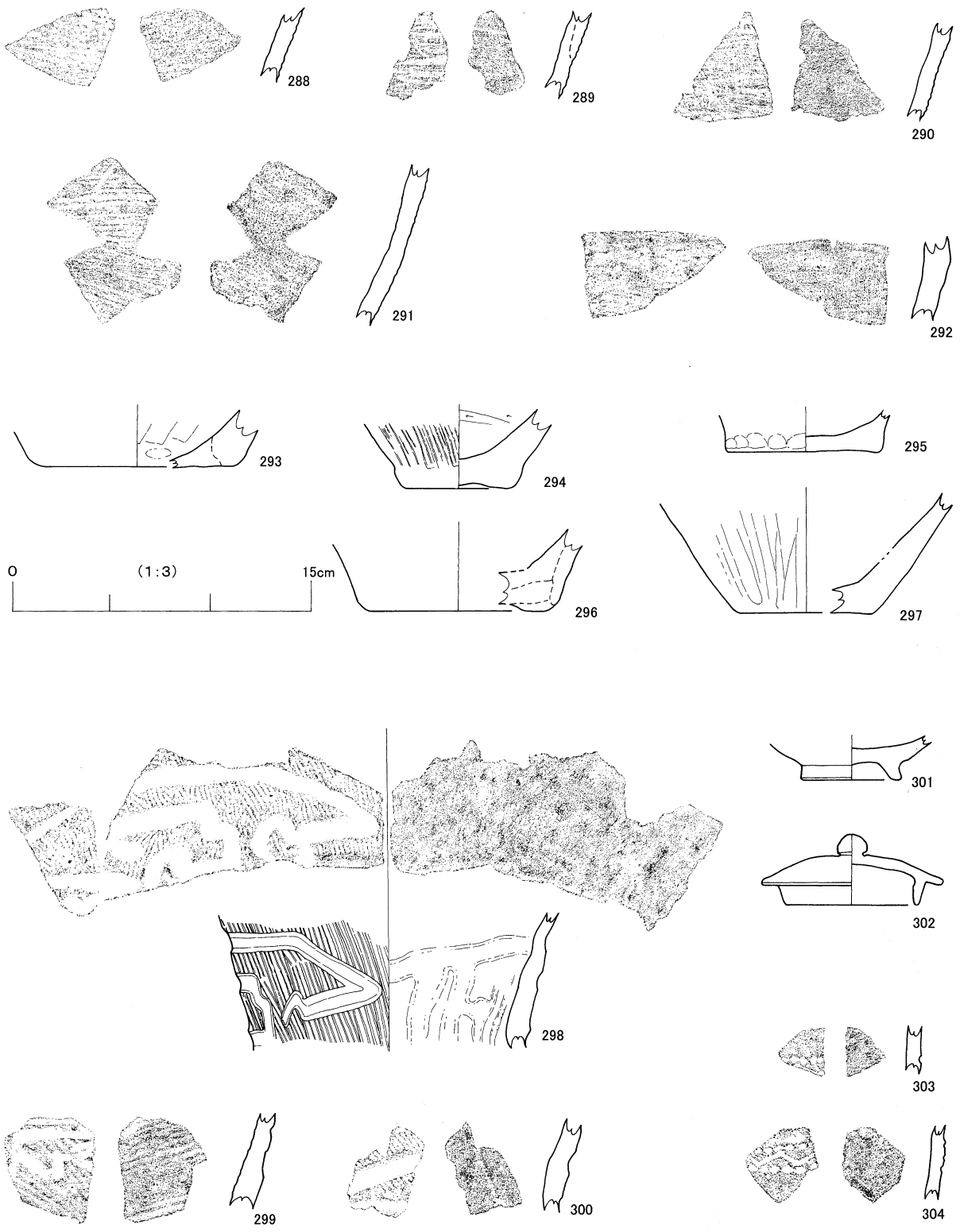
第44図 牧原遺跡 土器3



第45図 牧原遺跡 土器4



第46図 牧原遺跡 土器5



第47图 牧原遺跡 土器6

石8点が出土した。その他には剥片が小数ある。

以下、おもな特徴を記述する。詳細は表のとおりである。

石鏃305・310は共に主剥離面を残しており、とくに310は明瞭である。

楔形石器311は上端部に原礫面が見られ、その横の剥離によって使用を終えたと思われる。

剥片312・313は共に加工痕が見られ刃部を形成する。石材は頁岩、後述する分類の312=①・313=②にあてはまる。また、313は磨製石斧の破損片の二次使用とも考えられる。

石斧は打製316・318・320、磨製317・319が出土した。石材はいずれも頁岩²としたが色調・質感は異なる。これは頁岩の風化の進行度の差として捉えた。その差はおおまかに二者に分けられる。頁岩①：7.5Y7/3 浅黄色、器面が磨滅する。頁岩②：10G5/1 緑灰色～5GY7/1 明オリーブ灰色、器面の良好に残る。頁岩①は安山岩と捉える考え方もある。石斧を分けると①は316・319・318、②317・320になり、器種による石材選択の差といえない。

316は全体的に磨滅が激しい。刃縁には細かい剥離後の磨滅が見られ、形状も尖った形を呈している。1次使用の結果以外に2次使用による痕跡とも考えられる。また、基部の対になった袂込みには明瞭な磨滅が見られ装着痕と考えられる。318も磨滅が激しく、刃部が欠損する。320は打製石斧の基部、側辺には整形のための剥離が明瞭に残る。317の器面には成形時の剥離痕と研磨時の明瞭な研磨痕が見られる。

319は丁寧に磨きだされた刃部をもつが、刃縁には使用による剥離などは見られない。表面には細かく浅い敲打痕が見られ二次使用が考えられる。

314は搔器であるが打製石斧の破損片を二次使用したとも考えられる。石材は頁岩、後述する①にあたる。

石核315は不純物を含んだ透明度のある黒曜石である。最終剥離面は小さい。

磨石321～328は形状から磨石①：平面が丸くて断面が平らなもの、磨石②：平面が方形で断面は平らなもの、磨石③：平面・断面が共に丸いものに分けられる。それぞれは①321・325～328、②322・323、③324にあたる。

321は、他とは異なり器面を非常に丁寧に磨き、敲打痕など見られない。石材も他と異なりチャートと思われる。形状も表裏面がわずかに膨らむ。325・326は花崗岩を磨いたもので、326にはごく僅かに赤色が見られる。顔料の可能性も考えられる。326は形状が若干であるが他と異なり、平坦面とわずかに膨らむ凸面が対になる。赤色は両面に見られる。327・328は砂岩を磨いたもので2面の磨耗面がある。328には側面に敲打痕が見られる。この二つは通常の磨石を小型にしたものに思われる。

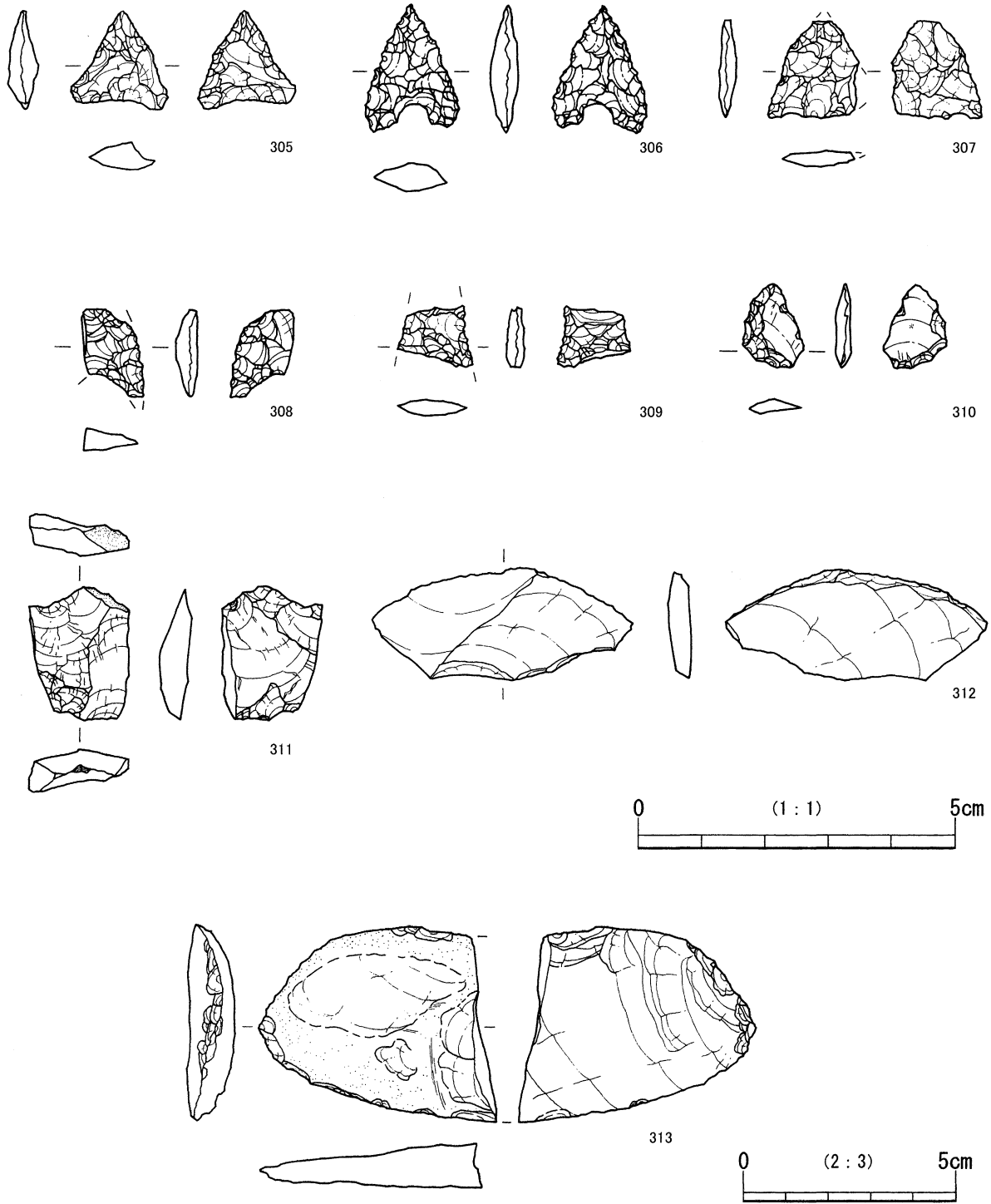
322は器面を丁寧に磨くが側辺には敲打痕も見られる。323は表裏2面の磨耗面をもち、側辺には欠損も見られる。本来は形を整えていたものと思われる。

324は2cm大の小礫で表面が丁寧に磨かれ、通常の磨石とは異なる。

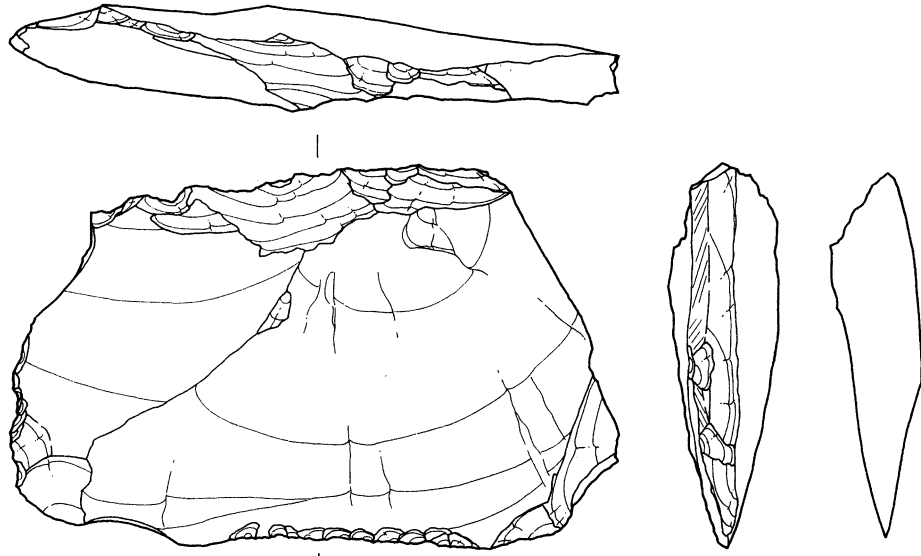
c. 検出面3（Ⅷ層上面）

下層確認のため補足調査として実施した。どの区においても明確な遺構を確認できなかった。遺物の出土があったのは1・2区のみである。1区では浅いくぼ地に、幅35cm×20cm、厚さ10cmを測る石が置かれており、それを中心に石鏃4点と少量の土器の細片・赤色化した破碎礫が広がる。出土状況からは簡易な作業場と思われる。この地点が旧地形で最も高かったことや付近で石鏃が出土することなどから狩猟時の野営地の可能性が考えられる。

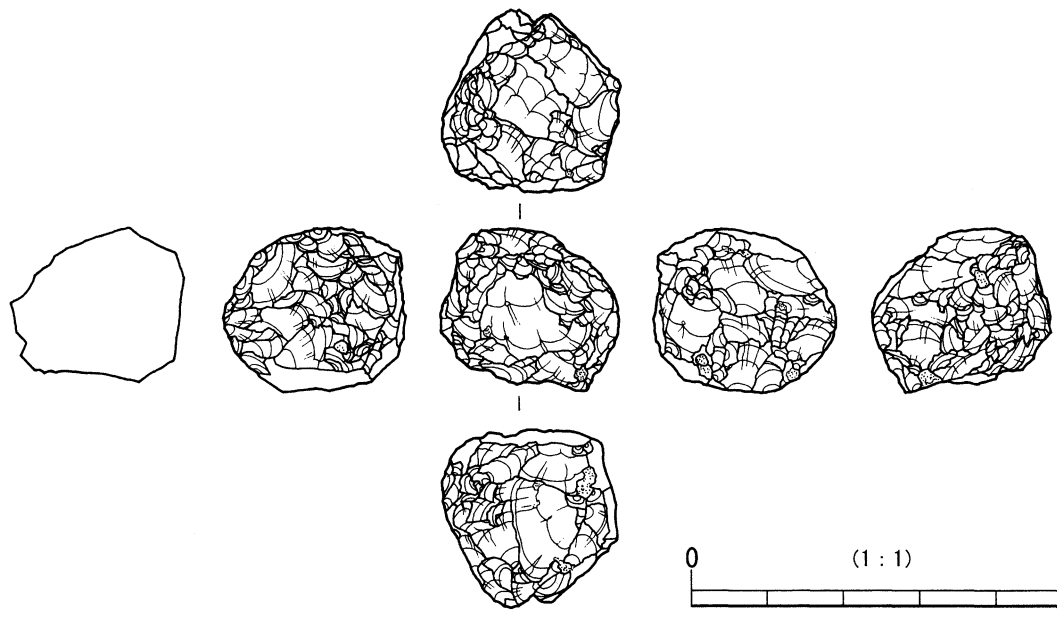
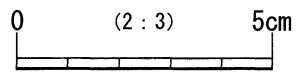
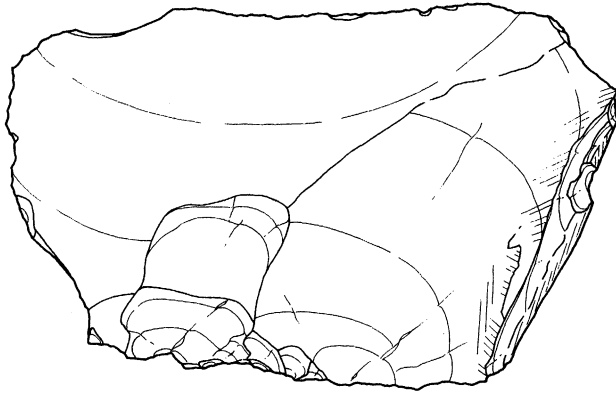
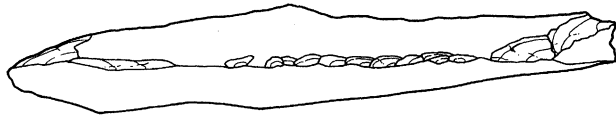
他には2区の中央で1点の石鏃と東端で数点の赤色の破碎礫が出土した。赤色の破碎礫は被熱破碎礫（＝焼石）と思われる。遺物はおもにⅥ層下位からⅦ層上位にかけて見られた。



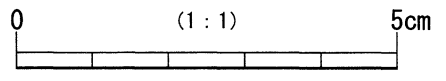
第48図 牧原遺跡 石器 1



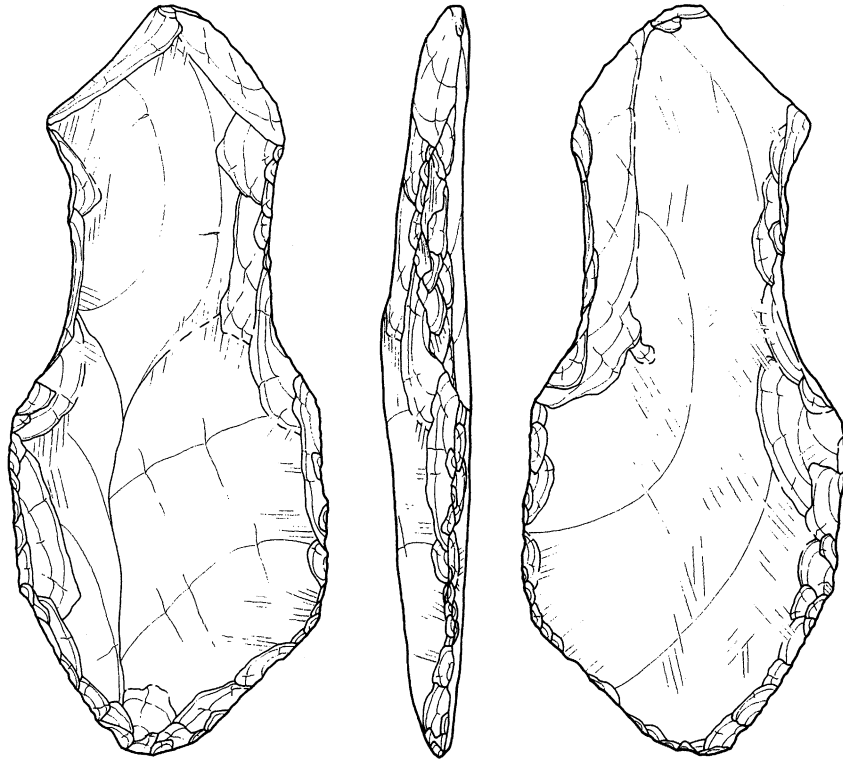
314



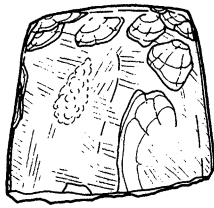
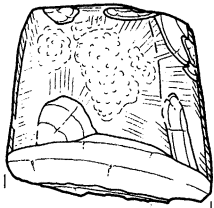
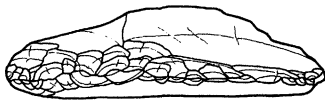
315



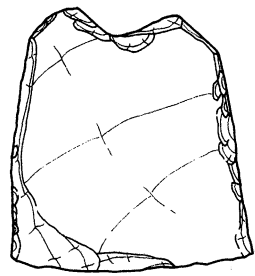
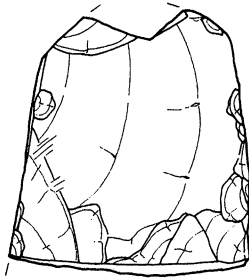
第49図 牧原遺跡 石器 2



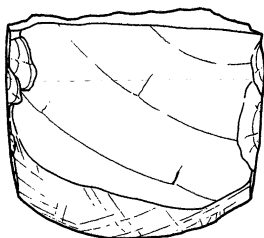
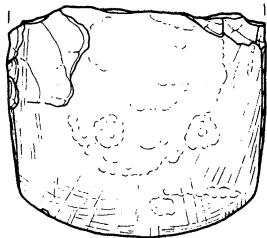
316



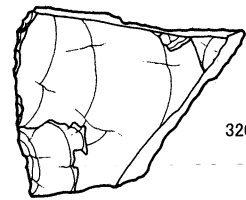
317



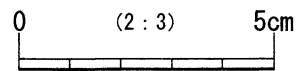
318



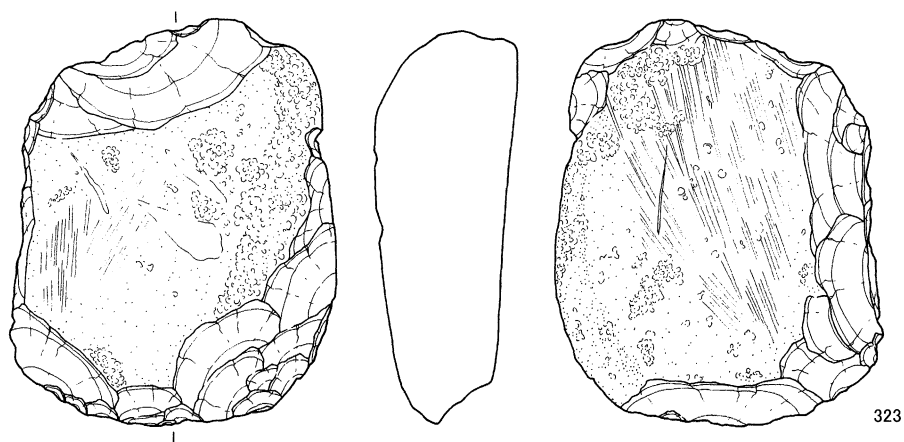
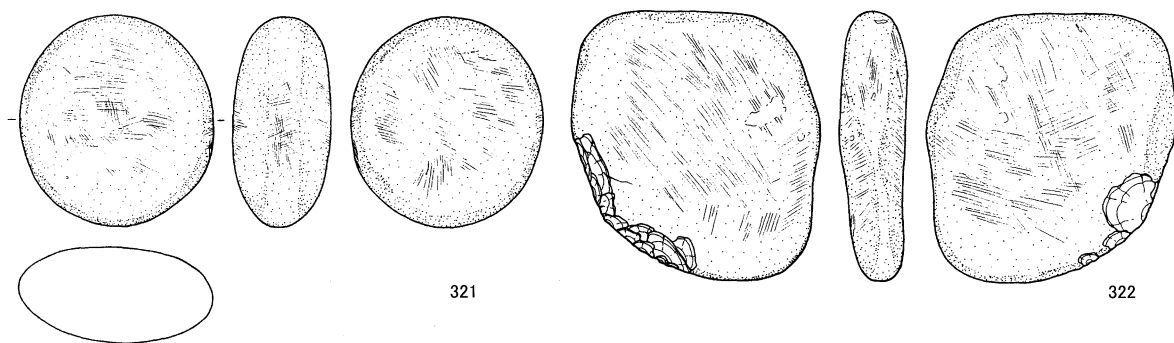
319



320



第50图 牧原遺跡 石器3



第51図 牧原遺跡 石器4

遺物 (Ⅶ層出土)

土器 303・304

303・304は同一固体と思われる。外面には横位に並行する2条の刺突文間に山形の沈線が施文される。型式は平楯式であろうか。

石器 306・307・308・309

石鏃が4点出土した。306のみ完形であり、307は側辺に調整が見られない、308は白色を帯びた黒曜石で姫島産と考えられる。詳細は表のとおりである。

挿図 番号	遺物番号	出土位置		種 類	器 種	石 材	法 量 (cm, g)			
		地点	層位				最大長	最大幅	最大厚	重量
305	116	9区	Ⅲ	剥片石器	石鏃	頁岩	1.58	1.55	0.47	0.68
310	113	9区	Ⅲ	剥片石器	石鏃	頁岩	1.30	1.00	0.25	0.29
311	113	9区	Ⅲ	剥片石器	楔形石器	頁岩	2.10	1.60	0.50	1.80
312	125-2	10区	Ⅲ	剥片石器	剥片(U. F)	頁岩	1.80	4.10	3.00	2.80
313	125-1	10区	Ⅲ	剥片石器	剥片(U. F)	頁岩	5.56	4.60	1.11	33.60
314	150	11区	Ⅲ	剥片石器	搔器	頁岩	7.60	11.90	2.10	167.20
315	83	4区	Ⅲ-上位	剥片石器	石核	黒曜石	2.00	2.30	2.40	12.40
316	112	9区	Ⅲ	礫石器	打製石斧	頁岩	14.80	6.17	1.76	165.60
317	1	1区	Ⅲ	礫石器	磨製石斧	頁岩	3.90	4.05	1.70	37.20
318	125	10区	Ⅲ	礫石器	打製石斧	頁岩	5.15	4.71	0.85	26.80
319	133	10区	Ⅲ	礫石器	磨製石斧	頁岩	4.50	5.05	1.23	44.30
320	109	9区	Ⅲ	礫石器	打製石斧	頁岩	3.70	4.50	0.88	16.00
321	150	11区	Ⅲ	礫石器	磨石(丸)	チャート	5.60	5.10	2.60	108.60
322	112	9区	Ⅲ	礫石器	磨石(平)	花崗岩	7.10	6.55	1.78	118.60
323	53	3区	Ⅲ-上位	礫石器	磨石(平)	砂岩	10.75	8.60	3.68	373.00
324	154	10区	Ⅲ	礫石器	磨石(丸)	花崗岩	2.62	2.17	1.52	9.94
325	93	6区	Ⅲ	礫石器	磨石(平)	花崗岩	4.60	3.92	1.53	29.40
326	134	10区	Ⅲ	礫石器	磨石(平)	砂岩	4.23	3.89	1.77	29.85
327	150	11区	土坑20	礫石器	磨石(平)	砂岩	4.86	4.66	1.91	47.68
328	126	10区	Ⅳ	礫石器	磨石(平)	花崗岩	4.84	4.59	2.39	52.58
306	37	1区	Ⅶ	剥片石器	石鏃	頁岩	2.05	1.50	0.50	0.97
307	14	1区	Ⅶ	剥片石器	石鏃	頁岩	1.52	1.45	0.27	0.53
308	8	1区	Ⅶ	剥片石器	石鏃	黒曜石	1.40	1.00	0.35	0.39
309	38	2区	Ⅶ	剥片石器	石鏃	チャート	0.95	1.10	0.27	0.26

第5表 牧原遺跡 石器観察表

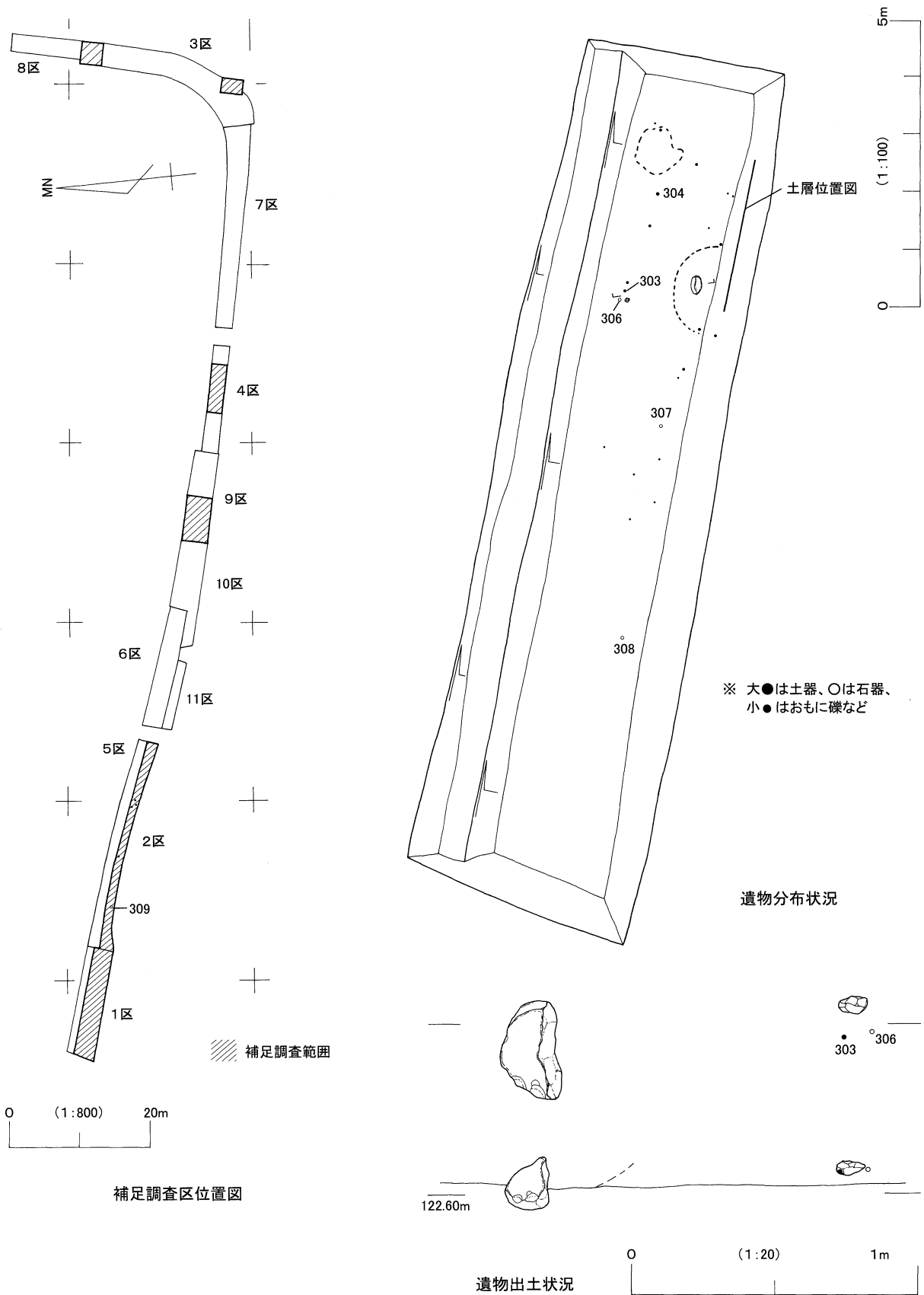
第3節 まとめ

調査成果について以下にまとめる。

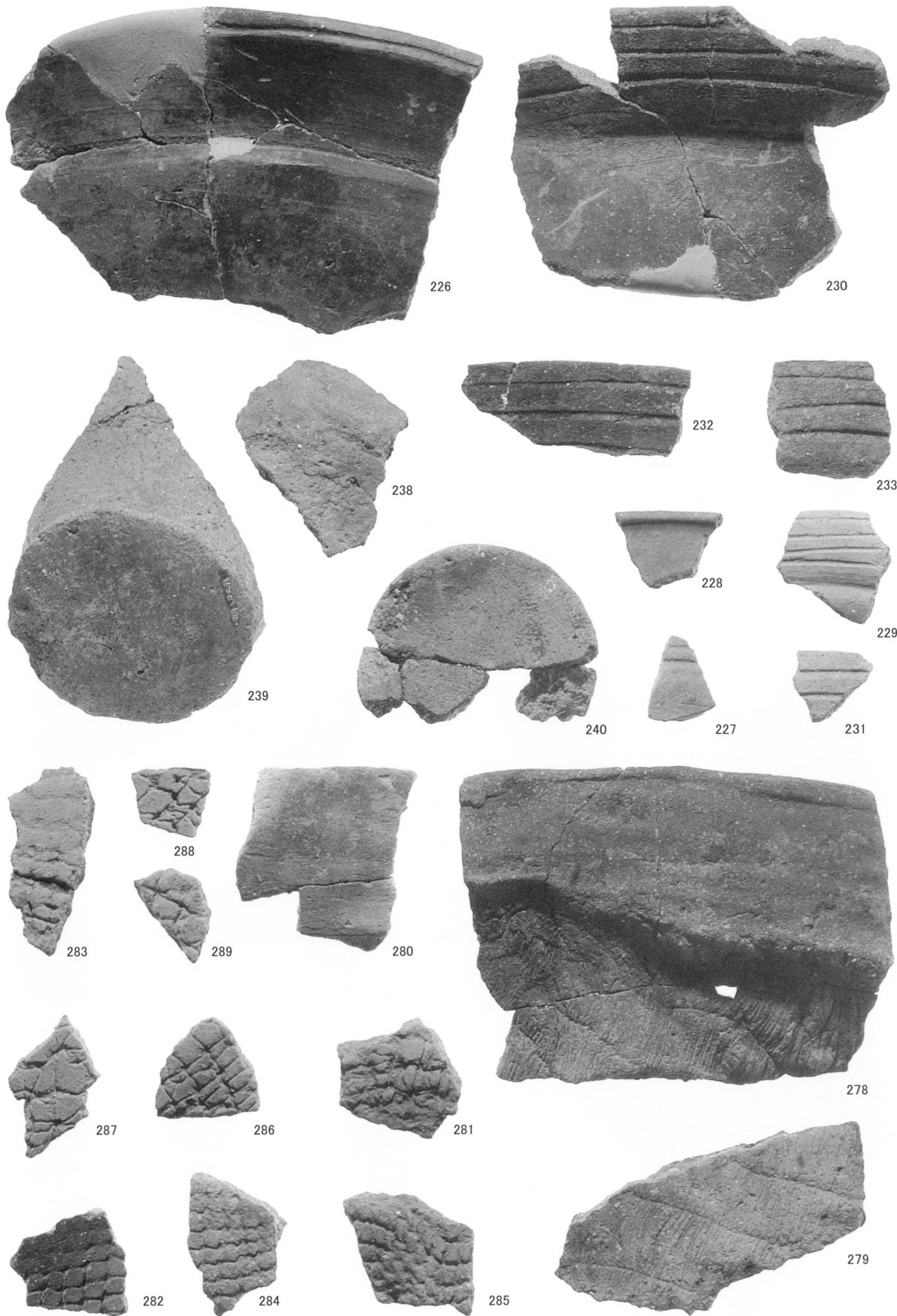
- ① 周囲には縄文時代晩期の遺物・遺構は広い範囲に分布することが予想される。
- ③ 検出した遺構には柱穴が多くあり調査区外にも続くことから、何らかの構造物があったことが考えられる。
- ② 縄文時代晩期の遺物の分布状況と遺構の配置状況に違いが見られる。
- ④ 縄文時代早期の遺物は周辺の地形で一番高い位置を占地して、簡単な作業場と思われる状況であった。

¹ 鹿児島県立埋蔵文化財センター 東和幸氏のご教授による

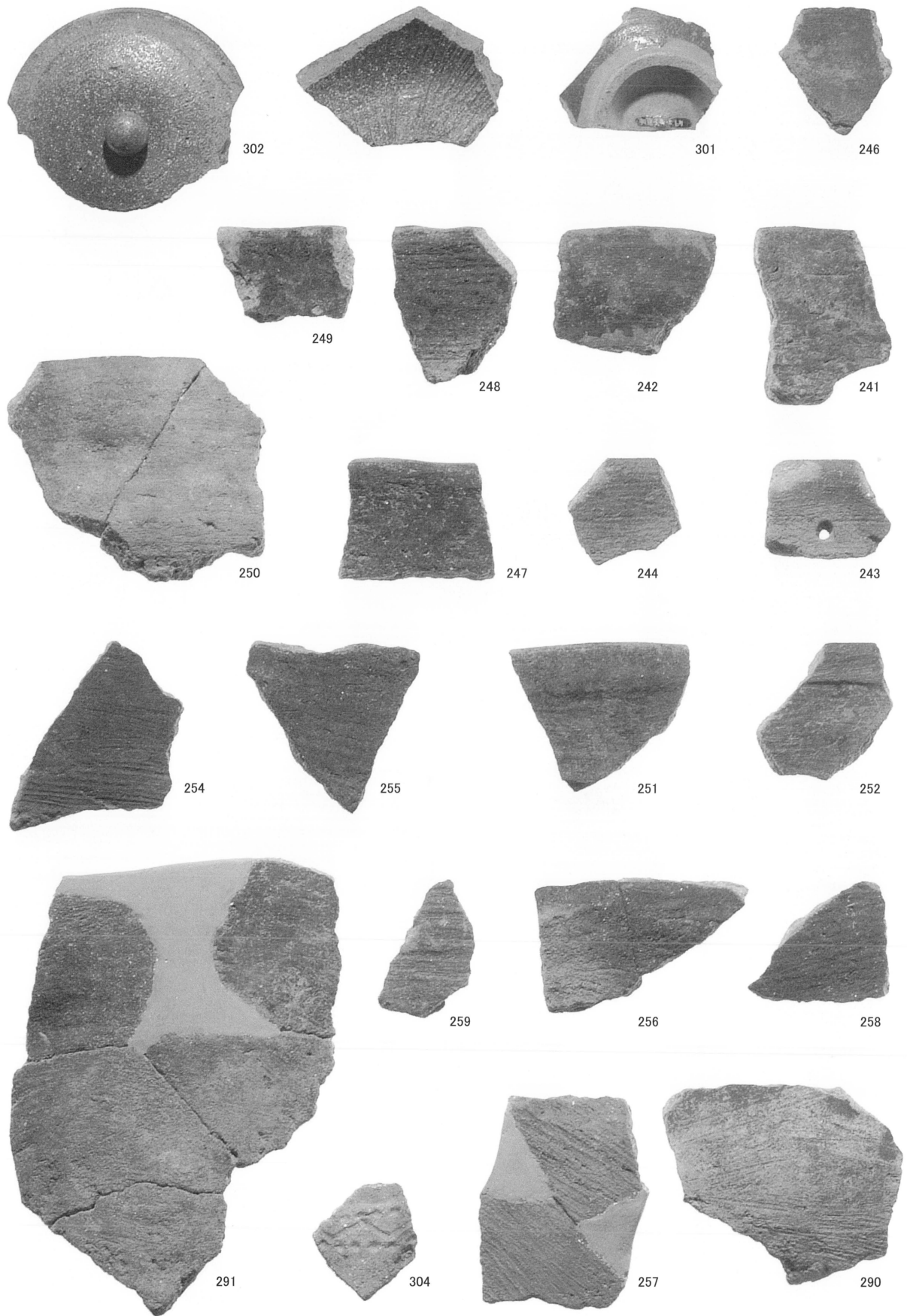
² とくに記述の無いものに関しては第三者が見ても頁岩と思われるものである



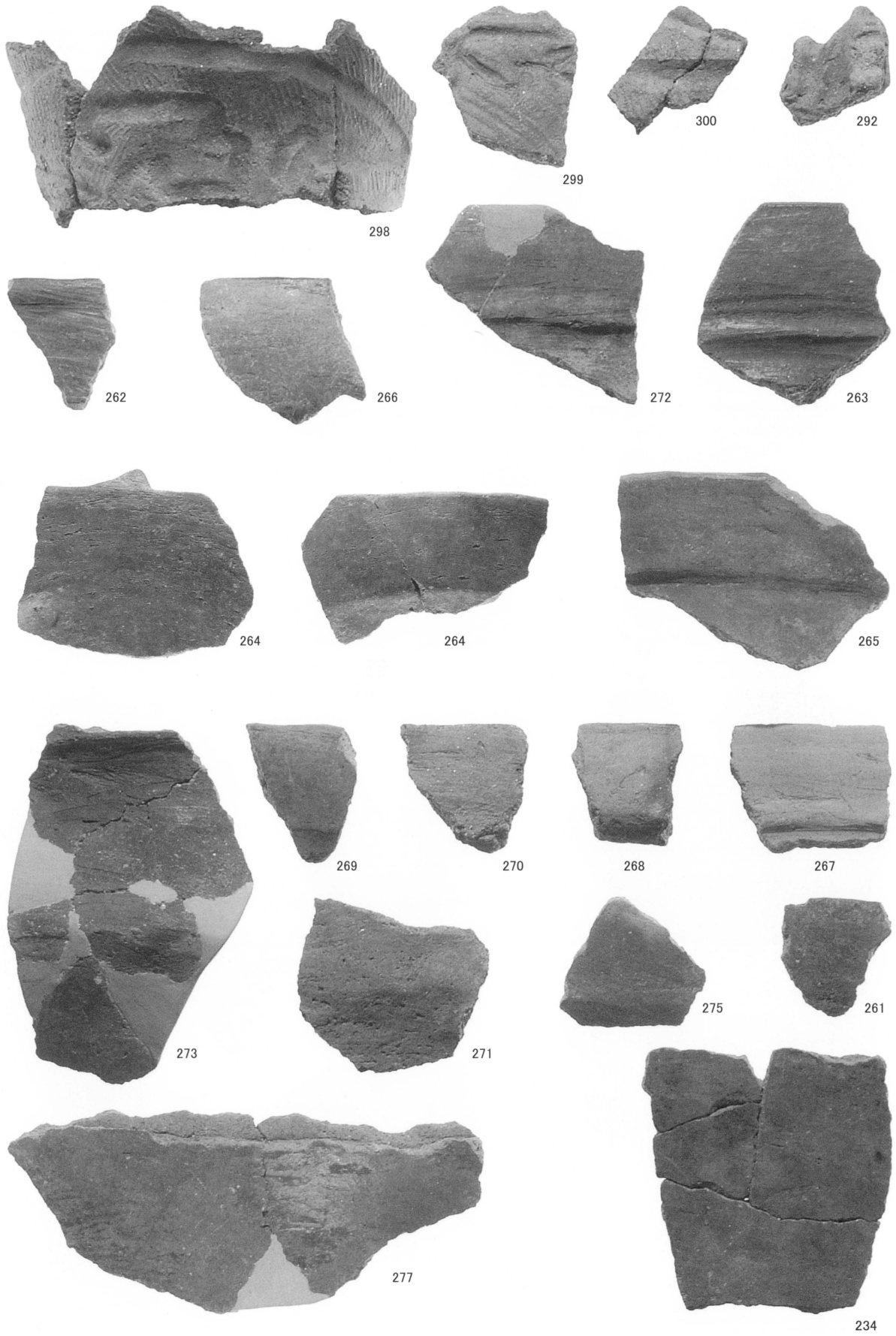
第52図 牧原遺跡 遺構5 (Ⅷ層上面)



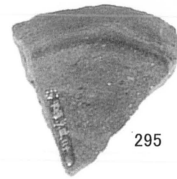
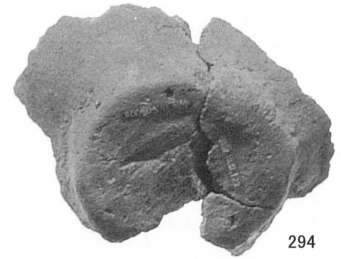
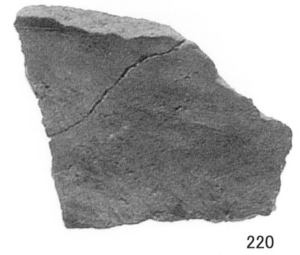
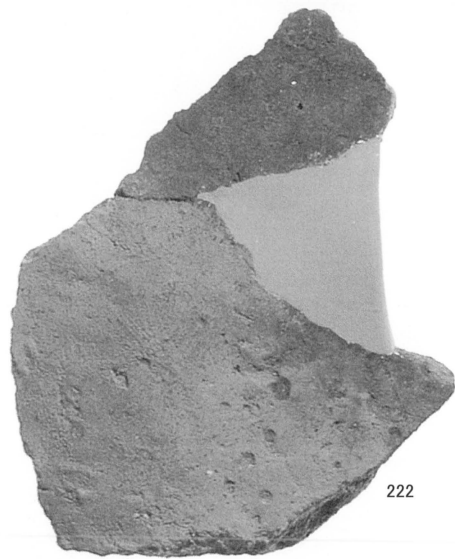
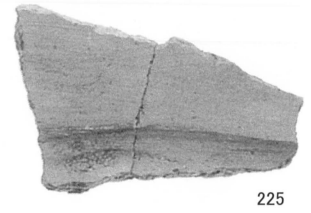
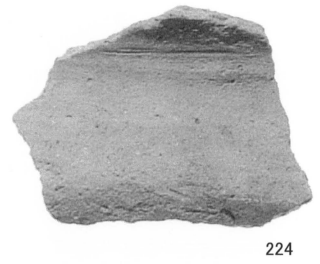
图版27 牧原遺跡 遺物 1



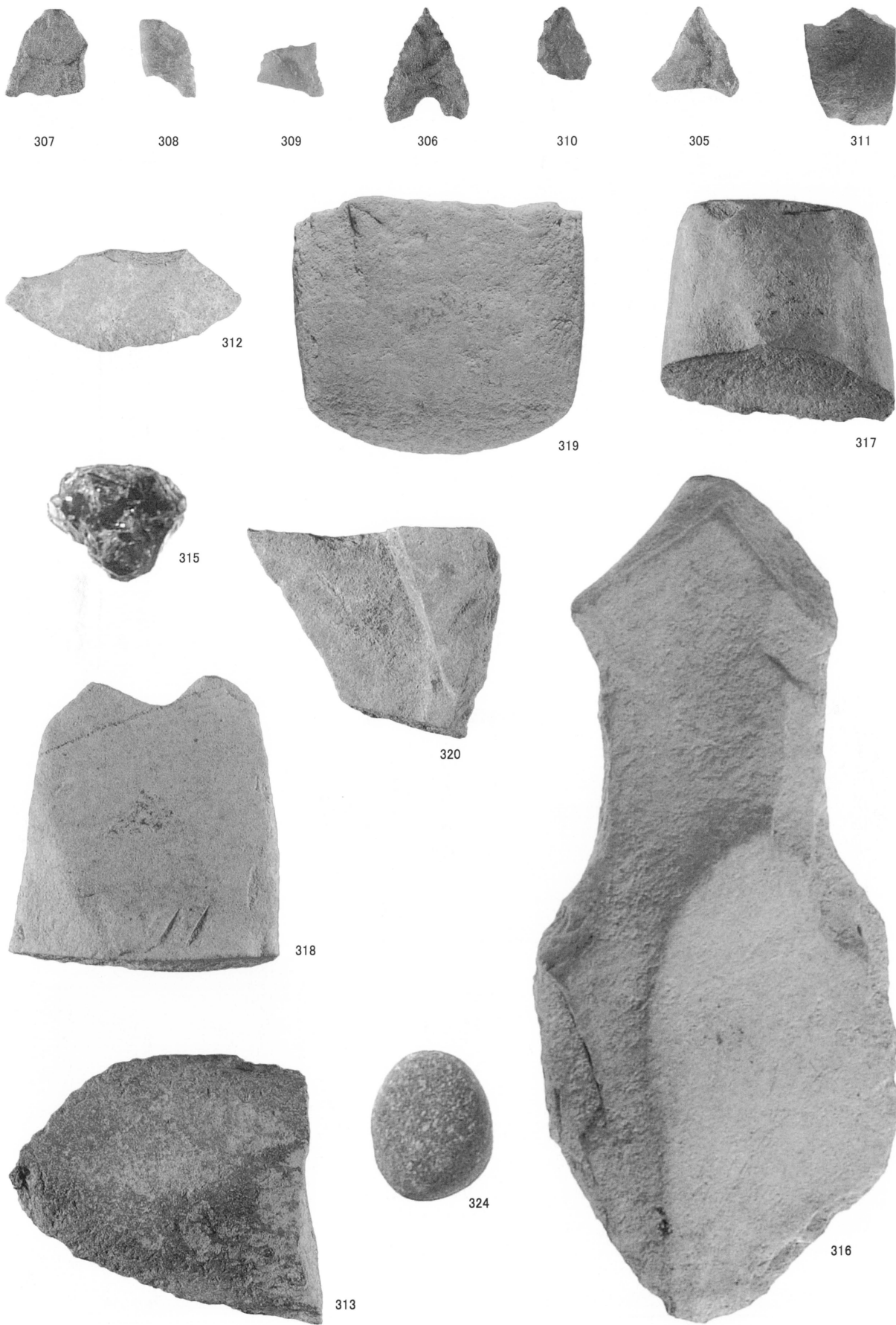
图版28 牧原遺跡 遺物2



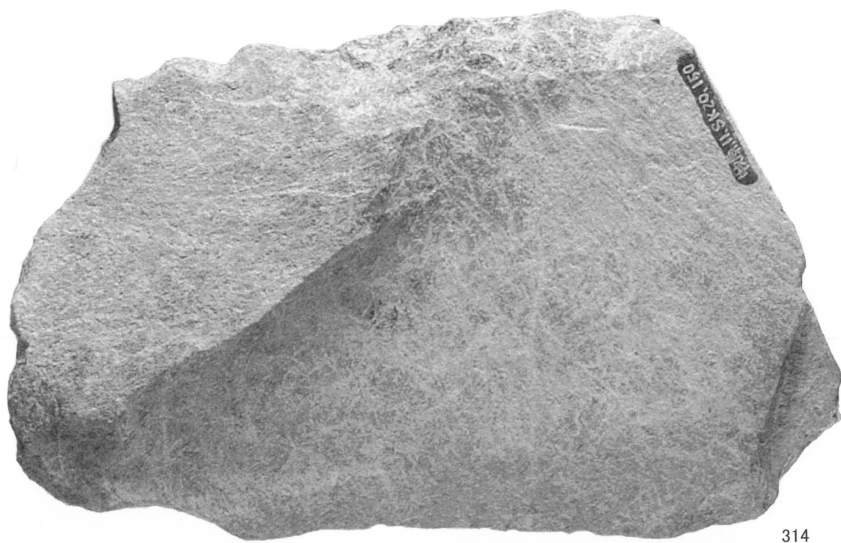
图版29 牧原遺跡 遺物3



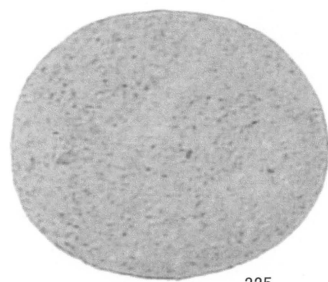
図版30 牧原遺跡 遺物4



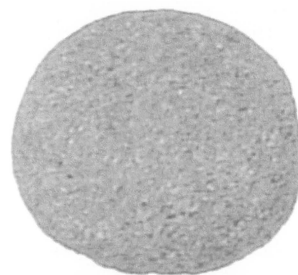
图版31 牧原遺跡 遺物5



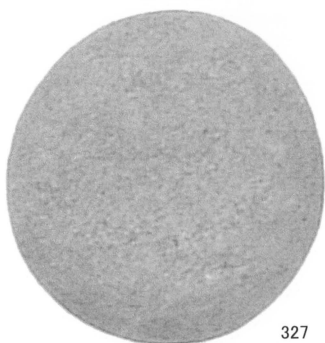
314



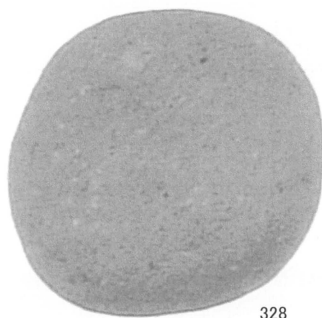
325



326



327



328



321



323

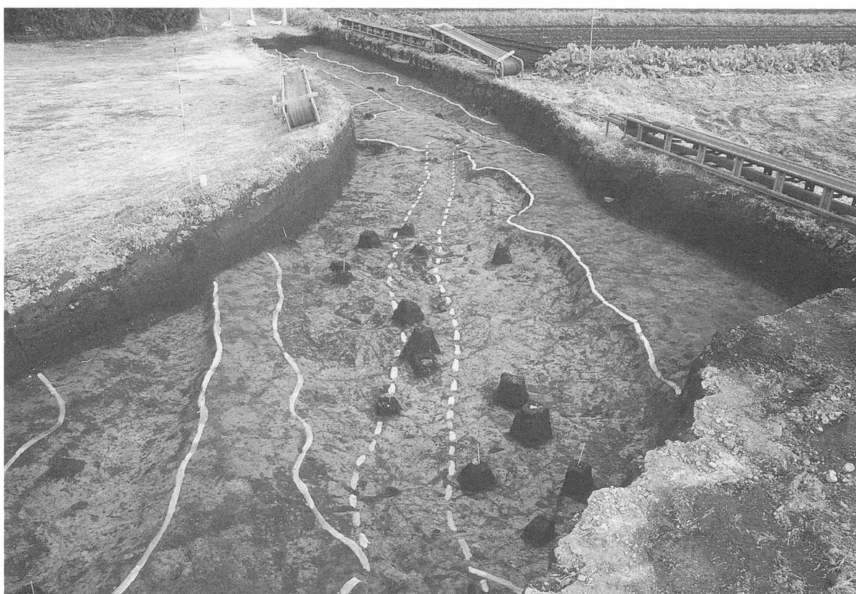


322

图版32 牧原遺跡 遺物6



Ⅲ層上面遺構完掘状況
(南より)



道検出状況
(南西より)



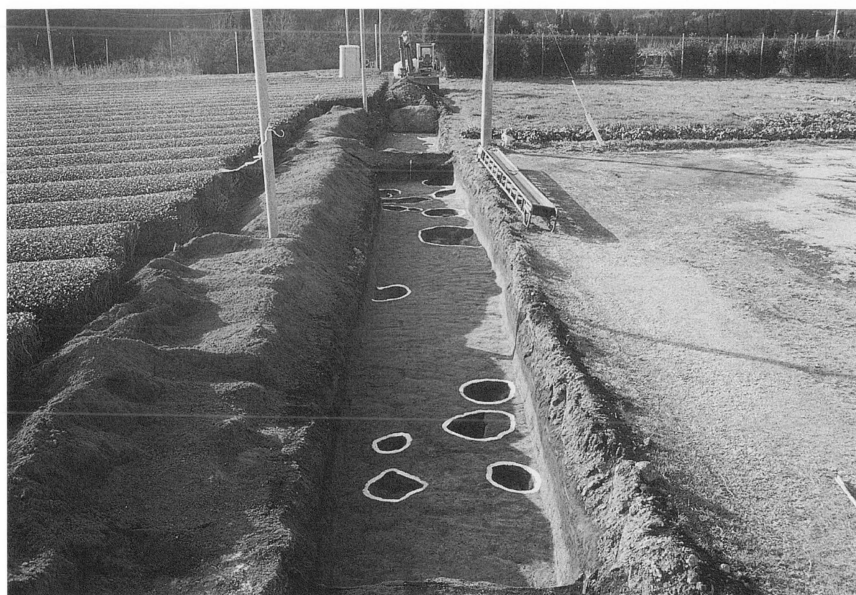
溝4・5土層断面
(南より)



Ⅲ層遺物出土状況
Ⅳ層上面遺構検出状況



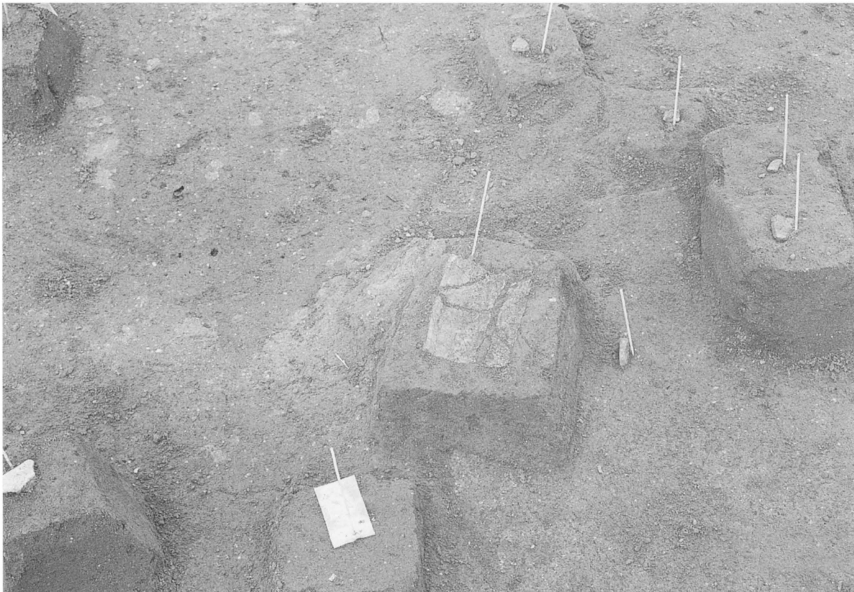
土坑2土層断面



Ⅳ層上面遺構完掘状況
(6区、東より)



Ⅲ層遺物出土状況 1
(9区、西より)



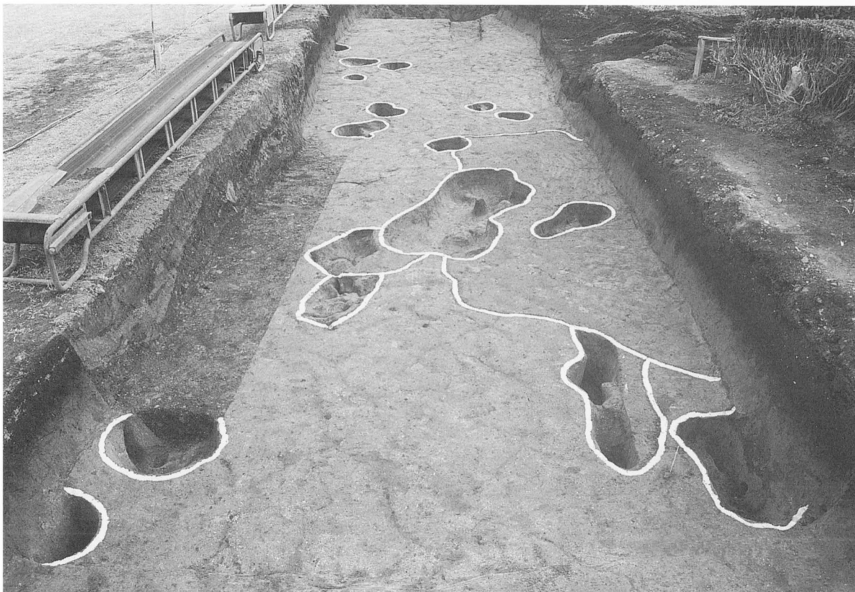
Ⅲ層遺物出土状況 2
(9区、写真中央は、No278)



Ⅲ層遺物出土状況 3
(9区、北より)



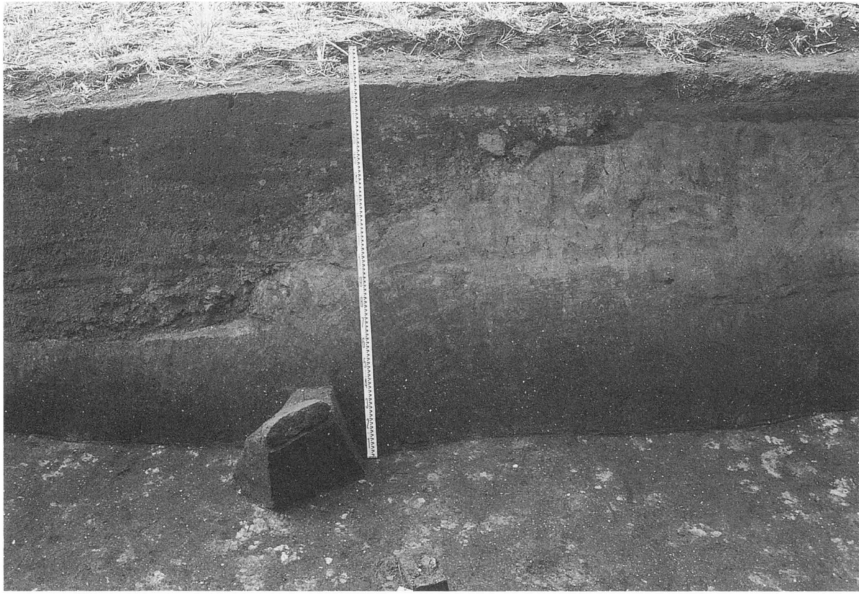
IV層上面遺構検出状況
(9区、西より)



IV層上面遺構完掘状況 1
(9区、西より)



IV層上面遺構完掘状況 2
(9区、土坑 9・10)



土層断面
(1区、南壁)



VI層遺物出土状況



VI・VII層遺物状況・土層断面
(2区東端、南壁)



VIII層検出状況
(2区、西より)



土層堆積状況
(9区、南壁)



調査地遠景
(牧原 A 遺跡より、牧原遺跡を望む)

第VI章 牧原A遺跡の調査

第1節 調査の環境

1. 調査の環境

調査地は県道63号志布志福山線から町道28号縄瀬牛ヶ迫線を黒葛集落へと向かい、北側に分岐する農道黒葛2号線の東側にあたる。本道をさらに進むと町道199号黒葛線へと出る。

遺跡は台地北側の縁辺部に立地し、調査地点は遺跡範囲の中央に位置する。周辺の地形は南側に平坦面が広がり緩やかに南へと下る。北側は斜面地となる。西側には牧原遺跡が隣接し、北東側の県道を挟んでは大迫遺跡が広がる。

調査地の現況は未舗装の農道であり大きく削平を受ける。また、周辺は耕地整備などが行われており旧地形は失われている。

2. 調査の経過

以下、調査日誌より略述する。

平成13年1月4日(木)・5日(金)重機による表土除去、樹木の移設作業を行なう。

9日(火) 作業員による包含層の掘り下げを始める。B区のアカホヤ層上面にて遺構精査を実施する。A・B区の調査区周辺に降雨対策を行なう。

10日(水) アカホヤ層上面で検出状況を撮影し、完了後に遺構を掘り下げる。

11日(木) A区、検出面より下で縄文時代後期の遺物が出土し、この面がアカホヤの2次堆積層の上面であったことが判明する。B区、遺構の半裁・完掘、平板測量を実施する。C区、アカホヤ2次堆積層を人力で掘り下げる。

12日(金) A・B区、アカホヤ2次堆積層を掘り下げる。B区、平板実測を行なう。

15日(月) A・B区、アカホヤ層上面で遺構精査、検出状況を撮影する。C区、二次堆積層を掘り下げる。

16日(火) A・B区、中央に下層確認のためトレンチを設ける。アカホヤ層を重機にて除去後、人力で掘り下げる。

17日(水) 下層確認トレンチを掘り下げる。遺物がB区内のトレンチより出土する。層位はアカホヤ層下の黒色土層にあたる。C区、アカホヤ層上面で遺構検出状況を撮影する。

18日(木) B区、トレンチを調査区全体に拡げる。C区、下層確認のためトレンチを設けて掘り下げる。

19日(金) A区、トレンチを西側に拡張する。B・C区、アカホヤ層下の黒色土層を掘り下げる。

22日(月) A・B・C区、掘り下げる。

23日(火) A・C区、サツマ層上面で検出写真を撮影する。埋め戻しを始める。B区掘り下げる。

24日(水) B区、掘り下げる。

26日(金) B区、遺物の出土状況などを撮影、平板実測・遺物の取り上げを行なう。

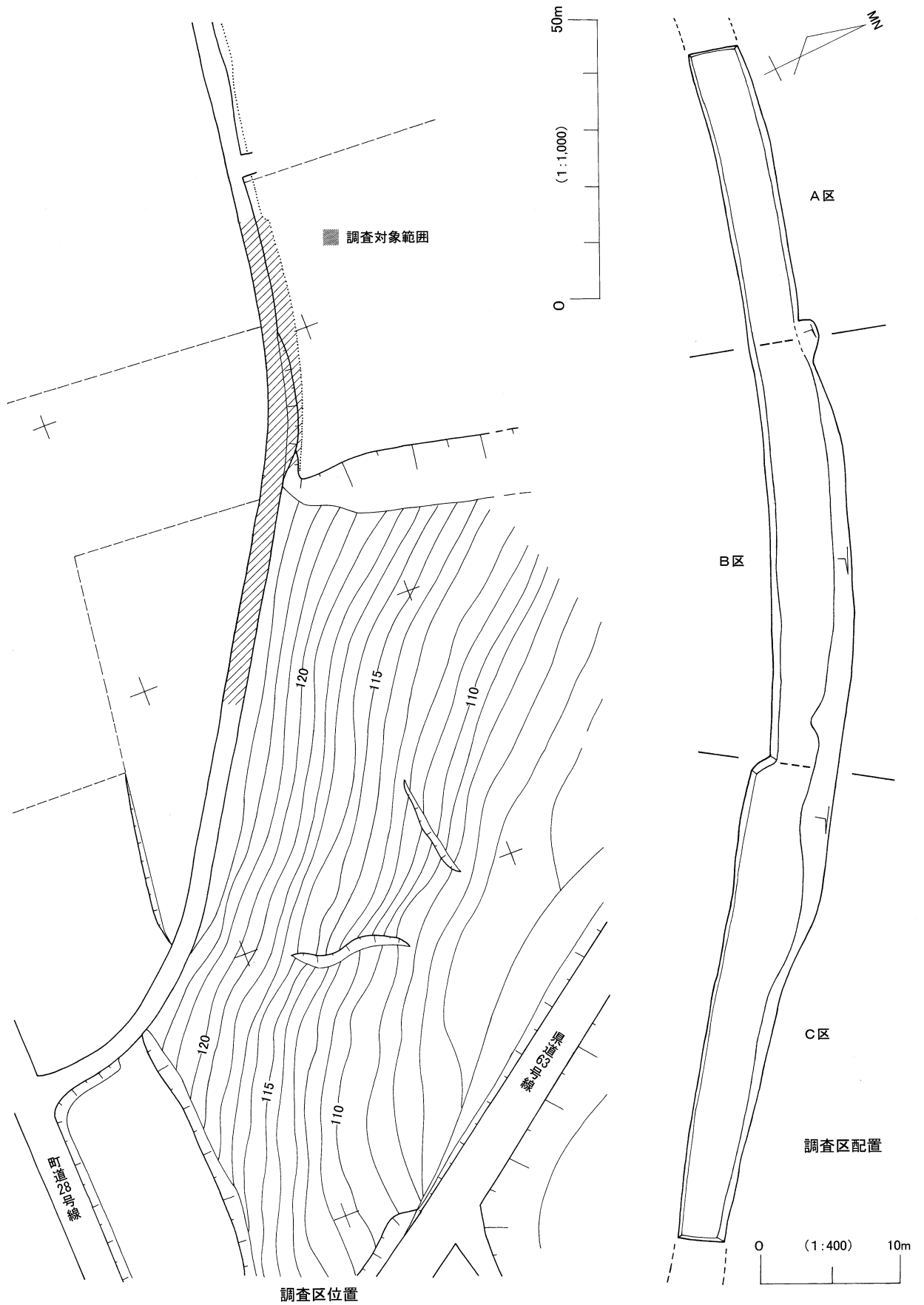
29日(月) B区、調査区内の地形測量を行なう。土層断面を撮影・実測する。

30日(土) 埋め戻す。

第2節 調査の概要

1. 調査の方法

調査は農道の通行止めを行い実施した。調査対象は工事による破壊深度までを対象に調査・記録を



第53図 牧原A遺跡 調査区位置・配置

行い、部分的に下層の確認のため補足調査を実施した。調査区はA・B・C区の3区を設定した。補足調査は各区に3×5mの先行トレンチを設け、その成果に基づき行なった。結果、B区を拡張した。

掘り下げは基本的に人力で行い、IV・V層のみを重機で除去した。記録は写真と図面で行った。遺物の取上げは平板にドットにて記録した。遺構検出はⅢb・IV・Ⅷ層上面で実施した。

2. 層序

a. 削平状況と旧地形

調査地は現道整備により大きく削平されて、周辺も耕地整備などにより削平される。調査区別の削平状況としては、A区ではⅢ層の上半分が失われ、B区ではⅡ層まで削平を受けた後に道路の整備層が互層状に厚く堆積する。C区ではⅡ層まで削平されて整備層が薄く堆積する。

層の堆積状況としては、B区北壁と南壁で層の対応が大きく異なる点が注目される。北壁では本来は厚い層として見られるアカホヤ降下火山灰(IV・V)層が極端に薄く、それに対して南壁及びA・C区では厚い堆積として確認された。これは北側の斜面に続く小谷がB区近くまで延びていたため層土が流出したものと考えられる¹。

推察される旧地形としては、急斜面へと延びる小谷が存在する北側緩斜面であったことが想像される。

b. 層序

以下、各層の特徴・見解などを箇条書きする。

第I-1層 バラスなどによる農道整備層である。

第I-2層 農道整備以前の旧耕土、含まれる白色砂粒は大正期の桜島降下火山灰と考えられる。現在の耕土(表土)も類似する。

第II層 黒色土。削平を受けない層と考えられるが均一ではなく、攪乱などが混在する。

第III層 黄色土。調査では「アカホヤ二次堆積層」と呼称した、縄文時代晩期の遺物包含層にあたる。また、層上部ではⅡ層への漸移層が見られ、これをⅢa層とした。

第IV層 黄褐色土。アカホヤ降下火山灰層と推定する。

第V層 黄褐色土。IV層に比べて粒度がかなり粗い。アカホヤ降下火山灰層と推定する。

第VI層 黒色系の土。

第VII層 黒色系の土。縄文時代早期の遺物包含層にあたるが出土量は極めて少ない。

第VIII層 黒色系の土。縄文時代早期の遺物包含層にあたる。

第IX層 黄褐色砂質土ブロックを含む層で薩摩降下火山灰層と推定する。

基本層位

第I層 シラスなどの互層で層の上部は非常に硬い

第II層 7.5YR1.7/1黒色土、やや多量にN7/0灰白色砂粒(5mm以下)を含む

第IIIa層 10YR2/2黒褐色土

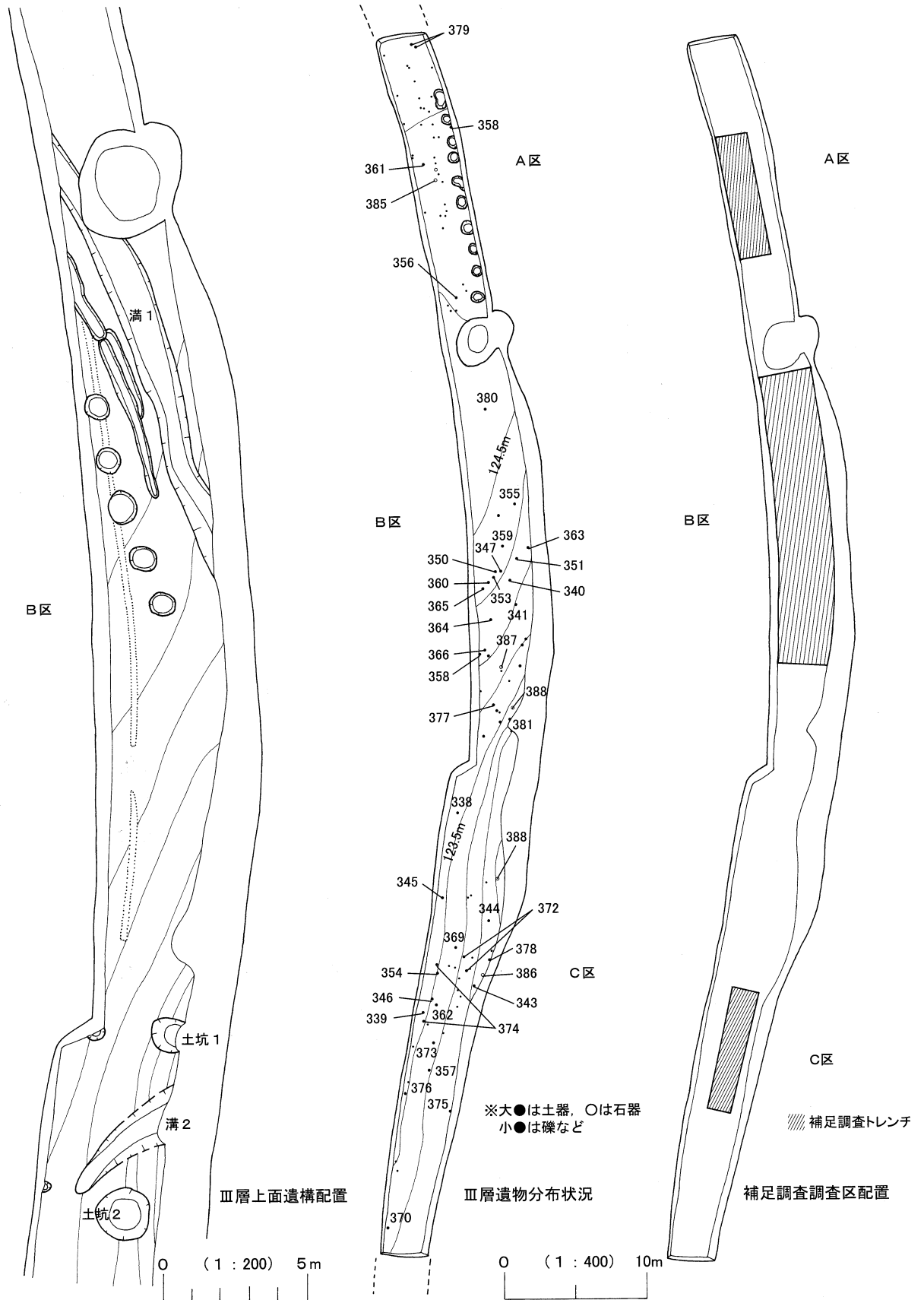
第IIIb層 10YR5/8黄褐色土、やや柔い

第IV層 10YR6/8明黄褐色砂質土

第V層 10YR5/8黄褐色砂質土、非常に多量の橙色砂粒(10mm以下)を含む

第VI層 10YR5/2灰黄褐色土、やや多量の10YR7/8黄橙色砂粒(5mm以下)を含む

第VII-1層 10YR4/2灰黄褐色土、N7/0灰白色砂粒(3mm以下)と多量の10YR7/8黄橙色砂粒を含む



第54図 牧原A遺跡 遺構1

第Ⅶ-2層 10YR2/1黄色土、少量のN7/0灰白色砂粒（1mm以下）とやや少量の10YR7/8黄橙色砂粒（3mm以下）を含む。

第Ⅷ層 2.5Y3/2黒褐色土、多量に2.5Y5/4黄褐色土ブロック（5～10cm以下）を含む

3. 調査の成果

a. 検出面1（Ⅲb層上面）

覆土が黒色土の溝と土坑を複数検出した。いずれも覆土から現代の攪乱と考えられる。とくにA区の直線に並ぶ円形土坑群とB区の溝1に並行する細長い長方形の土坑は、掘り方と覆土²から近代～現代の芋穴と考えられる。また、溝1には覆土内に大正期の桜島降下火山灰と思われる白色砂粒が層を形成するほど堆積する。前述の土坑などとの検出状況から道路跡と考えられる。

遺構

溝1 規模は幅160cm、深さ15cmを測り、等高線にほぼ直交する形で延びる。5mm大以下のN7/0灰白色砂粒を多量に含む。

b. 検出面2（Ⅳ層上面）

遺構は検出できなかったが、遺物が各区に比較的集まる形で分布する。B・C区の遺物を比較すると粗製土器や打製石斧が出土するなど共通点があるが、精製土器・組織痕土器などはC区でのみ出土した。A区は削平により包含層の上部が失われて詳細が不明である。出土遺物のおもな時期は、縄文時代晩期の黒川式と考えられる。

分布状況の詳細は図に記載してある。

遺物（Ⅲ層出土）

土器 338～380

出土した土器は338を除いて5cm前後の破片であったため、器面調整・器厚などから精製（器壁が薄く緻密なミガキが施される）・粗製（器壁が厚くナデ・条痕で調整される）に分けた後に部位ごとに特徴を記述する。

精製土器 338・339

精製土器の胎土には1mm以下の石英・長石・雲母・黒色砂粒が見られる。

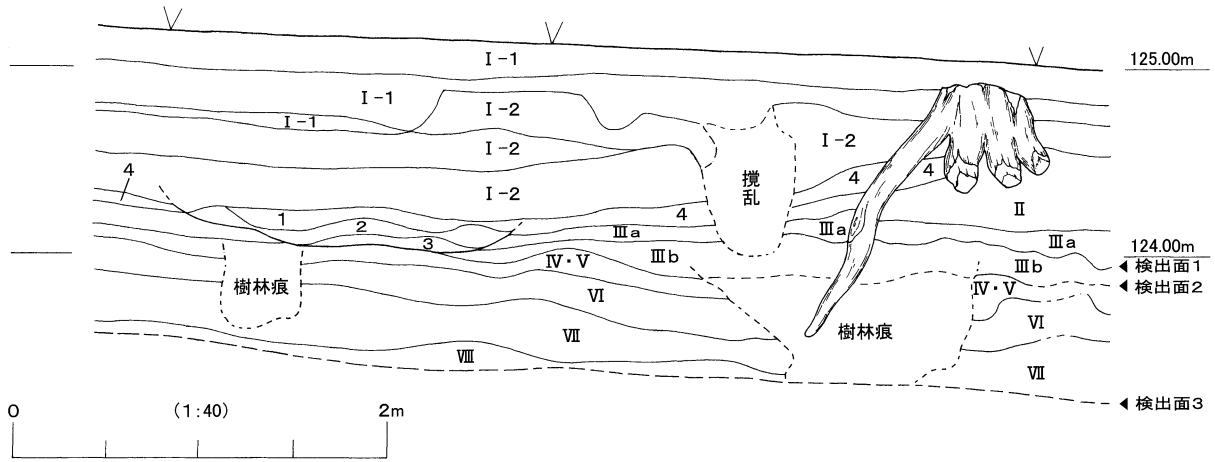
精製浅鉢338は口縁端部の数箇所が山形に突起する。口唇部は平坦に仕上げで面を取る。器面は内外面を共に丁寧なミガキを施して、器面は黒み帯びる。頸部の内面には沈線がめぐる。断面の一部に煤・炭化物の付着が見られる。

口縁部339は外反する口縁に鈍く立ち上がる口唇部をもち、口縁端部に1条の沈線を施す。

粗製土器 341～361

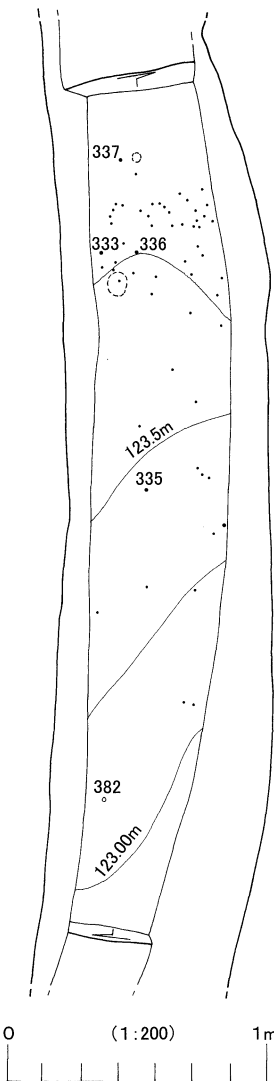
特徴としては器面に煤・炭化物が観察されるが付着の見られないものもある。346・354・357は内外面共に付着が見られない。色調は10YR7/4にぶい黄橙色である。374・375は内面に煤がつき外面が5YR6/6橙色と赤みを帯びる。また、375・380は内面から断面半分まで黒色化する。

胎土は全体的に同じであるが、精製土器と比較すると同様の鉱物が含まれる。しかし、粒度が異なり粗製の方が2mm以下と粗い。



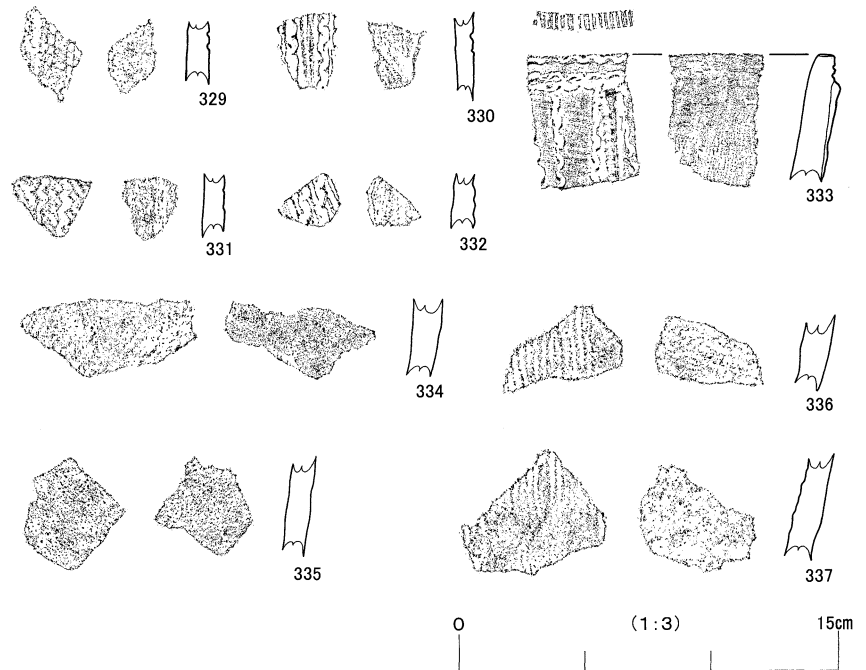
基本土層

1. 10Y6/2 オリーブ灰色砂，粒度は1mm以下
2. 10Y7/2 灰城色砂，粒度5mm以下
3. 10YR2/2 黒褐色土
4. 7.5YR1.7/1 黒色土，多くのN7/0灰白色砂粒（～5mm大）を含む



※点線は推定の遺構

遺物分布状況



VI・VII層出土土器

第55図 牧原A遺跡 遺構2・土器1

以下、部位別に形態を中心に述べる。

口縁部は口唇部が面を取り口縁端部の外面に段をもつものが多い。口縁端部が肥厚して1～2cm幅の段をもつのは341・343・344・347～352・355であり、そのうち341・344・347・348・351は口縁が山形を呈する可能性が考えられる。器種は深鉢が想定される。

また、口縁端部が肥厚して段をもつが幅が2cmを超える342・346・353・354がある。353のみ口唇部が丸く整えられる。器種は粗製浅鉢と思われる。

他に真っ直ぐ外に開く345、厚手の器壁に丸い口唇部の356・358、明瞭に条痕を残す357がある。

胴部は373～380、底部は381である。375には外面に明瞭な内傾の接合痕が見られる。373・380は外面に条痕が見られて、380がとくに明瞭である。内面は丁寧なミガキを施している。他の土器も内面には丁寧なミガキが施されるが、373・374は器面に炭化物の付着や剥離が多く見られて調整も不明瞭である。

組織痕土器363～372には、蓆目363～367・372と網目368～371が見られる。網目は369・370と368では一網の単位が大きく異なり、前者が4編/cm、後者が1.5編/cmを測る。内面の調整は、頸部の363を除けば丁寧なミガキが施される。363は横方向のケズリとナデが施される。

土製円板 376

1点のみ土製円盤376が出土した。土器片の断面を打ち欠いて円形に仕上げており全体的に器面が摩滅する。

石器 383～388

打製石斧386の側辺には抉込みがあり、装着痕と思われる摩滅が見られる。

打製石斧387の刃縁には不規則な剥離が多く見られ、使用痕と考えられる。基部の抉込みにわずかに見られる摩滅は装着痕と思われる。

磨石388は楕円形の形状に表面が丁寧に磨かれる。丹念に観察すると1cm程度の平坦面が多く見られる。

剥片383は不純物を含んだ透明度の高い黒曜石、剥片384・385は白色を帯びた黒曜石で姫島産と思われる。

c. 検出面3（Ⅷ層上面）

補足調査としてⅥ・Ⅶ層及びⅧ層上面の調査を実施した。B区では土器などの遺物の広がりを確認するため、トレンチを拡張して調査を行なった。A・C区では数点の自然礫が出土したのみであった。B区での遺物分布状況は、調査区の西側に遺物が集まるが遺物量は少ない。調査では精査を行い遺構の検出に努めたが検出できなかった。しかし、その後の写真などでの検討で少なくとも遺物の集中する範囲内に土坑と柱穴が存在した可能性が確認された。位置は図中に記す。

遺物の分布状況は図のとおりである。

遺物（Ⅵ・Ⅶ層出土）

土器 329～337

口縁部333は平坦に整えた口唇部にキザミを施し、口縁端部に横位の貝殻刺突文をめぐらす。胴部には縦位の貝殻刺突文と円形刺突文に挟まれたクサビ型貼付文が見られる。それに類するのが329～332で329は刺突文が異なる。334～337は縦方向に貝殻条痕が施される。

形式としては329～333が加栗山式と考えられる。

石器 382

石鏃382が1点出土した。

挿図 番号	遺物番号	出土位置		種 類	器 種	石 材	法 量 (cm, g)			
		地点	層位				最大長	最大幅	最大厚	重量
382	176	B区	IX	剥片石器	石鏃	頁岩	1.80	1.30	0.35	0.59
383	66	A区	V	剥片石器	剥片	黒曜石	1.53	1.30	0.30	0.48
384	一括	—	V	剥片石器	剥片	黒曜石	1.60	1.20	0.45	0.60
385	29	A区	V	剥片石器	剥片	チャート	1.50	0.95	0.25	0.33
386	97	C区	V	礫石器	打製石斧	頁岩	7.25	5.52	1.42	103.70
387	53	B区	V	礫石器	打製石斧	頁岩	10.70	6.50	1.40	110.70
388	75	—	—	礫石器	磨石(丸)	花崗岩	5.85	4.37	3.56	78.32

第6表 牧原A遺跡 石器観察表

第3節 まとめ

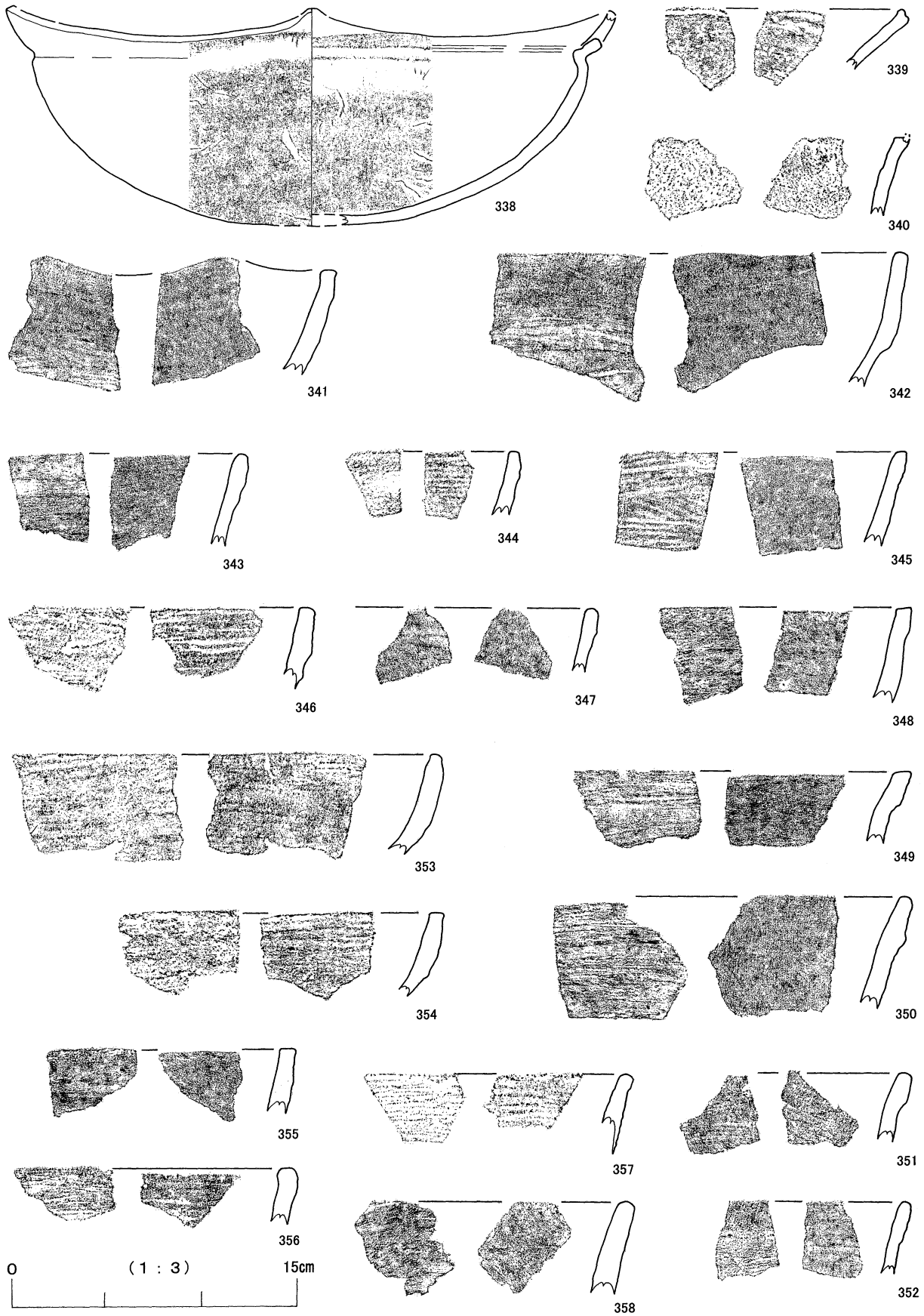
今回の調査では遺構を検出できなかったが、Ⅲ層中では遺物が調査区全域に分布し、Ⅵ・Ⅶ層でも集中する部分が存在していることから遺構が存在した可能性は十分に考えられた。

その後、Ⅳ層のアカホヤ降下火山灰層上面では平成13年度の大迫遺跡・黒葛遺2次・牧原遺跡などで検出しにくい覆土をもった遺構を確認した。また、Ⅷ層の薩摩降下火山灰層上面では平成14年度の下掘遺跡の調査においても、従来の検出位置より深い位置で小型の遺構を確認した。

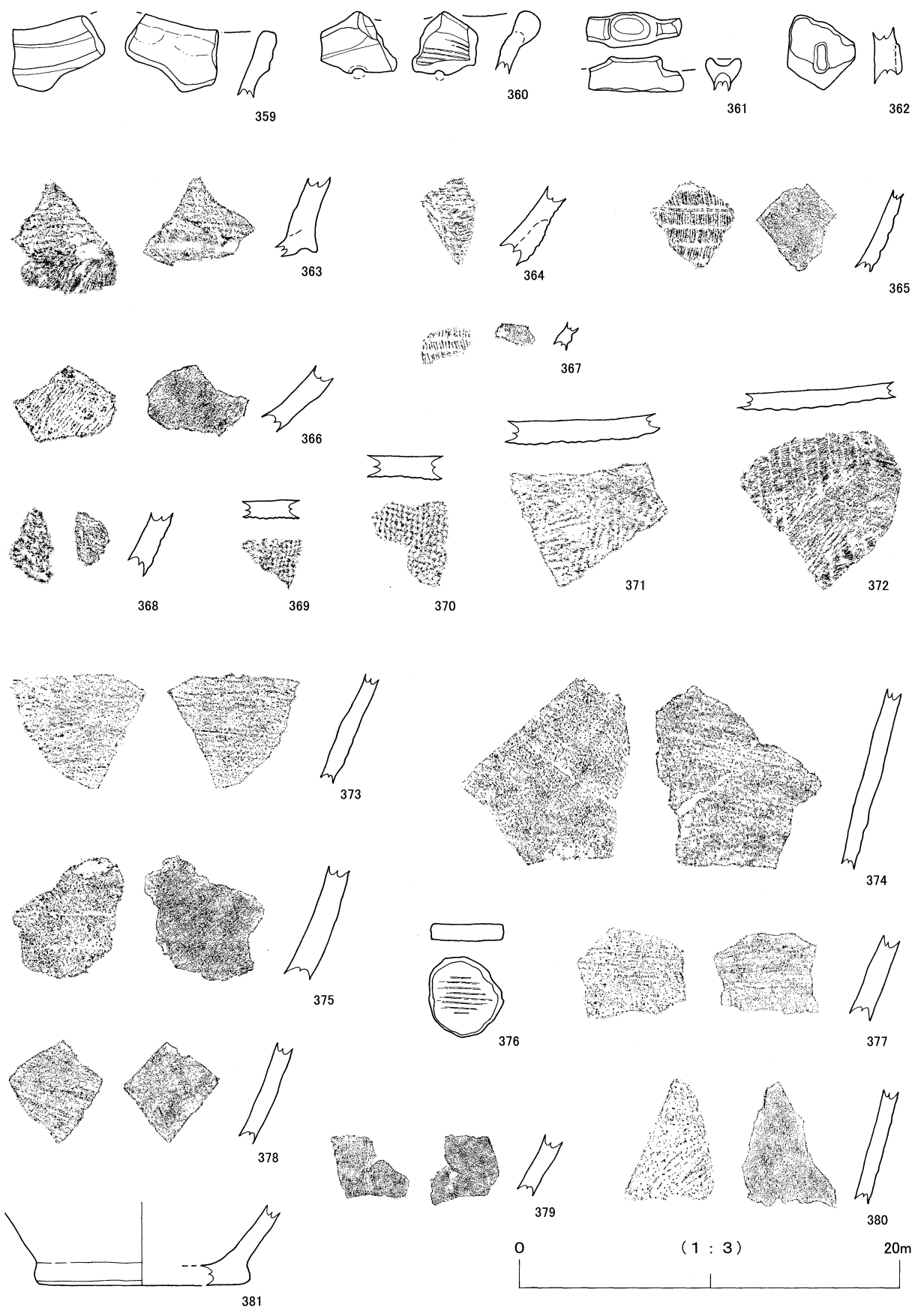
これらのことから写真など用いて遺構の存在について検討したところ、Ⅷ層上面においては遺構と思われる範囲が数箇所確認でき、そのうち二つは可能性が高いと判断できた。位置は図面上に記録してある。

¹ B区北側は現在では周囲より一段高い畑地となるが土地所有者の話によると、ここに小谷があり西側にあった丘を削平して埋め立てたということであった。

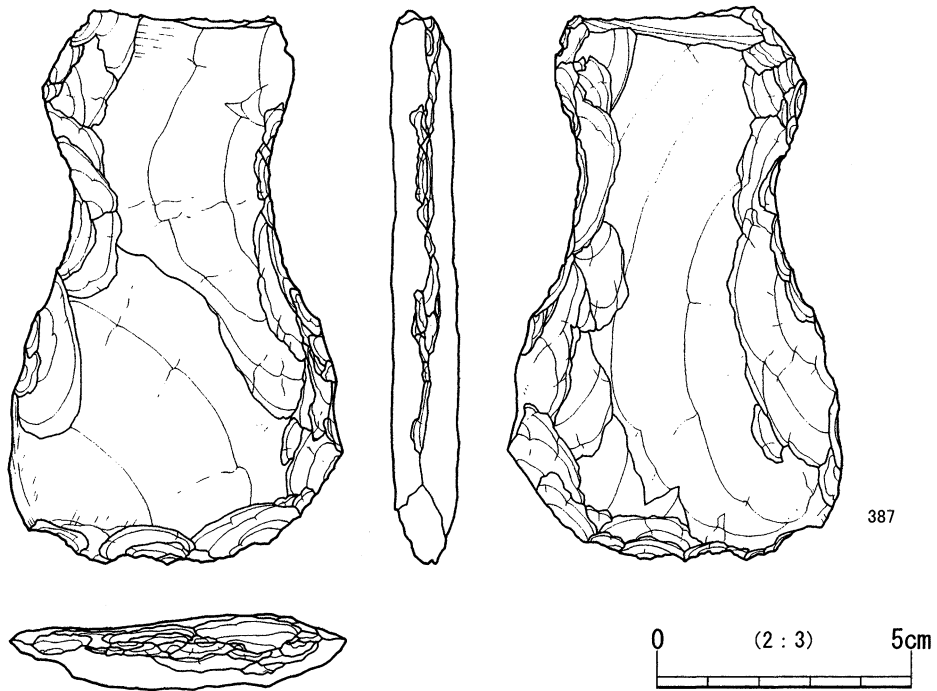
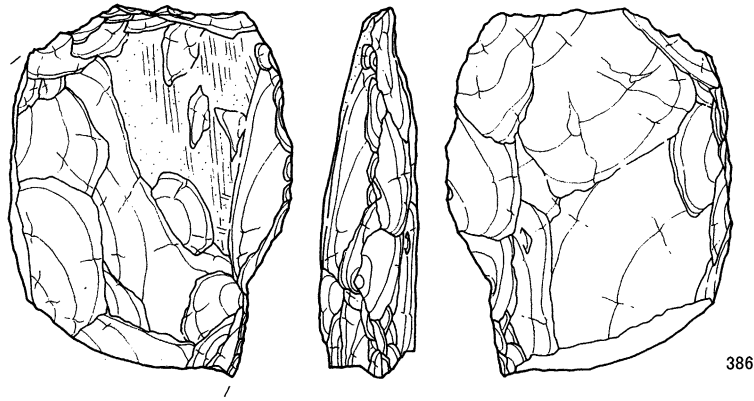
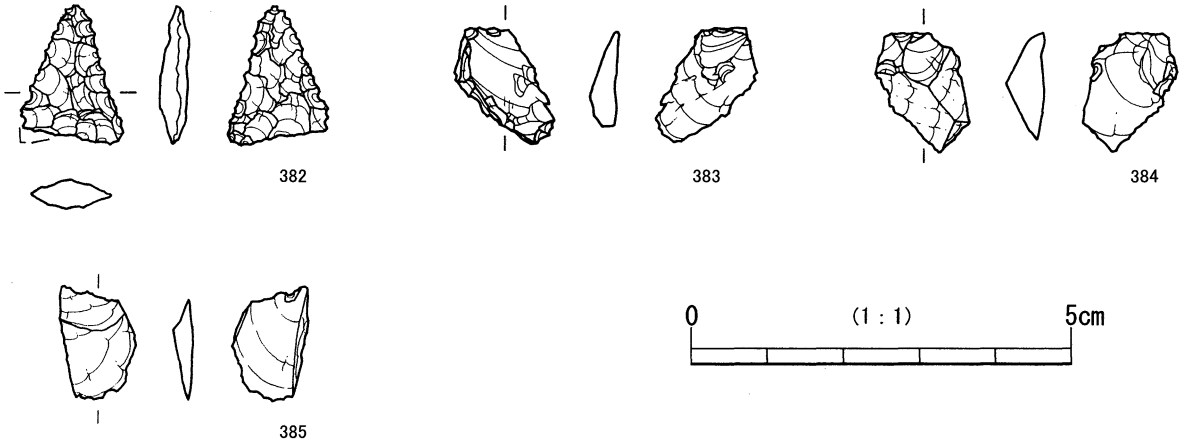
² 緑色を帯びた黒色土に1・2mm大の白色砂粒が含まれる覆土は現在の耕土などと同様に近代・現代の表土層と思われる。白色砂粒は大正期の桜島降下火山灰と思われる。



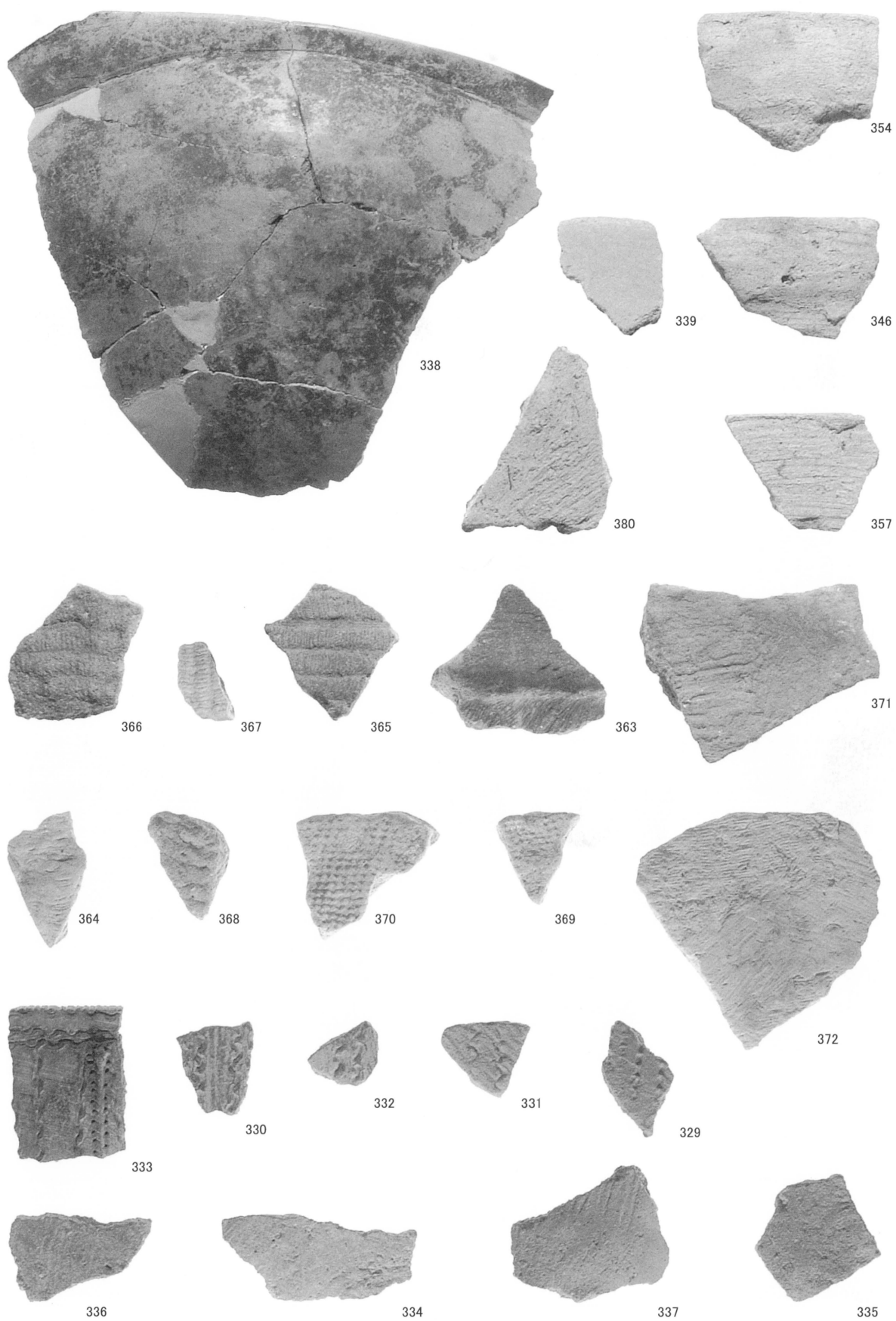
第56図 牧原A遺跡 土器2



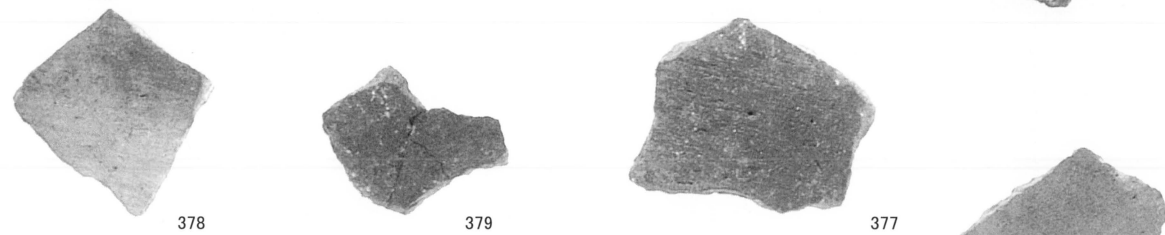
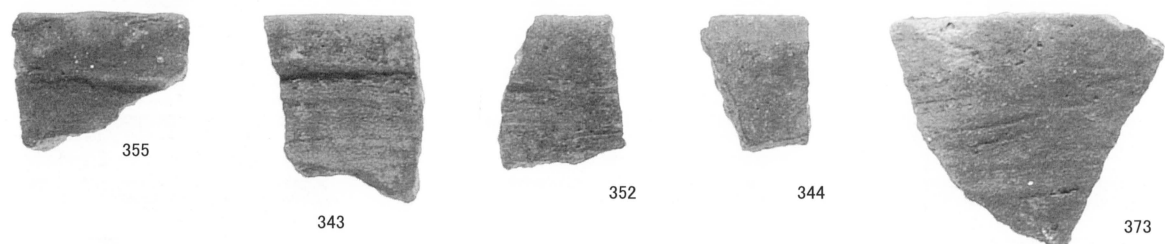
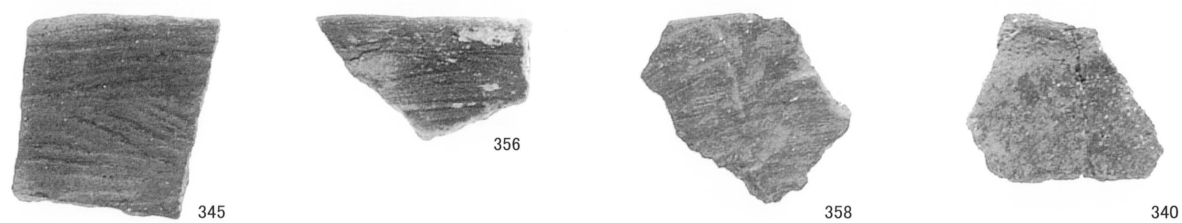
第57図 牧原A遺跡 土器3



第58图 牧原A遺跡 石器1



图版39 牧原A遺跡 遺物1



图版40 牧原A遺跡 遺物2



387



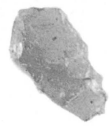
382



385



384



383



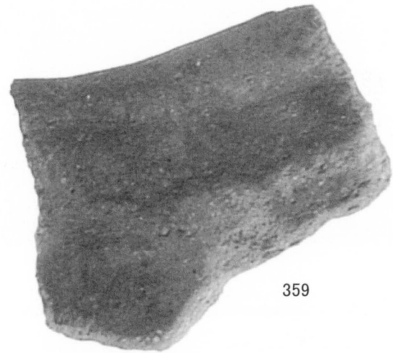
386



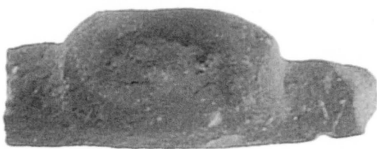
388



360



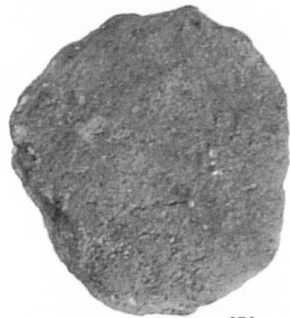
359



361



362



376

图版41 牧原A遺跡 遺物3



Ⅲb層上面 遺構検出状況
(B区、東より)



Ⅲb層上面 遺構完掘状況
(B区、東より)

奥のA区はⅢ層遺物出土状況



補足トレンチ調査状況
(C区、北東より)



Ⅲ層 遺物出土状況 1
(C区、西より)



Ⅲ層 遺物出土状況 2
(A区、西より)



Ⅵ・Ⅶ層 遺物出土状況 1
(B区、東より)



VI・VII層 遺物出土状況 2
(B区、西より)



VI・VII層 遺物出土状況 3
(B区、北より)

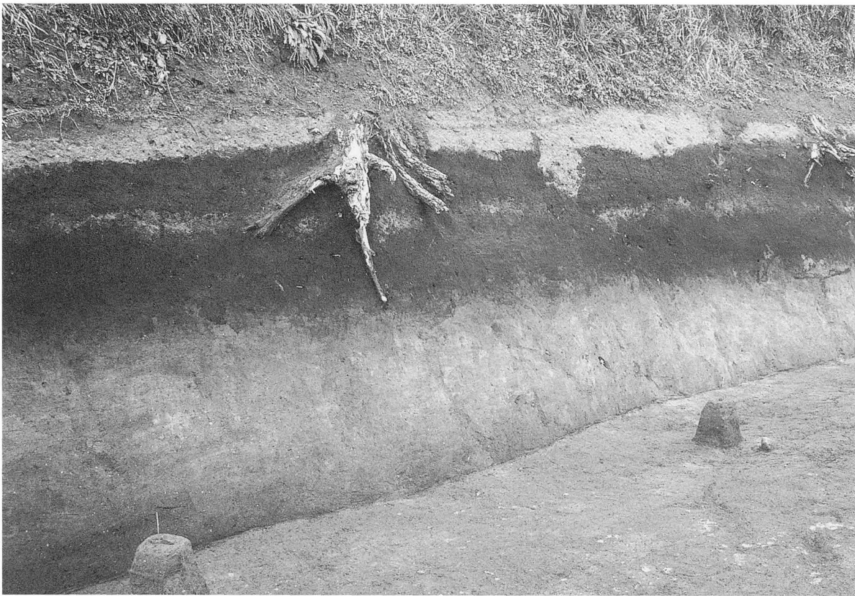


土層断面 1
(B区、南壁)

※ 中央下は No333



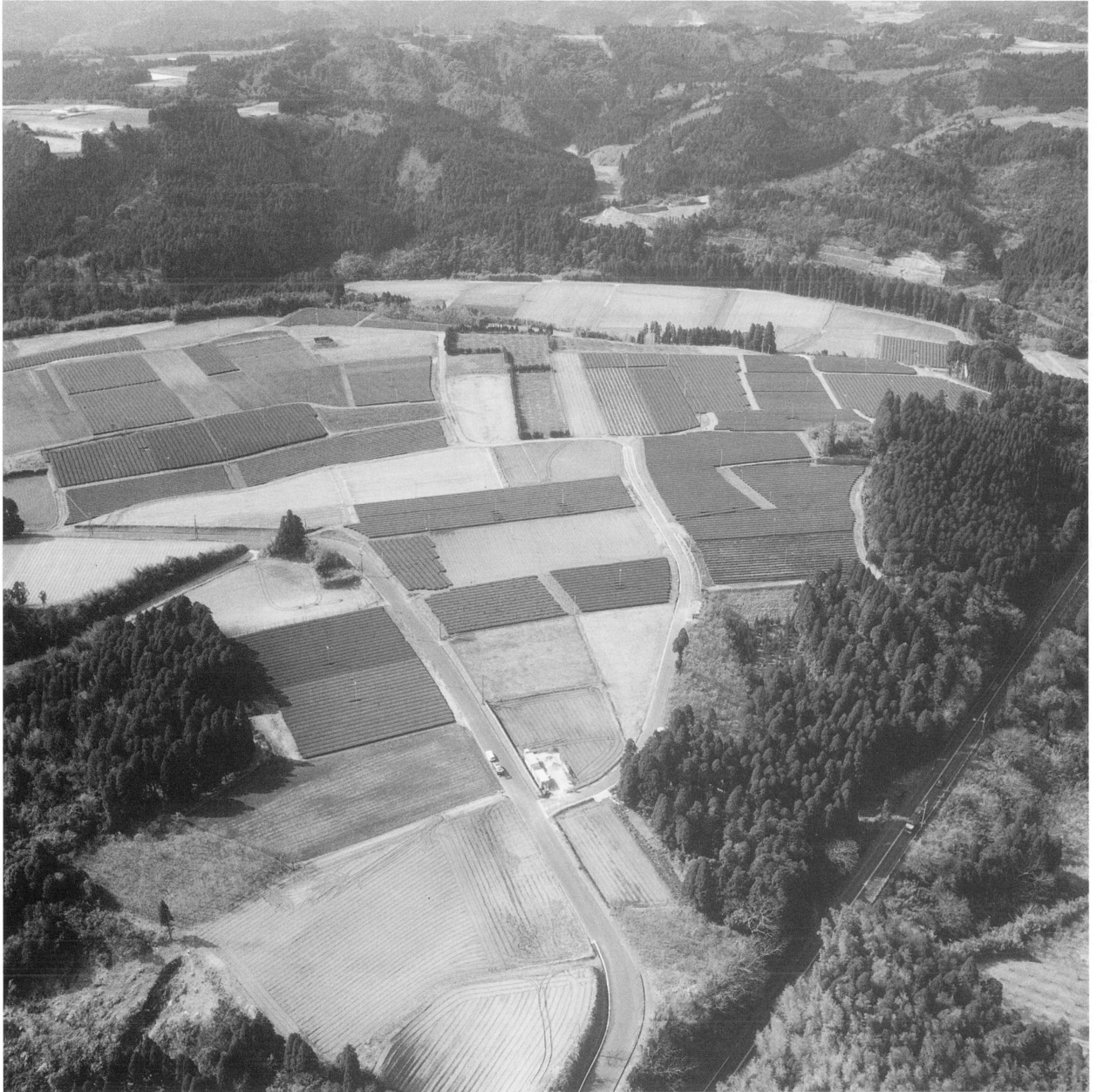
VII層 遺物出土状況
(B区、No333)



土層断面2
(B区、北壁)



土層断面3
(B区、南壁)



図版46 牧原 A 遺跡・牧原遺跡 遠景

※東より撮影、写真奥の台地縁辺部は黒葛遺跡